

ABOUT THE BLANK

ようぐそうとほうとふ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

1999年 ヴォート・ブランクはパツショーネのボス親衛隊の入団テストのため、暗殺者チームの裏切り者が誰か特定しよう命じられる。

ブランクは他者のスタンド能力をコピーするスタンド『ミザル』を持つ。彼の心は他人の精神エネルギーのビジョンをそっくりそのまま真似ることができるとほど『空虚』だった。

ブランクは無事裏切り者を突き止め、そのまま継続して暗殺者チームに反逆の兆しがないかを監視していた。

しかし2001年、『ボスの娘』の存在が発覚し事態は動き出す。

黄金の風まで完結

パールヘイズまで完結

6部アニメ化が決まったら書きますと言っていたので再開します。  
完結タグを取り下げました。

## 目次

グッバイ・ブルースカイ

罪と罰① 1998年12月〜 | 1

罪と罰② 1999年1月〜 | 11

罪と罰③ 1999年3月〜 | 24

罪と罰―I a c t a s y o u w a n t | 36

“ソリッド・ナージ”① | 52

“ソリッド・ナージ”② | 65

俺たちに明日はない | 77

ヤング・ラスト

せんぱい① 2001年3月30日 | 89

せんぱい② 2001年3月31日 | 101

せんぱい③ 2001年4月1日 | 113

マンハッタン・トランスファーVSセックス・ピストルズ | 127

ベイビー・フェイス：フィレンツェ行き特急 | 139

ヴェネツィア、リベルタ橋近辺 | 152

暗闇の密度 | 165

夜明けまでの距離 | 180

サン・ジョルジョ・マジョーレ島：夜明け | 195

A w a k e n | 210

ラン・ライク・ヘル

道すがら | 232

サルディニア | 247

ホワイト・アルバム&ベイビー・フェイス・ジュニア | 261

ホワイト・アルバムVSオアシス | 274

グリーン・デイとブランクの『ミザル』	287
ABOUT THE BLANK	303
目的地はローマ、コロッセオ	315
『ディアボロ』	331
悪魔を憐れむ歌	344
あなた達にあえてよかった	356
エピローグ：あまねく空に光りあれ	373
バッド・トリップ	
00. ギャンブラー：過去	389
01. グレート・ギグ	404
02. エリンニ	423
03. デプレッション	434
04. ナイトバード	446
05. パープル・ヘイズ	459
モメンタリー・ラプス・オブ・リーズン	
00. D O P E：過去	477
00. ギャンブラー②：過去	492

グツバイ・ブルースカイ

罪と罰① 1998年12月

1998年12月初旬

外は木枯らしが吹いていた。日差しはあるが風は突き刺さるように冷たい。冬の柔らかい日差しはぼんやりとした陰影を作って昼下がりのカフェに差し込んでいる。大通りに面したカフェでは冷たい風から逃げてきた人がちびちびとエスプレッソを啜っていた。

「なんか…雑誌で見たんですね。ノートルダム…?の大予言っていうのが流行ってるらしいって…。知ってます?」

紫色のセーターの少年はジェラートを食べながら向かいに座っている人物に話しかけた。相手は小さく顔を横に振った。少年と同じくらいの体格で、赤毛がとても美しい。だがそれ以外は全体的にみすぼらしかった。

「なんか来年の夏、世界が終わるらしいですよ?なんでかわからないんですが…でもそもそもなんで流行ったのかさっぱりだけど。えーと、それで、あなたは…」

少年は手元の履歴書に目を落とした。メモには

ヴォート・ブランク vuoto blank

とだけ書かれていた。他の欄はすべて白紙だ。

「ブランクさんは、来年世界が終わるならなにかしたいことがあります?」

ブランクと呼ばれた相手はしばらく無言でいた。少年は困ったような顔をしてジェラートを一口、ペろりと舐めた。するとブランクが急に言葉を発した。

「僕には何も無い」

少年は次の言葉を待った。しかしブランクはそれ以降黙りこくつたままだった。

「え?…困ったな。ええと、今日は面談、ということですかですよ、ぼく。貴方が組織の親衛隊に入りたいと言うから。間違ってますか」

よね?。」

「はい。僕は空っぽなので、何か仕事が必要です」

「じゃあ貴方には何ができるんですか?。」

「僕は何にでもなれます」

「何にでも?。」

「何にでもです」

ブランクは出されたコーヒーに一口も手を付けてなかった。少年と同じ味のジェラートはもうほとんど溶けて液体になっている。

「…食べないんですか?。」

「指示をしてください」

「指示がないと何もできないんですか?。」

「それが僕の美点です。僕は空っぽなんです。やりにくいですか?。」

「えー、まあ、正直」

「手を見せてくれますか?。」

「え?。」

「手を見せてください」

「は、はあ…」

少年は洪々手のひらを上にして見せた。ブランクはそれをじっと見てから「触れます」と言ってるので手相でも見るかのようにじつくりと少年の手を触った。

そして手を離すと、急にヘラつとした笑顔を作って話し始めた。

「僕はヴォート・ブランクっていいいます。仕事を探してて…で、ドツピオさん、あなたの属してる組織だったら僕の能力を活かした仕事につけるかなって思ったんですよ」

「能力っていうのは、その急に明るくなる性格?。」

ドツピオと呼ばれた少年はその変貌に驚きながら尋ねた。

「それは僕の特技です。僕は手相を見ると、その人の性格がなんとなくわかります。貴方がやりにくそうだったので、貴方っぽい性格になってお話ししようと思いました」

「じゃあ貴方は今ぼくっぽく喋ってるってこと?。」

「ええ。僕自身は空っぽなので」

「えー？ぼくってそんな笑顔するかなあ…」

ドツピオはちよつと引きながらもさつきよりかはマシだと思い質問を続けた。

「じゃあ能力っていうのは？」

「僕はスタンド能力者です。あなたに連絡をとってくれた幹部の方に紹介されたのです。こういう特殊能力を持った相手とは何度か会ったことがあります。僕は他者の能力をコピーすることができるとすよ」

「…それは、どうやって？スタンドの発動条件は？」

ドツピオは声を潜めて聞いた。

「スタンド能力を発動している相手に触れることです。コピーした能力は相手が生きているかぎりいつでも使えますが、同時に2つのスタンドを操ることはできません」

「それは…強い、ですね…。でも普通、そういう能力のことは他人に絶対秘密にしますよ？いいんですか、ぼくに言って」

「はい。僕には主人が必要なんです。僕は空っぽなんです。指示をくれる人が必要なんです」

「なるほど…えつと…」

ドツピオはしばし考えるように顎をさすった。ブランクはコーヒーをぐいっと飲んでから溶けたジェラートを啜った。とうるるるるるるるん…

「あ、ちよつと…ちよつといいですか？」

とうるるるるるるるん…

ドツピオはキョロキョロと周りを見回し、カフェの出入り口付近に公衆電話があるのを見つけた。

「電話が」

どたどたと椅子を蹴つ飛ばして、ドツピオは受話器をとった。

「もしもし、ドツピオです」

『私のドツピオ。どうだ？入団希望者というやつは』

「ボス！ええ、今ちよつどやつの能力について聞きました。弱いのか強いのかちよつとわからないんですが…」

『いいや、十分強い。強い能力をコピーすればな。それに…あの奇妙な性格。自分が無いというのはなかなか興味深い。使えるかもしれない』

「そうですか？ぼくはなんか不気味ですよ…親衛隊に突然入れるのはどうかと思うなあ…」

『入団は許可しろ。ただしその性格と能力が本物か試す必要がある。いいか、やつに与える任務は…』

「ああ、ええ。なるほど。わかりましたボス。それでは…」

ドツピオはどこにも通じていない電話を置き、席に帰っていった。ブランクはジェラートの器を口に当て完食、いや完飲していた。

「あなたの仮入団を認めます。親衛隊に入れるかは試験を終えてから決めます」

「本当ですか？試験かあ…緊張します」

ブランクは器をおいて口をナプキンで拭った。ドツピオはぐつとブランクに顔を近づけて囁いた。

「まず、組織の基本的なルールと構造についてはぼくがこのあと説明します。そして肝心の試験なんです…」

1999年1月

賑わったレストランではディナーショーがたった今終わった。特段有名でもない歌手のワンマンショーだった。

レストラン『グロリア』ネアポリスではありふれた、高級感はあるが高級ではないレストランだ。中流階級がちよつと贅沢する日に行くようなところというのが適切なたとえだろう。

そこで8人の男がテーブルを囲み、大してうまくなさそうに料理を食べていた。

「おせーなりゾットの野郎はよおしく自分で指定しておいて、前菜どころかメインディッシュにも間に合わねーってどういうことだ」

巻き毛の男がひどく苛立った様子で言った。横に座っている男が



呆れた様子で横目で見ている。

「遅れるって連絡あったろーが」

「あ、兄貴…でも何かあったとしたら…？」

「ペッシ。おめーリゾットに、よりにもよってリゾットに何かあるわけねーだろ。あるとしたら今日来るっつー新入りがなんかあったんだよ。違いねえ」

「新入りね」

髪を短く刈り込んだ男が嘲るような調子で言った。

「新入りが来ても分前は人数分増えねーっていうのによお…」

「ご、ごめんよ…」

「おい、イルーゾオ。ペッシはきちんと仕事こなしてるだろうがよ。お前だつてこの前…」

「あ？なんだよプロシユート。別にペッシが悪いなんて言ってるねーだろーが。ああ？」

「集まるといつもこうだ」

彼らはパツシヨーネの中で暗殺を請け負うチームのメンバーだ。全員が全員スタンド能力を持ち、組織に歯向かうものを秘密裏に消している。

報酬の話以外で全員が揃うことは新入りが入るときか、誰かの葬式くらいだ。そしてリゾットが遅刻するということは今までにないことだった。

皿が下げられ、デザートのスフレが出てきたときによくやくリゾットと噂の新入りがやってきた。

「すまない、待たせたな」

「おいおいおせーよ。何があったんだよ？」

「ああ、調整に手間取ってな」

「調整い？」

「ああ。紹介する。新入りのヴォート・ブランクだ」

リゾットの後ろから遠慮がちに小柄な人物が前へ出てきた。肩くらいまでのセミロングの赤毛がやけに綺麗だった。だがそれ以外はパツとせず、これと言って特徴が挙げられない冴えない容姿をしてい

た。強いて言うなら不安げに全員を見る猫目が特徴だろうか。

身長が低いせいかな、それとも顔立ちがあどけなさを残してるせいかな、何歳なのかも掴みかねる。老け顔の10代と言われればそう見えるし、童顔の30代と言われてもなるほどと納得できそう。髪も長いせいで女々しく見えるが、顔つきだけ見れば男にも見える。

なんとも掴みどころのない容姿だ。

「ヴォート・ブランクです！どうぞよろしくお願いしますッ！頑張ります！」

まだまだガキじゃねえか、と言いたげにギアツチョがブランクを見た。しかも超地味なガキ、と。

「お前ら、きちんと挨拶しろ」

「…あー、新入りクン、とりあえず座って食えよ。もうデザートだけだよ」

「ハイッ！恐縮です」

イルーゾオが自分の隣の空席の椅子を引いてやった。ブランクはペコペコしながらそこに座ろうとする。ブランクが尻を椅子におろそうとした瞬間、イルーゾオは椅子を思いっきり引いてブランクは床にすっ転んだ。

どつと笑いが起こった。リゾットだけが呆れ気味に額を抑えたため息をついた。ブランク本人はきよんとんとして床から笑い死にしそうなイルーゾオを見ていた。

「いや、すまねーな。立てるか？」

「いえー！問題ありません」

ブランクはイルーゾオの悪意に全く気づくような素振りも見せず、さっと立ち上がり椅子に座り直し、皿に乗ったオレンジをぺろりと食べた。拍子抜けしたイルーゾオをホルマジオが愉快そうに見てる。

「とても美味しいオレンジです！」

「ぷっ…ハハハ！なかなか根性あるヤツじゃねーか！どこで拾ってきたんだ？」 プロシユートが笑いながらリゾットに聞いた。

「ああ…情報部のやつの紹介だな」

「っていうと…ムーロロってやつか？」

「ああ」

「はい。ムーロロさんにはとてもお世話になりました」

「ムーロロに世話になってんならよおくる、なんで暗殺チームに回されてんだ？」

「ハッ！それは僕がとんでもなく機械音痴だからであります」

「最悪だな！バカなのかお前」

「残念ながらそのようです」

「よかったなペッシ、お前にも弟分ができて」

「いやー…オレにはちよつと荷が重いよ、兄貴みたいになれるかわからないから……」

「そういうのを人前でいうんじゃーねーよ。つたく…」

「ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします！」

「ああ。…ちよつとお互い話していてくれ。電話だ」

リゾットが席を立つと、今まで不機嫌そうに黙っていたジェラートが口を開いた。

「てめー、誰の下につくんだ？お荷物ひかされんのは誰なんだよ」

「まだそのような指示は受けてません！」

ついでソルベがいかにもトゲのある感じで言った。

「つていうか気になってただけどよお。お前男なのか？女なのか？紛らわしいナリしやがって」

「…？僕の性別が何か問題でしようか」

「女だったらオレたちは絶対にテメーと組む気はねえ。嫌いなんだよ女って、やかましくて弱っちくて」

ジェラートはソルベと視線を交わした。その様子を見てプロシユートが呆れ気味にいった。

「お前らと一緒にやりたいやつなんていねーつつーの」

「僕は指示さえいただければなんでもやります！お二人には近づかない、受諾しました！」

「なんかおめーまともじゃねーな」

ギアツチヨがかなり不審そうな眼差しでブランクを眺めた。同じようにブランクを見ていたメローネが急に提案した。

「とりあえずそのダツサイ服と髪の毛何とかしたらどうだ？」

「確かに」

「クソダサイ。死んでも隣を歩いてほしくない」

「そ、そこまでダサイでしょうか？」

わいのわいのとブランクの服装に対する文句がでてきたころ、リゾットが電話から戻ってきた。

「紹介はすんだか？」

「だいたいすんだぜ」

とイルーゾオがしれつと嘘をついたが、リゾットは別に気にしてないようだった。

「こいつの面倒はひとまずイルーゾオ、ホルマジオ、おまえらが見ろ」

「は？なんでだよ!？」

「ニコイチで面倒見れそうなのお前らしいねーだろ」

ソルベが笑いながら言った。暗殺チームは任務の際二人一組で動くことが多い。今はソルベとジェラート、プロシユートとペツシ、メローネとギアツチヨ、そしてイルーゾオとホルマジオがよく組まされていた。確かにこの中だと二人共経験が長く安定し、比較的社交性があるのはイルーゾオとホルマジオだった。

「ははあ！よろしくお願いします！先輩方」

「クソツツ：みそつかす掴まされるとはー!」

「ブランクはなかなか面白いぞ。…とりあえず今日のところは解散だ」

リゾットの鶴の一声で全員がコーヒーを飲み、レストランから出た。ホルマジオは任された手前仕方なくブランクに尋ねた。

「で、お前家は？本部にとまんのか？」

「いえー僕はこれからムーロロさんとお別れパーティーなので！明日！また明日からよろしくお願いします！」

「おいおい、甘ったれてんなあ」

イルーゾオが意地悪げに言う

「へへへ…」

なぜかブランクは照れた。

「は？全く褒めてねーよ…」

こうしてヴォート・ブランクは暗殺チームへの潜入を開始し、ボスから提示された本当の入団試験がはじまった。

「で、どうだ。うまくやってけそうか？」

ブランクはこくこくと頷いた。

目の前に座ってる男はカンノーロ・ムーロロ。パツシヨーネの情報技術チームにいる男だ。ギャングと言われて人々が想像するような服装をしている。

二人がいるのはモノで溢れかえった倉庫で、ムーロロの拠点の一つだ。遠くで船の汽笛の音が聞こえる。二人はプラスチックケースに座って向き合っている。

ムーロロはゆっくりワインを飲みながらほとんど反応のないブランクに話しかける。ブランクは虚ろな目をしてグラスを持っているだけだった。

「あっちでは何になってるんだ？」

「…この前空港で荷物を持ってくれた少年です。リゾット・ネエロに社交的な人物になれといわれた」

「そうか。うん、当たり前だがそのまま行ったらどこでもやってけねーよな。ボスの試験の方はどうだ？」

「裏切り者を突き止めることです。多分すぐに終わる」

「へえ。予想では誰だ？誰がボスの正体を探ってる？」

「ソルベ、ジェラート。他のメンバーより排他的で親密。あなたのデータ通りです」

「よしよし、じゃあすぐに親衛隊入りできるはずだな。いい調子だ」

ブランクはうなずく。

「お前のホントの仕事は？」

「いずれボスの腹心になること」

「いい子だブランク」

「僕は何にでもなれる」

「その通りだ」

誰にも正体を明かさないボスにどこまで近づけるか。ムーロロが今トライしているゲームだ。と言っても本気でボスの正体を知りたいわけじゃない。

ただ退屈だったから。賭博やスポーツじゃもう微塵も心躍らない。本当にスリリングで頭を使うゲームを思いついたときはまだ始めてもないのに勃起しそうになった。

このブランクはだいたいどこまでいけるはずだった。

なんにでもなれる人格と、それを写したかのようなスタンド能力。ブランクのスタンド、ミザルは他人の能力をコピーし、本体が生きている限りストックしておくことができる。そう、能力をストックできる。ここがブランクの最大の強みだ。その能力の情報はいずれ大きな力になる。

「長いゲームになるかもしれないが、覚悟はできているか？」

ムーロロはブランクに問いかけた。

「あなたは？」

ブランクはムーロロをまっすぐ見つめ返し、質問を質問で返した。

「そりやできてるよ」

「なら僕もできてる」

## 罪と罰②1999年1月

新入りを任されたホルマジオだが、少なくとも自分はイルーゾオよりは面倒見がいいと自負していた。というかイルーゾオがそういうのに向いてないので自分がやるしかないというのが実情だった。

本部に行くと、ブランクは掃除をしていた。誰に言われたというわけではなさそうだが、異様に本格的な掃除用具を揃え、床にワックスがけしている。

基本的に暗殺チームは定期報告会や仕事のブリーフィング、報酬に関する会議以外で集まる義務はない。故に本部にいつもいるのはリゾットくらいで、掃除も業者に任せられないためいつもどこか埃っぽかった。

「あつ！おはようございます」

「掃除なんてしても誰もお前を褒めちゃうねーぞ」

「いえ！僕、ハウスタストアレルギーなので気になっちゃって…」

「そーかよ。…これ踏んでいいのか？」

「ああもう！どうぞ。僕のことなど気にせずに。ただとても臭いかもしれません。窓際にいるのを推奨します」

ホルマジオは窓際の椅子に腰掛けた。ブランクはテキパキと掃除道具を片付け、ホルマジオのそばに立って気をつけをした。

「ヴォート・ブランクです。先輩、今日からよろしく願います」

「オレはホルマジオ。イルーゾオは今日バツクレた。…で、今は特に依頼がねえしお前に今日教えられることはあんまねえぞ」

「それなのにホルマジオ先輩は来てくれたんですか！自分感激ツス」

「リゾットの頼みだからな。そういえばあいつは？」

「僕と入れ違いで外出です。あ、なんか飲みます？」

「ミネラルウォーターくれ」

ブランクは冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出しホルマジオに渡した。おそらく今ペッシンがやってる備品の発注なんかもこいつが引き継ぐのだろう。

「そういえばなのですが今日昼頃メローネさんが来るそうです」

「あいつなんか用事あったか？」

「はい。僕の服を買ってくれるそうです。あとペッシさんも来るそうです」

「あいつらなんやかんやで新入り甘やかすんだからよおーまったく。オレは厳しーぞ。少なくとも仕事面ではな」

「楽しみです！」

「お前はどんな能力を使うんだ？」

「僕ですか。僕はスタンドをコピーするスタンドを使います」

「は？コピー？」

「左様です。スタンド発動中の本体に触れることでコピーができるのです。しかもストックできるんですよ。最強！」

「ほおー、そりやなかなかピーキーだな」

ホルマジオは昨日リゾットがブランクを「面白い」と言った理由がわかった。

「暗殺にはいいかもな。だがスタンド使い同士の戦いじゃ使いにくい」

「え？なんで？最強では？相手の能力コピーですよ。最強ですよね」

「いや。お前やっぱ馬鹿なんだろ。相手がスタンド発動中に接触しなきゃなんねーってことはよー、絶対相手の射程に入るってことじゃあねーか。しかもその場で相手の奪つても練度では勝てねーし」

「…あ！そっか。考えたこともなかったです」

「まあでもストックできるんだろ？だったらコピーする必要がない相手なら使えるし、つえーよ。今は何をコピーしてんだ？」

「えーつと…それは平時は秘密にしとけて言われました」

「はあ？オレはおめーの尻拭いしなきゃなんねーんだぞ？歯向かうんじゃねーよ。いざって時に泣いて縋ってきてもなあーんもできねーじゃあねーか」

「うーん…たしかに…いや、でもなんかスタンド使いは能力を明かさないと。すっげー言われたんすよね、リゾットさんに…なんででしょう？」

「…お前つてもしかして常識知らずなのか？」



「いや、そんな事はないはずなんですけどね。なぜかよくそう言われますね」

「秘密にすんならもう手遅れだぜ。オレ絶対スタンド出してるときにお前には触んねー」

「え？あ、そつか。あー。なるほど。もつともですネ」

「だからって嘘をつくのはダメだ。それはオレたちチームに対する侮辱だからな。ただ自分の能力に関しちや本当のことを言う必要もねえ。わかるか？」

「はい。ええと…言葉遊びですか？」

ホルマジオは呆れながらブランクに忠告した。

「いいか？自分がバカだつて喧伝するのはやめろ。ナメられちまうぞ。もしわざとやってんならそれはそれでいいが、仲間内でナメられるつてのはよくない。敵ならナメられても殺しちまえば終わりだな、仲間はそうは行かない」

「僕は仲間になれないということですか」

「ちげーよ、なりたいたいなら対等を装え。今のお前は犬みてーだ。腹を見せて手の内を明かしてオレに気に入られようとしてるだろ」

「おお、そのとおりであります！さすがホルマジオ先輩！」

「だーかーら、その態度！その態度がムカつくんだよオーーツ」

「えぶつ」

ホルマジオがぶん殴るとブランクは一応黙った。泣き出したりパニックになったりしなくて安心した。ちなみにペツシは最近まで殴られて泣いていた。

「僕、わっかんないんですよね、ラインが…手本がないと」

「ガリ勉強だったのか？周り見てりやーなんとなくわかんだろ」

「わかんないんですよ！僕…僕が友人と話してるところを知らないからかな。先輩、誰を手本にすべきでしょう？教えてください」

そのなんだか奇妙な口ぶりにホルマジオは一瞬首を傾げたが、指摘してもわけわからん事になりそうなのでスルーした。

「ムーロク？だったか。お前の世話になったやつのマネすりやいーんじゃねえの？」

「わかりました」

「いや、別に命令じゃねーけど」

そんなこんなしていると、ドアが空いてペッシが一人で入ってきた。

「あ？なんか掃除してある？」

「おうペッシ。こっちの新入りは気が利くぜ」

「オレはそんなのやろうと思わなかったな…」

「僕、ハウスタストアレルギーなので！」

プロシユートと一緒にいないペッシはとても珍しい。チームに入ってからペッシはずっとプロシユートの背中を追いかけていた。ホルマジオは生まれたばかりの雛かよ、と思いつつも微笑ましい光景だと思つてた。

そのペッシのポジションがブランクになったわけだが、こいつはどうもペッシみたい純粋じゃなさそうだった。

「オレはペッシ。プロシユート兄貴に仕事を教えてもらってるんだ。入ったの去年の秋…だったかな。よろしく」

「じゃあもうバリバリ暗殺です？クール！」

「あ、いや…俺、まだ一人も殺してないんだ。兄貴がまだだめだって」

「プロシユートさんは仕事に厳しい方なんすね」

「まーあいつは一番流儀持つてるつーか。うん」

「オレ！兄貴のそういうところすっげえ尊敬してるんです！」

「おおー、僕もホルマジオさんの尊敬できるところ探しますね」

「いや、やめろよ暑苦しいから」

ペッシとブランクは仲良くなれそうだった。ほのぼのした部分で息が合いそうだ。すぐにメローネも本部に来た。普段来てる服ではなかったが派手ながらの服を着ている。オンオフを分けるタイプだったという記憶はないが、服買うときはなんか気を使ってるのかもしれない。

「ちゃんと揃ってるな。ブランク、お前どうせ金持っていないだろ？」

「はい！無一文です」

「じゃ、今日貸すから借用書書けよ」

「わーい借金！」

「奢ってやんねーのか。けちくせー」

「自分の仕事着くらい自分で買うべきだろうが。お前こそショーパブとかに連れてつたりすんなよ」

「んなどこいくわけ…」

「じゃ行くぞー」

「ホルマジオの兄貴、留守番頼みますね」

「先輩留守番よろしくです」

メローネ、ペッシ、ブランクはあつという間に出ていってしまった。

「……はあ」

ホルマジオかしばらくパソコンをいじっているとリゾットが帰ってきて、仕事が入ったから誰か夜に会議を開くことになった。夕方になって買い物に行つてた三人が帰ってきた。ブランクもペッシもショッピングバックを抱えて楽しそうにしていた。いくら借金が出来たのか興味があつたが聞いたら同情しそうだった。

「夜から会議なら早速着ます！」

「髪もちゃんとやれよ。香水とかテキトーにあんの使っちゃまえ」

「ハッ！」

「お前！黒くて丸いやつはぜってー使うなよ！」

「ハッ！……でもどれもこれも黒くて丸いですが…」

「右から三番目の、金の文字が書いてあるやつ！」

「かしこまりました！絶対使わない！受諾ッ」

ブランクは洗面所でゴソゴソやってる。ペッシは新しい靴を買つたらしく箱を開けてうっとり見ていた。メローネもなんか買ったらしいがとつと自分のロッカーにしまったようだ。

「ホルマジオ、次の仕事ブランクにやらせてやれよ。借金地獄に浸かっちゃうぞ」

「お前いくら使わせただよ」

「さあねー」

「ま、でもやらせるべきかもな。あいつが仕事で使えるのかわかんねーし」

「リゾットが面談してるんだからそこは大丈夫だろ。な」

メローネがリゾットに問いかける。リゾットは自分のノートパソコンから視線を上げて頷いた。

「あいつはああ見えて経験者だ。問題なくこなす」

「へえ？だってよペッシ。やっぱマンモーニはお前だけか」

「や、やめてくれよ。マンモーニっていうのは…」

「あのバカっぽいのは演技なのか？」

「演技…か。そうとも言えるが、そう言うとは嘘だな」

「はあ？意味わからん」

「オレから言えるのは、あいつは即戦力として入団を許可したってことだけだ」

「へえ…じゃあ次の仕事、ブランクに振ってくれよ」

「もとよりそのつもりだ。他のやつらも使えるのか知りたがつてるだろうからな…」

「メローネ先輩、ばっちりっすよー」

タイミングよくブランクがやってきた。ジーパンにパーカーというダサい服から高そうなスーツにグレードアップしていた。髪もびしっと纏めて顔面にも伊達メガネが追加されている。

「最低限だな」

「え、まだだめっすか」

「悪くない。いい服を着ることが大事だ。あのくそダサジーパンは捨てとくからな」

「そんな…」

そうこうしているとどんどん他のメンバーが本部にやってきた。集合時間ぴったりソルベとジェラートが駆け込んできて全員揃うと、リゾットが仕事の話始めた。

「へー、はじめての仕事は国外か」

ブランクはムーロロの言葉に頷いた。二人はまた港の倉庫にいる。今日はワインでなくコーヒーを持っていて、ブランクは口をつけていない。

二週間ぶりに会うブランクは前より垢抜けた格好をしていた。チームとうまくやってけているようだった。

「：マンハッタン・トランスファアを使う。許可をいただけますか？」  
「オレに許可をもらう必要はねえよ。ブランク。そりゃオレがお前を拾ったわけだが、今や同じ盤上にいる。対等だ」

「ではスタンド能力を使う際、許可を乞うことを辞める」

「ああ。自分で考えて自分で行動しろ。：あー、オレはお前が心配だよ」

「任務自体に危険性はありません」

「違う違う。オレはお前の腕を信じてる。じゃなくって、お前の将来とかそういうのだよ」

「……」

ブランクは黙った。表情に変化はない。ムーロロはコーヒーをぐいっと飲んだ。ブランクの経歴は名前同様ブランクだ。

マンハッタン・トランスファアというコピーしたらしいスタンドについて尋ねると返ってくるのは「恩人」「軍隊」という単語のみだ。他のコピーしているスタンドも「連れられた。お見舞いに」と、誰かに才能を見込まれて仕込まれていたらしいことがわかるだけだった。

他の思い出についても、本人がエピソードトークがほとんど不可能なせいで何もわからない。

ブランクと会ったとき、こいつは未成年売春している女を車で客のところを送り届ける運転手をやっていた。ただし、その売春宿の客がめちやくちや高い割合で死んでいた。

未成年を抱いて腹上死。遺族からすりや絶対に世間に知られたくないことだ。故にギャングに探偵みたいな仕事が回ってきて、ムーロロがそれを調べるようになった。ちなみに売春宿は事件を逆手に取り『天国に一番近い』なんてキャッチコピーをつけていた。

その被害者と居合わせる嬢はバラバラだったが、客の注文にはかな

り共通点があった。

一晚コース

他の店でトラブル

サデイスト

そして必ず運転手としてブランクが一晚中車で待機していた。さらに監視カメラからブランクが車から降り、今寝ているであろうターゲットの部屋の前まで行き、ドアの前でしばらくじっとしている映像が見つかった。

「お前あそこで何していたんだ？スタンド能力者なのか？」

尋問中、だいぶ絞られぶん殴られたというのにブランクは涼しい顔をしていた。そしてムーロロが『優しい警官』役として質問すると、あっさりと答えたのだ。まるでマニュアルにそういう質問があったかのように。

「頼まれたのでスタンドで殺しました。…次の指示はありますか」

「僕はバカですか？」

「は？そんなこといってねーだろ。お前はバカじゃねーよ。バカのマネをしてるだけだ」

「僕、ダサイですか？」

「へ？いや。なんかすげーいいスーツきてるよな。カッコいゝゝぜ。メガネも似合ってる」

ムーロロは驚いた。ブランクが自分の見かけについて聞いてくるなんて初めてだ。というか仕事のこと以外で自発的に質問してくるなんてレア中のレアだった。

「同行するのは誰だ？」

「ホルマジオ、イルーゾオ。リゾットもおそらく監視目的でついてきてると思われます」

「そうか。ソルベとジェラートはどうだ」

「……二人は本部にほぼ顔を出さないようです。…でも端末にチップを仕込むことに成功した」

「やるじゃねーか！ブランク」

「あとは待つだけ。ボスの試験は楽勝です」

そして任務当日、ホルマジオ、イルーゾオ、ブランクの三人はシチリア島から海を渡りリビアに上陸した。

リビアはかつてイタリアの植民地だった地中海に面するアフリカの国であり、世界遺産に登録される遺跡が多数あるイスラム教圏の国である。現在はカダフィ大佐によつて共和制が敷かれているものの、実質独裁国家となっている。

独裁国家は町並みが美しいというがまさしくそのとおりだった。外国人向けのホテルのサービスは極上だが、今回三人はリビアに秘密裏に入国しているある人物を暗殺しなければならないので、身元を明かさなければならぬ良いホテルは使えなかった。

「あーあ、お守りは全然旨味がねーな。ホテルもシャワーがろくに使えねーし暑くて砂っぽいし」

「マジだるい」

「観光できるわけでもないし…」

三人でずつとぶつくさ言いながらも安ホテルの屋上へ向かった。やることをやらねばしょうがないのだ。今回のターゲットはアメリカのマフィアだ。イタリア、リビア間の武器の密輸にイツチョがみしてきてる野心家に制裁を、との事だ。

「でもよー、狙撃って…狙撃だぞ？なんかオレは好きじゃねー。だって露骨だもんなア？わかるか？」

「でも見せしめだとわかるようにこのことですし…イルーゾオ先輩のは全然見せしめじゃないし、ホルマジオ先輩のはわけわかんないじゃないですか。僕適任！」

「でもその狙撃もお前の本当の能力じゃあねーんだろ？誰かからパクったもんなのにうまく使えるのか？」

「ばつちりっすよー」

ホルマジオは縮めておいたカバンをもとに戻しブランクに投げ渡

した。ブランクはカバンをあけるとバラバラに分解したライフルをテキパキ組み立てた。スタンドでしか戦ってこなかった二人にとつてなんだか新鮮な光景だった。

「そのマンハッタン・トランススファアーの能力、もう一回説明してくれ」「ハッ！これは射撃の中継をしてくれるのです。つまり死角というものには存在せず、どこにいても標的に鉛玉をぶちこめるのです！」「射撃ありきのスタンドってことか？」

「そうです。持ち主はシモ・ヘイへみたいな人でした。最強！」

「おい。って事はテメーがへばならどーしよーもねーって事じゃねーか」

「いえ。それは大丈夫です。僕その人にいろいろ教えてもらったので」

ブランクは自信ありげに銃を構えた。だがイルーゾオはあまりブランクを信用していない。ホルマジオもだ。

目標のいるホテルとここは一キロ近く離れている。マンハッタン・トランスファアーはあくまで中継であり目標を捕捉できる位置に発動させなければならぬのだが、そもそもその中継点たるマンハッタン・トランスファアーに弾を届かせなければならぬ。そんなことこいつにできるのか？

「よし…わかった。オレがマン・イン・ザ・ミラーで目標を監視する。テメーが失敗したときはオレが仕留める。いいな」

「お前の能力で？オイオイ大丈夫かよ。場所によっては目立つんじゃないか？」

「あー？なんだよ。じゃあおめーのくだらねー能力で突然ちっちゃくすんのかよ？そっちのほうが目立つねッ」

「くだんねーかくだるかはよおー能力の使い方次第だって何回も言ってんじゃあねーか」

「マンハッタン・トランスファアー。位置に付きました。ここから968メートルです。ですが標的の位置が…部屋変えたかもしれないですね。まだ見つからない」

「おい、勝手にはじめんなよ…ほら、無線機だ」



イルーゾオは無線機を渡すとホテルの屋上から降りていった。

「あー、みてみたいなー先輩のスタンド」

「コピーしたいのか？」

「それもありますけど普通にもっと知りたいです、皆さんのこと」

ライフルを構えるブランクの姿はサマになっていた。シモ・ハイへもどきというのがどんなやつか気になるが、ここ一週間こいつにそれとなく昔の話を振っても具体的なエピソードがほとんどでてこなかった。というかうまく自分のことが話せないようだった。

『イルーゾオだ。ターゲットのいる部屋、鏡はあるんだがちよつと見えにくい。5階の角部屋だ。ふた部屋あるうちの寝室にいるぜ』

「了解。スタンドの位置を調整します」

『シャワー室とクローゼットの中にしか鏡がねーんだよ、ここ。だから音と物の動きしかわからんが、うす開きのクローゼットのドアから見るに抜け毛のケアしてるっばいぜ。……いやちげえ！こいつツラだぜ!!髪の毛だけ浮いてる！ツラ外して櫛で梳かしてんのか』

「まじっすか。ツラ、寝るときも被ってくれば狙いやすいですね」

『それはねえな。……今ベッドサイドの椅子にいるようだ。マンハッタン・トランスファーは場所を掴んだか？』

「はい。かすかに気流を探知しました。…いけます」

『梳かし終わっちゃうぞ。早くやれ』

「了解。撃ちます」

ホルマジオは耳をふさいだ。銃声が轟き、ブランクが反動で肩を揺らした。一キロ先にあるマンハッタン・トランスファーに当たったのか裸眼では到底わからない。

『…命中だ』

イルーゾオの声が無線からした。

『だがおい、お前どうして顔の中心にぶっこんだんだよ。ひでーやつだな、顔の判別がつかわからんぞこんなのじゃ』

「え？あら。そんなとこに当たりましたか。まあ見せしめっぼくはなつたかな…」

『オレは帰還するぜ』

イルーゾオの通信が切れ、ブランクはてきぱきと銃を分解し始めた。銃声のせいでホテルの下の方が騒ぎはじめてる。銃をしまい終えたカバンをリトル・フィートで小さくして二人はそそくさと部屋に戻った。

「ね？慣れたものです」

「普通に殺し屋として食ってけそうだな」

「今回はスタンドが強かっただけです。借り物ですから…でもまだ僕隠し玉いっぱいあるんで！超期待、最強！」

「そーかいそーかい。イルーゾオが帰ってきたら早速イタリア行きの船に乗るぞ。もうこんな暑いとこいたくねーし」

「ハッ！僕は好きですが！…こきょうのにおい！」

「出身なのか？」

「え？それはわかんないっす」

「…おめーよー…今まで優しきで何回お前を殴るの思いとどまったか教えてやろーか」

「それは知りたくないです！」

三人はシチリア島でちよつとだけ贅沢な飯を食い、ネアポリスに帰還した。初任務達成をねぎらってささやかながら祝杯が用意されていたが、すでにべろべろの三人には味がよくわからないわ吐くわで、ギアツチョがめちやくちやキレてブランクだけをボコボコにした。

こうしてブランクはきちんと仕事をこなす一人前として認識された。ブランクはほんの少しだけそれを誇らしく思ったが、それを感じることは指示されていないことなのですぐ忘れた。少なくとも本人はそう処理した。

「もしもし…ブランクです。ドツピオさん。はい、対象の通信記録、検索記録、カード情報、位置情報を抜きました」

「はい。クロです。ソリッド・ナージについて調査しています。…え

？ショッピング履歴？…ペデイキュア、シエイブローション、定期購読してるフランスのファッション誌…ああ、はい。エジプトへの旅券を買ってますね」

「はい。わかりました。ではそちらへ連絡します。ええつと……チヨコラート？タ？…タですね。わかりました」

罪と罰③ 1999年3月

『はい』

「チヨコラータ？」

『どちら様です？』

「ブランクです。えー…受験者の」

『ああ…話に聞いているよ。こちらはすでにネアロポリス入りしてる』

「そうですか。仕事にはかかれますか？」

『問題ないよ。問題ないとも。場所を教えてください』

「地図を送ります」

『…受け取った。では現地で会おうか』

チヨコラータとの待ち合わせ場所に行つてすぐにブランクは納得した。自分が面接を受けたのと同じ時期にボス直々に親衛隊入りを打診されたという男。

只者じゃないというのが肌でわかる。できれば関わり合いたくないが、こいつらに同行しなきゃ親衛隊入りは無理だ。ブランクは自分が「嫌悪感」をちゃんと感じていることに感動した。

元医者らしいが医者っぽい雰囲気全然ない。笑顔を浮かべて佇んでいるがオーラが澱んでいる。足元にかなり大きな箱を置いている。

横に立つてる男は猫背で、なんだか挙動が不審だった。時々チヨコラータの方を見て何かをねだつてるようだったが、すくなくとも成人男性がやっていい仕事ではない。

「ブランクです。こんにちは」

「ああ。君がそうなのか。…ふうん。頑張っているかい」

「はい」

今日のブランクは誰でもなかった。ムーロロがなるべく誰でもなく自分でいると指示したからだ。

普段の「自分」は外界に対してほとんどリアクションをとってな

かったが、今日は多少コミュニケーションを取れるように頑張っていた。

ムーロクの指示とはいえ、誰かになりきってもないのに人と話さなきゃならないのはとても苦痛だ。

「裏切り者は…この時間二人揃って隠れ家にいます。一緒に昼寝しています」

「仲がいいんだねえ。そう聞いていたから、張り切ってたんだよ」

何を？と聞くのは面倒だった。ブランクはチョコラータと荷物をせかせか運ぶ男をソルベとジェラートのアパートの前まで案内した。

「じゃあ、呼ぶから。ちょっと待ってておくれ」

「はい」

命令されてブランクはホツとした。ソルベとジェラートが殺されるまでここで立つてればいい。楽な仕事だ。

自分が親衛隊に入るには二人を売るしかない。二人とは二ヶ月間それなりに話したが、ブランクには情というものがまだよくわからなかった。そもそもそれらを持つよう言われていない。

ブランクの思考は実にシンプルだった。命令を、あるいは指示をこなす。それだけ。そう育てられたからなのか、そう生まれついたのかはわからないが、感じることも思い出すことも言われなければやらないようにして生きている。

ムーロクに従い、親衛隊に入る。その命令以外に指示されたことは  
リゾット：社交性のある人格であること

リゾット：スタンド能力のことを迂闊に話さないこと

ホルマジオ：嘘をつかないこと

イルーゾオ：彼のベッドのシーツに絶対に、死んでも触らないこと

メローネ：スーツをクリーニングに出すこと

ギアツチヨ：彼の私物に触ったら死ぬこと

ソルベとジェラート：二人に近づかないこと

チョコラータ：ここで待つこと

だけだ。つまり、それ以外はやってはいけない。それに反してはいけない。

とうるるるるるん…

「はい。ブランクです」

『チヨコラータだ。ちよつと来てくれるか?』

「はい」

ブランクがソルベとジェラートの部屋に行くと、二人はまだ生きていた。てつきり殺してから連絡が来るものと思っていたのでブランクは当惑した。

縛られたジェラートがブランクを見てなにかウーウー叫んでいるが猿轡のせいで何を言ってるのかわからない。

ソルベはダイニングテーブルの上に寝かせられている。ラップのようなビニールでギチギチに拘束され、目を恐怖でひん剥いている。ただし彼は轡をされていない。ブランクを見るなり罵声が飛んできた。

「どういうことだテメー! ブランクツ! コイツらは何なんだ?!」

「……」

ブランクは質問に答えるべきか考えた。もう死ぬから言ってもいいの。死ぬから教えないでおくべきか。困ってチヨコラータを見ると、彼が代わりにソルベの疑問に答えた。

「ボスは暗殺チームに裏切り者がいる事は知ってたんだけどね…確実に誰か突き止められなかったそうなんだ。だから彼を送り込んだよ。自分で蒔いた種だから、彼を責めるのはお門違いってもんじゃないか?」

「テメー、オレたちを裏切ってたのか?! はじめっから」

「先に裏切ったのは君たちだろう? ボスの正体を探るものがどうなったかって知ってるはずなのに」

くすくす、と猫背の男が笑った。なぜかカメラを構えてソルベとジェラートを交互に撮っている。これから何が始まるのだろうか。

「裏切り者には罰を」

チヨコラータが取り出したのは大きな肉きり包丁だった。屠殺場

で使うような巨大な刃物をみてジェラートが暴れまくる。

ブランクは自分の心臓がものすごいスピードで脈打ってるのを感じた。項の毛まで逆だってる。なんだかとても…とても…その先をどう言い表せばいいのかわからない。

「あんまり騒ぐと他の住人が…」

「問題ない。もう誰もいないからな」

「…どういうことですか？」

「さあね。どうでも良くないか？始めよう。君にはアシスタントをお願いしたくて。ほら、セツコは録画してるから手が空かないだろう？」

「はい。指示をお願いします」

「簡単なことだよ。これから彼を刻んでいく。その部品をなるべく丁寧にこの箱に詰めてくれるか？丁寧にだぞ。あんまりぐちゃぐちゃだと、あとできれいにみえないから」

そういつてチョコラータはずっと持ってた大きな箱を指した。中にはさらに小さい箱が大小様々詰まっていた。マトリョーシカみただい。

「…刻むとは？」

「え？刻むと言ったら刻むんだよ。35…いや、36かな。ほら〜ペディキュア、これ、きれいに塗ってあつて感心したんだ。足をピーンでさせて、指だけ標本になってたら素敵だと思わないか？」

ブランクはチョコラータが何を言ってるのか、頭の中でゆっくり噛み砕いた。やりたいことはわかった。だが理由がわからなすぎる。裏切り者の報復だとしたら悪趣味すぎる。

「…なぜそのようなことをするんでしょうか？」

「そりゃあ、見てみたいからだよ。見てみたくないか？恋人の前で足から刻まれてく男の顔と、それを見る恋人の顔。想像しただけでたまらない。興味がある」

それを聞いてソルベの罵声はいよいよピークを迎えた。チョコラータは大好きな音楽でもきくようにニコニコしてる。

「なるほど」

はつきり言つてチョコラータの語つた理由はブランクにはよくわからない。よくわからないし、とてもやりたくないと思つた。だがチョコラータは手伝えと指示したのだ。

自分は指示を突っぱねた事はない。

「さ、はじめようか」

なんの躊躇いもなくチョコラータは包丁を振りかぶつた。そしてピンと伸ばされた足の指、ジェラートとおそろいのペディキュアが塗られた足の先を切断した。

悍ましい悲鳴が聞こえた。ブランクは絶叫するソルベの口の中に虫歯の治療痕があるのを発見した。彼の頭の向こうでジェラートが失禁するのが見えた。

見たくない。

頭の中にそれだけが浮かんだ。

「ほらあ。ぼうつとしないで！箱にしまつてくれ」

「はい」

ブランクはハツとして切り落とされた指を拾つた。切断面はとても美しい。親指の骨をうまく避けて切つているおかげで刃がもたつかなかつたのだろう。指を箱に入れるとき、ブランクはその切断面にもやもやとしたなにかがへばりつき、蠢いているのを発見した。カビのようだった。

「あの、これは…」

「それはわたしのスタンドだよ。いいから、気にせずほら、しまつてしまつて！」

「はい」

ブランクは箱の蓋をした。パチンという音を聞いてチョコラータはまた肉包丁を振りかぶり、足の甲を切断した。今回も中足骨があるにも関わらず美しい断面だ。遅れて血が流れるが、その血は流れたそばからカビに覆われていく。ブランクはそれを拾い、またケースにしまう。

「ブランク！テメー！呪つてやる！絶対に許さねえからな、オレが死んでも絶対にあいつらがテメーを…」



チョコラータはソルベの怒声を無視して足首を切断した。ゴツドンと言う音がして関節からきれいに落ちる。

「ギャアアアア……ッ！」

「さてどこまで一刀両断でいけるかな。経験的に言うとき意外と、足の付け根くらいまでならいけるんだよな」

それから悲鳴と肉を断つ音が景気よく何度も繰り返された。大腿骨を断ち切る頃には、悲鳴は命乞いめいたうわ言に変わった。

「頼む、ジェラートだけは許してやってくれ。頼む。頼むから……」

足の根本を断ち切るとき、包丁が骨にあたってゴツンという音を立てた。ソルベが感じる鈍い痛みを嫌でも想像してしまう。自分の想像力じゃ追いつかない痛みを感じてるんだろう。ソルベの顔はもうぐちゃぐちゃだ。

チョコラータが骨に半分埋まった包丁を引き抜き、もう一度叩きつける。

「ひげっ」

としやくり上げるような声が聞こえブランクは持つてる箱を取り落としそうになった。チョコラータは今度こそ完全に斬り落とした太腿の断面を見て、こちよこちよとくすぐるように筋肉繊維を撫でる。またソルベが悲鳴を上げた。

そこでようやくブランクは彼が失血で死ねないことを悟った。切る端からカビが血管を塞いでいるのだ。今も動脈から血が吹き出したのは一瞬で、もうカビが断面を覆い尽くしている。テーブルもほとんど汚れていない。

こんな拷問は……いや、処刑か。さすがに初めてみた。どんな苦しみにも終わりはあるがその終わりが遠すぎる。そしてその途方もないソルベの絶望と痛みはブランクが招いたものだった。

ジェラートももうただ体中の穴から液体を流してるだけだ。ブランクも口からゲロが出そうだった。

「骨盤を真つ二つはちよつと骨が折れるね……ふふ、骨が折れる……だつてさ。のこぎりを使うかね」

そういつてチョコラータは小型の骨用鋸を取り出した。先程の肉

包丁より大ぶりの鉋で腹部を斬り、赤い肉と薄ピンクの腹膜を遠慮なくにかき分け鋸をに突っ込んでく。

ガリガリガリガリ、と暴力的な音が耳孔から脳へ駆け抜けていく。みちみちみち、と肉を巻き込む音も聞こえて、ひととき大きな悲鳴を上げてソルベが気絶した。

セッコがつんつん、とチヨコラータの太ももを突つつき、ジェラートを指さした。彼は猿轡を飲み込み窒息して痙攣していた。

びくんびくんと体全体が跳ねている。物凄くくぐもつた咳みみたいな音が聞こえて、それから全く動かなくなった。

「ホホホホホッ！いやゝたまらんなあ。セッコ、ちゃんと撮れてるか?!」

「うんッ！」

「良オ~~~~~よしよしよしよしよしい子だッ。終わったらご褒美だッ！たっぷりね」

ブランクはジェラートの恐怖で引きつったぐちやぐちやの顔を見て、自分にこれまで感じたことのない大きな感情が芽生えてるのがわかった。だかその芽をどうすればいいのかわからない。ブランクには今切断されたソルベの下半身と手の指の付け根を同じケースにしまふことしかできない。

腹腔は腰部分と比べとても斬りやすいようだった。何よりチヨコラータは腕が良い。複雑に入り組んだ腸も崩れることなく切断し、あつという間にカビにくるんで保存する。多少持ち上げたくらいじゃ内蔵が飛び出してくることもない。

肋骨もうまく避けて、どうしても当たる部分は骨自体を潰さないように丁寧に鋸で切っていく。その度におぞましい音がして、どんどん胸が腐るようなどす黒いなかか芽生えていく。

チヨコラータは肝臓を真っ二つに切断する。ソルベの肝臓は意外ときれいな色をしていた。ああ、そういえば二人は健康に気を使っていたなと場違いな回想がブランクの脳裏に浮かんた。

ソルベはもう何も言わないし叫ばなかった。切断するとき口からうめき声みたいな空気を吐くだけだった。チヨコラータは面白く

なさそうにソルベの露出した肺を揉んでみた。ぼしゅ、と喉から変な音が出ただけだった。

「あーもう、発狂したのか？おーい。ほら、ブランクくん。彼に呼びかけてー！」

「え……」

ブランクはチョコロータに小突かれ、ソルベの顔が見える位置に行かされた。ソルベの顔は恐怖により歪み、目は見開き口もかっぴらいている。生きているとしたら、それが最大の罰だ。地獄すらも生温い苦痛を想像させる顔だ。

もう、ブランクの事が見えているのかわからない。

「や……やりたく、ない」

ブランクは自分の口からそんな言葉が出たことに驚いた。

「え？君、嫌なのか？…セツコ、ちゃんと彼も撮ってるか？よオーしよしよし偉いぞ。やりたくないっていつでも、君はやらなきやいけないんだ」

やらなきやいけない。

ブランクの今までの生き方に従えば。

空っぽ。

そう思っていた。何も響かない真空みたいなものだ。

僕の中の空虚になにかがどんどん溜まってく。

どす黒い何かが。

ブランクはつばを飲み込んだ。口の中に血の味を感じる。

「ソ、ソルベさん…起きてください…あ、あなたの…心臓、に。今…うう。刃が通りました。感じますか？う…：…わかりますか？」

心臓は動いていた。ついさっきまで。カビが一瞬で覆えない巨大な血の坩堝。今度の出血はテールブルにドバッと溢れ、床まで滴った。これでようやく殺人現場っぽくなった。

「おお、いいねー実況プレイツ!!これは励まされるなあ…その調子その調子!続けて?」

ゴリゴリゴリゴリと硬い音がする。もう脳に酸素が行かなくて死んでいてくれていればいいのに。

「肩甲骨に…鋸を入れています。わ、わかりますか…ああ…ご、ごめんなさい…」

「なぜ君が謝るんだ？何も悪い事はしてないじゃないか。あくいい、いいッ！その表情。ポーカーフェイスからそういう表情が出るのってたまらない！素晴らしいね〜」

チヨコロータは首を一刀両断しながら微笑む。その喉の断面が一度だけ自発的に伸縮した。ブランクはもう、ソルベに何も言えなかった。そして自分の心を制御できないままチヨコロータに話しかけていた。

「僕は…指示に対して本気で嫌だっと思ったのは初めてです。人に、人に対して、こ、こんなに罪悪感を持ったのも」

「あくたまらん…。わたしは君をとつても気に入った…今、君は感じてるんだな」

チヨコロータはソルベの口を少し開け、そこから下顎骨を分離させるように切断した。これできつと脳幹も損傷したろう。やつとソルベは死んだと確信できた。

「…僕は怒るべきですか？」

「は？」

「僕は泣くべきですか…？それとも自責の念に駆られるべきですか？」

「君は面白いねえ」

「気持ち悪い…」

「吐くならここで吐かないほうがいいよ。バレちゃったら親衛隊に入っても命があるかどうか…」

「僕は親衛隊に入れますか？」

「ん？うんうん。推薦しておこう。なんていうか君は見込みがある。わたしのもとで働いたら、きつと素敵な人間になれるよ。どうだ？」

その言葉にセツコがどたばたと抗議の意を示しているようだった。コミカルな動きだがとても笑う気になれない。

「…いえ…結構です」

「ブランクくん、君は自分というものがものすごく希薄だと聞いて

ているよ。わたしはこれでも研修のとき精神科にいたんだよ。だからわかるんだ。人は大きなストレスを抱えたとき、どんなに無感動だって思い込んでても、本当の自分の姿を垣間見ることができんだ」

チヨコロータはわざわざかがんでブランクと視線を合わせた。

「絶望や死や苦しみは、人間の精神を最も浮き彫りにする。そう思うんだよわたしは。…どうかな、君のはじめての感情は」

「……………これが……………感情なんですね」

「そうだよ。どんな気持ち？わたしに聞かせてくれ」

チヨコロータの笑顔を見て、ブランクは息を呑んだ。チヨコロータはブランクと同じくソルベだった肉塊の前に立っているというのに自分とは真反対の精神状態にいる。

ずっと誰かの模倣で生きてたブランクは初めて「これにはなれない」という相手に出会ってしまった。足元が大きく崩れていくような気分になる。

「……………わかりません」

「おや」

「ただここに長居したくないと思っています」

「ふーっーん」

チヨコロータはがっかりしたようだった。ふいつとブランクから視線を外し、36個に分解されたソルベを運び出し始めた。ブランクも手伝った。

「じゃ……………また」

「さようなら」

昼間合流したときとほとんど変わらない調子で二人は車に乗って市内に消えた。

ブランクは自分の服にかすかに血がついてるのをみつけ、頭の中に黒いもやもやが溜まってくのを感じた。

ブランクは帰ってから服を焼き捨てた。捨てとけと言われていた古いパーカーなのだから悲しむ必要なんてないが、何故か無性に悲しかった。

飯をくおうと思った。だが頭の中にソルベの内臓の色がちらついで何も喉を通らない。喉。ぐにやぐにやした弾性のある肉の塊。

吐きはしなかった。もつと料理に近い死体なら見たことある。ただひたすらに気分が落ち込んでいった。

ブランクはふいに自分をずつと連れ歩いてくれた『恩人』のことを思い出した。彼はまだ若いのに戦場に行き場を見出していた。

お前は復讐しなくてはならない、と繰り返し言われていた。

復讐には心が邪魔だ。葛藤するな。お前はあの血統を滅ぼすこと以外何も思わなくてもいいと。

ブランクにはピンとこなかった。言われるまでもなく、葛藤などしたこともないし何かが好きとか嫌いとか、そういうことがまずわからなかった。

ただ『復讐のために心を捨てろ』というのはきつとブランクではなく自分自身に言ってるのだなと思っただけだった。心がわからないぶん、恩人の望む姿でいようと思った。だから全ての命令に従っていた。

『恩人』と別れたのは最近だった。自分が戻るまで適当に生きておけと言われたのが最後だ。無性にあの人に会いたいと思ったのは初めてだった。

とうるるるるるん……

電話が鳴った。

「はい。ブランクです」

『あ、お久しぶりです。ドツピオです。お疲れ様でした。チョコラータも褒めてました。：無事、あなたは親衛隊に抜擢です。ただ：もう少し、いやもしかしたらずつと暗殺チームにいてもらうかもしれせん。追って連絡しますけど：任務は継続ということ』

「わかりました」

電話はすぐに切れた。ムーロクからの命令はこれでワンステップ進んだわけだ。無事、自分は命令をこなし続けている。それに安心する。

とうるるるるるん……

また電話だ。

「はい。ブランクです」

『よおブランク。どうせ家で暇してんだろ？今から来いよ、おもしろーもん見せてやっから』

「わかりました」

ブランクは居場所を聞いてすぐに電話を切った。断るのはブランクらしくない。でも今ホルマジオと顔を合わせたくなかった。それでもブランクは指示された場所へ向かうしかないのだった。

罪と罰ーI act as you wantー

呼び出された場所は高級なレストランだった。急にこういうところに入る事になったら、メローネに選んでもらったスーツみたいなのを着てないととても困る。パーカーはやっぱり捨ててよかったんだ。「こっちだ」

プロシユートが手を挙げてブランクを呼んだ。テーブルについているのはプロシユート、ペッシ、メローネだけだ。

「あれ、ホルマジオ先輩は？」

「あいつは今仕込み中だ」

「仕込み？」

「とりあえずなんか飲めよ」

「じゃあ：ウイスキーお湯割りで」

「そんなふざけたメニユーここにはねーよ」

「ミルクはあるのに？」

ブランクはペッシが飲んでるミルクをちらつと見て言う。

「ミルクはどこにでもあるよ」

「じゃあ僕もミルクを」

「お前らなあ：そんなの飲んでるギャングがいるかよ。ペッシ、お前はオレの隣で今まで何をみてきたんだ」

「ご、ごめんよ兄貴」

などと話しているとホルマジオが戻ってきた。ペッシに車の鍵を投げつけるとやるよ！と気前よく言った。

「ブランク、お前も好きなもん食えよ」

「いや、僕いま食欲ないんすよね…」

「はあ？勿体ねえ」

「だからお前なよなよなんだよ。背、伸びないぞ。そういえばお前年齢いくつだ？」

メローネはやたらと身長体重年齢血液型という身体的なデータを尋ねてくる。誰に対してもそうらしいがかなり不評で、イルーゾオは



以前「マジでキモいよな」と漏らしていた。

「んー：15歳から18歳の間だとは思うんですけど、ちよつとわかんないっすね」

「思ったより若いな」

「僕発育いーんす。伸び代！」

「戸籍とかちやんとあんのかよ」

「よくわかんないっす」

「よく今まで生きてこれたな」

「へへ：照れますー！」

「なんで褒められてると思ってるんだこいつ」

ホルマジオはブランク越しにある席を眺めていた。その席についた男と女性が席を立つと、「よっし！仕上げと行くか」と言ってペツシの肩を掴んで前方の男性を指さした。

「よく見てろよマンモーニたち」

さつきホルマジオが見ていた男だった。

男は急に苦しみだし、ボン、と音がしてその男から車が出てきた：としか言いようがない。ギャグみたいな光景にペツシは言葉を失った。

そして連れの女が車に押しつぶされ、その血が車体の下から流れてきてからようやく

「ヒイヒイヒイーツ」

と叫んだ。ホルマジオはそんなペツシを見てご満悦だった。プロシユートとメローネは「あーあ」と言って殺す予定になかった女の死体の方を見ていた。

「あつはつはつは！よし、帰って会議だ！終わったらサッカーでも見ようぜ」

本部に行くところとソルベとジェラート以外全員がすでに揃っていた。今回の“車ボーン”案件の報酬についての話し合いだ。当然実働し

ているホルマジオの取り分は多いが、ボスからの報酬は任務に関わろうと関わるまいと全員に配当される。

「アイツらが来てないなんて珍しいな」

「サボりか？」

ブランクは平静を装っていつもソルベとジェラートが座ってる椅子を見た。

「どっかにしけこんでんだろ、ドーセ」

イルーゾオがニヤニヤしながら言うとりゾットが深刻そうな声で言った。

「いや、報酬にがめついあいつらが欠席なんておかしい。変だ」

全員が沈黙した。心当たりがあるのはブランクだけではない。

そもそもなぜブランクが暗殺チームに派遣されたか。それはチーム全体に反逆の兆しがあったからだ。暗殺チームにはボスからの報酬のみでそれ以外にしのぎがない。故に不満がゆっくり蓄積している。

カンノーロ・ムーロロはそこに目をつけたのだ。

ソルベとジェラートを探すためにチームはそれぞれ搜索を開始した。だが一向に二人の行方はつかめないまま一日がたった。

ブランクが突き止めた二人の隠れ家はどうかやらの誰も知らないようだった。たしかに自分の仲間を尾行しスパイする必要なんてないのだからチームメンバーが知ってる必要もない。秘密を暴く必要も、殺す必要も。

ブランクはリゾット、ギアツチヨとともに本部で待機していた。

「テメーはなんで行かねーんだ？」

ギアツチヨはパソコンでチームと情報技術部の協力者と連絡を取り、時にそれをメンバーに中継していて忙しそうだ。別にギアツチヨは特別機械に明るいというわけではないが、リゾットはリーダーだしブランクは機械音痴ということになってるので仕方なくやっている。

「僕はお二人に近づくなと言われてますので…」

「こんな時に何言ってるんだテメーツ！」

「ヒイ！殴らないで！」

リゾットは拳を振り上げかけたギアッチョに尋ねる。

「カード履歴は見れないのか？電車や飛行機に乗った形跡は？」

「見てるけどよオ、2日前でぱったり止まってその後一切使ってねーんだよ」

「そうか…」

リゾットは落胆というよりかは何か覚悟したような重たい口調だった。ギアッチョはだんだん額の血管を浮き上がらせてヒートアップしていく。

「なんでオレらがこんな目に合わなきゃなんねーんだよオ。そもそもオレらの実力は組織ナンバーワンだろ？こんな低賃金でよく働かされる立場じゃねーっツのによお！」

「少しは落ち着け、ギアッチョ」

ブランクは腕をぎゅつと抱いた。隠れ家に行けばジェラートは絶対に見つかる。だがソルベはあのあとどうなったんだろうか？

「テメー今日はぜんっぜん喋んねーなオイ。なんか喋れよツ！」

ギアッチョが唐突にブランクの頭を小突いて怒鳴った。

「だってギアッチョ先輩、僕がしゃべると殴るじゃないですか！」

「殴んのはテメーがつまんねー話してるときだけだろーが！黙っててもイライラするぜツ！」

「リゾットさん、この人頭がおかしいです！」

「落ち着けお前等」

とうるるるるるん…

そして、電話が鳴った。

鳴ったのはリゾットの携帯電話だった。リゾットはすぐ電話に出る。

「リゾットだ。ああ。……窒息死？」

いきなり不穏な言葉が聞こえた。ブランクにはジェラートが見つかったのだとすぐにわかった。ギアッチョがどうなったか気になりすぎて激しく貧乏ゆすりを始める。

「わかった。遺体はそのままにしておけ。すぐにいく」

そして電話をきると立ち上がり、端的に通話内容を二人に伝えた。

「ジェラートの死体が二人が偽名で契約していたマンションから見つかった。オレとブランクがそこに向かう。ギアツチヨ、お前はチームと連絡を取り合い一度全員を本部に集めろ」

「オレも行くぜッ」

「いや、お前じゃないとパソコンを使えないからな…」

「クソツツ！お前がバカなせいで頭のいいオレが損するなんてマジありえねー！！」

「ヒイ…」

ブランクはギアツチヨから逃げるようにリゾットについていった。本当はあんなおぞましい事のあった現場に再び行くななんて嫌だ。

嫌だ。

今演じている、名前も知らない少年の感情じゃない。これはきつと自分の意志だ。チョコラータの問いかけが脳裏によぎった。

「ジェラートは…」

隠れ家に向かう車の中で、リゾットがふいに口を開いた。

「お前のことを全然可愛がってなかったが、嫌っていたわけではない」

「あ…はい。それはわかってました。死んだのは残念で悲しいです」

「ブランク、それはお前の感情なのか？」

「え？」

「他の連中はまだ知らないが、オレはお前にあった時 “社交的な性格でいる” と命令した。お前はそれを守り続けているが、今回の言葉はどっちなんだ？会ったときの空っぽのお前か？」

「…えっと…」

ブランクは考えようとした。 “僕” はジェラートが死んだと聞いてどう思った？ “僕は彼が死ぬところを見た” という事実を “僕” は知らないふりをしている？だめだ、頭が混乱する。

「わかりません」

「……………そうか」

対向車のライトが二人を照らした。ブランクは自分の前髪を留め

ていた頭につけている眼鏡を下ろす。伸びっぱなしの前髪で瞳が完全に隠れる。

「ただ、二人の椅子が空いてしまうこととか…二人のカップを片付けるべきか、とか…あの二人を呼び出すときに気を使うとかしなくないんだ、とか…そういうことを思います」

「そうか」

目的地に到着した。ブランクは腕に鳥肌が立つのを感じた。

ソルベとジェラートの隠れ家に行くと、ドアの前でホルマジオが待っていた。

「…おう」

「中だな？」

「ああ」

ホルマジオとリゾットは中に入っていく。ブランクもそれに続く。ソルベの断片を運ぶため繰り返し往復した廊下だ。その先に転がっているジェラートの遺体も何回も見た。

目立った変化はない。まだ虫たちが本格的に活動してないおかげだ。あの日見た通りの恐怖に引きつった顔。まるで焼き付いてしまったかのようだ。

「猿轡を喉の奥まで飲み込んで死んでる」

ホルマジオはすぐそばのダイニングテーブルを指差した。心臓を切ったときに流れ出た血がすっかり乾いてどす黒い色のカスになって広がっている。

「こっちはソルベの血だよな…ざっと調べたが死体は見つかんねえ」

「ソルベの死体だけ持ち去られたということか」

「ああ。……なあ、ジェラートは一体何を見たんだ？何を見たらこんな顔になるんだよ」

「さあな…」

ブランクは無言でジェラートをみた。白目が濁り始めている。2日ほど経って皮膚の下で腐敗が進んでいるせいだろうか。最後に見たときより肌がおどろおどろしい色味を帯び、臭いを放っている。

「死後硬直がとけかけてるな。…こんな顔のままでは気の毒だ」

リゾットはジェラートの傍らに屈み、臉をおろしてやった。でも顔の筋肉はどうしようもなかった。轡に指紋があるかも、という淡い期待を持ってかそれ以上遺体に手を触れなかった。

「あの、買収してる警察を呼びますか…？」

「いや…呼んでも来ないだろう。誰も裏切り者には関わりたくないだろうからな」

「裏切り者？」

「見ろ、この紙」

その紙は覚えている。チョコラータがジェラートの遺体に貼り付けた「punizione 罰」と書かれた紙。自分はここで何が起きたのかわかってるし、ジェラートが死んだ瞬間何を見ていたのか知ってるし、ソルベがどう殺されたかこの目で見ている。

全部知ってて、白々しく言うのだ。

「まさか…ボスの情報を探ってたんですか」

「そうだ。そして罰された」

「クソツツ!! 一体ソルベはどこ行っちゃまったんだよ!!」

それはブランクも知らなかった。

その後リゾットは本部に戻り、ホルマジオは事件現場の捜査ができるような能力を持つ組織の人間に声をかけに行くことになった。ジェラートの遺体はこのまま置いておくことはできないため、どこか保管場所を探さねばならなかった。ブランクはその役目を進んで引き受けた。下っ端の仕事だからだ。

結局、ジェラートの遺体をおいてくれる死体安置所を探すのに一晩費やした。誰もパツシヨーネから反感を買いたくないんだろう。結局100年前の設備がそのまま残ってるような古い病院に金を積んで置いてもらえたが、あまり長くしなくてくれと言われてしまった。その後ジェラートの遺体を運び込むころには朝になってた。

ブランクは流石に眠くなり、早朝からやってるアメリカのコーヒーチェーンでコーヒーを飲んでから本部に戻ろうとしてきた。そこでまた携帯電話が鳴った。

とうるるるるるん…

「はい。ブランクです」

『寝てたのか?』

かけてきたのはイルーゾオだった。まだ本部に全員いるのかと思いきや、電話の向こうから聞こえるのは風の音だった。

「寝そうなだけっす」

『今どこにいんだ?』

「カゾーリアのシティーホテルのそばっす」

『じゃあ迎えに行つてやるよ』

「え…なんでですか?」

『は?なんでつてなんだ』

「イルーゾオ先輩、今まで僕を置き去りにしたことはあつても迎えに来たことなんてないじゃないですか。まさか…僕を暗殺しに…?」

『あー?お前本気で言つてんのか?だったら何も言わずに殺してるだろ。いいからおとなしく待つてろ』

ネアポリスにいるのならここには15分もあればついてしまう。ブランクはコーヒーを飲み干し店外に出て、車でも目に止まりやすい駅の方へ向かった。

駅のすぐそばの道でちょうど都合よくイルーゾオがブランクを見つけ、クラクションを鳴らした。

「とつとと乗れよ」

「ありがとうございます」

ブランクには車の良し悪しはよくわからないが、イルーゾオの乗つてるのは最近カタログで見かけたオープンカーだった。冷たい風がかなり当たるので寝ようとしてもねれない。

「みんな解散したんですか」

「一旦な。安置所、こんなところまでこねーと見つかなかつたのか?」

「ネアポリスのは全部だめでしたから…」

「そうか。ビビリの糞ヤローしかいねーな、ネアポリスには」

「…………あの、イルーゾオ先輩、どういう風の吹き回しなんですか?」

「は？」

「いや、だっておかしいじゃないですか。なぜ僕を迎えに？本当は真の目的があるんですよ？」

「お前の面倒見ろって言われたのはホルマジオだけじゃねーだろ」

「そうですか…」

「オレが親切にしてんのがそんなに不満か？」

「いや、超嬉しいです」

「ま、今はホルマジオが参ってるからな…オレは見てないんだが、ジェラートの顔って…」

「そうですね。あんまりことばにしたくない感じでした」

「ソルベもジェラートもバカだな。確かにオレたちの待遇は納得できねーけど、ボスの正体を探るなんて自殺行為だろ」

「…：イルーゾオさんは知ってました？その…：二人がボスの正体を探ってるって」

「いや、そんな素振り見せてなかったからな。やるならあいつらだと思いが…」

「そうですよね」

「オレだって野心はあるけどよオ…：手順つつもんがあるだろ。なんでいきなり本命に当たるんだか。やっぱよー、二人で肯定しあつてると回り見えなくなるんだろーな」

イルーゾオやホルマジオはブランクより付き合いが長いぶん堪えるのだろう。遺体の搬送をかってでてよかった。

ネアポリスに戻ると人々が起き出したらしく出勤する人や店をあける人がいた。ブランクは目を細めながら朝日に照らされる町並みを眺めた。

「オマエ…：こういうときにはおちやらけねーんだな」

「だ、だって空気読まないと殴るじゃないすか」

「オレはお前に手を上げたことねーよ。…：ねーよな？初対面の時は置いていて」

「え？覚えてないっすね…」

「はーあ…：怠い。怠いな。お前運転しろよ」



「いいですけど事故つてもいいですか？すっげー眠くて目が霞んでて…」

「使えね〜」

「いや、いいですよ。やります！任せて！代わってください」

「代わるわけねーだろーが」

2日後、本部に大量の荷物が届いたことで状況が一変した。一辺50センチ、厚さは実に6センチはある巨大な荷物が、36個。

暗殺チームはその日全員本部にいて、ジェラートの死亡現場についての調査結果を共有していた。何も証拠らしきものはなく、全員が落胆しているところに突然宅配業者がやってきたのだ。

36という数字を聞いてブランクはぞつとした。だが荷物の形はどれも同じ四角だった。ソルベの死体なのはほぼ間違いないが、なぜこんな形をしているのだろう。

「にしてもなんなんだこれ…現代アートってやつか？」

そのままにはしておけず、メンバーで36の包みをやぶき始めた。メローネが半分剥いたそれを見てつぶやく。

ブランクは額縁とその中に収まっている透明の液体を見てすぐにチヨコラータが言つてたことを思い出した。

『標本になってたら素敵だと思わないかい？』

「う……………ッー！」

今時分が手に持っている額縁の中央に浮かぶのは、あの切るのに手間取っていた腰骨と手の甲だった。

ブランクは思わず後ろに仰け反り、ちょうど後ろに立っていたプロシユートに激突した。

「ツテーな…なんだよ？」

「こッ…これは……………!!」

ほぼ同じタイミングでペッシが叫んだ。

「ソルベの足の指だ！このペディキュア、ジェラートとオソロのやつだ！」

「何ッ?!」

ブランクはしゃがみ込み、慌てて包みをビリビりに裂き始めるチームを見ていた。額を外して皮膚表面を確認すると、それが何なのか疑いようもなくなる。

「こ、この入れ墨…確かに見たことある」

「並べてみる!」

「お、オレ見たくねえよ!」

「うるせえ! いいからとつとと並べるんだ」

36のソルベが順番に並べられていく。切断面はおそらく後ほど修繕したのだろう。とても美しい出来だ。

「こんな…こんなことって…」

送られてきたのはホルマリン漬けになった輪切りのソルベだった。

何より恐ろしいのは手間のかけ方だ。額をすべて取り払い並べられたソルベはおぞましい表情をしていた。ただ見せるのではなく、組み立てさせて、触れさせてその顔を観客に晒す。

あまりに重すぎる「罰」だった。

「ジェラートはよオ…目の前でソルベが輪切りにされてくのを見て、絶望のあまり…」

全員無言だった。想像を絶する苦痛を与えられて殺されたのは明らかだった。ブランクは彼がチョコラータのカビのスタンドによりなかなか死ねずにいたのを知っている。死してなお晒し者にされるとはその時予想だにしていなかったとはいえ、この残酷な仕打ちにまた胸のそこに黒いものが溜まっていくのを感じた。

ソルベの遺体はリゾットが「どうにかする」と言っ、ペッシとブランクは返されてしまった。二人して本部を追い出され途方に暮れているとペッシが「とりあえず少し落ち着きたい」というので客の少ない寂れたバーに入った。

ペッシはストレートのウオツカをショットで一杯やると、頭を掻きむしって俯いてしまう。

「信じらんねえ事するよな…」

「……ですね。ドン引きつす」

「ブランクは…この業界長いんだよな？あんなことするやつ見たことある？」

「ないですね。普通死体にそんな手間かけないつす」

「報復にしたつて…あんな、あんなふうになつちまうなんてよオ…  
一体ボスは何者なんだ？」

「……そんなのあれを見てからじゃ考えたくないですよ…」

ペッシと別れたあと、ブランクは家に向かった。すでに明かりがついていて、キッチンではムーロロが持ち込んだらしい冷凍ピザを食べ  
て待っていた。

「おう」

「ムーロロさん。何かあつたんですか」

「聞いたから。見つかったんだつてな二人共」

「情報が早いですね」

「そりや仕事柄な。座れよ」

ブランクは腰掛け、メガネを頭から外した。前髪が視界を遮りやつ  
と一息つけた心地がした。

「ボスの試験はどうだった」

「合格です」

「おお！やつたじゃねーか！」

ブランクは返事ができなかった。ムーロロもソルベとジェラート  
が始末されたことは知つてもそこにブランクがいたということは  
知らないようだ。

ブランクも話したくなかった。曖昧に笑い、ムーロロが差し出した  
缶ビールを飲んだ。

「なんだ？様子が変だぞ」

「そうですか？」

「ああ。愛想笑いなんてどこで覚えてきたんだよ」

「今のは愛想笑いですか？」

「ああ。へらーつとしてぺらぺらだ。演技にしては大根すぎるぜ」

「……僕はこのところ変みたいです」

「ソルベとジェラートを売ったからか？」

「……そうだと思います」

ムーロロは物珍しげにブランクを見た。やはりブランクにはだんだん感情が芽生え始めているのだろうか。

「何かあったのか」

ブランクはふるふると首を横に振った。何かあったに違いないが言いたくないらしい。こいつが何かを拒否するなんて今までなかった。

だが、ゲームを途中で辞める程のことではない。

「そうか。じゃあほら……ビール、飲めよ。湿気た面してるくらいならオレの前でも演技してもいいから。な」

「…はい」

翌日には二人の葬式が行われた。犯人がどうかろくに調べていないのだろう。それも当然のことだ。参列者は一人もいない。暗殺チーム8人だけの寂しい式だった。

リゾットは葬儀のあとただ一言「二人のことは忘れろ」とだけ言った。全員返事もせず、教会を去っていった。

二人のものはすべて沈黙の中に処分された。

2000年6月

「で、厚顔無恥なキミは今もぬくぬく、黙々と、チームで仕事をこなしてるんだね。無垢な顔して大悪党だな」

「…ボスからの命令です」

ブランクはチョコラータの顔は決して見るまいと手元のコーヒーを意味もなくかき混ぜた。日差しは夏を感じさせる鋭さで二人のいるカフェの外を白く照らしている。

ドツピオと面談したのと同じカフェだ。彼とはあれ以来月一の電

話連絡だけで会っていない。

ブランクはあれから1年3ヶ月、ずっと仕事をし続けている。ボスから与えられた監視と暗殺チームの本業である暗殺を。

そして定期的にチョココラータに呼び出しを受け続けている。

「いいね。わたしももつと仕事をしたいものだけど、中々ね…恐怖に抗える骨のあるやつはもういないのかな」

ブランクはまだコーヒーをかき混ぜている。チョココラータはいつもこうして暗殺チームに反逆の兆候がないか聞いてくるがブランクは返事をしなかった。現にあれ以降彼らに反逆の兆しなんてない。

屈辱的な日々を粛々と過ごすのみだ。難易度が高く、報酬の低い仕事をただこなす毎日への不満をみんな飲み込んでいる。

「キミのコピーしてるスタンド？ デス・13だっけ？ ペドフィリアのポルノメーカーを3人も殺したの。アレのおかげでわたしのところにも恩恵があつてね。アシのつかない検体が手に入ったんだ。今日はそのお礼に奢つてあげよう」

そして、チョココラータは毎度こうやってブランクを揺さぶる。自分のした暗殺がどのような結果を招いたか逐一話してきかすのだ。

毎回毎回、暗殺によって死んだ人間の何倍も不幸な人間がうまれていく。その詳細なエピソードを。

そして最後に必ずこう聞く。

「今、どんな気持ちだ？」

ブランクはコーヒーをかき混ぜる手を止めた。そして分厚い前髪と眼鏡越しにようやく彼の顔を見る。

「わかりません」

チョココラータはブランクの強がりにはゲラゲラと笑い、チップを払うように金をおいて先に店を出るのだった。

とうるるるるるん……

「はい、ブランクです」

『おいおめーよお、今日競馬来るって言ってたよな？ 言ってたはずだ。予言が出るから任せろっつーからよオ』

電話の相手はホルマジオだった。かつてコピーしたスタンドにノートに予言が出るトト神というスタンドの話をしたときに勢いでそんなことを言った気がする。

「え？ ああ、はい。言いましたね」

『今何時だと思っただテメー！ とつくに全馬走り終わってこっちは大損だぞッ！』

「うわ、やべ」

ブランクは反射的に電話を切ってしまった。あの怒りようだとあと2日はホルマジオと顔を合わせるべきではない。(大負けについてはブランクに一切責任はないのだが)

「……………ふう」

ブランクのスタンド能力、ミザルーパーのコピーしている能力は8つある。そのうち7つは『恩人』と旅をしていたときに手に入れたものだ。1年、一貫した人格を演じてきたことによつてブランクは『恩人』について言語化できることが増えてきた。

「…あの人はもう僕を迎えには来ない。僕じゃあの人の復讐を遂げられない。僕は…空っぽだ」

恩人は自分の中に誰かの面影を見て、復讐に燃えていた。あの血統に復讐するために、かつて持っていた力をすべて自分のものにしろと言っていた。

世界中を回って色んな人に引き合わせてくれたが、今思うとそんな旅より、自分になにか期待してくれたのが嬉しかったのだと思う。

ソルベの絶叫とジェラートの恐怖に歪んだ顔をまだ鮮明に覚えている。いや、チヨコラータと会うたびに思い出しているせいで反芻しすぎて忘れられないのだ。

自分は誰よりも裏切り者だと思っている。

自分が何であるか自ら規定したのは初めてだった。

自分はチームとともに恥辱に耐え、痛みを共有している。

だがそもそもその受難は自らが招き、加担したものだ。

なのに、誰もそれを暴くことはない。

罪には罰を。それが人間が人間として従うべき原理なのに自分の罪は罰されない。

それはつまり、自分はまだ本当の形を手に入れてないという証だ。とうるるるるるん……

「はい。ブランクです」

「…はい。ドッピオ様、変わりありません」

「はい。引き続き。異変があつたらすぐ連絡します」  
とうるるるるるん……

「はい。ブランクです」

「いや、あの、いま外なので…」

「ほんとすみません。ほんとすみません！でもご自分でも言ったじゃないですか、ギャンブルなんてくだんねーって…」

「……わかりました。すぐ行きます」

ブランクは電話を切って、眼鏡を額の上まで持ち上げ、前髪をカチューシャのように止めた。

「行くか」

とうるるるるるん……

とうるるるるるん……

とうるるるるるん……

## “ゾリツド・ナージ” ①

2001年1月18日

カラブリア州はいわゆる “ブーツのつま先” にあたる地域で、メッシーナ海峡越しにシチリア島と面している。自然に恵まれた豊かな土地で、各県ごとに独特の文化を持つ。料理はあまり手間をかけないが、歴史的に見ればかなりの昔から酪農が営まれていた土地であり、サラミ発祥の地とも言われている。

ブランクはナポリから列車で約五時間揺られその地に降り立った。船や列車で通ったことはあったが目的地とするのは初めてだ。レッジョ・デイ・カラブリア駅を降り、タクシー乗り場で待ちながら目的地を再度確認した。

ブランクが暗殺チームに入って2年になる。当時より15センチは背が伸び、体つきもなかなか様になってきた。(と本人は思っているのだが周りにいる奴らが全員体格がいいせいでいまいちパツとしない)

スーツも自分で買って好きにカスタマイズしているし、カチューシャ代わりに行っている伊達メガネもジョニー・デップがかけてそうなブランドものだ。

“僕が” 望んでそうだったわけではない。

2年経つても、ブランクはまだ自分が誰かが “こうであれ” と指示された何かで有り続けていると感じている。つまりこれは手本のよくなイケてるギャングの服というだけだ。

タクシーに行き先より少し手前の場所を告げ、ブランクは窓の向こうを流れ去っていく美しい景色を眺めた。

今日ここに来たのは観光のためなんかじゃない。カンノーロ・ムーロロの命令だ。

つい昨日、いつものようにブランクが寝るためだけに借りている部屋に帰るとまたムーロロが上がり込んで中華料理屋のテイクアウト



を食べていた。

よくあることなので気にせず自分のために置かれた四角いパツクを開けヌードルを啜ると、口の中のものを飲み込んだムーロロから財布を渡された。

「何これ？」

「交通費と経費」

「？つまり？」

「特別任務。極秘任務。呼び方はなんでもいいがオレ個人からのお願いだよ」

「わかりました。どこに行けば？」

「カラブリア。詳しい場所と内容は中にメモが入ってる。当日、電車に乗ってから確認しろ」

「わかりました」

「日帰りの楽な仕事だ。だが決して個人的な興味だとかで余計なことはするな。いいな？」

「わかりました」

ブランクは容姿もだが、ムーロロの前での振る舞いも変わった。ソルベとジェラートの一件以降、彼の前でもずっと暗殺チームでしている演技を続けている。

それが本当に演技なのかどうか、ムーロロは怪しんでいるが。

ブランクがヌードルを一気に掻き込んでから聞いた。

「武器は要りますか？」

「いいや、いらない」

「そっか、よかった。もう前使えてたスタンドはほとんど使えなくなっちゃってるから…」

「護身用にナイフくらいは持つていいかもな。でもライフルは目立つからだめだ」

「わかりました」

何より変わったのはスタンド能力だ。

2000年の10月末の事だったか。ブランクは自分のスタンド

が変化したことを報告してきた。

「僕、スタンドが今までどおり使えないんです」

ブランクはスタンド能力を発動している対象に触れるとその能力をコピーし、ストックできた。

だが今はスタンド能力を発動していようといまいと、触ればそれをコピーできるのだ。それだけ聞くとかなり強くなったように思えるが実際は違った。

「じゃあオレので試してみろ」

ムーロロはブランクに手を差し出し、握らせた。もちろんスタンドは発動させていない。

「……はい。わかった」

と言ったブランクの肩にはトランプの形をしたスタンドがちよこんと乗っかっていた。

間違いなくムーロロのスタンド、オール・アロング・ウオッチ・タワーだ。若干カラーリングが違うが。

ムーロロのオール・アロング・ウオッチ・タワーは53枚からなるトランプの群体型スタンドだ。ムーロロは普段はその小ささ、薄さを利用し諜報活動に使っている。

そのオール・アロング・ウオッチ・タワーがブランクの周りをカサカサ動きまわり、好き勝手に遊んでる。

「ん？ちよつとまで……なんか少くないか？柄もなんかハートとダイヤしかねーよーな……」

「そうみたいですわね。スタンド本体のことをよく知れば知るほど、フルパフォーマンスを発揮できるはずなんですわが……どうやら僕はムーロロさんのこと、半分くらいしか知らないみたいです」

スタンド能力を発動していない状態でもコピーできるようになったのは、ブランクの手相を見て性格を読み取る特技が進化したのだから。

問題は相手を知れば知るほど、コピーした能力が強まるという変化だ。

理にはかなっている。自分の能力の特性、限界、使い方を知ることが強さに直結する。どんな使えなく見える能力だつて使い方次第で最強になったりもするのだ。

「……なるほど…。つてことは前使えてた能力、8つはあつたよな？使えなくなったのか？」

「はあ…使えはするんですけど…」

といつてブランクは一冊のノートを出してみせた。中にはぐちゃぐちゃの漫画？絵？象徴文字？よくわからないものが書いてある。

「トト神の予言です。わかります？」

「なるほど…な」

「まともに使えるのはマンハッタン・トランスファーだけです」

「そうか。ありやお前の恩人のだもんな」

「はい。僕は弱くなつたんですか？」

「…リゾットには報告したか？何か言われたか？」

「はあ。いい事だと言われました」

「……そうか。ボスには？」

「まだ内緒にしています」

「わかった。ボスには言わず、オレの命令を継続しろ」

「わかりました」

スタンドとはすなわち精神のヴィジョンだ。それが変化するというのはつまり精神も変化したことを意味する。

それをブランクに指摘すると「可能性は無限大？」と言うに留まり変化に対してどう思っているのかは話さなかった。

相手のことを知れば知るほど強くなるつてことは、相手のことをわかりたいって思つてるつてことだ。

ブランクはただ見たもの触れたものを真似するだけでなく、理解したいと思ひ始めたのだ。

本人はその変化の意味をわかっているのだろうか？ムーロクにはそこがもどかしく感じる。まだ暗殺チームとボスを敵対させるゲー

ムは続いているというのに。

ブランクは目的地の病院の1キロ手前でタクシーを降りた。とても小さな村だが住むには良さそうな場所だった。ただそのぶんよそ者は珍しいのだろう。あんまりジロジロ見られるので途中の雑貨店で地味な白いワイシャツに着替え、髪もおとなしく見えるようにひつつめた。

病院は町のハズレの丘にある。山岳を吹き抜ける風が心地良い。ブランクは病院に入るとナースに見つけられないように非常階段を登った。

そして“ドナテラ・ウナ”と書かれた病室のドアをノックした。

「はい……」

病床にいたのは今にも死にそうな女だった。

「ドナテラ・ウナさんですか？」

「そうよ……。あなた……まさか名札が読めないの？」

「いえ。念の為」

「気の強そうな女性だった。とても弱っているが、瞳に宿る光は力強い。」

「教会のものです。あなたのためにお祈りさせてください」

「教会？こうなる前までは何度もいつてたけど、あなたのことは見たことない」

「僕は各地を旅して病気の方のために祈りをささげています」

「……うさんくさいわね」

「そうかもしれないね。……重いんですか？」

「見ればわかるでしょ。わたしはもうすぐ死ぬわ」

「そのようですね。ですがあなたの目には恐れや苦しみは見えませんか。なのにそんなに悲しそうなのはなぜですか？」

「……あなた、遠慮つてもものがないの？普通もつと気を使うでしょ……」

「すみません。だから僕、こういう修行をしろって言われるんですね」  
「……いいわ。祈らせてあげるから終わったらとつと出ていって」  
「ありがとうございます。あなたはとても優しいひとですね」

ブランクはやせ細ったドナテラの手をそつと取り、額に当て、目をつぶり、その形をじっくり肌で感じた。

彼女はスタンド使いではないということはずぐわかった。それがわかればムーロ口に与えられた任務は終了なのだが、ブランクはその女性の分析を続けた。

気高い女性なのだろう。血管の浮き出たガリガリの手でもわかる。何かを守ろうという強さと愛に満ちた手だ。

手のひらに浮かぶ微妙な凹凸としわから彼女の芯の強さがひしひしと伝わってくる。だが同時に骨から冷たさが伝わってくる。瞳に宿っていた悲しみの原因だろう。

「…変わった祈り方」

「………そうかもしれないね。でもこうしたほうがあなたのことがよくわかるんです」

「…あなた、女の子よね？」

「え？そう見えます？」

「わたしの娘もこうやって、わたしの手を握ってくれる。とても、暖かくて優しい手だわ」

「いい娘さんですね」

ドナテラの手から感じる骨のつめたさの正体がわかった。不安だ。

きつと彼女の娘はまだ若い。彼女の気高さは母親のもつ気高さだったのだ。その誇りが、娘を残し早死する自分を許せないのだ。

ブランクは手を額から離し、最後にぎゅつと両手で包み込んでドナテラの目を見た。

「あなたの魂に安らぎが与えられることを祈ります。あなたの勇気と誇りが娘さんにもきつと受け継がれていることでしょう」

「……………」

ドナテラは無言でブランクをじつと見つめ返していた。

「では。祈らせてくださってありがとうございます。ありがとうございました」

「…ねえ、待つて。あなた各地を旅してるのよね」  
「はい」

「サルディニア島に行くことがあれば、教会の関係者に『ソリッド・ナーゾ』という人がいないか尋ねてみてほしいの」

「別に構いませんが…その方は聖職者かなにかですか？」

「いいえ。わからない。教会に関係があつたようだけど…もしかしたらと思つて」

「わかりました。いいですよ」

「ありがとうございます」

ブランクはドナテラに微笑んでから病室を出た。来たときと同じように非常階段から出て、レストランでタクシーを呼んでもらう。まだ午後三時だから帰つてすぐムーロロに報告できる。

駅に着き、きつぷをとつたあとに取り急ぎ列車の到着時間だけ連絡し、ブランクは来たときの服装に着替えた。売店で5時間の船旅のために本を買つた。(ジエイムス・P・ホーガンの『星を継ぐもの』だ。面白かつた)

まっすぐ家に帰ると時計は十時を回つていた。ブランクがシャワーでも浴びようかと服を脱ぎ始めると呼び鈴がなつた。ムーロロだろう。

「よう」

ドアのすぐ前まで行くと、ムーロロはドアを数センチだけ開けて囁いた。

「どうだった？」

「スタンド使いではありませんでした」

「そうか。それがわかればいい。ご苦労だったな。財布は焼き捨てる。あ、中の金はとつといてくれ」

「わかりました。上がつていきますか？」

「いや、いい。ちと忙しくてな。ありがとうよブランク」

「いえ。ではおやすみなさい」

なんで田舎の死にそうな女について知りたがるのか、ブランクにはさっぱり理由がわからなかつた。だが言われないうことは知ら

なくてもいいことなのだ。わざわざ知ろうとすることはヤブヘビつてやつだろう。

変に突っ込むと深みにハマる。ソルベとジェラートのように。ドナテラには悪いがソリッドなんとかという人物についても探す気は更々ない。

次の日はイルーゾオとのブリーフィングだった。彼は早起きするタイプではないので夕方に待ち合わせる。ブランクは日中昨日の旅行の荷物を処分してから本部に行った。

本部にいたのはイルーゾオとプロシユート、ペッシだった。プロシユートとペッシはたまたま居合わせただけらしい。

「おせーよブランク」

「夕方集合って言ったじゃないすか」

「お前、四時じゃ夕方中盤だろ」

「…時計。時計を使って情報共有しません？」

このごろイルーゾオとブランクはよく組まされる。彼のスタンド、マン・イン・ザ・ミラーは単体でも強いが、万が一鏡の中でなにかあったときにフォローできる人間がいればより安全に仕事ができるからだ。

ホルマジオは一人でやりたがる質な一方、ブランクは人と組むほうが向いていたので自然とそうなった。

「せっかく4人いるし麻雀しようぜ」

「いいね兄貴！オレ最近やつと役を覚えてきたよ」

「なんでそんなくそドマイナーなゲームやんなきやなんねーんだよ。ちまちま並べんのストレスなんだよな」

イルーゾオはあまり卓上ゲームをやらない。スポーツの試合には気前よく賭ける一方でプレイするのは好きではないようだった。

人を観察する癖があるブランクは見抜いていたがイルーゾオは実は逆境とプレッシャーに弱い。ポーカーや対戦ゲームに向かない性格だ。

「麻雀なら僕、昔めっちゃイカサマ勉強しました。賭けましょう」

「お前のイカサマ見破るゲームならいいぜ」

「オレもそれにのる」

「…ちなみにペツシアニキは僕とグルですよ」

「え?!イカサマの打ち合わせなんてしてないだろ!急にやめろ!」

「ほら、普段打ち合わせしてるから出てくるセリフっすよそれ。僕らイカサマのゴールデンコンビなんです」

「変に揺さぶろうとしても無駄だぞ」

「イカサマのコールがあつた時に僕でなくペツシアニキがいかさましていた場合、僕の賭け金でなく先輩方の賭け金を全額もらいますがいいますか?」

「ほう…おもしれーじゃねーか」

「えーつと…麻雀のイカサマって自分の役を教えて都合のいい牌を捨てさせるとか?」

「そうです。麻雀は自分の望む役を揃えるゲームですからね。どちらか片方だけ勝てばいいのですからゲーム中何らかの方法で自分の欲しい牌を相手に伝えられればそれでいいんです」

「ハッ。そんなの注意深く見てりゃー余裕でわかんじゃねーか。それを逆手に取って普通にこっちがあがることだってできるぜ」

「待て、イルーゾオ。イカサマはすでに始まっているぞ」

「何?」

「さすがプロシュート兄貴ですな…」

「ブランク、お前すでに心理戦を仕掛けているな?」

「ふ…見破られましたか。そうです。仲間で結託し牌を教えるローズなど麻雀のイカサマの本流ではありません。そう、男は黙ってぶっこ抜き!（牌を予め用意していた手持ちのものとすり替える行為）」

「あ、そっか。そもそもオレのビーチ・ボーイならこっさり牌を入れ替えたり並べ替えたりもできるッ!」

「そのとおり。ルール無用のイカサマ対決ならばスタンド能力からして僕らのほうが有利なのです!もっと言うならトランプゲームだと勝ち確なんです」

「お前、人からパクったスタンドでゲームしようとするなよ…」



「さあ、賭けますか？・おりますか？」

「オレは大口叩く相手は負かしてやりたくなる性分だな。やってやるーじゃねえか」

「さすが兄貴！」

ブランクはすっかりチームに溶け込んでいた。裏切り者を排出しボスから冷遇されていても穏やかな日はあったし、飢えたり苦しんだりすることもなかった。

時々辛い任務も在るし毎日こういうふうにふざけられるわけでもないが、たまにとんでもなく面白い日があったりすればブランクにとっては十分だと思っていた。

そう思えるのが自分が一番年下だからだという事実気づくのはそこから二ヶ月も後のことだった。

2001年2月9日

ブランクはまだチョコラータに呼び出されている。毎度自分の殺しが誰を不幸にしたのか聞かされるが、もうあまり胸が傷まない。人はどんな痛みもいずれ慣れるのだ。何度も何度も胸が腐るような気分になっていたし、時に“加工中”の人体の写真を披露されたりしたがそれすらも慣れのうちに入っていく。

殺しという経験もそういう慣れに埋没していくものだ。そしておそらく、裏切りも。

「今日は残念ながら君のカウンセリングの時間はあまりない」

「カウンセリング…？え…？…？今までののはカウンセリングだったんですか」

「いいか？一度しか言わない。暗殺チームに“ソリッド・ナーズ”を探してるやつはいないか？」

「え？」

「いないのか？いるのか？」

「ソリ：？いや、聞いたこともないです。というか人探しなんてや  
てる人、いませんよ。通信記録にも特にないです」

「そうか。じゃあ今後出たらすぐドツピオに連絡すること。さてカウ  
ンセリングに時間をさけるね」

「わかりましたが：アレですか？誰かが裏切り：」

「わたしならボス自身が詳細を言うまで首を突っ込むのはやめるね。  
まあ君が突っ込むぶんにはいい口実ができるから歓迎だよ。調べな  
よ」

「絶対嫌です」

ソリッド・ナーツは一月前あった病気の女、ドナテラが探してほし  
いと言っていた名前だ。ちゃんと覚えていて。どうして同じ名前が  
チョコラータの口から出るのだろうか。

「いいか。その名前は撒き餌だ。ボスを探るものが必ずぶち当たる名  
前。かつてボスが使っていた偽名の一つなんだがね。これを探して  
るやつはレッドカードだ」

「そうだったんですか。じゃあソルベとジェラートもその名前を？」

「さあ。わたしは罰を与えるよう言われただけだから」

「……わかりました。兆候があるか注視します」

「裏切り者が出るといいねえ。また一緒に仕事したいね」

「二度と嫌です」

「最初と比べると生意気な口をきくようになったな」

「そう演じてるんです。あなた相手に素の自分でいたら耐えられませ  
ん」

「耐えられない？空っぽの君からそんな言葉を聞くようになるとはね  
！すごい進歩だ！セツコ、今のセリフ録音してたか？」

すぐ足元の床が突然柔らかくなり、にゅつと手が一本飛び出し、  
グーのサインを送っていた。ターミネーター2のシユワルツエネツ  
ガーみたいだった。

「きみはわたしに感謝すべきなんだ、ブランク。君がこんなふうに出  
分を表現できるようになったのはこのわたしがお前にそうなるよう  
望んだからだ」

「それは…思い上がりも甚だしいでしょう。会うペースは離婚した父親の頻度以下じゃないですか」

「君の初めての拒絶を引き出しのはこのわたしだよ。君の自我は絶望により目覚めた」

「…確かに引き出したのはあなたかもしれませんが。でも僕が変わったと感じるならチームのみんなが…」

「以前の君なら『いいえ、僕は空っぽです』とか言いそうなもんだだけだね？変わったって自覚はあるんだ。ずいぶん愛着が湧いたんだねえ。なにもかも命令のままに放り込まれた仮の仲間に過ぎないのに。君はそのチームのメンバーを売ってわたしの殺人に加担したんだぞ？忘れたのかい。なんて都合がいい脳みそなんだ」

「…」

ブランクは反論できなかった。チヨコロータがじいつとこつちを見ているのを睨み返すしかない。

自分が変わった？…変わったとも。だがそれはそっちのほうが任務を、命令を円滑にこなせるからだ。これは適応だ。

「君の与えられた命令はなんだ？」

「ボスのために裏切り者を見つけること…」

「裏切り者には？」

「罰を」

「今の君にできるのか？」

「罰を与える？」

「2年面倒を見てくれた仲間には？」

「…できます」

「え？…なんだって？聞こえないな。もっと大きな声で」

「殺せます。命令されたら何にでもなる、何でもする。それが僕の美点です」

これは自分自身の言葉なのだろうか。ブランクにはわからなかった。だが少なくとも、自分はそうやって生きると決めていたことだ。

守らなければならぬ命令

恩人が戻るまで適当に生きていること

ムーロロの指示に絶対に従うこと  
これを守ることが僕でいることだ。

「その言葉が嘘じゃないことを願ってるよ」

## “ゾリッド・ナーゾ” ②

2001年3月4日

ブランクが恩人と過ごした日々はとても目まぐるしく、週ごとに違う国にいたんじゃないかと思うくらい移動が多かった。そのせいか思い出せる光景はいつも列車の連結部分だとか車の座席だ。

恩人はまだ青年というよりも少年と言えるくらい若かったがとても腕が立つスナイパーだった。だから仕事があっただろう。

恩人と出会う前までブランクは子供がたくさん集められたとても狭い場所にいたのだが、その事は“暗殺チームのブランク”では思い出せない。“空っぽのブランク”ならばその時感じた乾いた熱風だとか口の中に入った砂の味を思い出せるが、どんな扱いを受けていたかは全く思い出せない。

思い出せるのは感触だけ。触れてきた手の数だけしか思い出がない。

酷い客を殺してほしいと言ってきた売春婦の手はとても薄かった。ガリガリに痩せた手はひと目で薬物中毒者のそれだとわかったし、手にひどい切り傷がたくさんあった。

誰かに何かを要求されたらそのとおりに動く。ブランクの基本原理。では逆に他の誰かにこの売春婦を殺してくれと頼まれたら自分は受諾しただろうか？

ドナテラ・ウナの手。母親の手。

南部の田舎に住む死にかけの女がなぜゾリッド・ナーゾの名前を口にしたのか。少し考えればわかることだ。

「……おい。運転中に目を瞑るな」

「え？ああ…すみません」

ブランクははっと我に返って自分がハンドルを握ってることを思い出した。今日はリゾットの運転手をやっているというのに。

普段リゾットは単独行動で仕事にもプライベートにも他人を同行させることはない。（故にブランクはまだ彼の能力を知らなかった）

今日はムーロロと特別な話があるらしく、彼と深い仲のブランクに  
運転を頼んできたのだ。

「ムーロロとはどう知り合っただったか」

「あー、ちよつとドジ踏んじやつて…殺しの現場を押さえられまして。  
その時拾ってもらったんです」

「そうだったな。お前は幸運だな」

「そうですかね。いや、ムーロロさんは良い人ですが」

ムーロロは指示をくれる。使ってくれる。役をくれる。今ブラン  
クがここにいるのもムーロロのおかげだった。

「にしてもわざわざリゾットさんを山中に呼び出すなんて…どんな用  
なんですかね。まさかキャンプでもしようってわけじゃないでしょ  
うし」

「ネアポリスで話したくないことなんだろう」

「うわーなんかやな予感」

ブランクの予感は的中だった。ドナテラのことを探らせて以来  
会ってなかったムーロロはいつものギャングっぽい服でなくレ  
ジャーにきた観光客みたいな格好をして山道の途中にいた。

「よう。わざわざこんなところまで悪い」

「問題ない」

「あ？ブランクじゃねーか。どうしてお前が？」

「オレが連れてきた」

ブランクはきよんととしてリゾットの方を見た。彼はいつ、何度見  
ても何を考えているのかよくわからない顔をしている。

「…リゾット…でも…」

「遅かれ早かれ知る話だ。ブランク、オレたちは…ソリッド・ナーゾ  
“を追う”

「え……」

「どういう意味かはわかるな？もし命が惜しいなら、今すぐ回れ右し  
て帰れ。今ならまだムーロロに身柄を保証してもらえる」

「ば…バカにしてるんですか?!僕が命欲しさに逃げ出すとでも?!」

「死ぬかもしれないんだぞ。お前の恩人にもう会えないかもしれないな

い。その覚悟はあるのか」

組織を裏切る覚悟。いや、違う。

ブランクの場合、チームを売る覚悟って意味になる。

ブランクは脳みそが煮えそうなくらい熱くなってるのがわかった。

命令は何よりも大事だ。僕は命令を、指示をこなすことで僕足りえる。僕は命じられるから人を殺せる。僕は命じられるから裏切れる。嘘をつける。

ブランクは何度も頭の中で自分の人生哲学を繰り返した。

「覚悟なんてとつくの昔にできてます。僕は暗殺チームのヴォート・ブランクです」

「……そうか。ではここに残れ」

「ヒヤヒヤしたぜ……いいんだな、ブランク」

「はい」

おもむろに歩きだすムーロロに続き、三人で青空が広がるなだらかな坂を登る。遠くにネアロポリス湾が見える。

「つい昨日、カラブリアでドナテラって名の女が死んだ。その女がソリッド・ナージ」って男を探してたんだ」

「組織とは無関係だな？」

「ああ。そこは保証済み。さらに……ドナテラには娘がいた。自分が死ぬ前に父親にあわせたかったのかもな」

「……ということは……その娘は『ボスの娘』ということか」

「ああ。ドナテラがボスを探してたことはまだ組織のうち数名しか知らないが、噂がまわるのははえーからな。じき誰かがドナテラの娘が『ボスの娘』ってことに気づくだろう」

「娘を手に入ればボスの正体へ一歩、いや……かなり近づくな」

「ボスは娘のこと知ってるんですか？」

「それもじき耳に入るだろう」

「ボスは娘を確保しようとするだろうな。なんとしても」

「ああ、急いдайほうがいいぜ。ただその娘が今どこにいるのかまでは調べがついてない。こつちで人を動かしすぎるとボスに気取られるからな」

「いいや。それだけわかれば十分だ」

「お役に立てて何より。オレもあんたらと同じ、実働と賃金が噛み合わないチームの人間だからな。期待してるよ」

リゾットは返事をせず、背を向けて山を下り始めた。ブランクはオロオロ迷い、リゾットについていこうとした。

「リゾット！ブランク借りていいか？」

「ああ」

「え？あ、じゃありゾットさん！鍵ー！」

ブランクが鍵をぶん投げるとあさつての方向へ飛んでいつてしまった。だがリゾットが手を上げると軌道が不自然に曲がり、鍵はリゾットの手の中にとんと落ちていった。

「あら…？ナイスキャッチ？スロー？」

ムーロ口はぼかんとしてるブランクの背中を突ついった。リゾットは片手を振って背中を向けて去っていった。

「ほら、ブランク。てっぺんまで行こうぜ」

「えー…今日のクツ革靴なのにい！」

もう3月になるとはいえ標高が高ければ冬並みの寒さになる。トレッキングの格好をして準備万端のムーロ口はともかく普段着ている薄手のスーツのブランクは寒かった。その上いつも背負ってる分解式ライフルがかさばる上に重かった。

「あれだけの情報話するためにこんなとこまで呼び出したんですか？」

「ここなら盗聴の心配はないからな…お前、さっきの会話がどれだけやばい情報かわかってんのか？」

「わかってますよ。リゾットさんは…ボスに反逆するつもりですよね？」

「そうだ。で、お前の今の仕事は？」

「…暗殺チームへのスパイ」

「それより優先されるのは？」

「あなたの命令です」

「よしよし。お前はほんっといい子だなア」

ムーロ口は機嫌が良さそうだった。というよりは高揚している



と言うべきだろうか。

「二年前、お前と始めたゲームがついに本格的に動き出したってわけだ。お前はうまいことチョコラータに気に入られたな。…まあボスに気に入られるってのはまず無理だからそれはそれでいい。暗殺チームにもうまく馴染んで、信頼されてる」

「はい。あなたの命令通りです」

「ああ、よくやってるよ。今から新しい命令をだすぞ。いいか？」

ムーロロは立ち止まり、こちらを向いた。周りには誰もいない。風で流された雲が日差しを遮り影を落とした。

「オレは暗殺チームがボスをぶっ殺す方にベットだ。今までは勝ち目が薄すぎたが、ボスの娘なんてカードが出てきちゃ話は変わってくる。だろ？」

「ええ。ボスがアクション起こさないわけないですしね」

「そのとおり。十中八九…いや、絶対に娘を保護するはずだ。あのボスが娘なんて手掛かりを野に放ったままにしておくわけがねーからな。おそらくこれはボスのしつぽを掴む最初で最後のチャンスだろう」

「…ですがチームの裏切りが発覚すれば僕はボスから暗殺指令を受けると思います。どうしますか」

「リゾットほど用心深い男なら、行動を起こす頃にはチーム全員に身を隠すよう指示するはずだ。見つからないだとなかなあなあにしてうまくはぐらかせ」

「…………善処します」

「お前の仕事は、まず第一に優先すべき仕事は…ボスを倒すために努力することだ。そして第二に、すべてが失敗しそうになったら、暗殺チームの生き残りを殺してボスの前に首を持ってけ。いいな」

「それは…………」

「お前が裏切り者だつてなつたらいずれオレにも手が回るだろ。ぜつてーやだよ、チョコラータとかいうイカれ野郎に拷問されるのは…」

「…………わかりました。ボスを倒す、組織に残る…」

「そうだ。やれるか？ ブランク」

「やります。やれますよ……。あなたがそう望むなら」

「偉いな。これからどういう状況になるかはわからん。お前は暗殺チームの使用する端末に仕込んだスパイウェアで常に監視しろ。目立った変化があればオレに伝える。もちろんそれはボスに言うな」

「はい」

「定時連絡が二回途切れた場合、お前はゲームオーバーだと見なす」

「はい」

「必要に応じて……ボスの信頼を損ねたと感じたら、暗殺チームのメンバーを殺して『証明』しろ。できるか？」

「はい」

「本当にできるんだな？」

「……やだな。できますよ！僕は究極のイエスマンなんですよ」

「……ブランク、お前一旦演技やめろ。出会った頃のすのお前に戻って言ってくれ」

「え……」

「いいからはやく。命令だ」

「……………」

「ブランク」

ムーロロはブランクに近づき、両手で頭をガツと掴んで無理やり目を合わせた。

「やれるか？殺せるか？」

ブランクの目は、出会った頃より全然違っていた。あの頃は瞳孔すら変化がなかった。脈拍も呼吸も、肌の温度すらも全く変わらず、ハイと即答していた。

だが今のブランクはどうだろう。首筋にあたった指から伝わる脈は早い。発汗しているし、瞳孔も興奮してか開き気味だ。

こいつは普通に動揺し、葛藤している。

「ほんとに、殺せるのか？ブランク」

ブランクはゆっくり、初めてしゃべるオウムみたいにたどたどしく話し出す。

「……………僕は……誰かの命令に、従うことしかありませんでした。なの

に…今、返事するのに抵抗を感じています」

だが瞳はまっすぐムーロロを見ていた。

「ですからもつと強く命令してください。僕をもつと命令で縛り付けてください。必ず殺せと、強く」

「ブランク…お前……」

ムーロロは頭を掴んでいた手を離し、ゆっくりその手を頭の上に置いた。

「変わっちゃまったな」

「……すみません……」

「いや、謝ることじゃねーよ。お前も成長期だもんなあ……」

ムーロロはため息をついてまた歩きだした。ブランクはトボトボとついていく。

「でもよ…オレはやるぜ。もう降りれねえ。お前もだ。お前もオレもこのゲームに責任がある。途中で情に流されるなよ。だからお前にしっかり命令する。どうにもなくなったらチームの生き残りは必ず殺せ」

「わかりました」

「…わかってますよ。僕は……」

「空っぽか？」

「………ええ」

その後ブランクはムーロロと別れて、一人で電車でネアポリスに戻った。まだ午後三時で、道には観光客や学校終わりの生徒がうようよいた。

あんな話を聞いたあとじゃ気分はあまりよくないが、何しろ天気が朗らかなので、なんだか散歩して気分が紛れるんじゃないかと思っ

た。二年前のブランクならこんなふうに分分から散歩してみようなんて思いもしなかった。そう、自分は裏切りを後悔してる。時々二人を思い出すと後味の悪い思いをするし、今日の帰り道リゾットが裏切り

を撤回しないだろうかと数度思った。

自由はたまらなく不安だ。自分で決めることは苦しい。

夜何を食うかとか、どのテレビを見ながら寝るかとか、どのマフラーを巻いていくかとか、それくらいなら苦もなく決められるっていうのに。

「うわっ…!」

考え事をしていたせいで人にぶつかってしまった。

「す、すみません」

慌てて前を向き謝ると、ぶつかった少年は財布を落として小銭をぶちまけてしまっていた。

「ひゃーやばい。ほんとごめんなさい!」

「いえ…大丈夫ですよ」

ブランドが慌ててしゃがんで小銭をかき集めると少年もしゃがんだ。車道側に転がってしまった10リレ硬貨を拾い上げようとしたとき、少年と手と手が重なってしまった。

「…あ」

ブランドはハツとしてその少年の顔を見た。金髪で巻毛の彫刻みたいな顔した美少年だった。そして、触れたことでわかった。この少年はスタンド使いだ。

「どうかしました?」

だが少年はきよんとんとしてこっちを見ている。

「あ、いや…あはは。まるで少女漫画みたいだなんて思って。お金全部あります?」

「はい。多分」

「ほんとすみません。…えーと…」

「気にしないでください」

少年は爽やかにそう言ってきつと立ち去ってしまった。もしかしたら自分を殺しに来た親衛隊かとも思ったのでホツとした。まさかあんな少年がギャングなわけないし、無自覚のスタンド使いなのかもしれない。

「なんだろ…このスタンド」

一瞬触れ合っただけではスタンドの姿もまともにコピーできない。ただ拳のあたりが生命エネルギーに満ちている感じがする。もう少ししっかりと接触したり、あるいは話したりすれば使えるのだろうか、無理に会いに行つて手を握る程のことではない。(というか、そんなことしたら変態だと思われる)

だがあの少年にはなにかひっかかるものがあつた。うまく言葉にはできないが…人を引きつける、でもない。どこか懐かしい？違う…。昔会つた？そうでもない…。

本部のソファで自分の右手を眺めていると、不意に上から声がかつた。

「なんだそれ。誰のスタンドだよ」

なんだかすぐく眠そうなホルマジオだつた。誰かが仮眠室で寝ているのはわかつていたが、てっきりイルーゾオかギアツチヨかと思つていた。

「あー？いや、なんか道端でぼつたり手と手を取り合つた美少年のなんですがね…」

「は？寝ぼけてんのか？」

「ホルマジオ先輩こそ仮眠室でパーティーすんのやめてくれませんか？なんか廊下の奥がにんにく臭いんですけど」

「っせーな…クソ、頭いてえ！」

ブランクは試しに仮眠室を覗いてみた。ピザの空き箱とビールの空き缶が散乱していて食べ物と汗といろんな匂いが混じつて臭かつた。

「ピザの空き箱がこんなに…あくソツッ！」

「チクシヨ…寝落ちするとはな…」

「仮眠室をこんな使い方すんの先輩だけつすよ」

「仮眠のつもりだったのに目覚し時計が壊れてたんだよな…。前使つてたの誰だ？」

「多分ギアツチヨ先輩ですね」

「あのプツンヤロー…ぜってーあいつがぶつ壊したんだ」

「いや…ギアツチヨ先輩なら原型留めないと思います」

「じゃあ片付けといてくれ」

「自分でやってくださいよ」

「はあ…しよオーがねエーな」

ホルマジオはそう言いながらシャワー室に入っていた。本当に掃除するのか怪しいものだ。

ホルマジオがシャワーから出てくる頃にはブランクは仮眠室の掃除を終えて換気をしていた。

「結局やってんのかよ」

「下っ端ですから」

「ハッ。みんなそんな気にしねーよ。オレが使う前も汚かったぞ」

「いやあ、何故かそういうの僕に苦情が来るんすよね…」

「そりやお前、しよっぱなワックスがけてたせいじゃね」

「あー、入団一周年のお祝いモツプでしたもんね。そういう事だったのか」

「諦めて役目を受け入れな」

その後イルーゾオとメローネがやってきてメローネが受けた仕事のターゲットについて確認し合った。今回は珍しく高額報酬の依頼だが、その代わり血液をこちらで入手しないといけない。

ブランクが血を採集し、イルーゾオが鏡の世界で中継をし…と地味に手間がかかるのでちゃんと手順を確認しあわないといけないかった。

「あーあ。めんどくせえ。だいたいよお、客の方も血液サンプルくらい用意するのが筋つてもんだよな?」

「まあ…しようがないだろう」

しようがないというのは言わずもがな、組織内で冷遇されていることだ。つまりこの仕事は辱めの一環だ。

「僕はみんなで作るほうが好きです」

「お前の仕事はスタンドなくてもできるくだんねーやつばっかだもん  
な」

「な…能力はシンプル・イズ・ベストですよ」

「その能力も借りパクだろーが」

「唾み合いはオレ抜きでやってくれよ。じゃ、行こうぜ」

「あーなんか回りくどいな…。普通にオレらで殺しちみたいわ」

「イルーゾオ先輩に賛成です」

「や…だから殺しじやなくて拉致、誘拐だって。オマエらなあー、さっきまでそれを確認してたんじゃないやあなかつたのかよ」

「え？ああ…そうだったな」

「だるいつすねえほんと…あ、メローネ先輩！女の用意は？」

「お前…言い方が悪すぎやしないか？お前らがやってる間に適当にどっかで見繕うから心配しなくていい」

「どっちも大差ねえな」

そんな軽口を叩き合いながら三人は仕事に向かった。結果的にはかなり楽勝だった。鏡の世界でアミを張ってたイルーゾオがブランクだけを外に出し、標的がトイレに来た時を見計らい蛇口のせんに刃物を仕込んでく。

「楽勝〜」

「儲けたな」

二人はすぐにメローネのところに血液を届けに行く。メローネはなぜかデパートのトイレの前で待っていた。

「ちようどいい。イルーゾオ、悪いがマン・イン・ザ・ミラーで女子トイレに行かせてくれ」

「は…？お、おいお前…オレのスタンドをそんな…そんなことに使うつもりなのかよ…?!」

「違うツ！母親に良さそうな女が一人で入ってるんだよ！はやくしろ!!」

「うわー…」

メローネの発言は性欲からのものではないのは重々わかっているがイルーゾオはドン引きした。ブランクもちよつと引いた。

帰り道はやや気まずい感じになったが任務はつつがなく終了し、リゾットに任務完了を伝えた後に3人は解散した。

その週の最後の晩に報酬についての会議があり、チームメンバーが全員本部に集まった。だが今日はやや雰囲気が違う。リゾットの真剣な顔を見てブランドはすぐ察した。

「報酬は…いつもどおりの分け方でいいな」

全員返事をするまでもなくイエスだ。そんなことよりもリゾットの凄みの理由が知りたかったからだ。

「お前たちはもう察しがついてるようだな。ここから先はやバイ話だ。オレたちの矜持に関わる重要な提案がある。いないとは思うが、そんなの関係ねーってやつがいたら帰って二度と戻ってくるな」

全員の雰囲気が変わった。ブランドにはそれが冬の硝子みたいな冷たさを感じられた。全員が呼吸を抑え、目に鋭さが宿る。

当然出ていくものはいなかった。

「オレたちは今から…」組織を裏切り　「ボスを倒す」



俺たちに明日はない

「オレたちは仲間を殺され、屈辱の日々を送っていた。それでもただ黙って耐えていた。それはなんのためだ？オレたちはいつかボスのすべてを奪う。その好機が今やって来た。：ボスに娘がいることがわかった。オレたちはそいつを奪取し、ボスの情報を搾り取る」

リゾットの言葉に全員が重たい沈黙を返した。最初に発言したのはイルーゾオだった。

「娘つてのは確かか？」

「確かだ」

「どうせ情報源はムーロロだろ？信用していいのか？」

「あいつだけじゃない。カラブリアにシマを持つてる幹部もすでに娘の存在は知っていた」

「お、オレら以外に根性あるやついたんだ」

「あいつはオートアサシノフィリアだから殺されるのを期待してる」

「嘔吐朝死のうフライ？なんだそれ」

「オートアサシノフィリアつてのは自分が死んだり殺されたりする妄想で興奮する変態のことだ」

「さすがメローネ」

ペッシの疑問にメローネが即答し、ホルマジオがそれにひいていた。

「話を続けるぞ。先月カラブリアである女が死んだ。その女は死ぬ一月ばかり前に突然ソリッド・ナールを探していた。シングルマザーが今際の際に呼びたい人物だったら：相場は決まってる」

「それもそうだな、と言いたげなメローネ。ギアツチヨはよく分かってなさそうだった。

「その娘を手に入れば：ボスの影をふむことができる。いや、本人にすら手が届くかもしれん」

プロシユートが口を開く。

「やれそうじゃねーか。娘はどこにいった？」

「まだ故郷のカラブリアにいるはずだ」

「じゃあまずオレたちはその娘を捕まえりゃーいいってわけだな」

リゾットは頷き、再び全員を見回して言った。

「ああ。ただこれまでのように本部に集合して話し合うのは無理だ。今はまだオレたちの裏切りはボスに知られないだろうが、娘を探り始めたらずぐにバレる。したがって、今日からすべての連絡はパソコンや電話で。滅多なことがない限り互いに会うな」

「ええ。そんな！オレ…オレ一人じゃやれる気がしないよ兄貴イ〜」

「ペッシ、ペッシペッシ、ペッシよオ…だからお前はマンモー二なんだよ、リゾット、オレはペッシと行動する。いいか？」

「わかった。ブランク、お前は？」

「僕は一人で大丈夫です！」

「生意気いつてんじやねーよ、かわいげねーなア〜おい」

「よし、ではチャットの使い方はギアツチヨ、教えてやれ」

「だ〜くか〜く〜く〜なんで教えんのオレなんだよツ！ムカつくぜ！」

「今端末持つてるのお前だけだろ？」

「持ち歩いてめーら!!」

「…これからは必ず持ち歩け」

2001年3月16日

ブランクはローマに身を隠すことにした。観光地なら人に紛れて見つかりにくいし、交通の便がいいからだ。市街のボロホテルの一室を借り、拠点になるように私物コンピュータや地図を貼り付け、鍵を付け替えた。万が一のときスイッチ一つで証拠が消せるように細工したりして一日を終え、服を買いに行った。

洗面所で顔を洗ってメガネを外したとき、しばらく演技する必要がないことに気づいた。なぜか頭に不安が過ぎった。

数日は誰からも連絡がなく、ブランクはぼーっとしてみたりローマ観光してみたりしたがいつもどこかに不安があった。そんなのははじめの事だった。

チーム支給のパソコンには一日に何度か全体チャットで情報が投

下されていた。ドナテラがカラブリアのどこに暮らしていたか。近隣に何があるか。別のスタンド使いがいるか、などリゾットが一人で調べているらしい。

どんな能力なのか知らないがあの人も建物も少ない田舎町で隠密行動ができるということはステルス性能でもあるんだらうか。

なかなか行動に移らないのは娘が見当たらないからか、確証がないからか。少なくともチームで一番用心深いリゾットらしい。

ブランクは現在ムーロロのオール・アロング・ウオッチ・タワーを使える。だが本人から「絶対使うな」と言われているので偵察や調査に協力できなかった。

他のメンバーも暇なのかわからないが、たまに突然電話がかかってくる。ペッシから「尾行されてるかもって思ったとき自然に確かめる方法ある?」と聞かれたので「靴紐を結ぶふりをする?」と答えたり。ホルマジオからBSアンテナの不正利用の方法を聞いたりした。

チャットには親衛隊メンバーについての情報や他のチームのスタンド使いの情報も多く共有され、部屋でそれを読んだりする時間も長かった。

ブランクが親衛隊で知ってるのはチョコラータとセツコとドツピオだけだが、他にも3名ほどいるらしい。昔はあと三人いたようだが全員鬼籍に入っている。

万が一自分の名前があつたらやばいなど思ったが見当たらなくて安心した。

2001年3月20日

とうるるるるるるん……

「はい。ブランクです」

『オレだ』

声の主はムーロロだった。電話なのにかなり小声で話している。

『もう限界だ。怪しまれる前にボスに報告しろ』

「わかりました」

ブランクの返事のあと電話はすぐ切れた。ブランクはすぐに別の

番号をプッシュし、ワンコールで切る。二分後すぐに折り返しで電話がかかってきた。ドツピオはボス同様用心深い。

『ドツピオです。ブランク、何かあったんですか?』

「リゾットが消えました。同時にチームに散開の命令が出ました。なにかするつもりです」

『……わかりました。指示を待つてください』

電話が切れ、きっかり二分後また電話がかかってきた。

『ボスからの命令です。リゾット・ネエロを暗殺してください』

「…わかりました」

リゾットの場所は不明だった。ボスの娘を探しているというのなら少なくともクラブブリア州にはいるのだろうが、彼は常時端末の電源を切っているらしく位置情報は全く送られてこない。

まさかスパイウェアが入れられてるのに気づいているのだろうか? だとしたらブランクはとっくに殺されてるか尋問されてるはずだからその線は薄い。だとすれば彼の能力に関係あるのだろうか。

どちらにせよムーロロの指示は依然 “ボスを倒せ” だ。ローマから動く必要はないのだ。

2001年3月27日

リゾットから全員に「娘の場所と行動パターンを掴んだ」と連絡があった。なかなか場所をつかめないと思っていたが、すでに組織の他のチームがうろつき始めていたのと、娘が友達の家を泊まり歩いたりしたせいでさらえるという確証が得られなかったようだ。

近日中に娘を奪う。

それはつまり狼煙を上げるってことだ。

ブランクは頭の中で素数を数える。久々にやった緊張緩和方法だ。97まで数えたとき、電話が鳴った。

とうるるるるるるん……

とうるるるるるるん……

「……はい」

『ブランクか。午後七時、テレビの泉に来い』

それだけ言って、電話相手は回線を切ってしまった。今の声は聞き間違いようがない。チョコラータだ。とてつもなく身の危険を感じる。

だが行かないというわけにもいかない。自分にはやましいことは何もない…という体でいなければならぬのだから。

だが午後七時という時間設定は気になった。現在六時。もしブランクがいつもどおりナポリにいたとしたら絶対に間に合わない。ローマに知っていることを知ってての時間設定であることは間違いない。

ローマにいる理由はいくらでもでっち上げられる。だが問題はなぜチョコラータがそれを知っているかだ。

トレビの泉はローマで一番人気と言っている観光スポットで行っても人がひっきりなしに記念写真を撮っている。その巨大な噴水を囲む柵に保たれるようにしているチョコラータを見つけ、ブランクは声をかけた。

「おそいよ」

そう言ってチョコラータはスタスタ歩いていってしまふ。人気のあるところからどんどん離れ、小さな川にかかる橋まで来た。チョコラータは橋脚部分に降り、サビだらけの鉄門をあけ地下へ降りていった。ローマの地下には発掘が追いつかないほど古い墓が多い。ちよつと掘ればローマ時代のコインが出で来るとまで言われている。

暗い通路の先にあったのは人一人が立っているくらいの空間と椅子に縛り付けられた裸の男だった。

「……誰ですか？これは」

ブランクの疑問を無視してチョコラータはぺらぺらと話し始めた。

「ブランクくん、わたしは君にとてもよくしてたと思うんだがどう思う？四肢は揃ってるし、どこも病気がないし…なにより生きてる」  
「そうですね…」

「それは君がどう変わってくか興味があったからだ。予想通り君は見事に自分というものを見つけた。故に、最近つまらなくなっていたわけだ。こういうのをマンネリっていうんだが」

「……」

「一週間だな。一週間、君はずっとローマにいたね？リゾット・ネエロをぶっ殺さなきゃいけないのにずいぶん悠長じゃないか」

「…どうしてそれを？」

チヨコラータは無視して話し続ける。

「わかるさ。暗殺チームを束ねてるんだからこちらから探して殺すのは難しい。それよりかは連絡を待ったほうが怪しまれないし、効率がいい。わかるよ、理屈としてはね」

「……」

「だが、ね。どうもわたしは気になるんだよ。空っぽで、自意識が希薄だった君ならその判断をし、ただローマでぼうっとしてたって納得した。だが今の君が、チームのおかげですとか抜かしやがった君が合理的な行動をするはずがないんだ」

「……そうですか？チヨコラータ先生、さすがに妄想が甚だしツ…」

チヨコラータはそれ以上言わせないようにブランクの口に指を突っ込んだ。そのまま指を曲げ、頬を上にはひっぱった。噛むわけにも行かないブランクはつま先立ちになるしかない。

「すつとぼけてんじゃねーぞ。このオレが、二年間も生かしてやってんだぜ？なあ、なんでかわかってんのかよッ！おい」

チヨコラータは遠慮なく爪先立ちのブランクの腹を殴った。ブランクの思考が真っ白に染まり、気が遠くなりかける。だが突っ込まれた指の爪が頬に深く刺さって嫌でも痛みと向き合わせられる。

「無表情を作ってるな？どんな気持ちだ、いつもみたいに言ってみよ」

指を突っ込まれてちゃ母音しか喋れないのに。チヨコラータは指をグリグリ捻って口の内側の肉をどんどんえぐっていく。

「オレのスタンドは知ってるよな？口の中の傷からストロー用の穴を開けることだってできるんたぜ。せつかく見栄えのいい顔してんだ。ネズミの食ったチーズみたいになんのは僥びねーよな。むしろオレはそうしたいが…スタンド能力をコピーされるのはムカつくからな」  
「おうあ…おういいんおうあええあいのか？」  
「おうあ…おういいんおうあええあいいおあ」

「ボスの考えは知らん。だがリゾットを本気で殺せると思ってるかは怪しいね。失敗したら殺されるんじゃないか」

「でも、りぞつとをころせるのは…えお、いおっおおおえうおあ…  
ぼすは…そうかんがえてるだろおうあ…おうあんあええるあお？」  
あうんたぶんおういぼくあいしかいかいい

「ブランク、オレはおまえが見かけより馬鹿じゃねーから疑ってたんだ」  
チョコラータはまだブランクを殴った。体がよろめき、爪が頬の中を抉った。血とよだれが口からダラダラ溢れてきてI♡ROMAのシャツを汚した。思わずチョコラータの腕を掴もうと手が出てしまうが、チョコラータは右手でブランクの首にチョップを叩き込んだ。

咳き込むブランクを眺めながらチョコラータは話し続ける。

「リゾットを殺せる可能性が減ると、ひよつとしたら裏切りそうなおまえをぶつ殺すの、ボスがどっち取るかはしんねーが…わたしだったらおまえをぶつ殺す方を選ぶね」

チョコラータは口から指を引っこ抜き、よろめくブランクを蹴り飛ばした。石がゴロゴロ転がっている地面に背中が激突する。

チョコラータはポケットからクロスボウの矢を取り出した。通常の矢と違い、ポイントに4ヶ所切れ込みのようなものがある。

そしてあつというまに矢をブランクの腹部に3箇所、首に一本深く突き刺した。貫通した矢先でジャコンというバネの音がした。

「うツ…」

「内臓も動脈も傷つけてない。後遺症になるような位置じゃあない。だが、背中側には鉤がでているから引き抜くのはかなり勇気がいるだろうね」

「これ…ほんとに死なないやつですか…超痛い！」

「そこは保証するよ。で、ほら。矢はケブラーの糸で…別の矢とつながってる！見てろ」

チョコラータはニコニコ笑って対になつてる矢を見せびらかし、裸で椅子に縛り付けられた男に突き刺した。男の方は猿轡さるひんごしにくぐもった悲鳴を上げた。

「彼の方は引き抜いたら確実に死ぬ。引き抜いても、放っておいても身体の中のカビが肉を食い散らかしてどっちみち死ぬがね。でもわ

たしたちがお前の宿を調べてここに帰ってくるまでは保つさ」

「こんなことしてなんの意味が…」

「趣味だよ」

「あ、そっか…」

「ちなみに彼はただそのへんを歩いてた旅行者らしい。家族写真を財布に入れて観光マップをだいいじに胸にしまつて…心温まるな。では失礼。そこで待っているよ」

チョコラータはブランクの上着のポケットから財布と鍵を抜き、地中から出てきたセッコのカメラを三脚に固定してから地下室を出ていった。

「クソチョコラータ…」

ブランクは起き上がった。地面にまで刺さった首の矢がひつぱられ、血がどろつと口に溢れてきた。死なない位置なんて嘘なんじゃないかってくらいの量だ。腹もとんでもなく痛む。何より口の中がズタズタだ。これじゃしばらく辛いものは食べられない。

だが痛みと引き換えにチョコラータの能力までもコピーできた。(生きて帰れた場合) 最大の功績だ。

さらに、これは脱走の好機でもある。チョコラータの好物は最後まで残しとく性格が今回はチャンスに変わった。

ブランクはチョコラータが指を突っ込んだのが右の頬で良かったと心から神に感謝した。

左の奥歯に本人内緒でパクったリトル・フィートで縮めたパソコン、着替え一式が仕込んであるからだ。

この矢を縮めて脱出…というのは無理だろう。ここから宿まで車で十分。家探しには五分とかかるまい。

ブランクのコピーしたリトル・フィートだと縮めるのものすごく時間がかかる。おおよそ30分たつてようやく縮みはじめ、任意の大ききになるまでさらに10分はかかる。

そして矢を繋いでいる糸だが、ケブラーという防弾チョッキにも使われている繊維の名前だ。触った感じもとてもじゃないが切ったりちぎったり出来そうじゃない。たとえタングステンだろうと今の



ブランクに切ることはできないだろうが…。

「……」

となると、矢で繋がれた男を殺す他ない。

ブランクは立ち上がり、男の様子を見た。まさかブランクが自分のために命を奪うことを良しとしないと思っただろうか。

いや、奪うこと前提でここに置いていったのだろう。

チョコラータはボスから与えられた仕事としてブランクを襲ったのではなく、疑惑と個人的興味で襲ったのだから。故に家探しが主目的で、あとのこれは前戯みたいなものだ。

家探しして何も出なくても、チョコラータは個人的に自分を殺しに来るだろう。絶望から引き出されたその次を見るために。

とんだ変態に目をつけられたものだ。

ブランクは無言で自分と男を繋ぐ糸を引っ張り、男の首に巻いた。気道を潰すと苦しんで暴れる。血の流れを止めてしまえば死ぬまで10秒、天にも登る気持ちらしい。

こういうとき言葉をかけるのはむしろ残酷だ。

後ろから輪にした糸を手のひらの上でまとめ、そのまま握る。そしてそれを90度捻りながらまっすぐ上へ素早く持ち上げる。

これにはあまり力はいらない。だが少しの抵抗と糸の細さのせいで手に糸が食い込み切れて血が出た。10秒カウントすると男はもう動かなかった。男の体に刺さった矢をむりやり引き抜き、抉れ取れた肉を取り除いて糸といっしょに巻いてズボンのベルト部分に無理やり差し込んだ。

ビデオは一応ぶつ壊したが、どうせ隠しカメラがたくさんあるんだろう。ブランクは虚空に向けてファックキューのポーズだけして地下から脱出した。街はまだ人気があつて、体から矢の突き出たブランクはかなり目立ってしまう。

「クソ：なんかクラクラしてきた…」

ブランクはなんとかタクシーを捕まえた。だが運転手は四本突き出た矢を見て悲鳴を上げ降りるように懇願してきた。

「ピーピー喚くなッ！金ならいくらでもくれてやるからとつと市外

に向けて走りやがれ！殺されてーのか」

ブランクは怒鳴る口から血が飛び散るわ、矢をブラブラさせてるわけではたからみればイツちやつてる人そのものだった。

誰かを恫喝するのは久々だったので怒鳴ってサツピラ投げたあとに赤面したが、運転手は車を急発進させ爆速で街を抜けていった。

ブランクはもとの大きさに戻した携帯電話である番号をプッシュした。

とうるるるるるるん……

「……あ、もしもし。ブランクです」

『どうした。お前から電話なんて珍しいな』

「あー、ちよつと教えてほしいんですが。お腹にあいた穴ってお医者さんに行かなくても治りますか？」

『は？』

「なんか……もしかしたら毒とかあるかも。……すげー喉乾いたんですが。なんだかわかります？目が霞むし……寒」

『お前今どこにいるんだ？』

「タクシー」

『はあ……しょオーがねー……なあ……運転手にカゼルタの水道橋のバス停まで行くようにいえ』

「あー、ヴァンヴィツテリ？あのすげーでかい……バカ……バカでかい」

『そうだ。それまでに生きてたら助けてやるよ』

「わかりました」

電話を切ってからよくよく自分の体を見てみると、首からかなり出血していた。何が動脈は無事だ、あのヤブ医者。それとも変に情けをかけて首を絞めたせいでどこか引っ張ってしまったのだろうか？

腹の方からもじわじわ血が出て、座席はどうしようもないくらい汚れている。だがそんなことかまっつられないくらい意識が朦朧としてきた。

ブランクは運転手に行き先を告げると座席に寝転んでそのまま寝てしまった。

2001年3月29日

カンノーロ・ムーロロは収集したデータを丁寧に編集していた。組織構成員の個人情報とスタンド能力をまとめたファイル。ボスにすら見せない完全版は生きてる人間だけでなく死んだ人間も網羅してあるいわばパッショーネ大全だ。

暗殺チームのプロフィールもブランクのおかげでだいぶ溜まった。地元をウロウロしてる下っ端のは簡単に集まるが、幹部クラスや特殊任務を受けてるチームは秘密主義だからだ。

ムーロロは何人かの幹部のファイルを呼び出した。もしボスが娘を保護するなら誰に頼むだろう。リゾットが行方をくらましたと聞いた以上スタンド使いに任せたいはずだ。

ナポリ地区で一番スタンド使いを抱えているのはポルポだ。あのデブは絶対に買収できない。現状に満足しているからだ。

他だとローマ、シチリアの幹部がスタンド使いだっただけ。シチリアのやつが一番可能性が高い。

ムーロロはポルポとシチリアの幹部の情報をリゾットに送った。リゾットはこのところこちらからの連絡に出ない。

ブランクも位置情報特定不可と報告してきた。あいつはリゾット暗殺司令をもらったくせにのほほんとしていたが大丈夫なんだろうか？

反響みたいだったあいつが自分を持ち始めたのはいい事だが、同時にあいつの一番いいところ、つまり冷静で公平な判断力と合理的な思考がなくなりつつあるのは残念だった。

万が一になったら切り捨てることも考えなければならぬ。

でも、どんなに変わってもあいつはずっと命令を出すオレに従順だ。そこは今も昔も変わらずやつの美点だ。

とうるるるるるるん……

とうるるるるるるん……

電話だ。

「はい」

『ムーロロさん。ブランクです』

「おう。どうした？」

『あの一、今一人ですか？』

「おう」

『実はチヨコラータに疑われて襲われました』

「何？ボスは知ってるのか？」

『知らないはずです。チヨコラータは…なんというか、趣味で僕を殺したがって…』

「お前の裏切りはバレてねーんだな？」

『ええ。定時報告もいつも通りでした。あ、でも…』

「なんだ？」

『チヨコラータのスタンドをコピーしました』

「でかしたな。お前、怪我は？」

『超しました。でも問題なく動けます』

「よし。任務は続行だ。リゾットの暗殺の件については情報部と連携するとボスに伝えておけ。こつちになんか来たらメールで送る」

『わかりました。では』

暗殺対象がリゾットで本当に良かった。あいつを見つけていうこと自体UFOをみつけろっていつてるようなもんだから時間がかかったって不思議じゃない。チームが散開しているのはブランクを送り込んだ当初の狙いから外れている。ボスにとっては不都合な展開だろう。

チヨコラータがブランクを追ってくるのだとしたらかなり危険だ。だが追跡能力に乏しい二人ならやり過ぎせないこともないだろう。待ち伏せされない限りは。

神の視点を得たような気分だ。

だが、神は決してプレイヤー席には座らないのだ。

ヤング・ラスト

せんぱい①2001年3月30日

「ハッ！」

目の前に広がってるのは最後に見たタクシーの運転席なんかじゃなくて、タバコの煙で薄汚れた茶色の天井だった。

「知らない天井だ……」

「そりやそーだろ」

「わ、え？ホルマジオ先輩？」

その視界に突然見慣れた坊主頭が飛び込んできたおかげで眠気が吹っ飛んだ。

「何驚いてんだよ。テメーで電話してきたくせによ」

言われてようやく自分がどんな目にあったか思い出し、ブランクは思わず自分の首を擦った。

「そうだ。矢が……」

「矢なら縮めて抜いた。お前森かなんかに隠れてたのか？あれ狩り用の矢だよな」

「まあ……多分あつちは狩りの獲物だと思ってるっていうか……」

「ボスの追手か？」

「うーん……そうともいえ……ますね。いや、そうです」

「はあ、やっぱお前一人にするんじゃないかなかったぜ。おかげで余計な手間が増えちゃった」

「あ、そういえば昨日のタクシーは？」

「始末しといた」

「そうですか……」

「なんだよしよぼくれた顔して。おめーが蒔いた種だろ」

「すみません、そうですよね。先輩は僕の尻拭いを……」

「本当だぜ。おめーいい先輩持ったよな。イルーゾオなら絶対見捨ててたね。むしろ助けんのプロシユートかオレくらいだろ」

「ホルマジオ先輩の尊敬できるところ、もうありすぎて両手の指じゃ足

りないっす。一生ついていくっす」

「ブランクは手を胸の前に組み仰々しくホルマジオを讃えた。

「あと電話で毒がどうこう言ってたけど特にそういうのはなさそうだぜ。血はすげーでてたがまあ食べれば治るだろ。お前怪我したことねーのか？なっさけねーなア」

「あ、あんだだけ血が出ればパニックりますよ…」

「恩人に甘やかされて育ったんだな」

「あの人はすげー厳しかったですよ！たまたま怪我しなかっただけで…」

「オレも甘やかしちゃったぜ。ほら、食っとけ」

ホルマジオが投げ渡してきたのはトマトの缶詰だった。

「ポパイじゃないんですから…あれはほうれん草か。いや、ほうれん草のほうが多分鉄分が…」

「うるせーな。ガス通ってねーんだよ。あとはスナックしかねー」

ブランクは上体を起こして貧血気味の頭を抱えた。

「今日日です？」

「3月29日」

「あれから一日眠ってたんですか？」

「そーだよ。初めて見たぞ、あんぐらいの傷で一日ぶっ倒れてるやつ」「言い訳しようがないっす…」

「あ、でも腹にすげー青あざ。あれは見たことねーな」

道理で今も腹に鈍痛がはしってるわけだ。どれだけの力で殴ったのかは知らないが相当アタマにきてたんだらう。

「なんか進展ありました？」

「ああ、あつたぜ。リゾットがしくじった」

「なんと」

「今回ばかりは慎重さが裏目に出たな。娘は先に保護されちゃった。保護しに来たのはノーマークのペリーコロって幹部でいま行方を探してるがうまく撒かれちゃった」

「ペリーコロ？あー、あのちっちゃいおじさんか」

「ああ。だがそいつがずっと護衛するのはねーだろうな。スタンド使

いじゃねえし。オレはポルポに預けられるんじゃねーかって思うが、おまえはどう思う」

「ポルポ…スタンド使い量産してるデブですか。あり得る話ですね。単純に手駒が多そうですし」

「ああ。だがいまネアポリスに行ってもすぐ殺されちまうだろうから確認はできねえ。ローマにいたお前がそのざまだしな」

「人が多いから大丈夫だと思ったのに…」

「ふん。マンモーニだなお前も」

「うるさいなあ」

ブランクは口の中から歯に糸で縛っておいた塊を吐き出した。リトル・フィートで小さくしていた私物のパソコンと支給のパソコン、その他諸々の資料を入れた袋だ。

ポルポの構成員のデータを参照するために私物のパソコンの方を能力解除しもとの大きさに戻した。

「あッ！てめーそれ！オレのリトル・フィートじゃねーか!!パクってんじゃねーぞおい！」

「だ、だって便利なんですもん」

「ふぎけんなテメー！ッ」

「や、やめて！ビンタはやめて！」

ブランクの懇願を無視し、ホルマジオは右頬を思いつきりひっぱたいた。チョコラータにえぐられた傷が痛み、口の中に鉄の味と涎が広がった。

「恩知らずが！」

「すみませくん…」

「気持ちが悪もってねーよ。しょーがねー。落とし前は動けるようになってからつけてもらうからな。おとなしくそこで待ってろ」

ホルマジオはでかけてしまった。ブランクはパソコンの電源をつけ、ポルポの地区の構成員のデータに目を通しながら携帯電話でムーロ口と連絡をつけた。

そしてすぐにドツピオに電話をかけてワンコールで切る。チョコラータに襲われたとは報告できないが時間がかかっている言い訳はし

なければならぬ。チクつたところになにか変わるはずもない。

自分はあの狂人に命を狙われているのかと思うと急に仕事が嫌になつてきた。

とうるるるるるるん……

「ブランクです」

『ドツピオです。どうぞ』

「リゾットの現在地が特定できません。情報技術チームに協力要請をしても？」

『わかりました。リゾットを殺すことが困難ならば、メンバーを一人ずつ暗殺しおびき出す他ないですね。接触はありますか？』

「いいえ。他のメンバーも場所を転々としています。ですがリゾットよりは特定は容易です」

『ではメンバーを殺してください。すでにリゾットのために一週間以上無駄にしています。…あの、親切心って言うのと押し付けがましいんですが…急いだほうがいいですよ』

「……ええ、わかりました」

『ぼくはあなたを信じてます。だってこういうときのためにあなたはいたんですから。ね？』

「ええ。そのとおりです」

ブランクは電話を切つて溜息をついた。嘘も手慣れたもんだつた。

立ち上がり、傷の具合を確認する。矢が貫通したというのに体に残る痛みや違和感は少ない。せいぜい身体をひねると痛みが走るくらいだ。熱も出ていないから感染症もおこしていない。

チヨコロータをヤブといったのは撤回しなければならぬ。

ただ殴られた際の内出血はかなり重みみたいだ。腹部は拳型に二箇所どす黒い色になっていて常時鈍痛がする。あの時吐いた血は内臓からのものだったのかもしれない。

ブランクはすぐライフルを組み立て構えた。重みのせいで内臓が痛む。痛みはどうしてもコントロールしきれない動きを生む。立つて撃つのは厳しそうだ。

「…筋肉は…信用できないか」



この痛む体で長距離射撃は難しいかもしれない。

恩人ならたとえ片腕が吹っ飛んでも標的を逃さないだろうが、ブランクには無理だ。地面に置いて狙う分にはまだなんとかかなりそうだが、これからの状況を考えると少し不安だ。

ブランクはベッドの傍らに置かれたビニール袋を漁って鎮痛剤を見つけ出し、適当に何粒か口に放り込んだ。

「でもチョコラータのグリーン・デイは切り札になる。怪我の功名つてやつかな…。…これ前も言ったっけ？血が足りねー…」

ブランクはしようがなく投げ渡された缶詰のトマトをそのまま食べた。他になんかないかと冷蔵庫を見ると、生野菜や生肉は一切なく冷凍食品ばかりだった。頻繁に移動を繰り返している以上仕方がない。

ただ目をつぶりじつとしていると窓の外で猫が入りたそうに外枠を引っ掻いていたので入れてやった。

猫を腹に乗つけて気持ちよく寝ていたら、どすんという衝撃とともに猫のぬくもりが消えた。

「勝手に猫なんて上げてんじゃねーよ」

「…せっかかない気分です寝てたのに…」

もう13時を回っていた。ホルマジオはステーキのテイクアウトを持って帰ってきてきてブランクに食べさせた。一日寝たあとに肉は胃にあまり良くないが気遣いを無碍にしてしまうのは今後の付き合いに支障をきたす。

なんとか肉を噛み切り野菜ジュースで流し込んだ。

「パソコンなんて立ち上げて何してんだ。つかお前デスクトップなんて使えたのか」

「あー、覚えました」

「できるなら初めからやれよ」

「へへ…」

ホルマジオは寝っ転がったままのブランクの顔面に5センチほどの厚さの封筒を落とした。

「褒めてねーよ。あと明日イルーゾオが近場に寄るらしいからこれ渡

しに行け」

「はあ。封筒：お金ですか？」

「ああ。口座なんてすぐ押さえられるから引き出しとけつつたのにあのバカ」

「イルーゾ先輩らしいですね」

「11時に3ブロック先のカフェ・オルトラニーだ。ブレスケツタが美味しいところ」

ブランクは了承し、翌日言われたとおりの時間につくよう外に出た。イルーゾオはカフェ・オルトラニーのテラスに座り優雅にカフェラテを楽しんでいた。

ブレスケツタが名物らしいその店は立地も良かった。大通りより一本裏なおかげで静かだし、裏にある昔使われていた鐘楼も歴史を感じさせる。

店とテラスを仕切るガラス板の間には水が流れていてとても涼し気だし、テラスの植え込みは青々として外装もかなりおしゃれだった。ホルマジオは結構ネアポリスでもいいところを知ってる。もしかしてカフェ巡りが趣味だったりするんだろうか？

ちなみにこういう風にきちんとお茶を楽しむのはメローネとイルーゾオだけだ。この場合のきちんとというのは仕事中にもかかわらず、という意味が含まれている。

「おーブランク。お前怪我したって？」

「ええ。まあ、大したことないですけどね？」

「大泣きして電話かけてきたって聞いたぞ」

「あのヤロー…」

「ま、座れよ。一杯奢るぜ。その金で」

「どうもです」

封筒を手渡しミネラルウォーターを一杯頼んだ。とてもじゃないが味付きのものは受け付けない。コーヒーは特に厳しい。

「こんなゆっくりしていいんですかね」

「カップ一杯飲み干す時間くらいあるだろ。ケツ。お前はホルマジオにはよく懐いてるくせにオレとはコーヒー一杯も付き合えねえって

か?」

「なんで今日はそんな被害妄想強いんですか…?」

「あ? テメーが余計なこと言うからだろーが」

「だって僕ら追われる身ですよ。この怪我だってぬくぬくローマで暮らしてたら…」

「オレのスタンドなら楽に逃げられるからな。襲われてもそんなケガしねーよ」

「じゃあコピーさせてくださいよ」

「絶対やだね。能力は安売りしたら強みも価値もなくなる」

イルーゾオの言うとおり。暗殺チームで能力をコピーさせてくれたのはペツシだけだった(しかも後でプロシユートにめちやくちや怒られたと言っていた)。

「…まあそうですね。他人に自分のことを曝け出すのに抵抗がない人は少ないです」

「あ? そういう話だったか?」

「そういう事じゃないんですか?」

「んん? ……まあそうか」

微妙な沈黙がおりた。ブランクはずっと気になっていたことを尋ねた。

「やつぱり弱くなったと思いますか? 僕のスタンド…」

「さあな。捉え方次第だろそんなん。ちなみにオレはオレの能力が一番強いと思ってるからお前のスタンドはクソ弱いと思うぜ」

「僕イルーゾオ先輩のそういうところは見習いたいと思ってます」

「敬意が足りねえんだよテメーはよオ…」

「そんなこと…」

ブランクは笑いながらミネラルウォーターのグラスを持った。だが口に運ぶ直前、手の影以外の何かがグラスにうつった気がした。

「なんか…今……」

「あ?」

「なんかグラスに映りませんでした? 黒くて三角のものが」

「何言ってるんだお前。そりゃ何かしら反射するだろ」

「でもなんか不自然な感じだったんだけど…」

「気になんなら交換してもらえよ」

ブランクはちよつと考えてからグラスを口につけ、飲んだ。グラスを離す直前に今度はつきり見えた。グラスの中に黒い三角のものが浮いている。いや、泳いでいる。

「なッ…!」

間違いない。ハリウッド映画みたいなサメのヒレがグラスに浮いてる。

「先輩、ここにいてください!」

「あ? ああ…なんだよ急に」

ブランクは自分が言った言葉にハツとした。

ここにいてだって? 自分はここから逃げろと言ったつもりなのに?

「先輩とずつとお茶してたんです! 先輩、僕は先輩とここにいたい、一緒にいたいです」

「なんだ? 忙しいやつだな」

違う。自分の意思に反して言葉がでてきている。ブランクはすぐ口を塞いだ。そしてグラスをまた見た。サメは消えている。

イルーゾオが様子がおかしいブランクを見ながらカップを持ち上げ口に近づけた。

ブランクはイルーゾオのカップを鷲掴みにし地面に叩きつけた。カフエラテが床にぶちまけられた瞬間、確かに見えた。

「上空に敵!」

「何ッ?!」

「違う! 左の客の足元!」

「どこだよ!」

だめだ、話せば話すほど混乱する。

サメの姿のスタンドを探す。ミネラルウォーターの中、カフエラテの中、正確には飛び散ったしずくに。そして今、別の客のグラスにもヒレがみえた。

敵だ…。

「やはりね」

そのブランクがぎりぎり見える位置、向かいの建物の屋根の上でティッツアローノは嘆息した。そしてスクアアローノの肩にもたれる。

「メンバーと接触があることを黙っていたようですね。とんだ二枚舌だ」

「今は本当に二枚舌さ」

スクアアローノはニヤニヤしながらカフェのテラスでうろたえるブランクを眺めた。

「アレはイルーゾオか。鏡の世界に逃げられると厄介ですね。先に始末してください」

「ああ。さて…ブランクはどうするかな」

「く…」

ブランクは口を抑え、席を立った。敵の狙いが何なのか、自分の暗殺ならば今ここでやる必要はない。つまり自分だけじゃなくイルーゾオもまとめて始末するつもりなんだろう。

「なんだ？口切ったのか？」

イルーゾオはなぜかこんな時だけ優しく紙ナプキンを差し出してきた。

ブランクは首をブンブン振って必死にノーを伝えようとした。だが首は縦に振られていた。

言葉だけじゃない、意思疎通の手段すべてを奪われている。

ブランクはカフェの周囲を見て敵がいなか確認する。だがそれらしき影は見えない。遠隔操作型だとして距離をとるべきかいなかとにかくイルーゾオから離れなければ。

ブランクは店内に入ろうとした。だがテラスを仕切るガラスの壁が…中に水が流れた凝ったガラスの壁が突然割れた。

「うぐツ…!!」

飛沫に紛れてサメ型のスタンドが移動しているのが見える。だが見えても対処できなかった。サメはまっすぐブランクの顔面めがけて飛んできた。

頭を仰け反らせて避けようとした。だがサメは耳たぶに喰らいつき、そのまま耳の下半分を持つていった。

ブランクは派手に倒れ、周囲のお客が悲鳴を上げた。

「なんだ?! 敵か」

千切れ飛んだ耳は床にこぼれた水の上に浮いていた。畜生。これじゃあ一生ピアスがつけられないじゃないか。

そしてその落ちた耳のすぐそばに三角形のヒレが見える。耳から流れる血がドロドロと地面に流れ、駆け寄ってきたイルーゾオの足元に流れる。

このスタンドは液体があればどこでも移動できるのか。だとすれば血を流してるのは非常にまずい。

「先輩ツ……僕、僕を抱きしめて下さいッ!」

「はっ」

「きつく抱いて離さないください! 好き好き大好き超愛してる! 今すぐ、さあ!」

ブランクは手を広げイルーゾオに叫んだ。

「お前……」

イルーゾオはポケットに手を入れた。その瞬間

「掴んだぜツ……クラッシュユ!」

スクアー口のクラッシュユがイルーゾオの喉笛を捉えた。だがそれとほぼ同時にイルーゾオはブランクの襟首を掴み、自分のポケットに入れていた鏡を使いマン・イン・ザ・ミラーを発動させた。

「ッ………!」

鏡の世界にはイルーゾオが選択したものしか入れない。つまり今

喉に食らいついたサメのスタンドは消える。

「いつツ………てえーっツ！何だこりやア！今のなんだよブランク！！」

イルルゾオの喉から血が出ている。だがつい先日のブランクと比べたら大した傷じゃない。かすり傷だ。

ブランクは慌てて自分の舌を確認する。

「あ……し、舌！舌！僕はブランク、好きな女優はレオンの時のナタリー・ポートマン！嫌いな食べ物は……酢豚！……よ、よかった。とれた！」

「今のは攻撃か？お前には見えてたか？」

「はい。僕の舌にもついていました。先輩！敵は二人です。ヤツちやいましょう」

「そうだな。見つかった以上やるしかねえ。だがおまえの舌の方もサメも遠距離操作型だよな？本体見つけれんのか？」

「はい。作戦があります。少なくともサメの方はやれるでしょう……でも……先輩はちよつと危険かもしれません」

「いいぜ。聞いただけ聞いてやる」

「じゃあ先輩、これあげます」

ブランクはさつきとつきに拾ったちぎれた自分の左耳たぶを渡した。

「うツわ……キモすぎる……」

イルルゾオは薄情なのでそれをバナナの革みたいにつまんでもよかった。ブランクはちよつと傷ついた。

「これをサメに食わせてください」

「あ？食わせたらどうなる？」

「多分すげーびっくりします」

「……で？」

「びっくりした本体を見つけて狙撃します」

「お前……それを作戦って言ったのか？」

「え？はい……」

イルルゾオは予告なくブランクの頬をひっぱたいた。

「て、敵は絶対にカフェのテラスが見える場所にいるはずですよ！先輩が出てきたらなおさら撤退はせず確実に襲ってきます。それで耳を食わせれば絶対びっくりします。僕なら必ず見つけられます」

「…本当に耳食わせたらびっくりするの？」

「ええ。僕を鏡の世界から出してください。裏の鐘楼まで2分もあれば登れます。この建物の上からならカフェを見渡せる場所も丸見えます」

「……2分だな。わかった、お前に2分だけ付き合っただけやる」



せんぱい②2001年3月31日

「なんだ？二人が急に消えたぞ」

「わたしのトーキングヘッドも強制的に解除されたようだ」

「何？トーキングヘッドはティツア、お前の意志でしか外せないんじゃないのか？」

「ああ。解除というよりも引き剥がされたという感じがした。イルーゾオの能力だろう。鏡の世界にスタンドは入れないらしいな」

「チツ…」

スクアアロはカフェ・オルトラニをもう一度見た。ガラスが割れて騒ぎになってる中、イルーゾオとブランクの姿は見えない。

「二人は…クソ、人だかりが邪魔だ」

「見つからない…みたいですね。スクアアロ、なにか痕跡は…」

スクアアロはティツアアノの言葉を遮る。

「イルーゾオが出てきた」

「一度隠れたのにわざわざ出てくるとはどういう事だ…？」

「どちらにせよ鏡の世界に逃げられたら厄介だ。殺れる時に殺っちゃまおうぜ」

「用心してください。ブランクは姿を見せてない。やつらがもしわたしたち本体の姿を見つけたら…」

「オレたちを見つけるなんて不可能だ。それよりもイルーゾオを生かして逃がすほうが面倒だぜ…！」

テラスには大きな水溜まり。イルーゾオは店員がガラスを片付けようと近づいてきたのを怒鳴って追っ払った。邪魔をされたくない。

先程噛みつかれたときわかったが、サメの形のスタンドは遠隔操作型のくせにスピードはとてはやい。

さつきは運が良かった。

イルーゾオは牙が掠った首筋を擦る。ほんの一瞬マン・イン・ザ・ミラーの発動が遅れていれば確実に持っていかれていた。

「水溜りなんて明らかな敵の巣だが…裏を返せば攻撃が飛んでくる場

所はハッキリしてるわけだ」

イルーゾオは集中して耳を澄ませた。ちやぶ、と後ろの水たまりから音がした。

「どっから噛み付いてくるかわかればかわすのはわけねーんだ！種がわかっちゃまえばよーく、くだんねー能力だな！」

クラツシュが狙っていたのは一貫して急所だった。液体の体積に応じて身体の大きさが変わるが故に破壊力は低いのだ。

背後の足元の水たまりからクラツシュが跳ねた。イルーゾオは椅子を振りかぶりクラツシュをぶん殴ろうとした。だがクラツシュはすぐに別の水たまりに移動する。

「床からの攻撃では見切られてしまう」

「わかってるッ！だがカップからの攻撃ならどうかな！」

ガラスが散乱したそばの席には飲みかけのまま放置されたカップがたたくさん。

イルーゾオのすぐそばのグラスからまたクラツシュが喉をめがけて飛び上がる。

「狙う場所も芸がないな」

イルーゾオは左手に握っていたブランクの耳をだし、クラツシュの口に突っ込んだ。その際クラツシュの牙が指の肉を引つ掛け人差し指の肉が半分持つてかれた。

「クソッ…速い！だが…！…」

クラツシュのヒレが床に見えた。

「ヤロー啞え込んだぜ、ブランク！」

ブランクは繋ぎっぱなしの電話からイルーゾオの声を聞いて大きく息を吸った。

いまさつき組み立てたライフルのスコープから景色を覗く。狭い路地のカフェが見える場所は限られている。テラス側にある高い建物、せいぜい百メートル圏内。

この鐘楼はカフェの真裏だ。ここからならその場所すべてを見渡せる。

「グリーン・デイ…」

イルーゾオに渡した耳はまだ生きている。以前たまたまであった少年のスタンド能力、全容は不明だが、今のところ生き物に過剰に生命エネルギーを与えることができるということだけわかっていた。

ブランクは切り落とされた耳に生命エネルギーを与えた後、グリーン・デイでカビを生やした。グリーン・デイは高低差を感知し、低い位置に移動した生きているものの肉を貪り続ける。

ただしブランクの劣化コピーではチョコラータのように数センチ単位の高低差では増殖しない。だが

「人の頭から地面の水たまりだったらーメートルはある…それくらい落ちればグリーン・デイは僕の耳を喰らい尽くす」

「ぐっ…！」

カフェ・オルトラーニに面した通りから一本奥に在る5階建てのアパート。その非常階段でスクアードは体を硬直させた。

「スクアード！どうしたんです」

「く、クラッシュの口に変なもんがまとわりついてる！」

「何？」

「ブランクだ！あいつの耳に変なもんがくっついてやがった！…これは…カビだ！あの野郎、まさかチョコラータのスタンドを…」

「戦闘継続は…」

「可能だ！だが…クソ！こんなもんクラッシュに食わせやがって…！」

ティツアードは階段から身を乗り出した。イルーゾオはクラッシュの移動を目視しつつある。いや液体の入ったカップをどんどん水たまりに落とし移動先を減らして動線を絞っているのだ。

「スクアード、場所が悪い。その口についてるのを取るために一度撤退…」

ティッツアーノが撤退しよう、と言い終わる前に事態は一変していた。

「グリーン・デイのカビはスタンドを食うことはできない。だけどその一瞬の動揺さえあれば簡単だ。獲物を探すのは慣れてる…グリーン・デイを解除してマンハッタン・トランスファアールを出すまでもない」

カフェから離れているにも関わらずカフェの方を注視していて、なおかつ動揺している人物。真正面のアパートの非常階段に男が二人いる、片方は身を乗り出してる。ここより高い建物だが問題ない。

「僕の師匠は世界最高の狙撃手だ。運がなかったな」

筋肉は信用できない。銃は骨で撃つものだ。恩人の言葉通り肌で風を感じ、微風がほんの少しやんだその瞬間引き金を引いた。

「ウーノ…」

バスツという空気の音がして身を乗り出していない方の男の頭がはじけ飛んだ。

ティッツアーノは額から血を流すスクアアールをみて一瞬何が起きたかわからなかった。

「スクアアール!？」

身を乗り出したまま振り返る無防備なうなじにブランクは容赦なく次弾を叩き込む。

「ドゥーエ」

だが風邪のせいかわりに痛みによる無意識な痙攣のせいかわりに狙いがずれた。弾はティッツアーノの右肩を吹き飛ばしたが絶命にはいたらなかった。ティッツアーノはスクアアールの側に倒れ込み、その死体に縋った。

「ブランクだな…やり、やがった！あの野郎スクアアールを…！」

ティッツアーノの腕は鎖骨とちぎれかけの筋肉でなんとかぶら下

がっつてるような状態だった。弾の入射角度からして撃ってきたのは真正面、ここより少し低い位置だ。

鉄柵の隙間から真正面を見る。カフェのすぐ裏にちょうどそれくらいの高さの鐘楼がある。やつはイルーゾオを囷にしてそこに移動したのだ。

「クソ……狙撃なんて……スタンド使いとしての美学がないッ……」

ティツツアーンは鉄の扉の向こうに逃げ込んだ。この傷じや助からない。死ぬ前にどうしてもあいつに連絡を取らなければ。

ティツツアーンは右側のポケットから電話を取り出す。失血で今にも気を失いそうだ。そして番号をプッシュし発信ボタンをおそうとしたその時

「テメーが追手だな？」

「な……あ……」

イルーゾオが頭に銃を突きつけた。そして返事も待たず3発頭に撃ち込んだ。

アパートの住人が音を聞きつけドアの外を見ると非常階段に続く廊下に腕のちぎれかけた射殺体が転がっていた。他に生きているものは誰もいなかった。

とうるるるるるるん……

『はい』

「あ、ホルマジオ先輩？僕です。ブランクです」

『ああ。お前らよー、今日なんかやらかしただろ？なあ。オレのオキニの喫茶店をぶっ壊しやがったよな？』

「それ関係でお電話したんですよ。実は親衛隊の追手に襲撃されました。追手はイルーゾオ先輩とぶっ殺したんですが、やつらの情報端末を手に入れたんで、それをムーロロさんに届けてきます」

『なんでムーロロなんだよ』

「だって僕らが持つても宝の持ち腐れですし……ムーロロさんならボ

スからの連絡逆探知できそうじゃないですか？」

『あいつを過剰に信用するのはやめとけ。…まあお前が殺して奪ったもんなら好きにしろ。つーかおまえローマからずつつけられてんじゃねーの？帰ってくんないよ』

「酷。いや、実際そうかもしれないんで帰らないです。あ、運転中なんであとはイルーゾ先輩に聞いてください」

『あんま派手にやんなよ』

「了解です。ではー」

ブランクは電話を切って助手席に投げ捨てた。

先程自分を襲ってきた二人組の私物はすべて回収した。死体の身元はしばらくは割れないだろう。パンツに名前を書いているようなヤツじゃないせいで未だ名前はわからないが、親衛隊のメンバーで二人組、という特徴からスクアーロとティツアーノではないかと思われる。

親衛隊はチームのようにはつるまないし互いのスタンド能力もわざわざ開示しない。全員の顔と名前、能力を知ってるのはおそらくドツピオだけだ。

おかげでこちらが勝てたがそれはあちらがブランクの狙撃能力を知らなかったからで、今後そういうたぐいの幸運に期待すべきではない。

ムーロロとはサレルノで落ち合う約束だ。車をとめて海岸沿いの遊歩道を歩いているといつの間にかムーロロが横を歩いていた。今日は観光客みたいなラフなポロシャツを着ている。

いつもギヤングでーすって感じのスーツを着ていたのに、最近は変装に気を使ってるらしい。

「お前目立つなあ」

開口一番そう言われた。ムーロロが呆れるのもしようがない。左の耳が半分食いちぎられたせいでブランクの顔には包帯がぐるぐる巻かれているからだ。

「包帯かなり適当だな。しよーがねー、巻き直してやるよ」

「イルーゾオ先輩がやってくれたんですけどね…」

ムーロロはわざわざガーゼとテープを買ってきて目立たないよう髪で隠せるように手当した。

「ひいー、ひでえー傷…全部落ち着いたら整形外科に行かなくっちゃな」

「千切られたのが下の方で良かったです。上側持ってたならメガネがかけられないですから」

「どうせ伊達だろ?…で、回収したものは?」

「はい。ノートパソコンと携帯電話。あとは彼らの財布ですが、中に入ってた身分証や免許書はすべて名義が違っているので宛になりません。ただ特徴からしてスクアールとティッツァーノかと」

「お前、親衛隊全員把握してるのか?」

「人数と名前くらいは。二人組で動く人間は彼らとチョコラータ、セッコくらいなので」

「ふむ。死体は?」

「さあ…あつちのモルグだと思います」

「こつちから手を回して身元の捜査はやめさせとく。あんま目立つ殺しはやめろよ。今後どうにもならなくなっとき困るぞ」

「はい」

「だが…この二人は誰に言われてお前を殺しに来たんだ?ボスだとしてたらリゾットを殺せてもリカバリーはきついぞ」

「いえ…ボスじゃないと思います。ボスなら僕からチームの情報を絞り出すはずです。二人は僕とイルーゾオを確実にあの場で始末するためにその場にとどまるというリスクをとってました」

ムーロロはふうむと唸ると携帯をいじり始めた。履歴にでている番号を見てブランクは二人を差し向けたのが誰かわかった。

「最後にかけた番号、チョコラータだ」

「ははあ…なるほど。どうやらあいつも100%ボスに従順じゃないみたいだな」

「二人を唆したのがチョコラータだとしても、ドツピオに報告をして

たかもしれませんね」

「そうだな。パソコンの解析はオレに任せろ。お前はオレからの命令を続行しろ」

「わかりました」

「……いいか、ボスを倒す。だがお前の心の裏切りをボスに悟られるなよ。お前はオレだけ信じてろ。そうすればオレはこれからずっと、お前を完璧にコントロールしてやるから」

「はい。僕はあなたがいなければこうやって、自分の好きな服とかメガネとかも選ばせませんでした。本当に感謝してます。そう思えることも、あなたのおかげですから」

「……お前はいい子だな」

ムーロロの言葉にブランクはにこりと微笑み「それが僕の美点です！」とガッツポーズをした。

その晩、ブランクは適当なホテルに泊まった。耳の傷は膿んだりしてないが骨のない部分は完全に千切れている。持つてかれたのが左で良かった。右だと銃を撃つときにかなり支障がある。

スクアールとティツアールを撃ったとき、ソルベとジェラートの時のような後悔や罪悪感はなかった。

僕はまだ大丈夫。最近いろいろ感じるようになったけど、命令には矛盾してない。

「……今日は、一人仕留め損ねた……そこだけ反省！寝るッ！」

ブランクは翌朝起きてからシャワーをあびてチョコラータにやられた傷と耳の包帯を替えた。ここ数日で体が傷だらけだ。口内炎も痛いし腹の青あざはますます不気味な色に変化してもはや青あざと呼べなくなっている。

ボスの娘の情報は昨晚更新されていた。ペリーコロの姿がナポリで目撃されたらしい。なぜわざわざナポリに？という疑問は次に送



られてきたリゾットの短いメッセージでかき消された。

リゾット　：ポルポが自殺した。ペリーコロの部下をムシヨ近くで発見。娘をポルポに預けるつもりだったのかもしれない

リゾット　：ポルポの部下のリストを用意しろ。そのチームの何処かが娘を護衛するはずだ

リゾット　：ポルポが一番信頼してたのはブチャラティってやつだ。まずはそいつを追え。顔を頭に叩き込め

ホルマジオ　：了解。ブチャラティを追う

イルーゾオ　：上に同じく

ブランク　　：はい

ホルマジオ　：ナポリに一番近いのはオレか？

イルーゾオ　：オレはもういる。ブチャラティのシマのレストランに侵入したが姿はない

ブランク　　：ぼくわ　あやしいちーむりーだー　おいます

ブランクは身支度をしてバイクを一台現金で購入した。携帯にイヤフォンを繋ぎ運転中でも通話できるように少し調整する。

とうるるるるるん……

電話がかかってきた。相手はイルーゾオだ。

『ブランク、お前耳寄りな情報欲しくないか』

「昨日片耳なくなつた人間に対する配慮が足りなくないですか？」

『ポルポはよオク見てのとおり強欲だったろ？あいつはムシヨの外に隠し財産拵えてたらしいんだ』

「へー：隠せるほどお金があるなんて羨ましいですね」

『バカ。話の肝は金じゃあねーよ。さっきブチャラティってやつが信頼されてるって言われてただろ？でもいくら信頼されてても、幹部じゃない人間にボスが大事な娘を預けるわけねーだろ』

「じゃあブチャラティ以外の人追つたほうがいいんですか？」

『テメーは黙って話を聞けよ。ブチャラテイってやつはおそらく幹部になるため、その隠し財産を手に入れるはずだ。幹部になってから任せられんのが娘の護衛なんて気の毒だがよー。そんなこと知らずにシメシメ顔で隠し財産を取りに行ってるに違いねえ』

「なるほど。ってどつちにしろブチャラテイを追うことには変わりないじゃあないですか。もー…」

『だあー話を聞けって何度言ったらわかる？ いいか、財産目当てで強欲なバカが何人かブチャラテイ追ってたよ。オレらが追うのはそつちだ』

「ああなるほど。鵜飼の鵜ってやつですね」

『案の定何人かナポリに駆けつけてきてる。そして一人、確信を持って動き出したやつをみつけた』

イルーゾオはマン・イン・ザ・ミラーの鏡の中の世界からネアポリス中を覗いて回ってるんだろうか。徒歩だから大変そうだな。

「場所は？」

『モーロヴエベレッツロだ。急げ、だがとつくの前に高速船に乗っていったらいい。クレジットカードなんて使ってるぜ。こいつ馬鹿なのかもしれん。周囲でブチャラテイたちを見かけたか聞き込みしたがピンゴだ。あいつらはレンタルヨットでカプリ島に向かっている。そこで娘を受け渡すかどうかわかんねーが一度ブチャラテイをマークすれば勝ったも同然だ』

「わかりました。モーロヴエベレッツロなら20分で行きます」

『はあ？ おっせーなオイ…飛ばしてこい』

「じゃー運転に集中するんで切りますよ。いいですねッ」

ブランクは一方的に電話を切ってスピードを上げた。ブチャラテイとか言う気の毒な幹部候補の顔はちゃんと頭に叩き込んだ。

殺す。娘を奪う。娘に「触れる」。

ドナテラの骨の感触を不意に思い出した。今や娘はあの母親の漠然とした不安よりはるかに悪い現実に取り込まれたわけだ。

娘を手に入ればボスは必ず取り戻そうとするはずだ。そしてボスの血液さえ手に入ればメローネのベイビー・フェイスでボスを追

跡できる。そうでなくても彼女の面影から今のボスを推察できるかもしれない。

そしてブランクにしかできないことだが、彼女のことを深く知れば彼女になりきることができる。なりきり、近づき、そして殺すことだつてできるかもしれない。

とにかく彼女さえ捕まえれば逃げ回るのをやめて攻勢に出れるのだ。

港でイルーゾオと合流し、高速船に乗った。船に揺られる一時間の間に事態が進展していたら、ブチャラティたちがすでにカプリ島から立ち去っていたら、その場合島に渡らないホルマジオがブチャラティの手がかりを追うことになる。

「まだいると思います?」

「さあな。あっちも長居はしたくねーだろう。だがあっちはヨットでこっちは高速船だ。なんとかなるだろう」

「あー…着くまで寝ててもいいですか?なんか貧血で気持ち悪くて…」

「はあ?ホントお前…昨日からわがまま放題かよ。新入りつてもう2年前の話だぞ」

「イルーゾオ先輩のほうが結構末っ子気質だと思うんですが…」

「どこがだよ。お前の方が甘やかされてんじゃねーか。普通怪我して助け求められても見捨てるぞ」

「そうなんですか?ホルマジオ先輩は本当に尊敬しちゃうな…」

「はいムカついた。オレは絶対お前が死にかけてても見捨てるからな」

「僕は……」

どうすればいいのかわからなかった。

「あと昨日の、お前のベロにひつついてたとかいうスタンドだが…あれって思ったことと反対のことを言うんだったか」

「え？ああ。そうですね。ほんとに言いたいことと真反対のこと喋っちゃって…でもよくよく考えると使いどころが難しいスタンドですよね」

「お前あのときオレと一緒にお茶したいだの好きだの何だの言ってたが」

「過ぎたことを蒸し返すのはやめませんか？あ、うみねこが飛んでいますね。そろそろ島が見えるかな？」

「クソガキ…」

せんぱい③2001年4月1日

高速船から降りてまず目についたのは人だかりと救急車だった。船着き場でなにか騒ぎがあったらしい。

「なんだ？ありやあ」

「ちよつと聞いてきます」

ブランクは走って人だかりの中に突っ込んでいった。そして何人かに話を聞いてからまた小走りで戻ってくる。

「えー、あつちの小屋の方は発砲事件だそうです。救急車の方はなんか波打ち際に頭撃たれた人がいたらしくて、病院に搬送するのかなんとか」

「来ていきなり手がかりか」

「なんかトラックの運転手が警察の事情聴取をうけてるみたいですよ。どうします？」

「つまりガラの確保は警察と病院がやってくれてるってことだろ。オレたちはまずブチャラテイたちを探す。船着き場にこの写真のヨットがあるか確認しろ」

イルーゾオはレンタルヨット店で撮ったブチャラテイが乗っているのと同型のヨットの写真をブランクに渡した。ブランクはすぐに船着き場にかけていく。

イルーゾオはすでにいないだろうと思いつつ港のレストラン、土産店、カフェ、コンビニエンスストアをぐるっと回った。だが当然ブチャラテイはいない。

「チツ：情報印刷してくるんだった。いちいちパソコンで見るのだるいんだよな」

店外に出るとブランクが大きく手を振った。怪我してるくせに無駄に元気に走っている。

「ヨットは見当たりません！」

「メンバーの誰かの能力で隠してんのかもな。それか港以外の場所に停めたのか？まあいい」

イルーゾオはボート監視小屋の責任者と見られる初老の男性に声

をかけた。ブチャラテイの乗ったヨットと同じ型のヨットの写真を  
見せると、いつもよりかは丁寧な語調で話す。

「忙しいところ悪いが、このヨット見かけなかったか？」

「え？……いえ。見ていませんねえ」

「そうか。もし見かけたらこの番号に電話してくれないか？金だ。  
とつといてくれ」

「え、でも……いいんですかこんなに？まさかさつききの事件と……」

「あんたはヨットを見たら連絡すりゃいいんだよ。見なくてもこの金  
はもらってくれ。頼んだぞ」

「は、はあ……」

島とはいえカプリ島はそれなりに広い。二人で闇雲に駆けずり  
回っても非効率的だ。索敵能力に関して言えば二人共特段優れてい  
るわけでもない。通行人全員に聞き回ればすぐ見つかるかもしれない  
が、そんなことしたら殺しに來ましたと知らせるようなもんだ。

「ブランク、ちよつとこつちこい」

「はい」

「お前はここでさつききの銃撃戦の現場を調べろ。で、まだ乾いてねー  
血液があればそれを採集しろ」

「了解です。先輩は？」

「30分周囲を探す。それ以上はあいつらもどまんねーだろうから  
な」

「わかりました」

ブランクとイルーゾオは二手に別れ、それぞれ痕跡を探した。イ  
ルーゾオもなるべく不自然でないようにあたりをくまなく探した。  
だが財宝を隠してられるような頑丈そうな店や民家、あるいは銀行  
などを回っているとすぐに30分たってしまった。

港に戻るとブランクもがっくりした顔で首を振っていた。

「血は全部乾いちやってました。ベイビー・フェイスには使えないで  
しょうね……トラックの上に残っていた血痕、二人分ですが。片方はブ  
チャラテイのチームの男でしょう。血液型はB型、年齢はおそらく成

人か少し下…男臭い男な感じがしますね」

「なんでそんなにわかるんだよ」

「血痕をベロベロなめればこれくらいわかります」

「お前……一番似てほしくないやつに似ちまったのか？メローネしかやらねえよそんなこと」

「あははは！なーんて、冗談ですよ。目撃したトラックの運転手から聞いたんです」

「テメーこんな時にふざけてんじやねエーツ！」

イルーゾオはブランクの右頬をぶん殴った。ブランクはチョコラータにやられた傷がまた開くのを感じた。ブランクが頬をさすりながら唸っているとイルーゾオの携帯が鳴った。知らない番号だが局番から見るにさっきのボート小屋のおやじだ。

「ヨットがいたのか？」

『あ、いえ…その、先程の写真の船がですね、あつたんですが…妙なんですよ！』

「は？結論だけ言え」

『港の栈橋のすぐ下に、沈んでるんです！バラバラになって』

「何…？すぐ行く、案内しろ。金は払う。……おいブランク！急いでさっきの港だ」

「はあ…」

イルーゾオの姿を見つけると、ボート監視小屋の職員は大慌てで二人を栈橋まで案内した。人気の少ないボロっちい栈橋の下に、確かに妙な影がある。よく目を凝らすと、たしかに写真のものと同型のヨットだった。

「ブチャラティの野郎…。船を破壊しやがったか。もう別の手段で島を出たな」

「うわー…すごい。船をバラバラにぶっ壊せるスタンドなんて…やだなあ。会いたくないっすね」

「この断面、やたら真っ直ぐだな。パワーにまかせてぶっ壊したって感じじゃない」

「一体どうしてこんなことになったんですかねえ？これ、事故ってこ

とになるんですかねえ？さつき運ばれてった人のものなんですか？」  
職員も不思議そうにしていた。ふたりは顔を見合わせ、追加で金を払って口止めした。

イルーゾオは一度現状をチャットで報告してから撃たれた男が搬送された病院へ向かった。ERにいるかと思いきや小さな病院なので普通のオペ室に寝かせられていた。そばに控えていた医師と看護師は締め落としてから、男の顔を確認する。

「ああ、高速船で乗ってった方だな。ローマ地区のやつだ」

「頭にガッツリ弾入っちゃってるのに生きてる。すげー…」

「聞き取りは無理か…無駄足だったな」

「いや、ちよつととりあえず触らせてください」

ブランクはピクリとも動かない、いろんな管に繋がれている男の手に触れ、寝てるのをいいことに全身をベタベタ触り始めた。

「うわッ…やっぱりお前…」

「いや…意識がない人にはこうするしかないじゃないですか。カルテとか持ち物とかに名前書いてないですか？」

イルーゾオは倒れてる医者の手元の書類を拾い上げてめくった。

「名前はあとでパソコンで確認できる。…お、こいつのじゃないけどどうやらもう一人救急車で担ぎ込まれてるやつがいるみたいだ」

「そつちも行きましようか」

「そいつのスタンド能力はコピーできたか？」

「ええ。すげー強いですよ。でも脳みそ撃たれちやな…意思疎通ができませんいのでこれ以上は…」

「よし。別を当たろう。こつちは名乗るくらいはできる見てーだな。ズツケエロって名だ」

ズツケエロの方は普通の病室に入れられていた。ドアを開けると4つあるベットのうち一番奥に男が寝ていた。ひどく焦燥した様子で寝込んでおり目に包帯が巻かれていた。

「マリオ・ズツケエロか？」

その言葉にズツケエロの肩がはねた。

「な、なんだ。誰だ？」



「組織のものだ。誰にやられた？目が見えないのか？」

「あ、ああ。なんで組織のやつがここにいるんだ？」

ブランクはさり気なくズツケエロの手をとり看護師がやるみたい  
に血管を探すような仕草をして触れた。イルーゾオはわざとらしく  
親しげにズツケエロに話しかける。

「そりやお前らと同じ理由だ。その様子じゃポルポの隠し財産はもう  
ブチャラティたちの手に渡っちまったようだな」

「お前ら？つてことはサーレーは生きてるのか？」

「ああ。重体だがな。…で、お前はブチャラティたちの能力を見ただ  
ろ？怪我してるところ悪いがちよつと教えてくんねーか」

「あいつらを追っても無駄だ。もう財宝はねーだろうし…チーム6人  
と1人じゃ勝ち目は薄いぜ」

イルーゾオは早くもイライラしたらしく同情気味の声色を捨て、  
いつもの調子で喋りだした。ブランクにはズツケエロの脈拍が上  
がってくのがわかった。

「グダグダ言つてんじゃねーよ。いいから教えろ。わかってる情報だ  
け端的に言え」

「な、なんだ…？お前ブチャラティに恨みでもあるのかよ？」

「ねーよ。ただこっちは急いでいるんだ。早く言わねーと優しく無く  
なっちまうかもな」

「お前、組織のもんじゃねーだろ」

「オレの言葉がわかんねーのか？」

一気に空気が険悪な張り詰めたものになった。イルーゾオはズツ  
ケエロに繋がれている点滴を引き抜き目に突き刺した。

「イギツ…！」

「今日にぶっ刺したのは、どーせ使えねー目に対して期待すんのをや  
めさせたかったからだ。わかるか。また見えるかもつていう希望は  
よー、あんまりに残酷だからな。…とつとブチャラティたちの能力  
を言え。オレがまだ優しくいれるうちにな」

「ツ…：うう！クソ！あんな噂信じてここに来るんじゃなかったぜ！  
言うよ、言うとも…！」

イルーゾオ　：ブチャラテイチームの能力がわかった

ブチャラテイ　：ジツパーを出現させ生物、物体問わず切開できる  
アバッキオ　：過去にあった出来事をスタンドでリプレイする

ジオルノ？　：新入り？リストにない。ものを生き物に変えた

他のメンバーについては不明。ズツケエロ、サーレー両名のスタンドはブランクがコピーした。なおサーレーの方は拳銃使いにやられている。(グイード・ミスタか?) 現場から血液は採取できず。

やつらは本島へ戻った模様。オレらも戻る

リゾット　：港近辺での捜索をつづけよ。アシの確保を急ぐはずだ

イルーゾオ　：わかった

イルーゾオはネット回線のつながったホテルを取りチームと情報共有した。ギアツチョはペリーコロの部下を一人捕まえ尋問したが何も情報が出なかつたらしい。

リゾットはブチャラテイ、ボス間での通信がないか監視しているらしいがボスが果たして直接指令をするかどうか。とにかくほとんど謎だらけだった。

「…でも、それにしてもだ。人探しはクソつまらんな」

「ですね。僕も先輩も罠っていうか、先に待ち構えて戦うタイプですしね」

「プロシユートたちもネアポリス近辺に着いたらしい。途中襲われたらしいが、ネアポリス地区の夢見るチンピラで親衛隊じゃなかったらしいぞ」

「は〜それは相手が気の毒に…プロシユート兄貴の倒し方なんて不意打ちくらいしか思いつかないな」

「オレのマン・イン・ザ・ミラーなら勝てる。スタンド能力なんて関係ないからな」

「あと勝てるならギアツチョ先輩ですかね？」

「ああ。それか不老不死の究極生命体とかだな」

「それか吸血鬼？」

聞き込みをするにしても深夜では誰も起きてない。朝早く起きるため二人はとつと寝た。起きてすぐに港のそばのレンタカー店をまわり、盗難車がないか聞き込んだ。存外早くに盗難被害にあった市民を見つけられ、ナンバーを聞き出した。

とうるるるるるん……

「はい、ブランクです」

『よお。ナランチャ見つけたぜ』

「ナランチャ……ああ。ちっちゃい子ですね。どこです？娘はいます？」

『ちよつと頭使えば港から一晩でいける町なんて限られてるだろーが。お前ら悠長にしてるからダメなんだよ。娘はいない。ナランチャ一人だ。今からとつ捕まえて尋問する』

「大丈夫ですか？」

「ホルマジオだろ。代われ」

そこでイルーゾオがブランクの手から電話をもぎ取った。

「……ああ。はあ？そんな遠く？チツ……何だったんだよこの朝の苦労はよー……。……わかった」

イルーゾオは電話を着るとまっすぐ道を進んで、人通りの少ない路地に止まってるワゴンの窓を割り鮮やかな手さばきでにエンジンを繋いだ。

「とつとと乗れ。行くぞ」

「なんか僕たち間抜けですな……」

「ああ。でも誰かがやらねえとな……貧乏くじだぜ。お前疫病神かなんかなんじやあねーのか。親衛隊にも追っかけられてるしよオ」

「親衛隊は撃破できたしいいじゃないですか。超前進！すごいですよね？」

「何人いるかもわかんねーから安心はできないだろ。そもそもヒットマンってのはしつぽ掴まれた時点で失格なんだが」

「僕の本業運転手だったんで…」

「じゃあ運転するか？おい」

「いえ。先輩にお任せします」

イルーゾオの運転はビュンビュン他の車を追い越していく。彼の運転は荒っぽい。2年前車に乗せてもらったことをふと思い出している、イルーゾオが口を開いた。

「ホルマジオがやられることは…まああるか。やられてた場合お前はあいつの死体からこっちにつながる物品を回収して燃やせ」

「…やられてる前提で話すのやめましょうよ」

「はあ？だからテメーは甘ったれなんだって、オレは何回も何回も何ッ回も言ってるよな？なあ。裏切ったって事はいつ誰が死んでもおかしくねえ。それ前提で動くんだよ」

「まあデッドオアアライブなのはわかってます…けど…」

「オレはお前が死のうがホルマジオが死のうがボスの娘を奪還する。そしてボスを倒し、麻薬ルートを奪い、組織を乗っ取る！それが出来なきゃ殺されるんだよ。はじめからあとはねーんだ」

ブランクにはまだあとがある。暗殺チームの人間を殺してボスの前に持っていけば自分の裏切りはなかったことになる。あとはチョコラータに殺されない限りはなんとでもなる。

ブランクははじめから見抜いていた。ムーロロのゲームはボスを倒すことが最終目標なんじゃない。

危険な賭けをして生き残ること。生き残って、なんてことはないゲームだったな！と世界を小馬鹿にしてやるのが「勝利」なのだ。

でもこの世界は、ゲームボードの上の駒である僕たちには違う。

「僕はお金も地位も興味ないな」

イルーゾオははあ？という目でブランクを睨んだ。

「…先輩たちには悪いですが、この二年間は楽しかったし、こういう毎日がずーっと終わらなく続くのも、そんなに絶望的じゃない。そうやって時間を茫漠とやり過ぐすこともできるのに、どうして怒るんですか？」

「ハッ！20も超えてないガキがつまんねえ人生観語ってんじゃないやねえ

よ」

「う…すみません」

「マンモーニ。どんだけナメた人生送ってたんだ？テメーが毎日をやり過ぎせねえ程に怒ったことねーのは、テメーがボケっと生きてるからだろ。誇りとかクセーこと言うつもりはないが、そういう生きる支柱みてーなのが傷つけられた時に怒るんだよ。それがわかんねーってことはてめーは今まで誇りなんて感じたことなかったってことだ」

「…誇りですか」

「ねえなら探せ、空っぽ人間。珍しく自分語りしたと思ったらクソネガティブだったんだなお前」

「…なんか恥ずかしくなってきました。はじめからやり直しても？」

「恥ずかしいってなんだよ…巻き添えでこっちもそういう感じになるじゃねーか。クソツッ！」

「ウオツ！アクセル踏み過ぎでは」

「飛ばさなきゃ逃がすかもしれないねーからなツ」

とうるるるるるん……

「はい、ブランクです」

『ブランク、オレだ。リゾットだ』

「あ、はい。…イルーゾオ先輩、リゾットさんから」

「スピーカーフォンにしろ」

「はい。聞こえますか」

『移動中か。ボスからブチャラティたちに指令が行った。いくつかパソコンを中継している。オレは中継点を当たる。お前たちはブチャラティたちが向かう場所へ行け』

「わかった。どこだ？」

『ポンペイだ。細かくは解析できてない』

「わかった、向かうぜ」

『何かを取りに行くよう指示されたようだ。それを回収しろ』

「おう」

イルーゾオは電話を切ってしばらく行くと、ガソリンスタンドで突

然車を止め、ブランクを蹴り出した。

「はあっ?! イツテエー! 意味わからん」

「お前はホルマジオんどこへいけ」

「な…リゾットはお前たちって」

「現場の判断優先だ。それにポンペイじやお前の狙撃はすぐ見破られる。なんもねー平地だしな。他のスタンドも大したもん持ってねーだろ」

「ホルマジオ先輩ならほっといて大丈夫ですよ!」

「あいつが無事ならとづくに連絡が来るだろ。それがねーのはそういうことだ」

「今一番やべーのはボスの娘を追っかけながら親衛隊だとかオレたちの命を狙うバカの邪魔が入ることだ。お前はホルマジオの尻拭いしてこい」

「でも…」

イルーゾオはそれ以上聞かずに車を発進させた。ブランクは自分のパソコンを開きホルマジオから連絡がないか確かめた。何も無い。

ホルマジオのいる街までたった5キロだ。ブランクはガソリンスタンド店員が乗ってきたらしいバイクをちよるまかしヤケクソで走り出した。

街についてすぐ、最悪の想定が現実に変わったことを悟った。消防車のランプが街の通りを照らしていて、規制線がはられていた。

ブランクはそれを無視して一番焼け跡が激しい場所めがけて進んだ。

制止してくる警官を突き飛ばし、布をかぶった人一人分くらいの塊にかけていく。ガソリンと焦げの匂いがする。かなりの火勢で燃えたらしい。

布を少しめくると半分焼け焦げた見慣れた服の袖が見えた。

「…クソッ!」

「君…その人の身内か?」

「うるっせんだよ! はなしかけんじやあねえ!!」

ブランクは周囲を見渡した。破壊され黒焦げになった車には弾を撃ち込まれたような跡がある。地面にもいくつか、大ききの異なる穴だ。

「マシンガンか…？大ききが違うのは…：…そうか。先輩のリトル・フイートで縮んだのか」

痕跡を見つげるために地面に這いつくばるブランクを警官は不気味がつて遠巻きにしている。止めるか止めないか、地方ののほほんとした警官には決断できないのだろう。

「あらかた焼けてる…ナランチャの私物でもあればいいんだけど…」  
そういうものはなさそうだった。あってもきつと焼けてしまっている。焼けていないとしたら…

ブランクは立上がり、またホルマジオの遺体へ歩み寄り、布を引つ剥がした。

「ちよつと…ッ！」

声を上げた警官を今度はぶん殴った。

「だいぶ焼けてるが…死因はやっぱ弾…かな。どれ…」

ブランクは息を止めてホルマジオの服を弄った。割れて壊れてるが携帯と、部屋の鍵を回収した。財布も半分焼けてて、こちらが処分するまでもないほど損傷している。鍵だけ回収し服をもとに戻す。

「ん…？」

そこでホルマジオの口の中に何か、紙のようなものが入ってるのを見つけた。ブランクは数秒だけ悩み、皮膚が焼けて肉が剥き出しになった口をこじ開けた。歯だけがやたらとキラキラ真つ白く輝いていてなんだか冗談みたいだ。

喉の方まで突っ込まれたぐしゃぐしゃの紙を引っ張り出し、口を元どおり閉じ、慎重に広げる。

「これ…は…：…地図か？」

半分焼けてるが間違いなく地図だった。ペンで印がつけてある。

「先輩…」

ブランクは立上がり、遺体にまた布をかけた。

そして怒り狂って突っ込んできた警官をもういちどぶん殴り、バイ

クにまたがる。

とうるるるるるん……

『ブランクか?』

「はい。リゾットさん、娘が今いる場所を突き止めました! あ、ホルマジオ先輩がなんですけど……っていうかホルマジオ先輩殺されました」  
『そうか……』

「えと、先輩が地図を入手しました。僕はそこに向かいます。街から東南40キロのぶどう畑農家です」

『わかった。……イルーゾオはポンペイに着いたそうだ。お前も用心しろ。娘を奪還するのが不可能な場合決して目標を見失うな。今メローネがそっちへ向かってる』

「わかりました」

『無理はするな。お前の戦い方はスタンド使い複数相手に立ち回れるものではない』

「わかってます。わかってますが……」

『絶対に見失うな』

ブランクはフルスロットルで畑を駆け抜ける。死体のことなど考えないようにして。

「ふうん……ティッツアーノとスクアーロ、舐めてかかったようだな」

ホルマジオが潜伏していた小さな街、その死体安置所でチョコラータはつぶやく。死体安置所には生きてる人間が一人もいないから自分のスタンドはほとんど役に立たない。だが少なくとも居心地は良い。

蛍光灯が切れ掛かってるし冷房も切れかけてる寝心地の悪そうな死体安置所。二人もこんな場所で徐々に腐っていくハメになるとは思ってもなかっただろう。

「で、お前はこの二人の死体を回収してどこに持ってくつもりだった



んだ？」

チヨコラータは上半身だけになった黒服の男を蹴り飛ばした。返事もうめき声もなく妙に思い、足でそれを裏返す。すると舌を噛み切って自殺していた。

「まったく。この根性のなさ……誰かに頼まれた下つ端にしても構成員の劣化はここ二年でずいぶん進んでしまったようだな……さて」

チヨコラータは死体をそのままにして出ていく。青空は高く、風は爽やかだ。そんなの特にどうってことも思わないが……

とうるるるるるるん……

「チヨコラータ」

『もしもし。ドツピオです。今どこにいるんですか？』

『どこだっていい。仕事なら言われたところに向かう』

『今、何をしてるんですか？』

「何だっていいだろ」

『……あなたがしてる事はボスへの背信行為とみられても仕方がないですよ』

「そうか？心外だな。ブランクよりは忠実だよ」

『ブランク？どうして急に彼の名を』

「あのガキは裏切ってる。リゾットを殺そうともせず他のメンバーといきいき戦ってるようだよ」

『なぜあなたがそれを？』

「わたしは彼とよく会っていたからね」

『なぜそれをぼくに言わなかったんですか』

「言う必要がないからだよ。……ドツピオ、なぜブランクと接触するのせずと避けてたんだ？あいつ、明らかに二年前と変わったが」

『……………』

チヨコラータは内心でこの反応に満足していた。ドツピオがブランクと会うのを拒む理由がわかりかけてきた。

「あいつなんかには仕事を任せるのはやめたほうがいいと思う。どうだろう。暗殺チームはわたしが殺すというのは」

『だめだ。チヨコラータ、あんたの能力は封印しろとボスから指示さ

『れてるはずだ!』

「じゃあボスに問い合わせておいてくれ。…わたしの勘だとすぐに  
オツケーするさ。ボスならね」

『……………わかった。また、連絡する』

## マンハッタン・トランスファーVSセックス・ピストルズ

ぶどう畑を吹き抜ける爽やかな風を感じながら、グイード・ミスタは空を流れる雲を見ていた。穏やかで気持ちのいい天気だ。状況が状況でなかったら今日は日が暮れるまでのんびりしていたかったが、そうも行かない。

ミスタは伸びをした。車のそばで立ちっぱなしであたりを警戒しているのだが、こう天気がいいとどうも眠くなる。二階の窓からトリッシュも空を眺めてるのを発見した。

ボスの娘っただけで危険に巻き込まれて気の毒だが、もしかしてこれからすつげー金持ちになれるかもしれないわけだし、ちよつと羨ましい。

アバツキオ、フーゴ、ジヨルノがボスからの司令に従いポンペイに出てる間、ミスタとナランチャが周囲を警戒している。

ナランチャは消耗していたがアイツのスタンドが一番索敵に優れているので踏ん張ってもらった。

ナランチャを襲ったという暗殺チームのやつはその場で死んだし仲間とも連絡をとってないとは言っていたが、油断はならない。

「ふうー……ここでとれたワイン、どんな味がするんだろーな」

なんて独り言をつぶやいてまた空を見た。

ふわ、と綿毛のようなものまで飛んでいる。春の風だ。

「…綿毛？」

違った。それは綿毛なんかじゃない。妙な形をした謎の浮遊物だ。

「ッー」

ミスタは銃を抜き二発即座に撃った。音を聞きつけブチャラティが飛び出してくる。

「どうしたー！ミスタ」

「な……あたんねーだど?!」

「あれは……スタンドか？」

ブチャラテイもすぐふわふわ浮いてる妙なものに気づき、目を細めた。スタンドはここから5メートルくらい上空でふわふわ浮いているだけだ。

「トリツシユ隠れるんだ！下へ降りてこい！ナランチャツ！あたりに敵は?!」

「えっ…そんなのいないぜブチャラテイ。人間の呼吸の点なんて、少なくともここ30メートル付近にはない!」

「範囲を広げてくまなく探せ！敵スタンドの姿が見えた！これは…遠隔操作型、なのか？なんもしてこないようだが…」

「こいつ、かなり精密に動いてるぜ。オレの弾を二発避けやがった」

「本体はナランチャも見つけられてない、ここから100メートルは離れた場所にいるはずだ。弾丸が見切れるということはスピードもあるかもしれない。気をつけろ!」

「チツ…ナランチャ!あのふわふわ浮いてんの撃つてくれ」

ミスタの怒鳴り声に家の裏口からドタドタとナランチャが走ってきた。

「どれだよ！スタンドじゃ見なきゃわかんねーじゃねーか!」

「こっち来いって！玄関の方に浮いてんだよ!」

「どれ…あ、あれか」

ナランチャが。だがその瞬間

「あ」

ナランチャの左腕が爆ぜた。肘の少し上あたりで皮膚と筋肉が弾け、血が吹き出した。骨が露出し血がどくどくと流れ出し、ナランチャは目をまんまるにしてぶらんと垂れ下がる前腕を見ていた。

そしてそれに遅れて銃声が轟いた。

「攻撃だ！物陰に隠れろ!」

ミスタが叫び、ブチャラテイがジッパーで無理やり傷をつなげたナランチャを家の中にぶん投げた。

その間にもう一発、ブチャラテイのふくらはぎを掠め肉を大きく削いだ。

ミスタは転がり、玄関をくぐってドアを閉めた。

そして連続して4発、銃声と何かが破裂するバスツと言う音がした。

「おそらくガレージの車を撃ったな…オレたちの車じゃないが、いざってときのアシがなくなるのは困る…」

さらにもう一発銃声がして、ドアの止め金が破壊された。軋む音を立ててドアがゆっくり開く。

「お、オレの腕ツ…！どーなってんだよ！ブチャラテイ…！」

「クソ、ジッパで繋いではいるが吹っ飛んじまった肉が多いな。ミスタ、なにか縛るものを」

「チツ…この威力は軍用ライフルか？スタンドじゃあねえよな…」

「ああ。ナランチャを撃つたのはスナイパーだな…。この家の玄関から真正面、手前の丘の上の森だろう。だがガレージは反対側だ。どうやって狙撃でパンクさせた？」

「妙なやつだぜ。だがライフルとは困ったな…襲撃にしちやちと正攻法すぎるぜ」

「ああ。オレのステイツキー・フィンガーズでもあの速度の弾を見切って止めるのは不可能だ。だがあつちが動く気がないのならこの家で耐えてジョルノたちの帰りを待てば…」

きいー…

と、軋んで開いたドアの向こうから、例の浮いていたスタンドがふわりと侵入した。

「ツ…きたぜ…」

「…ナランチャ、おい。エアロスミスは出せるか？」

「う、うう…うん」

「あれを撃て。…見えるか？」

「ああ。わかった、チクシヨーツ！ブチャラテイ、超いてえーよオ」

「すまない。踏ん張ってくれ」

ナランチャのエアロスミスが機銃でスタンドを狙った。

「エアロスミスッ！」

だがエアロスミスの掃射さえも、まるで風に煽られとんでいく羽のようにキリキリ舞いして避けていく。

そして掃射が終わった途端また銃声がした。

「うっ！」

ナランチャのスタンドを弾丸が貫いた。だが実弾はスタンドに傷をつけられない。

「今の軌道…ドアの外からじゃ当たるわけがない。あのスタンドが射撃を中継しているのか？」

銃声。

そしてドアの丁番のあたりに大穴が空き、がたんと音を立てて入り口から中が完全に丸見えになった。

「わざわざドアを開けたか。ミスタ、もう一発撃つてくれ」

「おう！」

ミスタはまた一発撃つ。スタンドは風に吹かれるように弾をかわし、また同じ位置に漂った。

「違う、ミスタ。このスタンドは操作で避けてるんじゃない。ようやく確信が持てた。やつはおそらく気流を感知してる」

「なんでわかる？」

「撃たれた直後、あのスタンドは螺旋状に回転して舞い上がった。弾丸はジャイロ回転している。その風を読んだんじゃないか」

だとしたらナランチャの掃射の気流も読んで避けたというのか。ならばドアを開けたのも空気の出口を一箇所作り、気流をより探知しやすくするためか。

「トリツシュの安全が最優先だ。キッチンから迂回して階段に行き、彼女を保護する」

「あ、ああ」

ミスタは丘の向こうに見える木々を見た。あの影になってるところの何処かに狙撃手がいる。新たな追手が…

「チツ…便利なスタンドだな……」

ブランクはナランチャの腕を即座に？げたブチャラテイのスタンドを見てイライラしながら呟いた。

「殺すなら……ドタマに撃たなきゃだめか……」

三人が物陰に隠れたのを見て次弾を装填し、まずはマンハッタン・トランスファアの射撃中継を利用し車を潰した。

そして次は中継なしにドアに狙いを定めて撃った。ドアが壊れ、マンハッタン・トランスファアの入れる隙間が開く。

ナランチャのスタンドを撃つてみたがエアロスミスに実弾は効かないためブランクには排除することはできない。

「だがこれでナランチャは相当呼吸が乱れた。彼の呼吸は目印になる。怪我人っていうのは一番使える足かせだな」

ブランクはもう一発ドアに撃ち込み、玄関の風通しをよくしてやった。

ブランクがいるのはブチャラテイの読み通り、家の真正面およそ200メートル。なだらかなぶどう畑の丘の上にある森だった。

ブランクはボルトを引き次弾を装填する。

勝機はある。

リゾットは追跡するだけで十分だとか言ってたがそんなわけがない。あいつらはホルマジオを殺した。

そんな奴らが分断されてる好機に付け込まないなんて間抜けすぎる。

車の轍から家を確認し、窓から空を眺める女の子を見つけたときにブランクはすぐ決断した。

イルーゾオ先輩がポンペイでやりあってるうちにブランクが残り三人を片付ける。イルーゾオが3、ブランクが3。娘を確保する栄光はブランクのものになってしまいが、半数わたせば先輩の顔も立てられていいじゃないか。

何より、ホルマジオが残した手がかりを無駄にしなくなかった。

気流が僅かに変化した。ブランクは目を閉じスタンド越しに風を感じる。ブランクの読みの精度は師匠より遥かに劣る。だが家の中の気流ならばいくらか読みやすい。

ブランクは引き金を引いた。マンハッタン・トランスファアの中継により弾が着弾する。

「……ん？誰も…当たってないか？…微風。微風だ。腰くらいの高さから…風が出てるのか？いや。下向き…下向きの水流。水道を流した？なんのために…」

ブランクは目を凝らす。精度不足を目で補おうとするが流石にうかつに姿は見せない。だが目を開けたら開けたで気流以外の余計な感覚がノイズになる。

闇雲に一発撃つか？だが盲打ちしたらこちらの精度それ自体が良くないことが悟られてしまう。

「……………階段の上…クソ。上がられたか」

マンハッタン・トランスファアがまたふわりと動いた。

「ブチャラティ！スタンドが反応したぞ！」

ミスタが怒鳴った。

さきほどキツチンから走り出したときに撃たれた弾丸はブチャラティの頬をかすめただけだった。ブチャラティは上に向かおうとするとき、キツチンにあるガス栓をすべて開け、排水管を破壊した。

ダメ元だったが狙い通り気流の流れが読みにくくなっているらしい。

銃声が轟いた。

「ウオツ…！」

またもライフル弾がスタンドを中継して飛んできた。だがガスのおかげで狙いが逸れている。弾丸はブチャラティの頭から五センチほど離れたところを通過して壁を破壊した。

「トリッシュ、部屋から出るな！毛布が何かをかぶれ！今行く…！」

「チツ…」

ナランチャがまたエアロスミスでマンハッタン・トランスファアへ



掃射する。弾もスタンドとはいえ動くものには必ず気流が発生する。マンハッタン・トランスファーにとってそれを避けるのは造作もない。

ブランクはブチャラティを狙うのをやめる。娘に誤射するリスクは取れない。

「先に下の二人だな」

ボルトを引き薬莖を排出した。次のために弾をつまむと、指がぶるぶる震えてるのがわかった。

「……」

次弾装填。スコープを覗き、同時に気流を感じる。ナランチャの呼吸はすぐに見つかる。もう一つの呼吸はおそらくミスタというガンマンだ。

「怪我人は…半殺しで囷にする。狩りの鉄則だよ、グイード・ミスタ…ッ」

捉えた。妙な気流を無視して荒い呼吸とすぐそばの呼吸に集中すれば絶対に当たる。

ブランクは引き金を引いた。

そしてマンハッタン・トランスファーがミスタとブランクの射線をつないだそのほとんど同時に、ナランチャはエアロスミスでキッチン天井を撃ちまくった。

「あ…ッ?!」

ブランクは引き金を引いたまま身を硬直させた。

「が…あアア…クソッ…!…!あいつらッ」

ぶどう畑の向こうに見えるブチャラティたちの潜伏する家。その家の一階は今火に包まれていた。

「キッチンがガス爆発させたのか…ッ!マンハッタン・トランスファーごと!つーか自分ごと!ば、馬鹿じゃねえの?!」

ブランクは身体を起こし上着を剥ぎ取るように脱いだ。左上半身にスタンドからフィードバックされた火傷ができています。

マンハッタン・トランスファーは爆発の寸前、空気の収縮を探知し反射的に空いてるドアから逃げようとしたはずだ。だからガスで満ちた天井付近にいたにもかかわらずこの程度の怪我ですんでいる。だが4つある羽のうち一つがやられた。もう気流を正確に読むことはできない。

「クソッ……」

ブランクは地面から起き上がりスコープで家の様子を見た。

玄関から男が走って出てくる。帽子とセーターがぼうぼう燃えているのに全速力だ。グイード・ミスタ、拳銃使い。

「正面突破だと……舐めんな！」

ブランクは立ったまま次弾装填し引き金を引く。だが

「ッ……」

痛みだ。痛みで筋肉が引きつって狙いが逸れた。

なんとということだ。師匠の金言をここに来て忘れるとは……！

弾はミスタの脇の下を抜けて地面に当たる。土煙を巻き上げ、ミスタは咆哮してこちらに銃口を向けた。そして1発撃った。

だがブランクとミスタの距離はおおよそ100メートル。拳銃の弾丸は100メートルじゃあまともに標的に当たりはしない。

ブランクはかまわずすぐ次弾を装填し、スコープを覗く。

「コイツ油断シタゼー！」

「100メートルクライオレタチノチームワークデ余裕デ届クツテーノニヨー！」

「こっ……これは……」

声だ。変なピーピー高い声が聞こえた。

その瞬間、スコープが、目の前が真っ暗になった。そして頭にもものすごい衝撃が走り、身体が後ろにのけぞった。

「……やったか」

「完璧ダゼ〜ミスタ」

「右目にシツカリブチコンデヤツタ！」

「ヤロー間拔ケツラシテタゼエー！」

「さすがだぜピストルズ！」

「スナイパーナンテオレタチノテキジヤナイゼー！イエーイ」

ミスタはまだ燃えてる左肩をパタパタ叩いて火を消した。

「クソツ…黒焦げじゃあねえか。昨日の傷も満足に治ってねーっていうのによぉ…」

キッチンを爆発させるといふのはナランチャの案だった。ついでさつきも街中に火をつけまくったヤツらしいイカれた発想だが、それに乗るミスタも大概なもしれない。

ガスは普通の空気と重さが違い、上に貯まる。そこで上に行くブチャラテイへの狙いを反らせ、当たらないからと狙いを変えたスタンドごと爆発させる。

「ナランチャも実は賢いのかもしんねーな」

だが結果的にもくろみは見事成功だ。トリツシユもまあ、怪我はしているかもしれないがブチャラテイはなんとか二階についたようだし大丈夫だろう。

死体を確認しに行こうとすると、ブチャラテイが二階の窓から叫んだ。

「ミスタ、すぐにここから出るぞ！敵は一人とは限らん！」

「わかった！」

ミスタは森を一瞥し踵を返した。ピストルズが右目に打ち込んだというのなら生きちやいないだろう。

トリツシユはかわいそうに、怯えていた。だがどつちかというと焦げ焦げのミスタとナランチャに対して怯えているように見えた。

「烟を抜けて車道沿いに走るぞ。ジョルノたちももう戻るはずだ。合流して即ここから逃げるッ！いいな」

メローネはバイクから降りてぶどう畑まで燃え移った火事を眺めた。

「派手にやったな…」

そしてバイクを降りて玄関付近の血溜まりから血液を採集した。ついでに指でその血をすくいベロリとなめた。

「A B型、血が薄い。怪我をして消耗してるな。…という事はホルマジオと戦ったやつ…ナランチャの血か。よーしよしよし…」

ぶっ壊されたドアから家の中を覗いてみた。かなり火が回ってて血を採取するのは無理そうだった。

「だがこれでジュニアが生産可能になったな。勝ったも同然だ」

メローネは立ち上がり、最後にブランクと連絡したときに聞いた『家のそばの丘の上の森』を見た。

逃して、現場は火事で、連絡なしってことは…

メローネは薄々だめだと思いつつも森に向かった。その森の入り口、ブランクが仰向けでぶっ倒れていた。スナイパーライフルが投げ出され割れたスコープのガラス片が飛び散っている。

「おいおい、ライフルで拳銃使いに負けたのか？ブランク」

メローネは呆れながら死体から携帯を取ろうと服を弄った。胸ポケットに手をつ突っ込んだとき、ブランクの手がメローネの手首をガシツと掴んだ。

「違う…スタンド勝負で負けたんだ」

「うわアあーッ?!」

メローネは思わず悲鳴を上げて尻もちついてしまった。ブランクは右目から大量に出血しているが生きていた。

「お、お前は…生きてるなら早く言え！」

「今…起きた…」

「てつきり脳天を撃ち抜かれたのかと思ったが…それ、どうなってるんだ？目は潰れてるのか？」

ブランクは右目に恐る恐る手を当て、傷を確認した。弾丸は眼球を潰している。だが、そこで完全に固定されている。

カプリ島でコピーしたサーレーという男のスタンド、クラフトワークだ。真正面から撃たれ、弾丸が眼窩に侵入した時にとっさに固定できていたらしい。

マンハッタン・トランスファーが焼かれ、一度能力を解除したのが幸運だった。

幸運…。

「右目は潰れましたが…それ以外は元気です。…あ、なんか火傷がすげー痛くなってきた…」

「はあ…生きてるならとつとと行くぞ。ナランチヤの血液を採取した。母親を見つけて産ませなければ」

「……………すげー…気分悪い。痛いし…」

ブランクは上体だけ起こし頭を抱えて蹲った。メローネはため息を付き背を向けてブランクに告げた。

「…落ち込みついでに教えるが、イルーゾオも殺られた。ここでポーツとはしてられないんだよ、来い」

ブランクはおもむろに起き上がり、自分の右目におもむろに人差し指と中指を突っ込んだ。

「いッ……………」

ブランクの声に振り向いたメローネはそれを見て顔を引きつらせた。

ブランクは目に突っ込んだ指を数回掻き回し、抜きだした。血まみれの二本の指の間には弾丸が挟まっていた。

ブランクはそれを茂みに投げ捨て、フラフラしながら立ち上がる。その形相は血塗れなものも相まってこの世のものじゃないみたいだった。

「…………早く来いよ」

メローネはその姿を見てからすぐに背を向け、ぶどう畑の向こう側に停めであるバイクの方へ歩いていってしまう。

ブランクは地面に落ちたライフルを拾い上げ、背中に背負った。バックパックも担いでふらふらした足取りで畑を抜けた。

悔しい。

悔しいだけじゃない。なんか暴れたいほどの気持ち胸の上側に

たまってくるし、喉がしまったみたいに苦しくなるし、潰れた眼球から血となにかよくわからない液体がぼたぼた流れてくるのが気持ち悪い。

ムーロロの「とりあえず生き残れ」という命令は結果的に守れたが、自分はそのとき…ナランチャを撃つたとき、そんなものはどうでもいいと思っていた。

僕は僕のために引き金を引いていた。

僕は…怒りを感じているのか。

ブランクは血を拭ってメローネのバイクの後ろに跨った。

「ほら、とりあえず止血しとけ。オレの服に血がつくからな」

「どうも。…：うわ、これ先輩のマスクじゃないですか。パールツクになるじゃないですか。キツイな…」

「お前だんだん無礼になっていつてるよなあ…」

そしてメローネはスタンドを蹴り、エンジンをかけた。

## ベイビー・フェイス：ファイレンツエ行き特急

ブランクはメローネの背中にもたれ眠り込んでいた。だがけたたましい着信音とメローネの呼び声で目を覚ました。

「おい。おいブランク。電話出てくれないか」

「あ…はい……」

携帯電話の着信音が聞こえる。メローネは運転中で出られないためブランクはメローネの体を弄り携帯を探した。

「バツ：お前！セクハラだぞ。携帯つつたら普通ケツポケットか胸ポケットだろ」

「だって先輩の服普通じゃないから…あ、ありました。出ちやっても？」

「頼む」

ブランクはスピーカーフォンにしてから電話に出る。

「はい。…もしもし、ブランクです」

『プロシユートだ。ブランク、お前よく生きてたな』

「プロシユート兄貴い…！」

『今ブチャラティたちが乗り込んだと思われる電車に乗った。姿は捜索中だ。6番線。35分発のフィレンツエ行き特急だ。ここでケリをつける。いいな』

「流石です兄貴！」

『お前たちはとにかく列車を追いかけろ、いいな』

「ブランク、受話器俺の口に当ててくれ。おいプロシユート？オレとブランクはもう駄だ。次の特急に乗り、ナランチャの血液からジュニアを作り追跡させる」

『作っても無駄かもしれないぜ。今からザ・グレイトフル・デッドを使う。逃れられるわけがない』

「娘が手に入るなら何でもいいさ。では」

ブランクは電話を切って元の場所（メローネの尻ポケット）に電話をしまった。

「ネアポリス駅にいたらダッシュユだ」

「了解」

ローマ行き特急の個室は乗ってる時間に対してフィレンツェ行きと比べるとやや割高だ。だがそれでも一般客室なんかよりもよっぽど快適で、何より横に他人が座らないのがいい。

「はあ…」

女はタバコを吸いながらイライラして時計を見た。出発時刻ぴつたりにてくてくれないと取引先とのディナーに遅刻してしまう。

「糞交通会社…早くしろっての」

まだ長いタバコを灰皿で押し消すと、ふいに声をかけられた。

「君、健康状態は？」

「……………えっ？」

いつの間にか対面の座席に男が座っていた。奇妙なマスクをつけた気味の悪い男が。背筋に悪寒が走った。身の危険を感じ、体をのけぞらせ窓際にへばりつく。

「あ、あんた…いつの間に入ってきたのよ。鍵、かかってなかった…？」

「良好ですか？なにか生年月日を書いてあるものは…と」

男は無遠慮に荷物をあさり財布の中から運転免許証を出した。

「ちよ、ちよつと！やめなさいよ！」

「1970年2月2日生まれ。31歳か。適齢期から考えると少し高齢だがまあいいだろう。ちよつと失礼」

「ヒイイ?!」

男はついさつきまで女が吸っていたタバコをとって、フィルター部分ペろりとなめた。

「血液型はB型。タバコも重いのを吸ってるな。デイ・モルト！非常にいい！酒やドラッグはやってるか？やっているととってもいいんだが…」

「な、何?!あんたなんなの?!け、警察に訴えるわよ」

「シー…ちよつと黙って、質問に答えてくれないか？これが最も大



事な質問なんだ。君はどれが好みなのかな。何事も楽しまなきやいけない。重要なのは君の好みなんだ。1500年前のインドの『カーマストトラ』という本には48以上の「仕方」が載ってるそうだ。立派な「子供」を産むための始まりには、とつてもとつても重要なことだもんな…」

男はパソコンのディスプレイを広げ、女に画面に映る表を見せた。そこには一面、細かく違うキスの方法の図が並んでいた。

「ヒイ……い、いやぁー……ッ！」

「本当に先輩の能力ってどうかと思います」

ブランクはメローネが客席に帰ってくるなり言った。だがメローネは全然気にしてなさそうだった。

「ああ？だがこれほど強い能力もないだろ？ジュニアがやられてもオレにダメージはない。むしろ大変なのは産むことなんかより”いい子”に育てる事だ。教育っていうのは本当に本ツ当に大切なんだからな」

そう言っつてメローネは情操教育セットを取り出し出産に備えた。ブランクは向かいの席で窓にぐったりもたれかかりそれを眺めた。

目が潰れてしまったせいとか体が熱っぽい。メローネが女性を襲ってる間に水と解熱剤を買い込み飲みまくったがそう簡単に体は回復しなさそうだ。

「僕……ちよつと寝ていいですか？」

「ああ、勝手にしろ」

ブランクはすぐに眠りに落ちた。

そして夢を見た。

砂漠で、誰かと手を繋いで歩いてる

まっすぐなのか曲がりくねってるのか、砂しかないからわからない

かった

手の主を見上げると、まだ16歳くらいの色素の薄い髪をした青年がいた

目の下に入れ墨があつて、肩にはライフルをかけている何かを僕に話しかけてるけど、言葉が違うからわからない

僕は自分の手をすっぽり包んでいる手のひらをずっと指先で触つてた

タコのできた硬い手だ

僕が知ってるどの手とも違う感触をしていた

僕が知ってるのは恐怖に凍える手のひらだけだった

冷たい鉄のドアと岩、乾いた冷氣

砂漠は真逆だ

僕はきつと、嬉しかった

師匠と手を繋いで、道のない砂の海をさまようのが

言葉を教えてもらうのが

言われたとおりにやって、褒められることが

選んでくれたことが

本当に嬉しかったんだ

「ん……」

蜃気楼に包まれてるみたいなのふわふわした心地だ。ブランクは寝返りを打とうとして、ここが列車の座席だったことに気づき思いとどまった。

意識が少し現実に戻ってくると、メローネの声が聞こえた。

「ここからジュニア、その子は殺しちゃいけないぞ。あくまで予行演習だからな。……うんうん、偉いぞ」

「え……何……ジュニア？産まれたんですか」

ブランクは半分寝ぼけながら質問する。すると

「おっとブランク、慎重に動けよ。今ちよつとお前で練習してたから

…もしかしたらバラけやすくやつてるかもしれない」

「は？…え？練習？何？」

ブランクには言ってる意味が全然わからず困惑した。メローネの忠告に従いゆつくり起き上がると、ベイビィ・フェイスから生まれたらしいスタンドがメローネの足元からこちらをじつと見ていてギョツとする。

そんなブランクを見てメローネは拍手をした。

「おおくちゃんとききてるな！じゃじゃーん！なんとお前は一度テールに組み替えられてたんだよ！だがこの通り生還だ！偉いぞベイビィ・フェイス。今回のジュニアは優秀だ！」

「サンプルに殺意を感じる」

ブランクは啞然としながらジュニアを褒めまくるメローネを見た。めちやくちや嬉しそうだ。

「よし、トリツシユはこんなふうには、絶対に生かして連れてこなくっちゃあいけないからな。これで本番もバツチりだろう。精密性Bつてところだな」

ジュニアも過剰に褒められてニヤツと笑っている。幸せな親子みたいだが、ブランクは自分が過去最高の命の危機に瀕していた事にゾツとして全然微笑ましい気持ちになれない。

「本気で…本気ですか？え？僕たちって仲間ですよね？」

「ああ。だがお前は拳銃使いなんか目潰されて負けた。はつきり言ってる戦力外だろう？だったらオレの荷物持ちに降格だ」

「なっ！バカ言わないでください。僕はまだ…戦えますよ。両手をもがれたわけじゃない！」

ジュニアは褒められたあと、また何か別の物質に自らを組み替え、視認が不可能になった。こうなるとメローネのベイビィ・フェイス本体でしか意思疎通ができない。

「じゃあなんで負けた？」

「それは…」

「簡単な話だ。お前は暗殺者ではなく狙撃手として戦ったからだ。自

分の十八番を使うのはいい。だがナランチャを即死させず、スタンドの能力を考察するすきを与え、最後の最後で胆力で負けた」

「ツ…確かにナランチャを目印に使うべきではありませんでした。いえ、もつと言うなら先に見えていたグイード・ミスタを殺すべきでした」

ブランクは右目が痛むのを感じた。

慚愧に耐えないという言葉が頭に浮かんだ。そう、自分は今、自分の行動を恥じている。

あの襲撃はスタンド使いの戦いとしては二流以下だった。狙撃手として師匠から学んだ知識と技術はあくまでも”狙撃手として”の戦い方だった。射撃衛星としてのスタンドは銃のアタッチメントにすぎないと。

だが結果的にその考え方は左半身のやけどを招き、やけどのせいで仕留められる時に獲物を仕留め損ね、右目まで失う結果を招いた。

「ホルマジオは2年間お前に何を教えたんだか。やっぱり”教育者”としてならオレの方が優秀かもな」

「ツ…先輩は…悪くないです。僕が愚かで弱かった。…それだけの話なんだ！」

ブランクはメローネがくれたマスクを剥がし、目に当ててたガーゼを剥がした。ミネラルウォーターをかけて乾いた血を落としもう一度マスクを巻き直す。

そして黙々と分解したスナイパーライフルの整備を始める。

「…フン」

メローネは拗ねた子供を見るようにブランクを一瞥し、ベイビィ・フェイスに表示されるジュニアとのチャット欄へ目をやった。

メローネはずっとカタカタやってジュニアとやり取りしていた。ジュニアはいうなれば受肉したスタンドなので一般人にも見える物質だ。

ブチャラティたちの乗る時速150キロで走行する列車に追い付けるはずもないので今は車内のどこかでスタンバイ中だ。

「……僕どれくらい寝てたんですか？」

「30分ほどだな」

「たったそんだけか……」

「ああ」

「……メローネ先輩って全然僕に興味ないつすよね……」

「え？いや、あるぞ。お前の身長体重、取れるときは食事のデータもちゃんと記録してある。ジュニアはたいいてい成長期になる前に消滅させるから、それくらいの時期の子供はあまり観察できないしな」

「え……うそ……ひく……」

絡んでくるブランクにメローネは面倒くさそうな表情をした。

「なんだ？暇なのか？しょうがないな、ほら、一冊貸してやるよ」

メローネはジュニアの教育に使った絵本の一冊をブランクに渡した。ブランクはとりあえず受け取る。『ちきゅうのどうぶつ アフリカへん』だ。

「わー……動物さんの絵本だ……」

「役立たずになったブランクくんはどの動物さんが好きかなー。ブランクくんにはライオンさんと違って牙も爪もないけどどうやって標的を殺せばいいのかなあ？」

「うっ……ぐす……ホルマジオ先輩に会いたい！昨日今日で目も耳も失くした！そのうえこんな先輩のカバン持ちになるなんて殺されたほうがマシだアーツー！」

ブランクは絵本を床に叩きつけて座席に寝っ転がってジタバタした。メローネは更にめんどくさそうに窓枠に肘を突き、暴れるブランクを見た。

「つたく……やかましいな。話したいなら勝手に話せばいいだろう」

ブランクはジタバタをやめるとメローネからそっぽを向いて話し始めた。

「メローネ先輩はホルマジオ先輩とイルーゾオ先輩がやられてなんとも思わないんですか」

「はあ？そりや思うだろ。お前より付き合い長いんだからな。だが泣

くのも喚くのもボスの全てを奪ったあとでだ」

「……もしできなかつたら死ぬだけ、ですか」

「ああ」

ブランクはついさつき見た夢を思い出し、ぽつりと独り言のように呟いた。

「…僕の師匠は、何が何でも生き残れと言っていました」

「師匠ってマンハッタン・トランスファアの本体か？」

「はい。師匠は復讐のために僕を連れ回していました。復讐は、生き延びてこそ復讐です。だから必ず生き残れるよう立ち回れと」

「へえー……」

「でも僕には復讐すべき相手なんていませんでした。だから言われるがままに師匠の言うことを聞いてました。復讐がなんなのか僕にはどうしても良かったんですが、師匠のためにはなりたかつたし」

「ふーん……」

「でも今日……急にいろいろ感じました。いや、二年前から今日まで、感じていることに気づいてなかつたんです。僕は……」

「おっ！ジュニアがブチャラティたちの列車を捉えたぞ」

「ええ……うそ……この人ぜんっぜん聞いてなかつたの……？」

「速度が落ちて追いつけると判断したな。列車はじき停止する。行け、必ずトリツシユを捕らえろ」

バシツと音を立てて窓があいた。ジュニアが出て行ったんだろう。ジュニアが乗っていくのは競技用のラジコンヘリだ。

ラジコンとはいえ最高時速は150キロを超える超ハイエンドな機体だ。だが長距離飛行には耐えられない。故に今、最後の追い込みで最大の成果を得られる乗り物だ。

「あ、悪いな。続けていいぞ」

「いや……いいです……もう……」

ブランクは頭を振って気持ちを切り替えた。そして自分のズボンのポケットからカプリ島でコピーした『ソフト・マシーン』で空気を抜いて折りたたんでいたメローネのバイクを取り出した。

「僕がまだ戦えるって証明しますよ」

ジョルノは朦朧とした意識の中、天井から聞こえてくる音を聞いた。

ブチャラテイが戦っている。老化した身体は重すぎる。どう頑張っても指先を動かすのがやっとだ。

ガシャン、となにか金属製のものが落ちる音が聞こえた。

「何…?」

トリツシユの声がした。

声の方を見ると、そこには誰もいなかった。

ジョルノはそれが見間違いかと思った。だが確かに、トリツシユが消えた。外に出たのか？まさかとは思うが…

いや、違う。そんなはずがない。まだ列車の振動が亀越しに感じられる。釣り竿の男が亀を奪ったとかそういうのじゃあない。天井は変わらず運転席のままだ。

「ま、さか…」

今にも夜闇に消えそうな黄昏の中、二人の男が対峙している。損耗したブローノ・ブチャラテイ。そしてビーチ・ボーイを携えたペツシだ。

「なぜさっきお前の心臓の動きを見失ったのか…わからねーが……全てはオレがオメーに兄貴への償いをさせる事でオレたちの『任務』は終了するッ！」

ペツシは顔の前にビーチ・ボーイを構えた。ブチャラテイの老化は緩やかになっている。しかし足から突如血が吹き出した。

「今の攻撃、よく見切れた」な」

「こいつには小細工は通用しねえ」

ブチャラテイが呟く。同時にまた老化のスピードが上がった。

「栄光は……おまえに……ある……ぞ。ペッシ。やれ、やるんだ……オレはお前を見守ってる……からな……」

列車の車輪の隙間で息も絶え絶えのプロシユートがペッシに向かって小さく、弱々しく語りかけていた。それが聞こえているかのようには、ペッシが再度ビーチ・ボーイを振りかぶる。

「兄貴が逝っちゃう前に、兄貴の目の前でよオオーッ！償いはさせるぜエエエ！」

ブチャラテイはまっすぐペッシに向かって走っていった。腕でガードし突っ込んでくるがペッシはまっすぐ、腕から胴へ経由することなく心臓へ向かった。

「思ってたぜ！お前が突っ込んでくるっていうのはなア！」

「ああ……読んでいた。お前がまっすぐ心臓へ針を投げてくるのを」

ブチャラテイは落ち着いた声で返した。

「ステイツキー・フィンガーズ！」

そして自身に延びた糸を瞬時に、ペッシの首に巻きつける。だがそのとき、銃声が聞こえた。

「な……なに……？」

弾はどこにも当たらなかった。だが音が聞こえたときにはペッシの首に巻き付いたはずの糸は、別の釣り針で巻き上げられていた。

「これは……まさか……」

バイクの音が聞こえた。ペッシの背後からバイクが土煙を上げて走ってくる。後部座席に座った男が後ろからハンドルを支え、運転席に座る人物がペッシの持っているのほとんどおなじデザインの釣り竿を持っていた。

肩からスナイパーライフルをぶら下げていて、銃身が後ろの男にガンガンあたっている。

「ブランク、ジュニアを回収した！あとはこのままぶつちぎるだけだ」



「ううう、酔うわこれ」

「つべこべ言ってるじゃあねえ！娘を奪ったんだ！ここでしくじったらオレがお前をぶっ殺すからな！」

「わかって、ます…よッ！ちゃんと支えててくださいね！」

少年は一気に釣り竿を引いた。

糸がたなびく。釣り針がギリギリと音を立て、ペッシの首に巻き付いた糸を上につ張り解いた。

釣り竿本体も引っ張られたせいでペッシの腕からもぎ取られ、ブチャラテイの心臓に達した針とともに糸が消失する。

「ペッシ兄貴…ブスツと行きますよ！」

ハンドルを握った赤毛の少年が叫んだ。釣り竿はもう持っている。

そしてペッシ共々轢き殺すルートでバイクが突っ込んでくる。そのバイク前方に、見たことのあるトゲトゲした人形スタンドの影が見えた。

「あれはッ…！」

ブチャラテイが叫んだ。

『ソフト・マシーン！』

そのスタンドは右手のレイピアでペッシを突き刺した。そして少年の後ろに座っていた男が跳ね上がるペッシの体をひつつかむ。ペッシは萎み始め、ペラペラになっていく。

「クソッ…！」

ライフルの弾は一キロは飛ぶ。あの少年はペッシのスタンドとそっくりの釣り竿のスタンドの針を弾にくくりつけ、むりやりこちらへ到達させたのだ。

このままじゃ轢き殺される。

ブチャラテイは体をとっさにジッパーでバラバラにし、突撃してくるバイクをかわした。そしてバラバラになった腕を投げ、ペッシの上着からはみ出していた亀を掴んだ。

「ぐっ……敵は逃したが……なんとか亀は取り戻せたようだな」

バイクは土煙を上げて遠くへ去っていく。ブチャラティは亀を抱き、中を見る。老化から目覚めた仲間たちが見えたが、肝心の人物が見えなかった。

「まさか……トリツシュを……奪われた、だと……?!」

「ギアツチョ！娘を手に入れた。お前車だな？今どこだ」

『マジかよ。さすがだなメローネ。あと5分でローマ駅につく』

「よし。したら……とにかくリゾットに指示を仰いどいてくれ！こっちはいろいろ手が離せない。駅より手前の田園地帯で拾ってくれ。15分もあれば着く」

『わかった』

メローネは電話を切った。バイクは線路沿いのあぜ道から一般道へ戻り全速力で飛ばしている。

「メローネ先輩、見ました？目を潰されてなお光る機転、才覚。僕の才能はカバン持ちなんかじゃ終わらないですね」

「お前……あんま調子乗るんじゃないやあねえぞ。そもそもオレのベイビー・フェイスが完璧に！最大の任務をこなしたのがメインだろ」

「おたくのジュニアくん、なんで亀ごと持ってこなかったんですか？」  
「それは……教育のせいだな。『トリツシュを奪え』以外命令してないから放置してきたらしい。……能力を解除したら消去だな。教育失敗だ」

「なんか同情しちゃうなあ」

ブランクは軽口を叩きながらも、だが内心はとても動揺していた。

左目で覗く世界は以前よりも遥かに狭かった。今回は届けばいいだけで標的に当てる必要はなかった。だが、それでも担いだライフルの重みだとか、支えるための筋肉だとかが全く違う。左半身のやけ

ど、千切られた耳も全てが痛みにより不随意の動きを生む。

僕はもう、今までのようには撃てない。

足元が崩れ去るような喪失感が襲ってくる。加えて、プロシユートの死だ。さつきまではさすがにプロシユートまで死ぬわけがないという謎の樂觀さがあつたのだが、そんなの不安を紛らわせるための心の錯覚に他ならなかった。

どうやら僕は：彼らを想定以上に大切に思っていたらしい。

しかも僕は不安で、怯えてて：それでいて、クソ！手が震えてる。

ブランクはこの震えを後ろに座ってるメローネに気づかれてないように祈った。

ともあれボスの娘、トリツシユは生け捕りにした。落ち着いた場所についたらベイビィ・フェイスの能力を解いてラジコンから人間に戻せばいい。

空気の抜けてしまったペッシも元に戻し、ギアツチョと態勢を建て直さなければ。残ったメンツをまとめられそうなのはリゾットしかないが、リゾットは一体今、どこで何をしているのだろうか。

## ヴェネツィア、リベルタ橋近辺

「オレだ」

『もしもし。リゾット、メローネが娘を奪った。プロシユートは死んだがペッシは無事だ』

「よくやった。オレはペリーコロの死体のそばに落ちてた紙の解析をしている」

『そんなの必要か？』

「ボスはブチャラテイたちに娘を引き渡す手段を用意していたはずだ。娘が奪還される前にな。さらに都合のいいことに：ボスからの指令は一方通行だ。娘が奪われたと気づかずのこのこやってくる可能性も捨てきれない」

『わかった。とりあえずはメローネたちを拾ってフィレンツェに向かう。奴らが乗った列車の行き先だ』

「わかった。娘はブランクに尋問させる。あいつならトリツシユからかなりの情報を引き出せるはずだ」

『あいつが？……わかった、リゾット。お前を信じよう』

リゾットは電話を切る。目の間のパソコンの画面では焼かれた写真の輪郭が浮かんでいる。そのパソコンの前に座る男は震える手でマウスをいじり、時にチラチラとリゾットを窺う。リゾットは遅々として進まない作業に苛立っていた。かれこれ14時間はたっている。

「早くしろ」

「ツ……リ、リゾット……こんなことしてなんになるんだ」

「もうお前の手に釘をさす場所がない。次はどこに刺されたいんだ」

「う、裏切り者には未来なんてない……！」

「そうだな。左目にしよう」

「ギイツ……グ……う……うう」

左眼から血を流しうづくまるのは情報技術部員の男だった。ムーロロのチームのメンバーだった。もう一人のメンバーはリゾットから逃げ出そうとして口から大量のカミソリを吐き死んでしまった。

こいつはそれを見て怯えて言うことを聞いたが、その恐怖も効力が薄れてきたのかもしれない。

ぎし、ぎし、と階段を登る音が聞こえた。男の肩がびくんと跳ねる。男の喉には大ぶりの断ち切りばさみが埋まっていた。それはゆつくりと開き、皮膚下から口腔を切り裂いて、舌の根元を切り落とした。

ドアが開いた。向こう立っているのはムーロロで、リゾットの姿と床に転がるチームメンバー、そしてたった今舌を切り取られ大量に出血したもう一人を見て固まった。

「リゾット……お前、オレの部下に何してんだ？」

「ムーロロ、久々だな。座れ」

「つていうか、どうして……」

「座れよ」

リゾットは無言を言わさぬ口調で事切れた男を蹴り飛ばし、パソコンの前の席を開けた。床に落ちた死体の口から血がばしゃばしゃと溢れ、ムーロロの靴を濡らした。

「……なんだこれ。焼けた写真の修復……か？」

「ペリーコロが持っていた写真だ。お前の部下は半日かけてこの調子だ。引き継げ」

「……構わねーが……仕事が遅いからってオレの部下を殺すのはよオ、裏切り者の烙印を押されたとはいえやりすぎじゃあないのか？ お前たち暗殺チームに流した情報はこいつらがせこせこ解析したもんだってあるんだぜ」

「オレの動機がわからないのか？ お前の部下を殺すような事をした覚えがないと。自分の胸に手を当ててみる」

「な……ぐっ……」

信じがたいことに、ムーロロの頬を切り裂くようにして剃刀が何枚も皮膚のしたから出てきた。何をされたかわからなかった。ただ痛みになりに手で頬を抑えた。リゾットはそれを見て冷たく言い放つ。

「殺しはしない。今はな。オレたちはボスを斃す。そのためにこの写真を復元しなくっちゃあならないんだ」

「わかった、わかったよッ……」

ムーロロは作業に取り掛かった。だがパソコンの解析プログラムはとつくに組まれていて、今まさに猛烈に稼働中だった。待ちの間。それ以上できることがなかった。

リゾットに説明してわかってもらえらるだろうか。ムーロロは頭の中で必死に考えた。

いや、そもそも…なぜこいつがオレを殺そうとしているのかだ。まさかブランクが何かしくじったのか？

「解析は98%まで進んでる。ちよつと待つだけだ」

「そうか。ではいつものように雑談をしよう」

雑談？雑談だつて？ムーロロはオール・アロング・ウォッチ・タワーを偵察へ出してしまったことを激しく後悔した。今ムーロロには自衛手段が一切ない。

「お前はよく麻薬取引ルートの話をしていたな。チームのもつ独自の仕入れルートや大麻の出处。合成施設の設備だとか」

「ああ。噂に過ぎねえつて前置きしたよな？あそこは、ほとんど他のチームと接触がないから」

「ああ。だが全くないわけじゃあない。会おうと思えば会える。あつちも人間で、飯を食うし酒を飲むし買い物をする。そうだろう」

「…会ったのか？」

「いいや。そんな危険はおかせない。だがお前は会っていたな」

ムーロロはツバを飲み込む。

「オレがお前にまず聞くことは、なぜ麻薬の取引ルートなどと言う幻想をオレたちに信じ込ませたか。そして次に聞くのは、ブランクに何を命令しているのか、だ」

びろりん

コンピュータから場違いな明るいポップ音がした。

【復元完了】

リゾットはムーロロを押しつけ、表示されている写真を保存しギアツチヨに送信した。

リゾット　：写真の復元が完了した。場所はヴェネツィア、サンタ・ルツィア駅と思われる。この場所に向かい、隠されたものを回収せよ  
ギアツチヨ：了解。オレとペッシが回収に向かう。メローネがブチャラテイたちの始末をつける。ブランクが娘を尋問中だ  
リゾット　：オレも今からヴェネツィアに向かう

「オレを殺すのか」

ムーロロの間にリゾットは答えなかった。

「ブランクも殺すつもりか？」

その問いにリゾットが答えようとしたとき、

コンコン

ドアがノックされた。

「……………リプレイ完了」

アバツキオのムーディー・ブルースはペリーコロの自殺をリプレイしたあと、トリツシュが攫われる場面をリプレイし、再びもとの姿に戻った。

「トリツシュを…ラジコンの表面に組み替えた、のか？そんなのありかよオ！っーか生きてんのか?!それって！」

ミスタは混乱気味だがブチャラテイは冷静だった。ナランチャはまだ千切れかけた腕のダメージと老化が激しかったせいもあり眠っている。

「敵は生け捕りが目的だ」

「ぼく達がいながら…すみません」

「いや、今回ばかりは敵の粘り勝ちだ。老化させるスタンド使いの最後の執念にしてやられた」

フーゴがぎゅっと拳を握りしめて言うが、ブチャラテイはなおも冷静だった。

現在ブチャラテイチームの六人は盗んだ車でトリツシユを追っている。

ジョルノがトリツシユのハンカチを小鳥に変えて追跡させているのだ。鳥はトリツシユの方へ羽ばたく。その方角を頼りにとにかく車を飛ばしていた。

「敵は生け捕りにしたあと彼女を無事に生かしておくとは限らないぜ」

アバッキオの言葉にブチャラテイが頷く。

「当然だ。そして同時に、オレたちはボスからの指示どおりヴェネツィアのサンタ・ルツィア駅の翼の生えたライオン像へ行かねばならない。そこでチームを2つに分ける」

トリツシユ奪還チーム

ブチャラテイ、アバッキオ、ジョルノ（亀の中にナランチャ）

ヴェネツィアチーム

ミスタ、フーゴ

「…まあ妥当な分け方だな」

「ええ」

ミスタとフーゴは頷きあった。敵が最も注意を払うのはこちらの追跡だ。こちらからヴェネツィアに行くのは気にもとめないだろう。

「ぼくのスタンドじゃあ万が一戦闘になってもトリツシユを巻き込むかもしれないからな」

「オレたちはオレたちで途中で車パクんねえとなくそういうのお前のほうが得意だよな？」

「君はいろいろ雑なんだ」

「…おいジョルノ！鳥はどうだ？」

アバッキオが亀の天井に向け、車を運転しているジョルノに怒鳴った。ジョルノの顔が天井に大映しになる。

「今のところヴェネツィア方面に行こうとしています。変化はありません」

「ジョルノ、ぼくが運転をかわろう」



フーゴがジヨルノに変わって運転席についた。中に入ったジヨルノは壁際に立つ。

「…では一度敵の能力をおさらいしておこう」

ブチャラティはペンを取り出し、机に直接敵の情報を書き込んだ。釣り竿のスタンド…体内に針を侵入させる。糸に攻撃してもこちらへ跳ね返る。一番厄介

トリツシュをさらったスタンド…生命を物質に組み替える。遠隔操作型？無機物に擬態可能

ソフト・マシーン…本体、ズツケエロはカプリ島の病院で治療中と確認。なのでスタンド本体は赤髪の少年？

赤髪の少年は釣り竿のスタンドも所持？またライフルを持っていることから狙撃手？

「狙撃手ならオレが仕留めたって言ってるじゃねーか！目ん玉にぶち込んだんだぜ？」

「でも死体を確認する時間はなかったんだろ。遠目に見た狙撃手はどんな格好だった」

「あ…赤毛の…やつ…」

「やっぱ仕損じてんじゃねーか」

アバッキオがツツコむとミスタはぐぬぬと黙り込む。

「弾丸を撃ち込まれても生き残るのは不思議じゃあない。現にミスタ、お前も生きてる。…それにどうやら、いくつものスタンド能力を有しているらしい。そのうちのどれかで致命傷を回避したのだろう」

「複数の能力を使いこなせんのか？そんなのありかよ？」

「ああ。釣り竿のスタンド…ビーチ・ボーイだったか。それとそっくりなスタンドをも使ってた事から、他人の能力をコピーする能力と考えるのが妥当だろう」

「どっちにしろ厄介だな。そのコピーするための条件ってのがわからんが、あまり接触したくはねえぜ」

「ああ。自分の能力を勝手に使われるのはいい気分じゃあねーからな」

「最も注意すべきなのは遠隔操作型とみられる物質を組み替えるスタンドだ。追手を暗殺するのにうってつけだからな」

「表面に張り付いたりもできるんだろ？見分けようがねーぜ」

「ジヨルノのスタンドなら生物、無生物の見分けがつかない。組み替えられた物質は生命になるのだろうか？」

「それは：敵に触れないと確かなことは言えません」

「おい、テメーのスタンド能力だろうが」

アバツキオはジヨルノに突つかかる。ブチャラティはそれを制しながら思案した。

「どつちにしろオレたちはすでに能力を知られている。不利なのは間違いない。その上で必ずトリツシユを奪還する：それがオレたちの任務だ」

そこで亀の外からフーゴの声が聞こえてきた。

「ブチャラティ！橋が見えてきました。鳥はヴェネツィア市街へ飛ぼうとしています」

「ああ、ではミスタとフーゴはここから別行動だ。それぞれ任務を遂行しろ」

ヴェネツィアの手前の街。貧乏な旅行者が泊まる裏通りの狭いホテル。

「あんな小娘を白白させるなんて：拷問したほうが早いだろ」

「北風と太陽ですよ、こーゆーのは。僕がやるのは：いうならばカウンセリングですよ。もしくはセツション。：この言い方すげーやだな」

「カウンセリングに行く女なんてろくなもんじゃあないぜ。そういう女は大抵健康じゃないし情緒が不安定で母体としてはイマイチなんだよ。カウンセリングなんかで救われるくらいなら、好きなだけ酒を飲んだほうがいい」

「なんかやな思い出でもあるんですか？」

「いいや」

「とにかく…ここに来る前の僕の得意分野なんですよ。女の子の悩みを聞くのは」

「ブチャラティたちはオレたちを追ってるはずだ。悠長なことをして暇はない」

「こう見えて僕、このやり方ですごいスタンド使いを発掘したことがあるんですよ。まあ任せてくださいって」

ブランクはカチューシャ代わりのメガネを外し、借りているメローネのマスクもととり、更に上着も脱いだ。

そしてさつきまでとは全然違う顔つきでトリツシュが寝かされている部屋にはいつていく。

トリツシュが目を覚ますと。鼻いっぱい嗅ぎ慣れない不快な臭いがした。例えるなら3日くらい換気してない生活臭というか、染み付いた人間の臭いというべきか。とにかく嫌な臭いだ。

体を起こすと自分はベッドに寝かされていて、その正面にある椅子に誰かが座っていた。

窓の外を車が通り、ヘッドライトで部屋が照らされた。

「やあトリツシュ」

「何…あんた誰なの？」

「僕はヴォート・ブランク。はじめまして」

そのブランクと名乗る人物は、うつとおしいほど伸びた赤毛の前髪の間から、澄んだ青い目でこちらをまっすぐ見ている。右目は固く閉じられていて、目の周りに火傷の跡が見える。

自分と同じ年くらいに見えるあどけなさだが、雰囲気はとても落ち着いていて、黙って考え事をしているときのブチャラティに少し似ていた。

でも線が細く、声もハスキーで女の子っぽかった。そう思ってみると女の子にも見えるし、柔和そうに微笑む顔はやっぱり年上の男の子にも見える。不思議な雰囲気だが、どこかで会ったことあるような安

心感がわいてくる。

自分が攫われたのだというパニックに陥らなかったのは、多分目の前にいたのがブランクだったからだろう。

「ブ、ブチャラティたちは…ここはどこなの」

「僕たちはブチャラティから君をさらいました。場所は言えない」

「じゃああなたが裏切り者のチーム…なのね？私を殺しにきた…」

「まさか。殺すならとつくにそうしてるし、拷問するなら君を縛らずベッドに優しく寝かしたりしないよ。まあ慈善事業じゃあないんでね…安全な場所に逃がしてあげるとか、そういうわけじゃないんですが」

「……………」

黙る。沈黙以外にどうしろって言うのか。ブランクは沈黙をまるで気にしていないように落ち着いた、音節を意識したトーンで話す。

「君はドナテラに似ているね、トリツシュ。怯えて伏目がちになるところも、頼りなさげな肩も」

「適当なことを言わないでくれる。母にあった事なんてないくせに」

「いいや、あるよ。今年の1月末に、僕はクラブリアの丘の上の病院でドナテラ・ウナと面会してる。その時君のことを聞いた」

「嘘よ」

「いいや。ほんとき。ドナテラは僕に手を握らせてくれたんだ。僕が彼女の手を包み込むと、彼女は娘を思い出したと言ってくれた。…暖かくて優しい手だとね」

ブランクは自分の手を前に差し出した。指と指の隙間から、トリツシュと目があった。

「瞳は似ている。でも眉は、君のほうが意思が強そうだね。ドナテラも気丈な性格だったけど、僕があつた時は君のことが心配で、不安そうだったよ」

「…本当に母と会ったの」

「さつきからそう言ってるじゃないか。トリツシュ。ドナテラはとても君を心配していた。彼女に触れたとき感じたのは、君の身を案ずる

柔らかな肌と、骨まで凍りそうな不安だった」

「あたしも…いま凍えそうなくらい不安だわ」

「本当?」

「そうよ。不安で不安でたまらない!…ブチャラテイたちがあんなたちにあんな目に殺されかけてるのを見たんだもの」

「そうかな。彼らの安否が心配なのはわかるけど…僕にはもっと、君が不安に思ってることがあるように思えるんだ」

「どうしてわかるのよ」

「僕はね…手に触れれば、その人のことがちよつぴりわかるんだ。トリッシュ、僕の手をとって」

「ど、どうしてよ…」

「僕は君の不安を分かち合いたいんだ。トリッシュ、君のことをとつても知りたいのさ」

怯えるトリッシュに近づくブランク。そつと伸びる指。振り払おうとするトリッシュの手首を掴み、そのまま指を絡める。

「やつぱり、僕のこと怖い?…目が潰れてるのは僕のせいじゃあない。ミスタつてやつにやられてね」

「違う…急に私のことを知りたいなんて言うやつ、信用できないからよ。裏があるに決まってる」

手はブランクを拒否するように強張っている。だがその拒否が、肉体の反応が「理解」への第一歩なのだ。

「そうだね…でもそれで君を傷つけようってわけじゃない」

「嘘よ。あんたたちは罪のない列車の乗客を巻き添えにするような奴らだわ。私の命なんてなんとも思っていないに決まってる」

「それは、僕らには大義があるからさ。僕らはボスを倒すためになんだったてる。…トリッシュ、君の父親だ」

「…私の父は…一体何者なの?ギヤングのボスを殺すために、そんな事までするの?」

「…君をひと目見たときからわかってたよ。やはり君は…何も知らされないまま連れられてたんだね」

トリッシュは目を伏せた。一瞬だが絡んだ指の抵抗感が消える。

ブランクは畳み掛ける。

「君はそれがとても不満だ。ブチャラティたちは守ってくれるけど、君になんにも教えてくれなかった。これから君が直面しなきゃいけない父親についても」

トリツシユの体が僅かに開いた。それを見逃さず、ブランクは自分の体をよりトリツシユに近づけ、手を固く握る。彼女の瞳を間近で観察し、その瞳孔の開き具合を、虹彩の輝きを見る。

「僕が全部教えてあげる。どうして追われてるのか、君の父親が何者なのか：君が何者なのか。だから」

トリツシユが息を呑んだ。眼が見開き、ブランクの左目に映る自分の顔を直視した。

「わかり合おう、深く深く。魂が剥き出しになるまで」

次の瞬間、

「きつ…気安くさわってんじやあねえ！」

トリツシユは意を決してブランクの腹に思いつきり蹴りを叩き込んだ。ブランクは体勢を崩し、トリツシユを巻き込んでベッドに倒れ込む。

ブランクは苦しげな呼吸をしながら、こちらを見上げるトリツシユをまた真っ直ぐ見つめた。呼吸の割には表情を変えていない。

「その勇気はどこから来たのかな。怖ければ怖いほど勇気が湧いてくる質なのか。…レイプされるとでも思った？」

ブランクの雰囲気之急に変わった。自分を安心させるような空気じゃなくなつて、まるでトリツシユの不安をそのまま模したみたいに暗く、冷たく、大きく見える。だがトリツシユはその怯えを知られなくなかった。

「ツ…私もあんたに押し倒されてわかった。あんた、女の子じゃない。女にレイプなんてされないわよ」

「それを確かめたいならさっきのキックは股間にするべきだったね。でももう動けないよ。君の手足は固定したから」

ブランクは動けなくなつたトリツシユに覆い被さり、そのまましばらくトリツシユの息と脈を観察していた。

トリツシユの呼吸、脈拍は固定されていると言う異常な状況へのパニックの後、だんだんと落ち着いていく、雫からなる波紋のように。「魂は、経験の積み重ねで形成されるのかな。もちろんそれは大きな要素だけど…でも肉という鑄型なしには魂は存在し得ないだろ。…僕は魂の鑄型ががわかるのさ。だから、誰にでもなれる」

トリツシユは鋭い眼差しでブランクを睨んでいる。ブランクはその瞳をじっと見据える。硝子のような目で。

ブランクはトリツシユの手をもう一度よく触り、揉み、残った左目でじっくり見た。指が手のシワを、皮膚を、筋肉をなぞるたびにブランクはトリツシユの反応を記憶する。

「君の…肉体の半分は、父親でできてる…だが…このかたち、どこかで…」

物音がして静かになって、そしてブランクが出てきた。

「お前、なかなか変態趣味だな」

メローネがそうからかうと、ブランクは反応せずにじつと虚空を見つめたままだった。猛烈に何かを考え込んでるように見える。

「…なんだ？おーい。…無視してるのか？」

だがそこでベイビィ・フェイスから連絡が入った。

ターゲットを発見しました。

「よし、ジュニアがナランチャを見つけたらしいぞ…一人一人確実に暗殺しろ」

了解

フーゴとミスタはヴェネツィア、サンタ・ルツィア駅へ辿り着いた。写真通りの景色が広がっている。二人はパクったバイクを降り、あたりをぐるりと見回した。敵の影はない。

深夜ということも相まって、物音がほとんどしないし、やけに冷え込む。

「とつとと回収しようぜ」

ミスタは像に近づき、フーゴを見た。

「……ミスタ、早く像を壊せよ」

「いや、銃打ったら敵に知られちゃうかもしれないねーだろ？お前のスタンドでやってくれよ」

「あのな…パープルヘイズは拳にカプセルがあるんだぞ。忘れてんのか？ここでぼくが拳で像をぶっ壊したら、太陽光もでてないんだ。無毒化するのに時間がかかる。忘れたのか？懇切丁寧に、危険が及ばないよう説明したのにもう忘れたのか？オイミスタッ！」

「わ、わかったから急にキレんなよ…おつかねー。蹴りとかもできねーのか」

「パープルヘイズは…あまり言うことを聞かない」

「はあ…つたく。じゃあ素早くやるぜ」

ミスタは一発だけ像に打ち込んだ。像は脆く、すぐに崩れてしまう。おそらくディスクを埋め込むために急増されたものなのだろう。破片を取り除くと、赤い色のディスクが見えた。

「よし…じゃあとつとと戻ろうぜ」

と、ミスタがディスクを取ろうとした瞬間

「なんだ、そんなところに隠してあったのかよ」

釣り針が、ミスタの足元から飛んできた。



## 暗闇の密度

2000年10月20日

ブランクとペッシはよく遊んでいた。

とはいえブランクの家には何もなかったから、遊ぶと言っても特別なことはしていない。

ペッシの家でぼーっとサッカーやゴルフや、ルールもろくに知りもしない、興味もないスポーツ番組をかけながら、だらだらピザやスナックを食ってるのみだ。あるいはテレビゲームをするか。

ペッシのほうがほんの少しチームに入るのが早かったから、ブランクはいつもペッシを立てていた。だがペッシからしてみれば、人を殺したあとに平気でピザを食ってコーラを飲み干すブランクのほうがよっぽど先輩に見えた。なのに下手に出てくるので、すごく座りが悪かった。

「ブランクは…初めて人を殺したときどうだった？」

「…どう…ってなんすか？」

「気持ちっつーかメンタル？っつーか…そういうの」

「どうだったかな…」

ブランクは昔話が異常に下手だった。自分でもうまく思い出せないらしく、思い浮かんだ単語がぼつぼつと出てくるくらいで収穫がないのが常だったが、それでもペッシは知りたかった。

ブランクは数分のロードを経て、ぼつぼつ話し始めた。

「やれって言われた…そう、冷たいタイル…。排水溝があつて…。あつちはナイフ、僕はなんだっけ…」

「殺れって誰に言われたんだ？」

「……わからない」

「ブランク…それって…」

ペッシは口をつぐんだ。地雷に足を突っ込んだ気分になって、思わず謝った。

「ごめん。忘れてくれ」

「いや…あんま覚えてなくて…すみません」

「いいや。…オレ、プロシユート兄貴にいつつも言われんだ。お前にはまだはえーって。なんでだと思おう？」

「うーん…僕にもそれはわからないです。でも、プロシユート兄貴はペツシ兄貴を大事に育成してますし、教育の一環なのでは？」

「そうかな…オレ、兄貴の足を引っ張ってんじやねーかってずっと思ってたんだ」

ペツシは手を広げてブランクに見せた。ブランクはきよとんとしながらもその手のひらをじつと観察した。

「ブランク、お前にはわかるんだろ…手を見れば、そいつがどんな人間か。なあ、オレって兄貴が期待してるようなヤツになれるのかな」

ブランクはスタンド発動時に限り、相手に触れることでスタンド能力をコピーできてしまう。

イルーゾオをはじめ他のメンバーからは「スタンド使ってないときもぜってーオレに触んな！」と厳しく言われているので、ペツシの手にも触れはしなかった。

「…僕がわかるのは、今のペツシ兄貴のことだけっすよ。ペツシ兄貴、手にタコができてる。あと汗っかきですね？ビーチ・ボーイを握ってるるとき、とても緊張してる。そしてプロシユート兄貴の期待に応えたいと強く願ってる」

「それはわかってるよ。オレ、気がちっちゃいしカンも悪いし、ここぞってときに思い切りが良くないんだ。そんなんでよく…プロシユート兄貴みたいになれる気がしないぜ」

「仮に触れてもペツシ兄貴がどうなるかは僕にはわかりません。でも願いの強さは実現へつながる力になると思います」

ブランクはうまいことそうまとめ、ニコリと笑った。だがペツシは全然励まされた気分になれず、しょんぼり項垂れた。

「なりたい目標が高すぎるんだよなア…」

ブランクはちよつと寂しそうな顔をしてペツシを見つめた。

「僕はペツシ兄貴が羨ましいです。なりたい自分があって、努力してる。それってすごいことだと思えます」

「お前にはないのか？目標とか」

「ないです。僕は…空っぽですから。何もないんです」

ブランクは目を伏せた。こいつはたまにこういう顔をする。好きなチームとか、好きな音楽とかを聞いたとき、適当な流行り物の名前を答える前。そういうときにひどく寂しげな顔をするのに、ペッシは気づいていた。

「…なあブランク。握手しようぜ」

「え…」

ブランクはびつくりしてこっちを見た。ペッシは自分の青臭さに赤面しそうになりながらも自分の考えを言葉にしていくな。

「何もないなんてさ、絶対そんなことないと思うんだ。だってよおー、オレたち新入りだし、まだまだこれからだって思わなきゃやってけねーよ。きつとこれから、オレたち何かになってくんだ」

「…これから…」

ブランクが恐る恐るペッシの手を握り、ペッシはそれをぐっと力を込めて掴んだ。

「……なれる……といいな…」

「なんだ、そんなところに隠してあったのかよ」

ミスタは声が聞こえた瞬間、ディスクに伸ばした手を引っ込めて銃を取った。そしてその声の方へ向けて引き金を引く。

だが判断を誤った。釣り針の狙いははじめからディスクだったのだ。

露出したディスクは暗闇へ飛んでいき、声と反対方向、駅の入り口の方から現れた手にー小指のない手にー回収された。

「写真だけ渡されてもよおー。わかるわけねーよなあ、こんな隠し方されちゃあよおー。だったら、はじめっから場所を知ってるやつに任せたほうがいいよな？そう思わねーか」

「テメーは…」

ミスタは再び銃を構えた。シャッターの降りた駅入り口にはつい半日ほど前対峙したときと全く違ったオーラを放つ釣り竿の男、ペツシが立っていた。

「まさか……この場所に来るなんてツ……!」

フーゴはそれを見て思わず動揺を口にした。言葉は白い息となり、途端、寒気がした。恐怖とか武者震いじゃあない。単に気温が下がっているのだ。

ギギ、と背後からなにか固いものがこすれる音がした。

「テメーはパンナコッタ・フーゴかア?」

背後に立っていたのは男だった。ひどいくせ毛の眼鏡の男がほんの数センチ後ろで自分にささやきかけている。フーゴはほとんど反射で足を振りかぶった。いや、振りかぶろうとしてそれができないことに気づいた。

足が地面から全く動かないのだ。自らの足元を視認して、ようやく何が起こっているのか理解した。

凍っているのだ、足元が、地面が。

「あのデコっぱちはよォー……『この作戦、まさに!漁夫の利』とか言つてたけどよォ……!」

男は真つ白な奇妙なデザインの全身スーツを着ていた。まさかこれがスタンドそのものなのだろうか。男は顎に手を押し当てながら急に話した。

「完ツ全に誤用じゃねえか!上げ膳据え膳だったらまだわかるぜ。現にリストランテかよつてぐれー簡単に目の前に目当ての品が出てきたんだからな……。だがよォー、漁夫の利じゃあディスク取られちまうのはオレたちじゃあねーか!クソムカつくぜ!なんでわざわざ仕事の前にボケてく?!それとも本気で言つてたのか?!なにが『まさに!』なんだよツ!意味わかんねー!ぜツ!クソが!」

男は地面を激しく踏みしめキレ散らかす。

「パープル・ヘイズ!」

フーゴは自身のスタンドパープル・ヘイズを発動させる。

パープル・ヘイズの拳には両手合わせて6つのウイルス入りカプセルがある。だが昼のマン・イン・ザ・ミラーとの戦いを経て、現在拳には毒のウイルスのカプセルがたった一つしか残っていない。ウイルスの充填には一日かかる。

つまり今のフーゴには最大の武器、殺人ウイルスがない。

ならば、いやだからこそ。背後数十センチという距離でも近距離パワータイプのパープル・ヘイズでぶっ叩けば相手はひとたまりもないはずだ。

絶対、カプセルのある左手は使うなよ。と念じて拳を振り抜く。

「ぐあるるるるるるるー！」

「うおッ…?!」

パープル・ヘイズの不意打ちに対応できず、男は攻撃を完全に受けた。だが顔面にほんの少しヒビが少し入っただけだ。

さらにパープル・ヘイズの拳がどんどん足元同様に凍りついていく。

「この硬さ、そして冷たさ…まさか身に纏っているのか？氷をツ…」「イルーゾオの死体の溶け方は薬品か毒か、なんだかわかんねーが…、こーやってテメーの周りの空気ごと氷漬けにしちまえば心配しなくて済むな」

ギアツチヨはそんなフーゴを見てニヤリと笑った。フーゴの体はすでに半身凍っている。

「どーだ？なんもできねー気分はよお。そのままテメーの仲間がぶっ殺されんの、氷漬けのマンモスみてーにぼんやり眺めてんだな！」

フーゴは自分の死を確信した。この男に、自爆覚悟でウイルス入りカプセルを叩きつけてもおそらく無駄だ。パープル・ヘイズのウイルスは超低温で生き残るような強いものではない。

警戒を怠った。

敵はディスクの存在を知る由もない。知っていたとしてもトリツシュの方に人を割くだろう。

そんな思いが自分の中にあつた。

「とつとと片付けるぜ！」

ペツシはディスクをポケットにしまってからすぐさま釣り糸を振りかぶった。ミスタはすかさず撃つ。

弾丸はペツシの頭を完全に捉えた…はずだった。

「あぁッ?! 一体…ッ?」

ミスタが声に出すよりも早く、ビーチ・ボーイの釣り針がミスタの銃を持ち上げた左腕に心臓めがけてはいつてくる。

「チッ！」

ミスタは暗闇に目を凝らす。するとペツシの周り、特に急所の付近になにかキラキラと輝くものがあった。

『ミスター・アイツノ周りニ氷だ! 氷ガ浮イテヤガル! ソレデ狙イヲソラサレタツ…!』

ピストルズの報告に、ミスタは心の中で呪詛を吐き散らす。

まさかトリツシュをさらってる方じゃなくてディスクの回収にこんな強い能力をもつ二人を裂くとは思ってなかった。

「…狙いが逸れちまったな…一朝一夕じゃダメだな。でもよォー、針は侵入した! オメーはもうおしまいだッ」

ミスタはすぐ腕を振り回し、釣り針の進路をめちやくちやにしてやろうと足掻いた。

前回と明らかに違う。心臓へ直に狙いを定めてきた。銃を構えていたおかげで腕で止まってるが、そんなのちよつとの時間稼ぎにしかならない。

相手はどうやらこつちの想像もつかないほどに本気<sup>マジ</sup>にボスの手がかりを求めているらしい。

「だけどよオ…こつちだつて命懸けで本気なんだよッ！」

ミスタはまた撃った。今度は自分の腕にはいつてる糸に向けて。

「バカかおめーは! ダメージはテメーに返ってくるんだよ! 忘れちまったのか?」

ペツシは一気に心臓へ針を進めた。

「ああ、すっかり覚えてるぜ……そんでオレは、何も糸を切ろうって撃つたんじゃあねえ。むしろ逆だ。糸は……繋がってるからいい……ッ！」

ミスタの心臓を今まさに引きずり出してやろうとしたその時だった。ペツシのビーチ・ボーイの竿先端が突如バチンと音を立てて爆ぜた。

「グッ……う、うわあああ……ッ！オ、オレのッ……ビーチ・ボーイが……」  
ミスタは弾丸を糸伝いに、糸に沿わせて発射したのだ。ピストルズは見事糸を伝い、竿そのものを破壊したのだ。

本体へのフィードバックでペツシの頭部にも大きな裂傷ができる。支柱を損傷した糸はたるみ、針はミスタの胸からポトリと落ちた。

「氷の盾だつてよオ……この距離じゃ自在じゃねーだろ！頼んだぜピストルズ!!」

ミスタは銃を乱射する。胴体、頭、どこだつていい。とにかくペツシめがけて。

「こっこれしきの……これしきの怪我がなんだつてエー……んだよ！ミスタアッ！」

ペツシは竿が折れてもなおビーチ・ボーイを振りかぶった。糸はまっすぐ、ミスタの心臓めがけて飛んでいく。

「ガッツあるじゃねーかペツシィ！」

ギアツチヨはもうフーゴを脅威に思っていなかった。ペツシのまわりの氷の壁をより強固に、弾丸から守ろうと意識をそっちへうつしたその瞬間。

「ぼくは……ッ」

フーゴが叫んだ。

「ぼくは自分のミスは自分で贖うッ！ディスクは必ずぼくたちが手に、入れる！」

「ああ？冥土で言ってるよバアア……カ！」

ギアツチヨがフーゴをコケにしてやろうと笑うと、

「は？な…何やってんだテメー！」

フーゴは自分の左手をパープル・ヘイズに食いちぎらせた。本体が傷ついたのと同様、パープル・ヘイズも左手が切断されている。

そしてパープル・ヘイズにその左手を思いつきり投擲させた。

「チツ…そんなことして何になんだ？バカが！血液で氷の盾をマーキングでもしようってハラか？無駄なんだよ！飛んでる血液だってホワイトアルバムにかかれば一瞬で凍るッ！」

「ああ…でもおまえが勝ち誇った一瞬の油断のおかげで…手、そのものは…届いた！」

かしゃん

と、脆いものが碎ける音がした。

「あ？」

パープル・ヘイズ、最後の一個のカプセルがついた左手がペツシの足元に落ちて砕けた音だった。

「なんだ？手…がなん…ツウ、うううーっ?!」

ペツシの釣り竿を握る手に、一瞬でおぞましい水疱が発生する。

2000年10月7日

夕暮れだった。

街のビルの一角、小さな事務所。窓から漏れてくる夕日は真つ赤で、部屋の中の真つ暗な影を分断し、そういうデザインなのかってくらい美しいコントラストを描いている。

プロシユートは影になつてるソファアに座り、ゆっくりとタバコを吸った。プロシユートはあまり吸うタイプではないが、たまに、こういうなんかキレイな光景に出会ったときはそれごと味わうようにタバコを吸うのだ。

「兄貴…どうしてオレに“仕上げ”をさせてくれねえんですかい」

ペツシは床に転がった老いて干からびた男を見て、恐るおそるプロ



シュートに尋ねた。プロシュートは当然のことを言うような口調で返す。

「あ？それはオレがやれるからだ。やれるやつがやんのが1番いろ」

「そ、そういうことじゃなくてよオ。ブランクは、オレよりあとに入ってきたのにバンバン仕事をしてる。オレはいつも兄貴に頼ってばかりで、全然役に立ってなくて…」

「ペッシ、ペッシ、ペッシ、ペッシよオ。お前は十分役に立ってんじやあねーか。何も手を下すのがイコール仕事じゃない」

「でも、ブランクはオレより年下なのに何人も殺ってる。オレはまだ…」

プロシュートはどんどんしよぼくれてってくペッシにため息を吐き、タバコを床に押し付けて消してから立ち上がり、いつもやるように頭をぐつと固定して顎を撫で回す。

「ペッシ、ブランクとお前は違う人間だ。お前はいつ誰を殺すか、自分で決めるべきなんだ。仕事だから、任務だから、言われたから。そんなので暗殺者なんてやるべきじゃあない」

「…？でもオレは暗殺チームですぜ」

「だから、その意識がマンモーニなんだつつてんだろーが、ペッシ。お前はまだ幸せなんだぜ。多分ブランクは…自分じゃ決められなかったクチだ」

「そうなんですかい？」

「勘だがな。悪いとは思っちゃいないぜ。…だが、オレはお前にはそうなつてほしくないんだよ、ペッシ。自分でそういう覚悟を決めて、初めて”殺し”が完了するんだ」

だとしたら、とペッシはふいに思った。

「…兄貴は、どうだったんですか？」

「さあな。忘れちゃったよ」

「ふッ…ふざけやがって!!」

ギアツチヨはすぐさまペッシに向かって走り出した。だがペッシの腕はもう溶け始めている。

「ギアツチヨ!!受け取れッ!!」

ペッシはミスタへ投げていた釣り針を引き戻す。そのせいで腕が溶けて崩れ落ちた。だが片腕になりながら、ギアツチヨにむけてディスクをひっつけたビーチ・ボーイを投げ渡した。

ギアツチヨがそれをしつかり掴んだ途端、糸は撓んで地面に落ち、消えた。

ミスタの弾丸がディスクを追いかけるようにギアツチヨに命中する。だがホワイトアルバムの厚い氷の装甲はそれを容易に弾く。

「まさかよお…ペッシが目の前で殺られるなんてよお…:…:テメーら、ぜってー生きては返さねえぜ!」

フーゴの体が一気に凍った。もう顔の一部しか露出していない。このままじゃすぐに凍死してしまう。

更にミスタの下半身も急速に冷やされ、固定される。だがミスタは冷静に、ありつたけの弾をギアツチヨへ撃った。

「学習能力ねーのかテメエーはよオーツ!ホワイト・アルバム・ジェントリー・ウイープス!」

ぎやりぎやりという音を立て、弾丸は凍った空気の壁を跳弾し、ミスタへ返っていく。

「うッッあ…!」

ミスタに跳ね返った弾丸は4発。すべてどてつぱらに叩き込んでやった。

「4…:…:発?4発だと?あいつは全弾…:」

「や、やっぱ…:4つて数字は縁起わりーぜ…:…:でも考えようによつちや…:2発は狙い通り、届いたってことだもんな。…:テメーのすぐ後、オレたちの乗ってきたバイクによお…:」

「なッ」

爆発炎上。その瞬間的な空気の圧縮はジェントリー・ウィープスを使用しスタンドエネルギーを消耗しているギアツチヨには凍らせることが出来ない。

爆音が真夜中のヴェネツィアに轟く。

まず異変に気づいたのはブチャラティだった。

「今…。外から変な音がしなかったか？」

「外ですか？」

ジョルノはハンドルを握ったまま周囲を見回す。車は鳥の目指す方向へ向かって狭い道を進んでいる。地面が荒れた石畳なせいで車はゴトゴトと揺れ、本当に妙な音がしたのだとしても気づくのは難しそうだ。

「わかりません。ですが鳥の目指す場所がはっきりわかってきました。おそらくこの通りをまっすぐいって、左の方に曲がれば…」

トン、

「やはり！上だジョルノ！敵は車の屋根にいるッ！」

ジョルノはブチャラティの警告を聞いてすぐに車の窓を閉め、内側から施錠する。

「アバッキオ！」

ブチャラティはすぐさま亀の中の二人を確認した。だがもう二人の影はない。

「敵はもう中に侵入しているぞッ！ジョルノ！」

「敵は部屋の中の家具のどれかに化けているはずですよ。おそらくアバッキオ、ナランチャも同様に何かに組み替えられている…！」

アバッキオ、ナランチャを組み替えました。

ですがブチャラティ、ジョルノに亀の中のことを気づかれまし

た。

「何?…敵は二人か? だったら…姿を見られても構わない。車をクラッシュさせろ。とにかくスキを作るんだ」  
車をクラッシュ。了解

「亀の中に入るのは自殺行為だ。だがこのままでは埒が明かない。もたもたしていると物質になった人間を殺しかねないな」

ブチャラティはしばし考えた。

敵の分解方法はアバッキオのリプレイで予習済だ。敵は直に対象に触れる必要がある。そして体が分解されるまでいくらか間がある。「今すぐ、敵スタンドをこの亀の中から出さなきゃならない。ジョルノ、オレが今からそいつをここから釣り上げる」

ジョルノは一瞬ブチャラティの意図がわからなかった。だが亀のスタンドの性質、キーを外した場合に「生きているものだけ排出される」ことを思い出し、頷く。

ブチャラティは亀の中に腕を伸ばした。部屋の壁に手をかけたその瞬間、アバッキオのリプレイで見たとおりに分解される。

「だがこの攻撃は予習済みだ」

ブチャラティはすでに腕をジツパーで切り離していた。

ブチャラティは分解されつつある腕でテーブルをしっかりと掴んだ。そしてジョルノはキーを取り外す。

物質に分解されている最中の「生きた」腕ごと、テーブルが排出される。

1

メローネ、ブチャラティを分解していたら、キーを外されました  
ブチャラティごと引きずり出される

どうしますか?

どうしますか?

「それなら都合がいいだろうが。出た瞬間、ジヨルノを殺してそれから亀とキーをぶっ壊せ。そしたら任務は完了だろうがッ！」  
ジヨルノを殺す。亀を殺す

了解

リゾットとムーロロの元に訪れたノックの主は返事も聞かずにドアを開けた。木の軋む音とコンピュータのブーンというファンの音が静寂に響く。

「予期せぬ来訪者だな。この場合、わたしが、だが」

隙間からぬるりと入ってきたのはやけに顔色の悪い、やけに骨ばった男だった。気味が悪い、とリゾットは心の中で吐き捨てた。ムーロロはひゆうつと息を吸って、明らかに恐怖を感じていた。

リゾットは尋ねる。

「お前は誰だ」

「それはこっちのセリフだが…」

男はそう返す。ドアを完全に開け放ち、こちらをじっと観察している。

リゾットはそれ以上入って来ようものならすぐさまメタリカで攻撃しようと、乱入者を牽制する。

「ムーロロに用があつてのことなら、悪いがこっちが先約だ」

とうるるるるるん……

リゾットはムーロロのスーツのポケットにあつた電話を取る。番号を確かめ、ムーロロをひと睨みしてからその口元に電話を持っていき、スピーカーフォンにして通話ボタンを押した。

『ブランクです。ムーロロさん？今いいですか』

ブランクの声が荒い音質で聞こえてきた。やけに緊迫しているが、ムーロロにかかってくる電話だ。暗殺チームに何かあったわけではないのだろうか。

乱入者も黙ってその電話を聞いていた。

ムーロロはちらりとリゾットを見てから応える。

「……………ああ。オレだ。何かあったのか？」

『ちよつと相談したいことが。超重要！あの、今お一人ですか？』

「あ、ああ。なんだ」

『なんか息が荒いですよ？あの、ほんとに…』

ムーロロの手のひらに剃刀が“生えてきた”。それを見てムーロロは痛みを堪えながらブランクの声を遮った。

「いついから話せよ。この回線なら盗聴の心配もねーから…」

『…ですか。あの、娘を攫ってみたんですが、ええー、うーん…難しいな。とにかく、ボスの正体がわかりかけて…』

そこで、不意に乱入者が口を挟んだ。

「それはいいね、ブランクくん。ぜひわたしにも教えてくれ」

『……………チョココラータ先生？』

「驚いたな。お前までブランクの関係者か」

「彼はわたしの患者でね」

続々聞こえてきたチョココラータ、リゾットの声にブランクはしばし沈黙する。そしてようやく出てきたのが

『…ムーロロさん、指示をください』

という言葉だった。ムーロロが何を言おうか迷っていると、リゾットが口元から電話を奪う。

「ブランク、オレだ。リゾットだ」

『……………』

「お前に聞きたい事がある。だが、とにかく今は娘を連れて逃げ、ギアッチョと合流しろ」

『……………わかりました』

「いやどうだろう。ここでふたりが死ねばまたわたしと君で楽しく鬼

「ごっつこができる」

「自信過剰のイカれ野郎か？ チョコラータといったな。貴様はなぜここに来た」

「わたしはわたしだよ。ブランク、お前のことを殺してもいいって、ボスが許可を出したからな。まずはお前の大切な人を殺しに来た」

『…………リゾット、チョコ先生は高低差を感知し繁殖するカビをばら撒きます。すでに撒いてることでしょう。今より低い位置には行かないでください』

リゾットはそれを聞いて電話を切った。

「ならば簡単なことだな。オレはお前に近づかない…」

## 夜明けまでの距離

「…マジでやばいな」

ブランクは電話を切ってからぽつりと呟いた。それにメローネが反応する。

「ああ、やばいぞ。ジュニアがあのだジョルノとかいう新入りに見つかった」

メローネはかなり焦ってベイビー・フェイスを弄っている。チャットへの応酬が激しくて、ちらつと見ただけじゃジュニアからのメッセー  
ジが目でおえないくらいだ。

「今ジュニアはどこに？」

「ここから西50メートルの路上だ。やつらここをまつすぐ目指してきてる。現在車外で戦闘中」

「…リゾットさんからも指示が来ました。娘を連れてギアツチョと合流せよとのことですよ」

「よし、もう娘からは絞れるだけ絞ったんだろ？移動だな」

ブランクは慌ててさつき脱いだ上着を着てライフルを担いだ。メローネもポケットからキーを取り出し、部屋のドアを開けた。

「娘は？」

「ソフト・マシーンで畳んであります」

ブランクは自分の胸ポケットを叩いた。

二人は走ってホテルから出てギアツチョの車に乗り込んだ。メローネはジュニアへの指示があるので運転はブランクだ。

本当はブランクはギアツチョの私物に触ったら死ななきやいけなのだが、今回ばかりは仕方がない。

「他人の高価い車運転するのって興奮するゝツ」

「いいから早く出ろ。様子がおかしい…！あの新入り、一体…」

ジョルノは助手席から飛び出したブチャラティと、腕をしつかり抱え込んだスタンドを見て即座にブレーキを踏んだ。車は激しくス



リップしほとんど突っ込むように角のリストランテのテラスを破壊して止まった。

「ブチャラティッ！」

ブチャラティは腕を失いつつも座席の上で蠢いている亀を抱え、車外へ脱出する。ジョルノも転がるように外に出て、すぐにブチャラティと背中合わせになって周囲を警戒する。

鳥が車外からパタパタと飛び立った。それに一瞬気を取られたジョルノに向け、車の下からナイフが飛ぶ。

ジョルノはすんでのところでゴールド・エクスペリエンスでそれを弾く。

「車の下か！」

ブチャラティがジツパーで車を切開する。

「いいや違うねッ！」

車ではなくぶちまけられたテーブルの一部が変化し、ステイツキイ・フィンガーズの足を掴む。

ステイツキイ・フィンガーズは足を掴んだスタンドごと車へ向けて蹴り抜いた。車のドアフレームがスタンドの頭をかち割ったかと思えた。だが

「無駄だぜッ」

スタンドはニタリと笑い、自ら分解して真つ二つになった頭部をブチャラティの脚ごと閉じた。

「チッ……」

ブチャラティは脚を切り離さざるを得なかった。

敵は触れなければ分解できない。つまり触れられたそばから切り離せば一応は致命的ダメージは避けられる。だが結局こちらが損耗していくだけだ。

「ブチャラティ！」

ブチャラティはジョルノへ亀を放おった。スタンドはブチャラティではなく亀を追おうと跳躍した。

「狙いはあくまで亀か！」

ジョルノは無防備なスタンドの腹にゴールド・エクスペリエンスの



「ブチャラティ！腕は…すみません。スタンドと一緒に焼けてしまったようですね」

「いや、いい。オレの腕もお前の能力で作れるな？」

「ええ。時間はかかりますが」

「俺の腕を治し次第、ナランチャの吹っ飛んじまった腕の部品も作ってくれ。すぐ鳥を追うぞ」

「はい。鳥はここから…すぐ先の路上です！」

「走るぞジオルノ！」

「うわ、爆発？」

「クソッ！ジュニアがやられたッ!!」

メローネは怒鳴りながら座席を蹴つ飛ばした。ブランクはエンジンをかけハンドルをぎゅっと握りしめる。

「こりやフルスロットルですね」

ブランクはがごとシフトレバーをいじり、アクセルを踏んだ。

「追跡者は誰です？」

「ブチャラティと新入りのジオルノってやつだ。ジュニアから送られてきた情報から考えるに、新入りの能力は生き物を作り出す能力らしい。…ベイビィ・フェイスと逆だ。それを応用して自分の拳を作ったようだ」

「えーすごい便利。僕の日も作れるのかな？コピーさせて欲しいなあ…」

「呑気なこと言ってんじやねーよ！結局一人も殺せなかったんだぞ」

「それは僕じゃなくて先輩のミスですよ」

「はア?!いやそーだが、そうだな…。クソ…やはり母親ってのは妥協しちやあだめだな。あの女、明らかに健康状態が悪かった…教育する時間もあまりなかったし…」

「世話の焼ける息子ですね」

ブランクはぶつくさ言うメローネを無視してリベルタ橋へハンドルを切った。

直線、あとは飛ばしてヴェネツィアに入るだけ。という時にブランクのスーツに糞が落ちてきた。そしてすぐにその糞の落とし主が半ばぶつかるとしてオープンカーの中に飛んできてブランクの肩によじ登ってとまった。

「えーっ?!どんな確率だよ。飛んでる燕のフンが?当たるか?!なんかデイズニープリンセスみたい!」

「は?燕だって?燕が夜に飛べるかよ」

ブランクが腕を振り回しても風に負けずに燕はまとわりついてくる。メローネはジョルノの能力を思い出した。

生き物を作り出す…

「こいつは敵だッ!」

メローネは燕を叩き潰そうとした。ブランクの肩と挟むように手を振り下ろす。

燕の脆い体はひとたまりもないかに思えた。だが手のひらにグニャっという柔らかい感触がした途端、全身に痛みが走った。

「うッ…!」

「メローネ?!」

全身を上から叩き潰されるような痛みだった。思わず蹲るメローネにブランクはぎよつとする。

「こ、この燕…ダメージを反射しやがった…!」

「ちよこぎいな!」

ブランクはつぶやく。

「何を探知して追ってるんだ…?やはりトリツシユか」

「仕方ないですね。一度ソフト・マシーンを解除します。先輩、運転できますか」

「ああ。かなり食らったがそれくらい!」

ブランクはメローネと運転をかわり、後部座席にトリツシユを広げ、ソフトマシーンを解除する。

元に戻ったトリツシユにとまる燕をすかさず掴み、グリーン・デイを直に食らわせる。肉食カビはあっという間に燕の体を食い散らかした。

「…いる」

そしてブランクは暗闇に目を凝らす。微かに聞こえるプロペラ音はこちらとほぼ同じ速度で後方約150メートルを移動中。

ブランクはライフルのスコープだけ取り出して覗いた。左目で見るとスコープの景色はずいぶん違う気がした。

「敵はおよそ200メートル後ろ…ナランチャのエアロスミスの射程は50メートル…距離を詰められたら面倒です」

「しぶといな。オレたちの能力じゃ奴らはまけない！ギアツチョたちを呼び出すぞ」

「ええ。あつちもつつがなければいいんですが、ねつと…」

ブランクはライフルを組み立てた。右目は使えないためいつもと逆の左側で構え、後ろにかすかに見えるヘッドライトを狙った。夜闇に移動も相まって最悪のコンディションだが、今はできることをやるしかない。

「利き目をやられたのに撃てるのか?!」

「ジュニアなしのメローネ先輩よりはマシでしょ」

「急に言うようになったな…」

道路は直線。車間およそ200メートル。今までの自分なら当てられなくもない状況だが、慣れない腕での射撃だ。

スコープを左目で覗く。銃身を右手で支える。引き金を左手で引く。それだけの事なのに、クソ。ちぎれ飛んだ左耳が痛む。

ブランクは撃った。乾いた銃声が夜闇に響くが当たった手応えがない。

「お…落ち着け…よく見るんだ、標的を…」

ブランクは次弾を装填する。マンハッタン・トランスファーを飛ばすか悩んだ。だがいざというとき自衛の手段がなくなるのは致命的だ。

つまり今、純粋に自分の射撃の腕が問われることになる。よりによってこんなボロボロの状態で！師匠はそういう言い訳を聞いてくれない人だった。

もう一度スコープをじつと見る。揺れてぼやけてよく見えないが、

たしかに車が一台ぶっ飛ばして追ってきてる。

運転席にはブチャラティチームの顔写真のリストになかった人物が座っていた。

「ジョルノ……お前がジョルノだったのか」

直感でわかった。

金髪の巻毛。ギリシャ彫刻のような顔立ち。彼とは以前たった一度だけ出会っている。たまたま手と手が触れ合ったスタンド使いの美少年だった。

「ギアツチョが電話に出ないぞッ！やっぱオレたちでどうにかする他ない」

ブランクは以前やったようにビーチ・ボーイを弾にくくりつけ、車に着弾させだれでもいいから釣り上げようと思った。だが

「ビーチ・ボーイが出ないだど……!?!」

「ペツシがやられたのか？クソッ」

「ギアツチョ先輩はしくじったんですか？」

「オレに聞いてもわかるわけ無いだろう。市内に入ったら面倒だぞ。タイヤとか撃てないのかよブランク！」

「今の僕にはこの遠距離は無理です。70……いや、50メートルくらいなら移動中でもなんとか当たる……と思う。でもそんな近距離に入ったらナランチャに蜂の巣にされる」

「それじゃあ……か八かやるしかないだろう。どっちにしろスピードの出せない市内に入ったらオレたちは確実に捕捉される。相手は4人もいるんだぞ」

メローネの言うことはもつともだった。だがブランクは躊躇う。自分にできるのか？目を潰されて火傷を負わされて、一度惨めに敗北した自分が……

しかも失敗したらメローネも自分も死ぬかもしれない。

「メローネ……でも……は、外すかも……」

「あー？じゃあオレにやれっていうのかお前は」

「だ、だって……全然ダメなんだ！さっきの射撃も……夕方も……今までの僕なら当てられたのにだめだったんだよ！」

「知るか。どつちにしろお前がやるしかない」

ブランクの泣き言をメローネは一蹴した。

「…失敗しても怒らないでくださいね……」

「失敗したらその時はその時だ」

「じゃあ…僕だけ降ります。トリツシユと先輩は巻き込めない…」

「バカ。3人車にいるから勝機があるんだよ。オレは勝ち目のない提案なんてしない。こういうときこそクールになれるのが大人の証なんだよ」

メローネはブランクに命令した。合図をしたら急停車。そして撃つ。極めてシンプルな命令だった。

ブランクは目を瞑り深呼吸した。相手はおそらく一気にナランチャのスタンドの射程距離まで詰めてくるはずだ。あつちも命懸けだから、猶予などない。

ちようど橋の分岐に差し掛かったとき、メローネは思い切りブレーキを踏んだ。

「……」

ブランクは意識を風に集中させる。わずかに川上から風が吹いている。

車は静止し、橋という骨組みを感じるができる。

メローネは運転席からこちらを見つめている。いつでもまたアクセルが踏めるように足は運転席に固定しつつも、シートは最大限に倒してある。

トリツシユがブランクの膝の上で小さく喘いだ。こんな状況じゃなかったら役得なのだが、いまは無駄にこそばゆい。トリツシユの体は運転席から後部座席にかけて横たえてある。

これで呼吸の点がほとんど3つ、並んでいることになる。

ナランチャの二酸化炭素レーダーを誤魔化すために。

「……見えた」

ブランクは4発連射する。勘に任せて。

発砲音が頭に響く。弾は夜闇に吸い込まれていき、ナランチャのエアロ・スミスが車のすぐ真上を通った。

バスンという音が聞こえた。

「メローネ、車を出せ！」

「デイ・モールトゥー！いいぞツ」

4発も撃って1発しか当たらなかった。だが1発はあたたつた。

車がうなりを上げタイヤが橋をこすり、ゴムの焦げる臭いがした。ナランチャがとにかく撃ちまくる前に、運転席を見つめる前に射程外へ逃げなければ。

ブウンと空気を震わすプロペラの音がして頭上をエアロスミスが旋回した。

ブランクはトリツシュを覆うようにして座席にしがみつく。

エアロ・スミスからなにかが降ってきた。

はて？と首を傾げる暇もなく、そのなにかは運転するメローネの首元に落ちた。

そしてそれは鎌首を擡げ、牙を剥いた。

「う、おおオオオーツ!!」

ブランクは右手で蛇をひつつかんだ。頸が締められる感覚がするが、そんなの無視してグリーン・デイを発動させる。だが蛇はそのまま右手に噛み付いた。

「イツ…」

蛇の毒がなんだかブランクはよくわからないが、とにかく、敵がただのシマヘビを落とすなんてまずあり得ない。

「ブランクー！」

メローネが叫ぶ。

「大丈夫！」

ブランクはすぐに蛇に噛まれた部分を自らカビに喰わせた。肉がグズグズになって溶けていくのを感じる。だがこれで毒が回る前に右手の小指球（小指側の側面）の肉を削ぐことに成功した。



「うわーッ?!グロいッ!」

ブランクは自分の手を見て叫んだ。肉と腱の断面から骨がちよつと覗いてた。

「我慢しろ!敵は!」

「ジヨルノ:絶対許さねエーッ!また銃が撃ちにくくなるじゃあないか!なんなんだよ!クソッ!」

ブランクはスコープで後方を確認した。

「ハザードランプだ。事故つたらしい!このまま行こう、メローネ」  
「当然だ」

メローネ、ブランクはトリツシュを有したままヴェネツィア入りに成功した。ブチャラテイたちの車を攻撃している間にギアツチヨから留守電が入っていた。

どうやらバイクは失つたらしい。しかも川を泳いで市内に入ったらしいので、三人の集合は入り組んだ水路の橋の下だった。

ギアツチヨは川から上がるとスタンド能力を解除した。当然髪はふわふわ、服も乾いてる。

「ほんとにちやんとまいてんだろうな?」

「正直保証はできない。なるべく移動を続けよう」

「ギアツチヨ先輩、ペッシ兄貴は…」

「:死んだ。だがブツは回収した」

ギアツチヨがポケットから取り出したのはディスクだった。

バイクの爆発炎上ごときでやられるホワイト・アルバムではなかった。だが炎を消すには川へ飛び込まねばならなかった。

川から顔を出し、敵の位置を確認する。フーゴはもう死に体でミスタの方の銃弾はガード可能だ。

それよりも…

ギアツチヨは遠くからライフルの音がしたのを聞いた。加えてメローネからの鬼電でケツがずつとバイブしてた。

ミスタをぶつ殺すのが早いか、あいつらがブチャラテイどもに捕

まっちまうのが早いから…どう考えてもメローネが捕まるほうが早い。デコっぱちは使えねーしメローネは本体はほぼ無力。だとすれば自分が優先すべきはデイスクの奪取、それ以外にない。

ペッシンが託したデイスクを。

あいつの死体を置き去りにして。クソ。目の前でツクソ脆いカプセルに猛毒？アホかそんな能力！自分で食らって死にやがれ!!

ギアツチヨはキレ散らかしたくなる激情を冷やし、再び川へ潜りそこから撤退した。

「リゾットからの連絡はどうなってんだ？」

「ない」

「チツ…あいつまでなにかトラブルかよ。この3人だけで娘をどうにかするってのは一番避けたかったぜ。メローネ、もうジュニアは作れねーのか？」

「午前四時のヴェネツィアの路上にいい母親がいると思うか？」

メローネとギアツチヨはずんずんと街を歩いてく。ブランクは無言であとをについていった。

ペッシンが死んだ。

ギアツチヨは言葉少なかった。そのせいで全然実感がわかなかった。今日一日でチームの半数が殺されたことになる。

そして…何より自分の命も風前の灯だ。

スパイがバレてムーロロが襲撃された場合の指示は受けていない。

この場合優先されるのは

すべてが失敗しそうになったら、暗殺チームの生き残りを殺してボスの前に首を持ってけ

になるのだろうか？

しかも今ならトリツシユもついてくる。と、なればボスももしかしたら僕を褒めてくれるかもしれない。

でも結局チョコラータは僕を殺したがつてる。これは揺るぎない。

「でもよ…オレはやるぜ。もう降りれねえ。お前もだ。お前もオレもこのゲームに責任がある。途中で情に流されるなよ。だからお前にしっかり命令する。どうにもなんなくなったらチームの生き残りは必ず殺せ」

このままりゾットと合流すれば僕は殺される。リゾットが僕を生かしておく理由なんてあるだろうか。いや、あるはずがないのだ。

自分にはもう、本当に何もなくなってしまったのだ。

携帯電話を見た。1件だけ留守電メッセージが入っていた。ブランクはそれを恐る恐る再生する。

「…もしもし。オレだ。ごめんなブランク」

「こんな形でゲームが終わっちゃうなんてな」

「オレはゲームオーバーらしい」

「お、オレは〃お前にもゲームに責任がある〃 って言ったよな？あ、あ、あれは忘れてくれ」

「逃げろ」

「お前は、ひ、ひとの望む形を…映すよな、鏡みてーに。オレ、お前を初めてみたとき…とき…とき…あ、やれるなって、思ったんだよ。それってよオ…オレがなんかしたかっただけなんだよなアきつと…」

「あれ？なんの話、してんだ…つけ」

「いたい…」

「最後の命令だ。逃げろ」

「ずっと遠い国で、師匠探す旅でもすりゃあいんだ。ホントは、おまえはそーすべきだったんだ…」

「ブランク、逃げろ」

「逃げてくれ」

「…め…ん」

「…だって。聞いてたかブランク？お前にも見せてやりたいツ…この顔！この、劇的な瞬間…あゝゝこれを聞いてるお前の顔、絶対に撮りたかった！撮りてエーぜ！なあ、どんな気持ちだ？お前はどうするんだ？これから。次会うとき、必ず聞かせてくれよ。それじゃあまたな！すぐ追いつくぞ」

「……………」

「…おい、ブランクウ！キビキビ歩けよ！てめーはよオオオレは爆発に巻き込まれてんだぞ。なのにテメーよりキビキビ歩いてんだぜ。つーかよお、キビキビってなんだよ？何をどう観察してりやそんな音が聞こえんだ？つーか音なのかこれは？ムカつくぜツ…超ムカつく！キビキビ歩けコラーアーツ！」

「……………」

「なんだ？様子が変だぞ」

「……………」

ブランクの異変にまずメローネが気づき、ギアツチヨがブランクの胸ぐらを掴み揺すぶった。

「もしもし？…聞こえてんのか？オイツ！」

「あー…ギアツチヨ、ちよつと前歩いててくれるか？」

「ああ?!無視かよ！マジでムカつくヤツだなツ！」

ギアツチヨが手を上げかけたとき、携帯電話が鳴った。ギアツチヨはすぐに電話に出た。

メローネはブランクの顔を見る。顔面蒼白で目を見開き、機械的に歩き続けている足を見つめている。

「リゾットからだ。多少手間取ったらしいがもうヴェネツィアについ

た。場所もメモった。早速行こうぜ」

ギアツチヨは携帯をしまうとまっすぐ目的地に向かって歩き出した。

だがブランクは立ち止まり、下を向いたまま動かなかった。メローネはそんなブランクを見て不審に思い、顎を掴んで無理やり前を向かせた。

「ブランク、急にバグってんじゃねえ。何があった?」

「……ムーロロさんが死んだ」

「何?なぜわかった」

「るすろく」

「……………そうか。あいつもこっちに踏み込みすぎたな。気の毒だがしょうがないだろう。オレたちもたまたましてたら同じ運命だ」

ブランクは泣いてはいなかった。ただ、泣きそうな顔で何かを言いたげにしていた。

「なんだ?」

「僕は…逃げたくない」

「あ?だったら早く付いてこいよ。ほら!」

メローネは苛つきながらブランクの腕を引っ張り引きずるようにしてギアツチヨの後を追った。

ブランクの右手はまだ包帯から血がにじみ出ている地面に点々と血痕を残している。メローネは舌打ちしてもう一枚自分のハンカチを巻いてやる。それでもブランクは茫然自失状態だった。

「あのな…恩人が死んでショックなのはわかる。だが腑抜けんのは死んでからにしろッ!」

そこまで怒鳴っても、ブランクはメローネに引きずられるままに無言でついてくるだけだった。

リゾットが指定したのは観光客用のゴンドラ乗り場だった。夜明け前には絶対人がこない場所。3人がそこにつくと、リゾットはまだ姿を見せてなかった。

メローネはバッグからパソコンを取り出し、ディスクを見る準備をする。

ブランクはその傍らに座り尽くしていた。

「ウジウジしやがって…初めて見るな。しよぼくれてるコイツは」

「こいつ昨日からウツ気味なんだよ」

「はあ？なんだそれは。そんなことしてる場合じゃねーだろーがツ  
！」

ギアツチヨが背中を強く小突いてもブランクは項垂れるだけだった。頭をひっぱたいでも同じだったのでギアツチヨは今度は蹴り転がそうとしたら、さっきまで誰もいなかったはずのゴンドラのうち一槽にリゾットが乗っていた。

「リゾット…、その怪我どうしたんだ」

「ああ。手間取ったつてのがそれだ。詳しくは後で話すとして…とりあえずあのボートに乗ろう。そしてディスクの中身を確認する」

ブランクはリゾットを見つめていた。酷く怯えた表情で。だが逃げるわけでもなく、むしろリゾットの方へ歩み寄っていった。

「……………ブランク。お前、何故逃げなかったんだ」

リゾットは傷だらけのブランクを見てたずねる。

メローネとギアツチヨには質問の意味がわからなかった。

ブランクは答える。

「僕は……………僕は、僕は……………逃げたくなかった。逃げたくない。でも……………どうしてなのか、そのあとどうすればいいのか、わからないんです……………」

## サン・ジヨルジヨ・マジョーレ島：夜明け

「オレはお前に近づかない」

電話を切ったあと、リゾットはそれだけ言った。この男の能力が何にせよ、二人の距離は五メートル、メタリカの射程圏内だ。

「一気に決めさせてもらう」

チヨコラータの背後にスタンドが出現した。ふいごのような音を立てて何かを散布しだす。ブランクの言う「カビ」だろう。

「ッ…ふッ…グエエエーッ」

だがやつがカビを噴霧すると同時にこちらもメタリカを発動した。チヨコラータの頸動脈にすでにメスができて始めている。

「このまま搔つ切らせてもらう」

「ゲッ…ゲフッ！」

チヨコラータの頸を切り裂いてメスが飛び出してきた。血が派手にぶちまけられ、勝負は一瞬で終わったかに見えた。

「ゴボ…ゴボボ…焦った、ぜ…チョー焦った…ゴホ…」

「な…」

チヨコラータの首には灰汁のような色をしたカビがまとわりついていた。チヨコラータはさらにそこに指をつつこんでぐちゅぐちゅと動かした。指先にはちいさな釣り針のようなものを挟んでいた。手術に使う縫合用の針に見える。

縫ったあと脈に合わせて、血がびゆるびゆる漏れ出していた。だが致命傷ではない。

「…おお…駄目だな、漏れちまうぜ…でも脳によおー、血が行くには十分だ。死ぬかと思った…」

「…何度縫おうと無駄なことだ」

リゾットはまたチヨコラータの皮膚下、手首にカミソリの刃を作り出す。

「ハッ、ビミョーに遅いぞ。射程ギリギリなのか？」

チヨコラータは先程自分の喉を切り裂いたメスを拾い上げ、ムーロ口に投げた。

「グガッ……」

それはムーロクの脚に命中し、ムーロクは蹲った。だが頭を少し下げただけで、顔面にカビの侵食が始まった。

「ひっ……何だこりゃあー!」

そして自らはバックスステップで部屋のドアから逃げ出す。きん、と音を立ててヤツの体内からでてきた刃が床に落ちた。

チヨコラータは部屋から出て、階段の手すりにしがみつきながら自分から生えてきたカミソリを引き抜き床に捨てた。そしてリゾットに大声で話しかける。

「お前もすでにカビに寄生されているぞ。そいつは高低差を感知する。…残念ながら、お前らはもうここから動けないってわけだ。だがオレはお前に近づけない。…そこでどうだろう? 取引しないか? オレはお前に近づかなければいい。お前はそこから動けないんだぜ? 膠着状態はお互いにとってよくねーんじゃないか。…オレがお前から逃げるのは簡単だ。階段を降りりゃーいいんだからな! ムーロクさえ引き渡せばとどめを刺すのはやめてやるよ! そいつを窓から落とせばいい!」

「膠着を好ましく思わないという点では同意する。だがオレがここから動けない、と決めつけるのも早計だ…」

「何?」

「ばすん、という音がした。」

一瞬なんの音がわからなかったが、その後漂ってきた焦げた匂いですぐリゾットが何をしたのかわかった。

チヨコラータは即座に階段を駆け下り、建物から出た。

「おいおい……だいぶ正気じゃねーな、リゾットとか言ったな。あいつ通電殺菌しやがった…」

カビとて人間と同じ真核生物だ。グリーン・デイのカビはスタンドが作り出したものだが、生き物に違いない。

通電により発生するジュール熱で体表から体に根ざした菌をまと



めてぶつ殺す…なんていうのは普通やれない。カビを殺せる電流を流したら普通心臓が止まって死ぬからだ。

あれ程の殺意をまとった男が、か八かの賭けに出るわけがない。心停止を避ける手段があるのだろう。おそらくスタンド能力に関係した何かがある。

「だがあいつのスタンドの秘密はちよっぴりわかった：鉄分だな。血の中の鉄分で刃物を作りやがる。そしておそらく、磁力を持っている」

先ほどムーロロに投げたメスの軌道がやや不自然だったのはやつに引つ張られてのことだろう。

チョコラータはリゾットのいるはずの部屋を見上げた。あいてなかったはずの窓が今は開いている。

「グエツ」

バチンという音がしてチョコラータの左耳が切断された。いつの間にか出現した裁ちばさみが今度は肩口に突き刺さる。

「建物の上から来るな…」

だがリゾットの姿は見えない。チョコラータは耳を拾い、大声で叫ぶ。

「おいセツコ！まだなのか」

返事は足元から聞こえた。

「うおッ…オオッ！」

「よし…」

リゾットが第二撃を与えようとしたときどぶんと音がして地面が波打った。

「もう一人いたのか…」

泥色の全身スーツを着た男が地中から浮いてきて（としか形容できない）、チョコラータにロープを投げ渡した。その男はムーロロを担いでいた。

「悪いがどうしてもこいつは加工しなきゃならないんでな…お前と殺し合いをしている暇はないんだよッ！」

チョコラータはセツコが破壊した車のドアを、まるでサーフィン

ボードのように液化化した地表に置き、それに乗る。するとスーツの男が獣じみた咆哮をあげ、一気にスピードを出して泳ぎ去って行ってしまうた。

「地面を液化化するスタンドと高低差を感知するカビ：ブランク、とんでもない奴らに追われてるな…」

リゾットはそのまま地面に降りた。もうメタリカの射程からはるか彼方へ逃げる二人とムーロロを追うのは不可能だ。いや、そもそも追う必要はない。

「時間とダメージを無駄に食ってしまったな…」

リゾットはすぐさま自分のバイクに向かい、エンジンをかけた。

「急がなければ。オレたちの目標はあくまでボスだ」

そして、リゾットはついにボスに手が届きかけている。

「……………ブランク。お前、何故逃げなかったんだ」

「僕は……………僕は、僕は……………逃げたくなかった。逃げたくない。でも……………どうしてなのか、そのあとどうすればいいのか、わからないんです……………」

リゾットは、そう言って項垂れるブランクの襟首を掴み、ボードに乗せた。ブランクは尻もちをついたまま動かなかった。

「ムーロロはチョコラータに連れ去られた。オレは追わなかった。もとから殺すつもりだったからな」

「……………」

「お前についても同じように扱うとは考えなかったのか」

「…考えました。……………でも、逃げたく、なかった…今更、逃げ出せません」

「逃げたくなかった、か。お前からそんな言葉が出てくるようになるとはな…」

「……………」

メローネとギアツチヨは事情がよく飲み込めなかった。

「リゾット、こいつなにやらかしたんだ？」

ギアツチヨの問いにリゾットは淡々と答えた。

「こいつはムーロロの命令に従い、親衛隊のスパイとしてオレたちのところに来た」

「なツ：何？それは：確かなのか？」

「オレも気づいたのはごく最近だ。妙に思ったんだよ、娘がいるとわかったあと、組織が動き出すまでのタイムラグがありすぎる。情報が意図的に操作されているのは明白だ。あいつはオレたちにまず情報を与え、裏切りの先陣を切らせたんだ」

「おい、おいおいおい：あいつはオレたちに裏切らせて、何がしたかったんだよ？」

「さあな。：オレたちが失敗しようと、きつとどうとも思わなかったことは確かだ。成功したら協力者、失敗したら知らん顔を決め込むつもりだったんだらう。いざとなりやブランクをスケープゴートにしてな」

「：ブランク、テメーはムーロロに何言われてたんだよ。ボスから何指示されたんだ。全部話せよクソヤローツ」

ギアツチヨはブランクを無理やり立たせる。船が大きく揺れるがお構いなしだ。

「は：はじめは：暗殺チーム内の裏切り者を特定せよとのことでした。任務を遂行し、ボスとのコネクションを作るようムーロロに言われました：。その後ボスより暗殺チームの監視を命じられ、今にいます。ムーロロからも、同様です。僕はムーロロのゲームのために、ここにきました」

「じゃあなにか？テメーがソルベとジェラートを売ったのかよ」

ギアツチヨが今にも爆発しそうな様子で言った。ブランクは少し躊躇ってから首を縦にふった。ギアツチヨはその頭を即座に殴った。ブランクは後ろに倒れ、ボートがかなり大きく揺れる。

「テメーが、テメーのせいでオレたちは組織であんな扱いされたってことかよ。なあ。ゲームだと？ふざけてんじやあねエぞテメーーツ

！」

ギアツチヨは転がったブランクに馬乗りになって胸ぐらを掴んだ。  
「すみません」

淡々と答えるほかないブランクをギアツチヨはまた殴りつけた。  
顔の左側を殴ったせいで、耳の傷が開いたらしく、血が船底に飛び散った。

「謝ってんじゃねーよ！ふざけんなッ！クソが！テメーが始めっからオレたちに知ってること全部いつてりやホルマジオたちだつて死ななくてすんだんじゃねえーのかよッ！」

ブランクはホルマジオの名前を聞いてようやく目に涙を浮かべ始めた。それをみてギアツチヨはもう一発ブランクを殴りつけた。

「オレたちの情報を買ったのか？スタンド能力の情報を」

メローネが尋ねると、ブランクは口から抜けた歯を吐き出してから答えた。

「はい。ですがムーロロに『ベイビィ・フェイス』と『マン・イン・ザ・ミラー』については伏せておくと指示されていました。リゾットの能力は知らないので教えていません…」

「そのムーロロへの最後の電話でお前は何を伝えようとした？お前は確かボスの正体がわかりかけた、といったな」

リゾットが尋ねるとブランクはしばし逡巡してから答えた。

「……ええ。トリッシュを観察してわかりました。ですが…」  
「今ここで言え。もう時間がない」

ボスからの指示

このDISCに入力している情報はネアポリスの町から列車に乗った時点で入力されたものである。

これから君たちが向かうのは「サン・ジョルジョ・マジョーレ島」  
たった一つ教会のみある島で、そこにはたったひとつの大鐘楼がある娘を連れてくるのはその「塔の上」

娘を塔の上に連れてきた時点で君たちの任務は完了する

指令1：塔には階段はなく、現在エレベーター一基のみで塔上に登るこ

とができる。エレベーターに乗れるのは「トリツシユと護衛ひとりのみ」である

指令2：護衛の物はナイフ、銃、携帯電話等あらゆるものの所持を禁止する

指令3：島にはこのDISCを手に入れてから15分以内に上陸しなければならぬ。なおこのDISCには発信機がついているのでこのDISCが移動していることはすでに確認している

指令4：他のものは船上にて待ち、上陸は禁止する

「今ここで憶測を言うのは、先入観により判断を鈍らせることに繋がると思っています。一つ確かなのはサン・ジオルジョ・マジョーレ島に必ずいるということ。それだけです」

「テメー……ここまで来て情報を隠すのか？」

「違います。あまりに……直感的なものなので……」

ブランクはいったことを後悔したような顔をしていた。自分でも確証のない勘なのだろう。

ギアツチヨは静かに怒りをためこんでいるようだった。

「確かに、あの島に必ずボスはいる。そして……娘はオレたちの手中にある。これがおそらくボスを殺す最後の、そして最大のチャンスだろう」

「問題は娘を連れてきたのがブチャラティのチームじゃないと気づかれたとき、ボスがどうするかだな」

「娘を奪還するだろう。ボスが強力なスタンド能力を持っているのは確実だ。ここまで手間をかけて導いた娘を奪還せず逃げ出すとは思えぬ。ここで終わりにするだろう」

「リゾット、お前が行くつもりなのか」

「ああ。オレが適任だ。もちろんボスにここでとどめを刺すのが一番いい。だが、万が一失敗した場合、メローネ、お前がボスを殺せ」

「ボスの血液を手に入れてか」

「そうだ。俺が適任だといったのはそこだ。そしてギアツチヨ。お前は荒巻く海でも止められる。…そうだな？」

「…ああ。その気になりやーな」

「お前はボスの逃走経路を潰せ。オレがボスを仕留め損ねた場合、状況を見て殺れそうなら殺れ。無理ならばメローネと協力してボスを追いかけて、暗殺しろ」

「わかったぜ、リゾット」

「了解」

三人は自分の仕事を確認し、互いを見つめ合った。

そしてまだ倒れたまま動かないでいるブランクを見てギアツチヨが軽蔑したように足で踏みつける。

「…で、こいつはどーすんだよ」

「…メローネ、見張ってる。本当に、何もかも失敗したとき、トリツシュをじっくり観察したこいつが最後の頼みになるだろうからな」

「はいよ」

「そんなの必要ねえーつツの…クソツ！全部終わったらオレはお前をブツ殺す！覚悟しとけよ」

ギアツチヨは一発蹴りを入れて、川に飛び込んだ。ブランクは無言でボートの底に倒れたまま動かなかった。メローネは呆れた顔でそんなブランクを一瞥し、遠くに見える朝日に照らされるサン・ジョルジョ・マジョーレ聖堂を見上げた。

トリツシュは目を覚まし、自分が見知らぬ男に抱えられているのに気づきギョツとした。とつさに叫ぼうとするがすぐに口を塞がれ、地面に降ろされ、後ろ手にしっかりと腕を固定されてしまう。

とんでもなく素早い手付きに「自分は殺されるんだ」と思った。

だが、聞こえてきた声は思っていたよりも落ち着く、低く安定したものだ。

「オレはお前に何もしない。お前の父親はこの教会の大鐘楼にいる。そっちに用があるだけだ」

確かに鉛のような冷たい殺意を感じるが、それはトリツシユではなく別のところを向いているようだった。

「…じゃああんたが…父を裏切った、チームのボス？」

「そうだ。邪魔をするな。それだけだ」

男は教会の門をくぐり、中の装飾には見向きもせずそのまま礼拝堂から出て廊下に出る。廊下の奥にはエレベーターがあった。

「でも父を殺すつもりなんでしょう…」

「会ったこともない父親でも殺されるのは嫌か」

「…そうじゃないわ。…ただ、結局私はほとんど何も知らずにここまで来てしまったんだって…おもっただけ」

エレベーターが到着した。リゾットは念入りに中を調べる。不審なものはなく、操作パネルももグラウンドフロアと最上階と開閉ボタンのみ。生き物の気配もなかった。

リゾットはトリツシユを籠に乗せようと腕を握る手に力を込めると、トリツシユは急にリゾットに尋ねた。

「…あの子は。ブランクって子」

「…あいつは生きてる」

「そう」

なぜ急にあいつのことをきくのだろうか。ブランクがトリツシユを深く知ろうとしたとき、トリツシユもまたブランクのなにかに触れたのだろうか？

だが、そんな事を考えている暇はもうない。

リゾットは最上階のボタンを押した。

「ブチャラティは『失敗』したか…」

教会入り口の監視カメラの映像がブラウン管に映し出されている。それを見て男はため息を吐き、座っていた椅子から立ち上がった。

「見込みがあると思っただけに残念だ。しかし、捉えようによつては幸運とも言える。始末しなければならぬものが同時に現れた

のだからな」

リゾット・ネエロ。

ヤツの能力は未だ不明だ。リゾットから始末するとなると相当手こずるに違いない。そうこうしているうちに仲間を呼ばれたら厄介だ。

故にトリツシユの確保が最優先であることに変わりはない。己の正体につながるものは必ず消す。

追ってくるようならば、能力の正体を暴いてやる。

「誰だろうと私の永遠の絶頂を脅かす者は許さない」

エレベーターが浮上する。天井がガタガタと不安な音を立てた。

「あの子が言った。……あたし……殺されるの？」

「…オレには関係のないことだ」

ブランクがなぜそんなことを言ったのか。あいつは意味なくに人を怖がらせるようなことは言わない。トリツシユ越しに感じたボスの魂を見てそういつたのだろうか。

正体がわかりかけた。判断が鈍ろうがなんだろうが、聞いておけばよかった。

「あいつはなんて…」

リゾットはハツとして自分が掴んでいたはずのトリツシユの腕が、いや。トリツシユが消えたことに気づいた。

「…これは…ボスのスタンド能力か」

エレベーターの床に大穴が空いている。リゾットは迷わずそこから下へ出て、壁にあるメンテナンス用のハシゴに飛び移った。

姿が見えない。だがそれは想定済みだ。

「娘の場所ならすでに、捉えているぞ。……下か。納骨堂へ向かったな」



ギアツチヨはメローネからリゾット上陸の知らせを受けて、メローネたちのいるボートと反対側にある船着き場上がった。

「クソが…ホワイト・アルバムは潜水スーツじゃねエーのによオオ…どうしてこんな潜んなきやいけねーんだ？そもそもなんでこんなところに街なんか作ったんだ？」

ギアツチヨは一度能力を解除し、曇ったメガネを拭きながらつぶやいた。

「だいたいよオ、フランスのパリは英語ではパリス(P a r i s)っていうくせに、みんなはフランス語通り「パリ」って呼ぶ。でもヴェネツィア(V e n e z i a)はみんな「ベニス」って呼ぶんだよ…『ベニスの商人』とか『ベニスに死す』とかよオ…。なんで『ヴェネツィアに死す』ってタイトルじゃあねえエーんだよオオー!!なめてんのかアー…このオレをッ！イタリア語で呼べイタリア語で！チクシヨオーツムカつくんだよ！コケにしやがって！ボケがッ！」

怒りを発散した後、すうと息を吸ってから教会の出入り口の位置、船をおいておけそうな場所を見取り図で確認し、ボスが脱出する際使うであろうルートを絞りこむ。

めちやくちや集中して考えてると、ちゅんちゅんうるせー鳥共の鳴き声に混じって波を切る音が聞こえた。

「……あ？」

集中が妨げられてイラツとして周りを見渡す。この時間に船が出るとしたら漁師だろうか？ヴェネツィアにいるのかそんなの。

遠く見える対岸の街並みをぐるっと見渡す。

見間違いではなく、1艘のボートがこちらに向かってくるのが見えた。

「メローネ…やっぱまけてねエーじゃねーかよ」

ブチャラテイたちはクラツシユのあと、ミスタとフーゴと合流するためにサンタ・ルツィア駅に向かった。橋からそこまで遠くはない。

だがひと目で戦闘が起きていたことがわかった。

「フーゴ！」

いち早く駆けつけたブチャラティはちょうどミスタが川からフーゴを引き揚げているところに居合わせた。

「なにがあった？」

「二人の敵と遭遇。一人はやったが、ディスクは奪われちゃった。…ッ！フーゴも左手を失った」

「負傷に関しては心配ない。…だが、フーゴは一体何があったんだ？ 全身が…凍傷、なのか？ひどく変色してる」

「ディスクを持ち去った敵は氷を操るスタンド使いだ。やべーぞブチャラティ。このままじゃフーゴが…」

「ジオルノ！治療は可能か？」

「左手や、ひどく損傷している脚ならば新しく部品を作ることはできません。ですが…全身ではどうしようもない。適切な治療を受けなければフーゴは死にます」

「……わかった、ナランチャ、もう動けるな？」

「あ、ああ！動けるよ！フーゴを病院に連れてくんだな？」

「そうだ。大急ぎで連れてって、戻ってこい」

「うん。わかった」

「ミスタ、覚えてる限りでいい。敵は仲間と連絡をとった素振りは見せたか？」

「……いや、すまねえ、わかんねえ。その爆発させたバイクはやつらのみてーだが、川を泳いで消えちゃった」

「ムーディ・ブルースでの追跡は困難か…」

「いいや、ブチャラティ。諦めるのは早いぜ。二人組の方の車が乗り捨ててあるかもしれない。そっちを当たろう。敵は必ず合流するために連絡する」

「…そうだな、まだ諦めるには早い。トリツシユは生きてる、奴らがボスに接触する前に必ず取り戻す」

ブチャラティの言葉にアバツキ才は力強く頷いた。ジオルノは二人についていきながらも考え事に耽っていた。

「おい、遅れてんぞ」

ミスタはさつき怪我を治して（と言っても部品で埋めただけだから完治ではないのだが）平気で走っている。

「考え事か？」

「いえ……この護衛任務が失敗したらボスは僕たちをどうするつもりかと」

「そりゃあんま考えたくねーな」

ジヨルノは考える。このまま暗殺チームがボスを殺した場合、組織の支配権を得るのは奴らだ。ボスの正体は誰も知らない。だからこそ、今ここで暗殺が起きて誰かが成り代わっても問題ない。

暗殺チームが支配権を手に入ればブチャラティチームに復讐するのは明らかだろう。

だがこのまま暗殺チームがボスを殺し損ねても  
任務失敗とみなされ、ボスに処分される可能性が高い。

トリツシュを奪われた時点で自分たちは道が残されていないのだ。

ブチャラティも当然そこに思い至っているはずだ。

彼が今何を考えているのか。真つ直ぐな志を持った彼のことだ。  
だからこそ今、必死にトリツシュ奪還へ動いている。

ジヨルノとしては、顔の知れないボスよりは暗殺チームとやり合う  
ほうがマシだ。

「ムーディ・ブルースが痕跡を見つけたぞ」

教会左手の船着き場。

メローネはギアツチョにリゾットが上陸した旨を伝えると電話を切った。ブランクはギアツチョに蹴られたままの姿勢で倒れたまま、死んだクラゲみたいに船底にへばりついている。

「おーい……ブランク。おい。いい加減顔あげろよ……昨日今日で一気にめんどくさいヤツになったなお前」

ため息混じりにそう言うと、ブランクは口を開いた。

「……メローネはなんで僕に怒らないんですか」

「は？怒ってほしいのか」

「……や、殴られるのは……やですな……」

「オレが喚き散らさないのは今更怒ってもしょうがねーからだよ。そうだろう？もともと暗殺チームは疑われてたんだ。そこにお前が来ようとか来まいと、いつかバレてソルベとジェラートは殺された」

「……でも、彼らを特定したのは、僕です。僕は……二人の拷問にも立ち会いました」

「……あれやったの、誰だ？」

「チヨコラータ先生です。今は僕を殺そうと追ってきてる……」

「へえ。じゃあちようどいいな。お前を餌にそいつにも復讐できるわけだ」

メローネは教会を見上げながら言う。ブランクは上体を起こし、自分の耳から垂れてる血を見た。朝日がまだ教会の影になって届かないせいか、どす黒く見える。

「……僕にまず復讐しないんですか……僕は……ずっとあなた達を裏切ってた」

「逆に聞くんが、そう思ってたんならなんで途中で逃げなかったんだよ。死にたかったのか？」

「……死にたくない。でも、逃げるのは死ぬのと同じだ。僕は矛盾してるんです。……僕はあなた達が好きだった。僕は、最悪の場合あなた達を殺せという命令を受けていた。でもできなかった」

ホルマジオの死体が頭をよぎった。焼け焦げた見知った顔。そして列車の車輪の隙間に見えた、ちぎれかけたプロシユートの脚。

イルーゾオがバイクで自分を突き飛ばしたときの目、ペツシが分かる前に握った手。

全部、もう二度と戻ってこない。この世から完全に消えてしまったものたち。

メローネはただ黙ってブランクの独白を聞いていた。

「僕は自分がない。空っぽだ。誰が死んでも悲しくない。何がどうなっても痛くない。傷ついても、それは演技している架空の人格だから」

ら」

涙が溢れてきた。止められなかった。自分の感情がこんなに制御できないことなんて今まで一度もなかった。

「でもそうじゃあない。もう嫌だよ、メローネ…。僕はもう、自分が空っぽだなんて言えないよ…。もう、誤魔化せない…。僕はどうしようもなく…。辛い…。…」

ブランクは跪くように泣いた。頼りない肩が揺れて、嗚咽を漏らしている。朝日が差し込んできて、ブランクのきれいな赤毛を照らした。船底に溜まった血と同じ鮮やかな朱色だった。

メローネははじめてブランクを見たとき、男か女がよくわからないし、大人か子供かもわからない妙なやつだと思ってた。

仕事を一緒にやりはじめて、飄々とした姿を見て、ペツシよりよっぽど大人びてるなど感心することもあった。

だが2年共に過ごして、死闘のはてにここまで辿り着いて、ようやく確信した。

こいつは年相応の脆さを持った、ただのこどもだ。

「…だからオレはこどもって嫌いなんだよな…」

# Awaken

1997年、春

噴水の音がした。外からの光がレースのカーテン越しに外の庭の木々の柔らかい影を作ってる。ちよつぱり湿っぽい空気は、こないだまでいた砂漠と全然違って、体がムズムズする。

フカフカのソファに、ピカピカのテーブル。上には金色の何に使うのかよくわからない器だとかライターみたいなものとかが置いてある。壁には絵と十字架がかけてあって、なんだか厳かな雰囲気だ。

扉の向こうから音がした。僕は師匠を見上げた。師匠は扉を開ける主をまっすぐ見ていた。

入ってきたのは浅黒い皮膚をした男だった。胸に十字架をくっつけているから神父か牧師なんだろう。師匠の訪問をあまり快く思っていないようだった。

「その子が電話で話していた子か」

「ああ。ブランクって呼んでる」

師匠は僕を立たせた。普段着ないような襟付きの服を着せたのはこのためだったらしい。

神父は僕を頭のとっぺんからつま先まで見つめた。そして何か汚らしいものを見るようにして目を逸らす。

「こんな子を代わりにする？頭がおかしいんじゃないか。彼は、もういない。どんな才能があったって彼になりうる人間なんてこの世に一人もいるものか」

「待ってくれ。それだけじゃない」

師匠は机の上に地図を広げて指差して、継るような必死さで神父に説明する。

「この子は、彼の…子どもかもしれない。その可能性だってある。生まれながらのスタンド使いで…みる、地図、彼の旅した場所で……！」

神父はそれを机から叩き落として怒鳴った。

「代わり？代わりだって？彼の代わりなんてあるものか！彼は失われたんだよ、永遠に！そんなちっぽけな代用品で私と彼の関係性まで穢

すな！」

僕は神父を眺めた。僕は自分が怒鳴られようと殴られようと何も感じない。でも、その言葉に師匠が傷つくのはわかった。

師匠は落ちた地図をただ黙って見ている。

神父は激昂したことを恥じるように口を一度覆ってから、今度は静かに言った。

「この子と君の出会いには運命かもしれない。だがそれは、彼とは全く関係ない別の引力だ。いい加減現実を見ろ。年も合わない。それに彼に似てるとこなんて何一つないだろ」

師匠は黙りこくってしまった。僕は師匠が僕をどうしたいのか、直感でわかってても言葉にはできない。ただ、少し前から彼の心に迷いを見ていた。

神父はそれをズバリ言い当てたんだろう。

「……」

「…教会から孤児院を紹介できる。置いていくか？」

神父の言葉に、師匠は首を横に振った。

「いいや…オレは、諦めない…こいつは、いつか弾になる。あの、空条承太郎の心臓を貫く銀の弾丸に」

「そうか」

神父は嘲るような口調だった。

師匠は僕の手を掴んで部屋から出た。その手はとてもあつかった。

僕はそのあつさにおどろいて思わず尋ねた。

「ししよう…ぼくはここに残ったほうがいいですか」

「残らないよ。お前はオレと一緒に行くんだ」

「どっへ」

「どこまでもだ。道を見つけるまでどこまでも」

あの時師匠の手に宿ったあつさが、急に瞳に涙として宿った気がした。頬から水滴がこぼれ落ちた。それは涙ではなく、血だ。

船底にはブランクの血がたくさん流れていた。朝日に照らされて

いる朱色の血。生きている証拠。

「僕は空っぽなんかじゃない。それを隠すのがうまかったただけだ。だからここまで…失うまで、気付けなかったんだ…」

顔を拭う。だが手も血だらけだから効果がないかもしれない。でももうそんなことブランクにはどうでもよかった。ただ頭と胸がねじ切られそうなくらいに苦しい。

「辛い、苦しい…寂しい…みんないなくなっちゃった。耳も吹っ飛ばし、目も潰れるし、手もえぐられるし……しこたま殴られたし…」

「最後のだけ自業自得じゃないか？」

メローネが突っ込む。確かに今痛むのはほとんどギアツチヨにぶん殴られた部分だ。

「もう傷つきたくないよ…」

「傷つかない人生なんて死んでるのと同じだろ。…ついかめそめそ鬱陶しいな…あれもこれもやりたくない、じゃあどうしようもないだろ。イヤイヤ期つてやつなのか？」

ブランクは黙って、鼻水を啜った。メローネは教会の方をじっと見つめた。そして滔々と昔話でもするかのようにブランクに話し始めた。

「オレたちはお前がきてから散々だったぜ。名誉も地位も、尊厳も何もかも、ハゲタカみたいなヤツらがこぞつてオレたちから奪っていく」

ブランクはまた胸がいたんだ。足元を睨みつけて黙ることしかできなかつた。

「この世界じゃ全員が奪う側に回ろうとする。でもオレたちははじめからそういう奪い合いゲームの中で生きていた。それまでずっと奪う側だったから忘れてただけで」

暗殺は人間の命を「奪う」ことだ。人間から奪えるものの中で一番重いものを奪い、対価を得る。そうしなければ生きていけないから。

「誰も彼もがお互いに奪い合う。それが世界のルールなんだ。こう



なったのはお前のせいじゃない。ギアツチョコもわかつてる。もっと大きなものが、オレたちをこんなところまで追いやったんだよ」

「……そんな理屈…僕にはわからないよ」

「そうか？お前もずっと、誰かに都合よく搾取されていたろ。ムーロ口に、ボスに。お前は奪われ続けてたんだよ」

イルーゾオの言葉が、ふいにブランクの脳裏に蘇った。

テメーが毎日を作り過ごせねえ程に怒ったことねーのは、テメーがボケっと生きてるからだろ

そう、僕は毎日を、漠然と、やり過ごせば幸せだと思ってた。

誇りとかクセーこと言うつもりはないが、そういう生きる支柱みてるのが傷つけられた時に怒るんだよ

僕はいま怒ってるのかな、イルーゾオ。

それがわかんねーってことはてめーは今まで誇りなんて感じたことなかったってことだ

ブランクはやつと、身体を起こした。そしてメローネをまつすぐ見て問いかける。

「……メローネは…僕がここで逃げ出したら、僕を殺す？」

「…まあ一回限りで見逃してやるよ」

「どうして？」

「さっきお前に助けてもらったから」

「……それだけ？」

「あつ、おい。オレが優しいやつだなんて勘違いはよせよ。そうじゃあない」

メローネはわざわざ手をびしっと前にして断りを入れた。そしてブランクの手の傷を指差し、はつきり言った。

「お前は自分が死ぬかもしれないのにオレを助けた。オレがお前を見逃すのはその傷への見返りだ。それだけだよ」

メローネとブランクの視線がかつちりと合った。メローネはトルコブルーの瞳で、ブランクはウルトラマリンの瞳で。ブランクはゆっくり瞬きしてから、目を逸らす。

「……逃げないよ。僕、泳げないし……」

「あつそくかよ。じゃあもう黙って鼻血拭いてろ」

「……メローネ。さつき世界は奪い合いだって言ったでしょ。本当にそうなら、世界は残酷だね」

「そうだ、残酷だ。だからオレたちは奪われただけボスから奪い返してやるのさ」

強いものだけが、勝者だけが、すべてを掴む。それがギャングの掟だ。

「それでお前はどうする。苦しいからってそこに座ったまま動かないのか？」

ディアボロは娘、トリツシユに会ってみて“実感”した。

地下納骨堂に逃れて、高窓から届く僅かな明かりでしか顔を確認できないが、確かに血の繋がりを感ずる。

ほとんど直感で、“これが自分の娘だ”と感ずる。それはつまり、娘も意識があるときならば自分の存在を直感で察知できるといふことだ。

やはり、始末しなければならぬ。自分へ繋がる痕跡は、血はここで絶たねば。

リゾットは完全にまいたはずだ。エレベーターの穴に気づいたところで姿を捉えることはできまい。

ギ…

そこで本来聞こえ得ない音がして、ディアボロは柱の影に隠れる。納骨堂入り口の扉がゆっくり開いている。

「…ようやく辿り着いた。本来ならば沈黙のうちに標的を葬り去るが、お前には…しっかりとけじめをつけなきゃならない。死ぬ前に自分が何に殺されたのか理解してから死んでもらわなければ、仲間が浮かばれないからな」

「…リゾット・ネエロ…何故わたしがここにいとわかったのだ」  
これもやつの能力か？エレベーターから一直線に来なければ追いつかれるはずがない。

一体何を感知している。

リゾットの姿は扉の前から不意に消えた。

階段を降りる靴音が僅かに聞こえた。

ちやり…ちやりちやりちやり…

金属がこすれるような音が抱えているトリツシユのもとから聞こえてきた。

「…これは…」

トリツシユの手だ。左手に小さな切り傷がある。そしてそこから“釘”が生え、階段の方へ引つ張られているのだ。

「まさか…磁力か…！」

ディアボロは迷わずトリツシユの左手を切断した。

「これほど早くオレの能力を悟ったのは貴様が初めてだ。だがすでに射程距離に入った」

射程距離と聞きディアボロはとっさに後ろへ下がる。途端ディアボロの左腕から大量のカミソリが生えてきた。カミソリは手首の動脈を的確に切り裂き血飛沫とともに地面に落ちる。

「何ッ…！」

その血にはおぞましいスタンド像が見える。体内に発現させるスタンド…これでは攻撃されるまで何もわからないわけだ。

血しぶきが空中で止まったように見えた。いや、血が、リゾットにかかったのだ。

姿の見えない理由がわかった。やつは磁力で鉄を操ることができ

る。おそらく砂鉄を纏って磁力で姿をカモフラージュしているのだ。  
「右だな」

こちらがやつの姿をほとんど視認できないのに対して、リゾットはまだこちらの位置を探知している。

いや、もうすでにかなり近くにいるはずだ。トリツシユを探知しているのか自分をすでに捉えているのかはわからないが、とにかくトリツシユを抱いたままでは殺られる。

ディアボロはトリツシユを投げ捨てる。そしてキング・クリムゾンの能力で時を飛ばし、さらに奥へ距離を取る。

だが完全に射程圏外に出ない限りスタンドそのものが消えるわけではない。

「逃がすかー」

納骨堂から外へ抜けようとしたのは失敗だった。この狭い空間ではやつを振り切るのは困難だ。

だが：一度能力の種がわかれば、そしてキング・クリムゾンの射程圏2メートルに入りさえすれば、確実に殺せる。

ヤツの姿は見えないが出血部位から窺える群体型スタンドの密度からして射程は10メートルがせいぜいだろう。離れば離れるほど密度が落ちている。

チキ：

皮膚の下で何かが動く感触がした。左のこめかみだ。やつは少なくとも左側にいる。時を飛ばし一気に駆け寄り、確実に殺す。

離脱までにこのカミソリが体外へ飛び出すのは確実だろう。だがこのままヤツの仲間がやってきて、トリツシユを置き去りにして逃げざるを得なくなるのが一番恐るべきことだ。

「傷を受ける覚悟なくして、何も得ることはできん！因縁を断ち切るための、これは試練だ」

「メローネ…やっぱまけてねエーじゃねーかよ」

ボートはまっすぐこちらへ向かってくる。

ギアツチヨは即座に行動を開始した。

ミスタは遠くに見えるサン・ジオルジョ・マジョーレ島を眺めながら操縦をしているブチャラティに話しかける。船上には二人だけでジオルノとアバツキオは亀の中で待機している。

「…本当に奴らは…ボスはあそこにいんのか？」

「ムーディー・ブルースのリプレイで確かに聞いたろう」

—今ここで憶測を言うのは、先入観により判断を鈍らせることに繋がると思います。一つ確かなのはサン・ジオルジョ・マジョーレ島に必ずいるということ。それだけです—

リプレイで映し出される赤毛の狙撃手は仲間にはひどく殴られていたようだった。ミスタは何があつたのかとても気になったが、前後のつながりまで聞いている暇がなく、リプレイ後すぐにボートを前進させた。

ボートは飛沫を上げて、サン・ジオルジョ・マジョーレ島に向かっていく。

敵の妨害もない。教会内ですでにボスと戦っているのだろうか？だとしたらジオルノの心配事が実現してしまったというわけだ。

そーだとしたら相当ヤバいぜ。まさか4月に入ったせいとか？オレに一月まるまる家から出るなつて言つてんのかよ。クソツツ！

ミスタは心の中で悪態をつく。そして朝日に照らされる教会を睨みつけ…キラリと空中で何かが光を反射しているのを発見した。

「ブ、ブチャラティ！今すぐ船を止めろーッ！」

ミスタはブチャラティから無理やり舵を奪い、ハンドルを思いっきり切った。だが遅かった。

進行方向上に並べられた氷のつららが舟の胴に突き刺さった。

「これは…！」

つららはいくつかブチャラティとミスタの体を抉っていた。飛び散った血で色が付き、まるで剣山のように並べられていた氷の罨が明らかになる。

「空気中の水分を凍らせて作ったんだ！ギアツチヨ：あいつがいる！この周囲に潜んでいるぞ！」

「潜むって言ったってここは…うっ！」

ブチャラティは自分の手に起きた異常にようやく気がついた。ボートについていた手のひらの皮膚が剥がれ、ひっついていてる。

「凍っている…！痛みに気がつかないほどに！」

「下だ！」

ミスタはすぐさま川へ発砲した。弾丸を水中で届けることは難しい。だが敵の姿を確認することくらいはできる。

「イルゼエーミスタ！ヤツハ船底二張りツイテヤガルツ！アンタノ真下ダ!!」

途端、ミスタの足元から底がぶち抜かれ、氷をまとった腕ががつちりと足を掴んだ。ホワイト・アルバムメット越しにギアツチヨとミスタの視線がかち合う。

「引きずり落としてやるぜエー…ツミスタ!!」

「しぶてえヤローだなテメーはよオーツ！」

ミスタは無理やり腕から足を引っこ抜いた。ズボンと皮膚が持つてかれる。血まみれの足さえもどんどん凍りついていく。

「クソツ…！血が凍りつく…！」

ブチャラティが持っていた亀の中からジョルノだけがでてきた。状況を見て息を呑む。

ボートの周りが次第に凍りついていき、スケートリンクか氷山みたくいになってゆつくり川を流れていつている。

「まさか泳ぐしかねーのか?!島まで100メートルはあるぞ」

「いいえ、まだ諦めるには早すぎます」

ジョルノは攻撃により破損したボートの部品を魚に変えた。カプ

り島のとぎと同じことをしようとしているわけだ。

「わかってねーようだな。オレのホワイト・アルバムは…流れる水だろーと関係なく止められるんだよッ！」

ギアツチヨはボートに上がり叫んだ。そしてジオルノたちを追いかけるように水面が凍り付く。

ジオルノは自分以外を亀にしまい速度を上げるが、ギアツチヨは凍った水面をスケートで滑ってきてすぐに追いつき、ジオルノに蹴りを入れた。

するどいブレードがジオルノの背中に突き刺さり体が宙に浮いた。亀はジオルノの手からごぼれ落ち、川へと投げ出されてしまった。

「チ…まあいい。まずはテメーだ新入り…」

ギアツチヨはジオルノから流れる血を凍らせ、蹴り飛ばされたときと同じ姿勢で静止させる。そして空中に氷柱を作り出し、ジオルノの延髄に叩き込もうとする。

「うおおおオーツ喰らいやがれ！」

ドンドンと発泡音がした。どうやらミスタは水面が凍り切る前に亀から逃れ浮上したらしい。

「何度同じことすりやわかるんだ？効かねーつつてんだろーが！」

ギアツチヨはジェントリー・ウィープスで瞬時に氷の壁を作りだし、銃弾を弾く用意をした。

「気を引いたら十分なんだよ！」

「何ッ」

ジイッ

「ジッパ…だと!？」

ステイツキイ・フィンガーズがギアツチヨの足元の氷を切開し川に叩き落とした。

水面下でブチャラティとギアツチヨが対峙した。ギアツチヨは着水の瞬間空気穴を閉じたが、水泡がごぼりと上がったのがわかった。

「オレをなめすぎなんじゃあねーのか？ブチャラティ。流れてる水だろうと、どんだけ体積があらうと…オレのホワイト・アルバムはすべ

てを静止させるぜッ！」

ギアツチヨの周りが瞬時に凍り付く。ブチャラティは離脱が一瞬遅れるが、すんでのところ魚に引つ張られた。すべてが凍っていないとはいえ、水温は零度前後のはずだ。なのに魚はその中を自在に泳いでいる。南極の海であろうと生存する魚はいる。不凍タンパク質を持つ魚だ。

この凍る寸前の水に飛び込むブチャラティも相当肝が座ってるが、あの新入りもまんざらバカじゃないらしい。

水面下まで凍ってしまえば泳いで追いかけることもできない。ギアツチヨはすぐに浮上した。

ブチャラティも水中から上がってきたらしい。ガタガタ震えながら蹲っている。

ギアツチヨの顔面が出てきてすぐ、ミスタは発砲した。氷の壁があるというのにバカナやつだ。すでにかなりスタンドパワーは消費しているがやむを得ない。ギアツチヨは再び自身の周囲の空気を凍らせた。

だがそこで違和感に気づく。

「ッ……」

新入りが自分の背中の傷を抉って、血まみれの腕をこちらに向けて振った。

ギアツチヨは瞬間理解する。

血飛沫はまずいッ……!!

とつさに腕でホワイトアルバムのフェイスカバー部分を覆った。現在ギアツチヨの周りにはなんであれ問答無用で凍る温度だ。そこに真っ赤な血なんてぶっかけられたあとじゃ……!

発砲音が聞こえた。空気穴は閉じている。たとえ弾丸が氷の壁を見切り飛んできたとしても耐えられる。

案の定首筋に衝撃が走った。だがダメージは全くない。ギアツチヨは腕をどけ、勝ち誇ったように言い放った。

「勘がいいなてめーらは……だが一手、こつちが早かつ……」



そこで、本当に一手上回っていたのは相手だったことを悟る。教会からすぐ近くの船着き場のビットにブチャラテイがしがみつき、よじ登っているのだ。

「は？なんであそこにブチャラテイが…」

ギアツチヨは蹲り倒れている氷上のブチャラテイを見た。それは呼応するようにゆっくりこちらを振り向いた。

頭にタイマーがついた、ムーディ・ブルースのブチャラテイだった。「ッ」

ギアツチヨはスーツ内にしまっていた無線機のボタンを押して叫んだ。

「メローネ！ブチャラテイがそっち行ったぞ!!」

「メローネ！ブチャラテイがそっち行ったぞ!!」

無線から突如ギアツチヨの怒鳴り声が聞こえてきて、メローネもブランクもハツとなった。メローネは無線をとって応答する。

「何?!ギアツチヨ、そっち側で何が起こってんだ!?!もしもし?」

メローネの通信にギアツチヨからの返事はなかった。

「……メローネ、僕行きます」

ブランクが立ち上がり、返事も聞かずに船から降りて走り出す。

船から降りて、ふらついた。でも転ばないようにしっかりと地面を踏みしめる。

武器は背中に背負ったライフルにナイフが一振り。

そんなんでブチャラテイを止めて、ボスを倒せるのか。わからなかった。だが立ち止まってる場合じゃない。

教会の扉がボタンと閉まるのが聞こえた。きつとブチャラテイだ。転びかけながら階段を登り、ブランクも扉に到達する。

僕は、この世界は奪い合いゲームだなんて思いたくない。だって僕はたくさん与えてもらった。

師匠にも、ムーロクにも、チームのみんなにも。

奪われ続けていたのなら、みんなが僕に与えられるものなんてないはずでしょう？

世界が本当に奪い合いゲームなら、僕は空っぽか、マイナスになつてはるはずなんだ。

でもそうじゃない。

世界は両義的で、引き裂かれてて、僕たちはその中間を飛ぶ一羽の鳥だ。

鳥はいつか一つの空を飛び続けることになるのかもしれない。

でも、違う空が消えるわけじゃないんだ。

僕はずっと、なにも向き合ってなかった。

辛いことは全部箱の外に押しやって、空っぽの箱の中で呆然と、その空虚な安寧に浸っていた。

でももう、与えられたものについて無視を決め込むことはできない。

僕はもう、ここに留まっていられない。

鳥は、そとに向かって飛ぶのだ。

リゾットは己の勝ちを確信した。ボスは出血した。さらにそれだけでなく、メタリカがすでに発動している。納骨堂は広く、その気になればメタリカの射程内から逃げ出すことは可能だ。

さらに言えばここまで攻撃を加え逃げの一手に徹してるあたり、ボスの能力は近距離パワー型……。こちらが近づかなければ勝てる。

心が踊る。ボスの顔を拝むのが……苦しみに歪んだボスの顔を見るのが楽しみではない。だが、浮かれてはならない。浮かれたや

つから死んでいく…！

磁力によりボスの位置は簡単に探知できる！娘の体以外に磁気を発しているのは…

「もう追い詰めたぞ、ボス…ここが貴様の墓場だ」

柱の影で皮膚がバリバリと剥がれる音がした。だが

「ッ違う…これは」

柱の影にあつたのは。トリツシユの切断された手だ。いや、確かにさつきまで人一人いたはずなのに。

まさか先程から起きている不可解な感覚…いつの間にか行動していたような瞬間が今再びあつた。

その能力を使い移動したのか。

だが、

「どこにいようと…オレの意識があろうとなかろうと、メタリカはお前の体を内側から切り裂くッ！」

感じた。背後だ。

リゾットは振り向きざまに最大パワーでメタリカにより刃物を作り出そうとした。

「喰らえ…ボス！」

だが、目に飛び込んできたのは納骨堂の階段を降りて全力でこちらに走ってくるブチャラティだった。

「ッ…ブチャラティ、だと?!」

メタリカの主たる能力は磁力による鉄の操作である。故に操作するリゾット本人が認識した対象でなければ、活性非活性、または攻撃といったアクションを取れない。

すべての意識を「背後のボス」に向けていたリゾットにとって、背後にいたのがボスではなく、いつの間にか教会にたどり着いていたブチャラティだという衝撃は一瞬の間となった。

「一瞬だ」

その冷たい声に、一瞬が永遠に引き伸ばされたようなどす黒い絶望を感じた。

「ほんの一瞬の隙が…お前の命運をわけたな」

ディアボロはキング・クリムゾンを発動させた。

「隙というものはわたしのキングクリムゾンの能力と少し似ている。つまり意識と意識のはざま。」

己の中へ埋没し現実に出さない『時間』だ。

『キング・クリムゾン』の能力の中ではこの世の時間は消し飛び、全ての人間はこの時間の中で動いた足跡を覚えていない。

だが一度血液内に発現したメタリカは時間を飛ばそうと飛ばさまいと殺意が継続する限り存在する。

つまりスタンド本体のお前が

お前自身が、己自身の意識の狭間に落ちない限りオレの体内の鉄分は奪われ続ける…。

だが今回ばかりは運命が俺に微笑んだようだな」

ブチャラティは何が起きているのか理解ができなかった。黒服の大柄な男が突然、どてつぱらをぶちぬかれて血を拭き上げたのだ。

「なッ…何イ?!」

漆黒の男の背後には真紅のスタンドが立って、拳を振り上げている。

そしていつの間にか、背後に冷たい刃物のような殺意を感じ、ブチャラティは息を呑んだ。

「ここで振り向かずに帰れば、お前に安寧を与えてやろう。お前のおかげで裏切り者のリゾットを倒し、トリッシュも我が手にできたのだ

からな。道中娘を奪われた失態はそれで精算する。…いい話だろう」

ボスだ。今、背後にボスが立っている！

魚に引かれる前にジヨルノから生命エネルギーを与えられたブローチを預かっていた。だがそれをボスにつける隙などあるわけがなかった。

こんなに近く、息遣いを感じるほど近くにいるのに。

ピクリとも動けない…これが、ボス。オレたちがいつか倒すべき相手…

ブチャラテイは、拳を引き抜かれ地面に崩れ落ちた男の向こうに、トリツシュが倒れているのを見つけた。彼女の投げ出された足は失血により真っ白になっている。

冷水に飛び込んだ時よりも背筋が凍りつくのを感じた。

「二つだけ質問させてください。トリツシュの傷は…この男が？」

「…そうだ」

汗を舐めなくなつてわかることだ。

失血した娘を、手首を切断された娘を捨て置いて男の始末を優先し、オレに甘言を吐く男が…娘を保護して安全に匿おうなどと、考えているわけがない。

ずっと想像していた最悪の想像が的中してしまった。

やはり、ボスは…

ブチャラテイがステイツキイ・フィンガーズを発動しようとしたその時、

「お前…一体誰なんだ…？」

ハスキーな声が聞こえた。

階段から光が漏れ、その影がブチャラテイのもとまで長く伸びている。

この声はついさつき、ムーディー・ブルースのリプレイで聞いた。

ブランクと呼ばれていた赤毛の狙撃手のものだ。

「ダメだ早く逃げろ！」

ブチャラティは叫んですぐ前へ駆けた。トリツシュのもとへ、ほとんど飛び込むように。

前後を敵に挟まれる形となったボスは一瞬判断が遅れた。そのおかげでブチャラティはなんとかトリツシュのもとへ辿り着いた。

すぐに彼女の傷をジツパーで塞ぐ。だかもうその時には、悪魔の手は彼に届いていた。

「ブチャラティ！」

赤毛の少年が叫ぶと同時に銃声が轟く。だがもう何もかもが遅かった。

ブチャラティの肩口に物凄いパワーでチョップが叩き込まれていた。その傷は心臓まで届いている。ブチャラティにはわかった。

そしてすぐさま、ジツパーでボスのスタンドの腕を固定した。

「ブランク…撃て…オレごと！」

ブランクは躊躇いなく撃った。一発で仕留められるかなんてわからないので連続で早打ちする。

だが弾はなぜかすべて背後の壁に当たった。まるで弾丸が体を貫くその瞬間、彼らが透明になったかの様に。

「無駄な悪あがきだぞブチャラティッ！」

スタンドは無理やりブチャラティの体からジツパーを引き千切るように拳を引き抜いた。肉と皮膚がぶちぶちと破れる嫌な音がした。

「くツ…」

ブランクはすぐに撃つ。

「弾丸など、我がスタンド、キング・クリムゾンに対して最も無為な攻撃だな！」

キング・クリムゾンはブランクも始末しようとして階段の方へ振り向いた。

だがそこで、納骨堂全体に凶悪な冷気が流れ込んできた。

「これは…ギアツチヨのホワイト・アルバム」

キング・クリムゾンには暗がりから出るのをやめた。すべてを凍らされては地下道から脱出するのは困難。

ギアツチヨが護衛チームの足止めをやめてこちらに来るといふことは、大量のスタンド使いがここにくると同義だ。

いかにキング・クリムゾンといえど複数名相手に正体をまったく見せずに戦うのは無理だ。

「チツ…」

ボスはすぐさま地下道の入り口へ走り、すでにドアに張り始めている氷を破壊し逃亡した。

「り、リゾット…！」

ブランクは薄く張り始めた氷にすつ転んで階段を落ち、リゾットのもとへ駆け寄った。まだ意識があるようだったが、腸が床に飛び散っている。手遅れなのは明らかだった。

「そんな…僕がもっと早く来てれば…」

「い、いや…やつを捉えていながら瞬殺しなかったオレの、ミスだ…：それより」

リゾットは自分の顔にかかった血液を指さした。

「…これが…：ボスの血液だ。受け取れ」

ブランクはいそいでいつも持たされているメローネのサンプル回収キットで血液を採取した。

「ブランク…」

「僕のコピーしてるカじや、治せない…。ごめんリゾット…：僕の…：せいで…」

「違う。これは単なる結果だ。オレは、お前がスパイだとわかってて手元に置いていた。…そっちのほうが、情報を掴むのに都合がいいからだ。…お前だけのせいで片付くもんじゃない」

「でも、僕は裏切ってたんだよ。僕が馬鹿だったせいで、もっと早く片付く問題がここまで悪くなったんだ…」

「…ブランク、オレがお前を罰さなかったのは…お前が…お前がう、奪われ続けてるだけじゃ…可哀想に思えた…からだ」

リゾットは血を吐いた。もう意識も途切れそうなんだろう。虚ろ

な目で高窓からさす光を見ていた。

「だって…それじゃあんまりだ。きつとオレもお前に…何かを投影してたんだな…。ブランク、手を出せ」

「はい」

ブランクはリゾットの手を握った。初めて触れる大きな手はどんどん冷たくなっていく。

「オレの望んでることがわかるか」

「…わかります」

「叶えてくれるか」

「はい…僕は…僕は、自分の意志で誓います。リゾット、必ず貴方の望みを叶えます」

「頼んだぞ」

寒い。ギアッチョのホワイト・アルバムのせいだけじゃなかった。

ここはとても寒くて、暗い。人が死ぬには悲しすぎる場所だ。

ブランクはリゾットの脛を閉じてやった。ここでじつとしてほだめだ。でも、ここにリゾットを留めたままにするなんて嫌だ。

その思いを断ち切り、立ち上がる。

トリツシユとブチャラティが倒れている。彼らにも申し訳ないが、今はリゾットが命をかけて手に入れたボスの血液をメローネに渡さなければならぬ。

トリツシユの喉がかすかに動くのだけ確認した。…ブチャラティはもう、駄目だろう。ブランクが去ろうとするのもわからないらしい。虚ろな目でトリツシユの方を見ている。

ブランクが階段を登ろうとするとブレードが地面を削る音がしてギアッチョが滑ってきた。納骨堂に立ち込める血の匂いに顔をしかめてブランクを睨んだ。

「お前……」

「ギアッチョ、リゾットは仕事を果たした」

ブランクは血液のサンプルをギアッチョに渡そうと手を伸ばした。だがギアッチョはそれを受け取らず、

「よく、ぬけぬけと…」



と怒りを押し殺したかのように言った。

ブランクは腕を伸ばしたまま、ギアツチヨを真っ直ぐ見つめ、強い口調でいった。

「僕はリゾットに、みんなにとてもひどいことをした。それを償うまでは殺さないでほしい」

ギアツチヨは黙った。そしてしつかりと二本の脚で立ってる、だが震えているブランクを見て、小さくため息をつく。

「…ブチャラティの仲間がもうたどり着く。てめーを引きずってちや追いつかれる。おぶされ」

ギアツチヨは背中を向けた。ブランクはこわごわおぶさる。

「うわ…お、お腹が冷える…下りそう…」

「テメーはたきおとすぞ、途中で。こっちはマジで疲れてんだよ…」

ギアツチヨはスピードスケートの選手みたいにみたいに走り出す。背中のブランクのことなんて全く気にしてないフォームだから気を抜くと振り落とされそうだ。

複数の足音が聞こえるが、間一髪、裏口を蹴破って勢いよく外に出た。

外に広がっていたのは思いもよらない光景だった。

「うわ……」

「言ったらーが、海だって川だって、止められる。その気になりやーな！」

目の前に広がっていたのは氷漬けにされたカナル・グランデだった。太陽の光を受けてキラキラと、オレンジ色に輝いている。

着氷し、氷の破片が空へ舞った。ブランクの赤毛が氷を通してピンク色の光になり、背後に積もっていく。

少し滑ると、凍りついた川を走るメローネの後ろ姿が見えた。起きたした街の住人も面白がって、次々と氷の上に立つ。

メローネに追いつくとギアツチヨはブランクを乱暴に背中から振り落とした。

「リゾットはー！」

「…任務は果たした」

メローネの言葉にギアツチヨがこたえ、ブランクはポケットからサンプルを手渡した。メローネは受け取った血液サンプルを見てなんともしえない顔をした。

「詳しいことは…とにかくこの街を出てからだな」

「ああ。まあでもちよつとみてるよ」

三人が岸に上がり終わると、ギアツチヨはニヤツと笑ってお祭り騒ぎになっている凍った川を指さした。

「ホワイト・アルバム解除！」

川は一瞬で溶け、氷上ではしゃいでいた大人、子ども、みんなが水の中に落ちた。

「ハツハツハツ！バカどもが！へへへへッ!!」

「ふ…あはは…はははは！」

「ははは…あは…あつはつはつはー！」

ギアツチヨとメローネは笑った。

ブランクも笑った。涙も出てきたけど、構わずに笑ってやった。

たくさんの舟が落ちた人たちを助けようと川を覆いつくしていく。ついでにいい足止めになったわけだ。

「じゃあ…行こう。次こそボスを仕留めるぞ」

メローネの言葉に二人はうなずき、歩き出す。振り返らずに。

鳥は卵からむりに出ようとする。

卵は世界だ。

生まれようとする者は、ひとつの世界を破かいせねばならぬ。

鳥は神のもとへとんでゆく。

その神の名は、アプラクサスという。

ヘルマン・ヘッセ（実吉捷郎 訳）『デミアン』岩波書店 1959

年  
より

ラン・ライク・ヘル  
道すがら

トリツシユが目を覚ますと、目の前にはすつかりおなじみの亀にはめ込まれたキー越しの少し歪んだ青空が見えた。

夢？

トリツシユは起き上がり、頭をおさえた。すると手首にジツパーがついているのに気づき、起きたての頭にかかる靄が一気に晴れた。

思わず周りを見た。ソファにはジョルノが座っていた。彼もまた寝ていたようで、トリツシユが起きたのを察して俯いていた頭を上げ「おはようございます」と言った。

「あれから何があつたの？…父はどうなつたの？」

トリツシユの言葉にジョルノは言葉を選ぶようにすこし考えながら答える。

「…どこから説明すればいいのか…とにかく、ぼくたちはサン・ジョルジョ・マジョーレ島を出て、ヴェネツィア市内を抜けたところですよ」  
トリツシユは自分の身に何が起きたのか、どんどん蘇ってくる恐怖に思わず自分の腕をさすった。

「…覚えてるわ。あの時、エレベーターで…わたしは…」

「トリツシユ…」

「やはりそうなのね」

「やはり、とは？」

「いえ。攫われたとき、ブランクって子に言われただけ。……父がわたしを…殺すつもりだって」

「もう少し、詳しく教えてもらえませんか。…ぼくたちはボスを裏切った。情報はなるべく共有しておきたい」

トリツシユはジョルノの言葉に驚いて尋ねる。

「裏切った…？…どういう事なの？…どうしてあなた達が」

「きみの護衛任務は失敗した。どのみちぼくたちには未来がない。それに……きみを、娘を始末するようなボスに忠誠を誓ったりはできない

い。ぼくもブチャラティと同じ意見です」

「……あなたとブチャラティのほかには誰がいるの？」

「フーゴ以外は全員です。フーゴは再起不能だ……ぼく的能力でも治療しきれなかった」

「……そう。そうなのね……」

「トリツシユ、疲れてるだろうけど今すぐ教えてください。暗殺者チームと何があったのか。奴らの情報を……」

「……ちよつと、ちよつとだけ時間をちようだい。一人にして。整理したいわ」

「………わかりました」

ジオルノは亀の中から出ていった。トリツシユは膝を抱えて脳裏によぎる様々な出来事について思いを巡らせた。父親、裏切者、生死。どれもこれも今まで生きてきた15年間、考えたこともなかったような事ばかりだった。

たつぷり30分はそうしていただろうか。「入るぞ」と言う声が聞こえて、ブチャラティが亀の中へ入ってきた。

「トリツシユ、とにかく生きていてよかった。手首のジツパーは傷が癒えれば自然に消える」

なんだか久々な気がした。ブチャラティの落ち着いたトーンの優しいげな声に、トリツシユは安心とまではいかないものの、少し冷静になれた。

「あなたが助けてくれたのね」

「ああ。本当にすまない。オレたちが不甲斐ないばかりに、君を危険な目に」

「いえ。薄々わかっていたわ」

「今オレたちがどういう状況にいるのか、ジオルノから聞いたか？」

「ええ」

「ナランチャは君に真実を教えるのに反対したんだが……これから先の危険も込みで伝えるべきだとオレが判断した。シヨックを受けさせてすまない。だが事実だ」

「……ねえ、これからどうするつもりなの？」

「オレたちは君の父親を暗殺する。そのために、顔を知らねばならない。君に協力してほしい」

「そうよね。わたしもこのままじゃどうせ殺されるもの…」

「トリツシユ、これからオレたちが君を護ることは変わらない」

トリツシユの諦念のこもったつぶやきに、ブチャラティは力強く言った。トリツシユはブチャラティを見つめた。ブチャラティはこの前と全く変わらない、真っ直ぐな瞳でこっちを見ていた。

「…ブチャラティ、ありがとう」

「当然のことだ。それよりも、暗殺者チームの人間について知ってることを話してくれないか。今は少しでも情報がほしい」

「…そうね」

トリツシユはゆっくり昨夜から朝にかけてのことを思い出した。起きている時間がやけに短かったおかげか、衝撃的な出来事が続いた割に細部まで覚えている。

「私があつたのは二人だけ。赤毛の子と背の高い黒服の男…」

「黒服の男は死んだ。リーダーのリゾットという男だ」

「そう…」

「赤毛の方は狙撃手だな。名はブランクだったか…何か話したか？」

「ブランクは…わたしの母親を知っていると聞いていたわ。そして…わたしに覆いかぶさった。魂がどうか変な話をしていたわ」

「襲われたのか？」

「違う。ただわたしを観察していた…。そして何か、そう。なにかに気づいて私から離れた」

― 昨晚、ヴェネツィア市街の安ホテル―

「…このかたち、どこかで」

ブランクはそうつぶやいたあと、トリツシユの顔を間近で見つめた。髪に触り、それを唇に持っていく。トリツシユは不思議と不快で

はなかったが、怖かった。

「そうだ…ふゆ。ひぎし…。あの日は…だが…」

ブランクはトリツシユの髪を握りしめた。頭皮が引つ張られて、トリツシユは思わず囁く。

「……やめて…ッ」

「あつ。ぐ、ぐめんね」

ブランクのさつきまでの有無を言わさない迫力は消えていて、同年の気弱な少年みたいな声でトリツシユから離れた。そして自問自答するようにブツブツつぶやいている。

「……でも、だとしたら…どういう意味なんだ」

トリツシユはわけがわからなくなってきた。ブランクの雰囲気はコロコロ変わり、恐怖で圧迫されていた混乱が噴出した。

「わたしを解放して…！もううんざりよ。見ず知らずの男に囲まれて、攫われて、これから会う父親はギャングのボス…本当にうんざりだわー！」

「……トリツシユ。たしかに、僕が善人だったらきつときみを逃してやるね……」

「…しないでせに。そんなのわかってるけど、クズ野郎って罵つとくわ。クズ野郎ッ！」

「…きみはたぶん、殺されるよ」

「…あんたたちに？」

「いや。ボスにさ」

「てきとうなことを言わないで」

「てきとうじゃないよ。感じるんだ」

「そういうのをてきとうっていうのよ」

「……そうかな。いや、そうだといいいんだけど。…君越しに感じるボスはとても冷たいよ、トリツシユ。そうじゃなくてもボスはとても残酷な人だ。君だけに特別だとは到底思えないな…」

「…だから何。逃してくれるわけでもないのに、どうしてわざわざそんなこというわけ？」

トリツシユの言葉にブランクは驚いたような顔をして、次に恥じ入

るように目を背けた。意外な反応だった。

「たしかに…：なんでだろう。ごめん…：僕ちよつと混乱してるんだ。今日だけで…：大事な人がたくさん死んじゃって。八つ当たりしたい気分だったのかも」

トリツシユは黙った。ブランクにとつての大事な人とは、間違いなくブチャラティたちが始末した裏切者のチームのメンバーのことで、原因は自分だ。

ブランクは、トリツシユがそう思ったのがわかったかのように、申し訳なさそうな顔をして苦笑いした。

「君のせいじゃないのにね」

ブランクはそう言って、またトリツシユに抱きついた。トリツシユはブランクの細い肩が震えているのがわかった。

安心させたり、怖がらせたり、不安がらせたり、怯えたようになりたり、この子は雰囲気コロコロ変わる。本質は結局なんなのだろう。

「ごめんね」

ブランクの声が耳元で聞こえてからすぐに視界が暗転した。そして次に目が覚めたときはリゾットと教会内にいたのだ。

「…悪い人だとは、思えなかった。残忍な人たちだとは思うけど、あの人も理由があるのだわ」

「そうか…」

ブチャラティもなにか心当たりがあるのだろうか。敵を庇うような物言いに対して同調するかのような声色だった。

「…矢継ぎ早に質問してすまない。次、オレたちがむかうべき場所について…：君に何か心当たりがないかと思つて。昔話でもなんでもいい、君の父親に関してなにか思い出せることはないか？」

「父のこと…：そうね。たしか母は父とサルデニアで出会ったと言つていたわ。…：そう、訛りもあつちのほうだったって。…：そうだわ！コスタ・スメラルダの海岸の話をしていた」



「サルディニアか…。わかった。すぐにそちらへ向かおう。飛行機が手っ取り早いな…」

「向かうの?」

「ああ、急がねば。間違いなく追われてるだろうからな。…何か必要なものがあつたら言ってくれ。すぐに調達する」

「…：わかったわ」

ブチャラティは亀の外に出て、ナランチャが入れ替わりで入ってきた。傷が癒え、かなり元気になったらしいが表情はどこか暗かった。フーゴと仲が良かったようだから落ち込んでいるのかもしれない。だがトリツシュにナランチャを慰める余裕はなかった。

亀の外に出たブチャラティは車を運転しているアバッキオと後部座席にいるミスタとジョルノにトリツシュの話したことを掻い摘んで説明した。

四人は飛行機を盗むことで合意し、アバッキオはハンドルを空港へ切った。

「…ブランクってやつはトリツシュの母親に会っていたのか。となると暗殺者チームの生き残りもサルディニアに向かうかもしれないね…」

アバッキオは面倒くさそうにつぶやいた。ミスタもブランクの話が出る若干渋い顔をする。仕留め損ねたのが尾を引いているらしい。

「だとして、まだトリツシュを狙ってくるのか?」

「いや…その可能性は低いだろう。奴らもわかったはずだ。ボスの強さを」

「じゃあよオ、敵は同じなわけだろ? あつちもこつちを狙う理由はねーし、こつちも同じだ。そーだろ?」

「ミスタ、それは違います。彼らはもとよりボスを殺し、立場を奪う気です。そして今やぼくらの向かうべき目標は彼らと同じです」

ジョルノの言葉にアバッキオも同調する。

「ライバル…ってわけだ。敵の敵は味方とか言うが、あいつらにその

理屈が通じるかどうか」

「アバッキオの言うとおりだ。三つ巴というわけだな…もつとも、ボスの正体がわからない以上両方闇の中を藻掻いてるようなものだが」  
「奴らの生き残りは三人…だったか？お互い能力は割れている…と。なあアバッキオ、あいつらも飛行機を使うかな」  
「さあな。飛行機なんて何台もあるし早いものがちってことはねえよ」

「そういうことじゃあなくってなあ…」

ブチャラティはアバッキオとミスタの会話を聞きながら目を瞑った。ジオルノはそんなブチャラティの様子を注意深く見た。

サン・ジオルジョ・マジョーレ教会の地下でブチャラティを見つけたとき、  
「もう手遅れだ」と思った。ゴールド・エクスペリエンスで傷を治したが、彼はもう動かないのだと心の底で静かな確信があった。

にも関わらず、ブチャラティは起き上がり、動いている。

あれは勘違いだったのだ。

その思いと、まるで運命のような冷たい確信。その2つがジオルノの心でせめぎ合っている。

今後それに意識を割いてはられない。胸の奥底にしまわなければと思いつつ、ジオルノはゆっくり、ブチャラティから視線を剥がした。

ブランクは自分の手の傷を見て深いため息をついた。へびに噛まれた部位を抉ったのは早計だったかもしれない。とはいえ血清を手に入れるために病院へ行ったりしてたら今ここにいないし、結果的に何かは失っていただろう。そう思えばまだマシだともいえる。

臆は傷ついてないので動きはするが痛みのせいで震えっぱなしだ。

「クソ…」

ブランクは小さくつぶやいて手首を掴み、傷口のガーゼを張り替えた。

ギアツチヨはゴミ箱の上に座って売店からスツたゴシツプ誌をつまらなさそうに見ていた。

2人はピサ中央駅の従業員用通路の業務用搬出口付近でメローネの“出産待ち”をしていた。受胎から出産までは3分だが母親選び、質問コーナー、出産直後の教育には時間が掛かるし、付き添っていても仕方がないので（というか二人共なるべく立ち会いたくなかった）目立たない場所で待機しているというわけだ。

「ペニシリンって青カビからできるじゃないですか。だからグリーン・デイのカビもうまいことそう、治癒能力とかにならないかなって思うんですが、そもそもカビって微生物のコロニーの総称じゃないですか。だから性質を変えるとすると人格根本から変わらないと無理な話ですよね」

ブランクは痛みを紛らわすために雑談をしはじめますが、ギアツチヨは元から必要のない話に相槌を打たない方だった。だがブランクはブランクで相槌の有無にかかわらずしようもない話を続けられる質だったので、ギアツチヨは話があさっての方向へ行ってしまう前に返事をした。

「傷なんて飯食つときや治るだろ」

「…そういうえば昨日の朝からちゃんとしたご飯食べてないな」

「メローネが一段落したらなんか食うか」

「あくいいですねえ。僕コシヤリが食べたいなあ…。まあイタリアじゃ売ってないですけど。でも家で作るとなんか違うんだよなあ」

「店入ってる余裕ねーだろ。移動しながらだよ。アホかテメーは」

「はあ…できたてのものが食べたい」

「忘れてるみてーだが…チヨコラータとかいうのがお前追ってきてるんだろ。別行動してもいいんだぜオレは」

「僕が死んだら次はお二人ですよ。覚悟の準備をしていてください」

「何目線だよ。…にしてもおっせーなメローネは」

ギアツチヨは立ち上がり読み終わった雑誌をゴミ箱にシュートし

た。ブランクも包帯を巻き終えて目を覚ますためにストレッチをした。ギアツチヨがイライラして壁を蹴り出しそうになってようやくメローネが帰ってきた。

「ベイビィ・フェイスはすでに追跡を開始した。ボスは移動しているらしい。すぐには追いつかないな」

「どこに向かってんだ？」

「南へ。ここからおよそ10キロらしいが…一定の距離を保ちつつ尾行させるよう指示している。姿を捉えたらまた連絡が入るはずだ」

「…行き先はトリツシュの向かうであろうところですね。きつとサルディニアだ」

「ああ。母親の家に写真が入ってたらしいな。リゾットのパソコンにデータが入ってたのを確認したし…お前は直接聞いたんだろ？」

「ええ。『ソリッド・ナーズ』がいた場所…確かにドナテラから聞きました」

「トリツシュは一人で逃げてんのか？」

「んー、ブチャラテイが生きてたら、彼も一緒だと思いますが…」

「死んだんだろ？」

「ありやたすからなんですねぇ」

「一人ならもう組織の手に落ちてるだろう。間違いなく誰か同行しているさ」

「あいつらが裏切るか？女一人のために」

「いやギアツチヨ、なくもないだろう。オレたちがトリツシュを攫つて、奴らの護衛任務は失敗しているからな。ボスが許すわけがない」

「ああ…確かに。ざまーみろだな」

三人は車を盗む事もできた。だが今回は無駄が多いが、運送トラックの荷台に乗り込みボスを追跡するベイビィ・フェイスを追いかける方法をとった。ムーロロが死んだ今、隠蔽工作は不可能だ。窃盗事件を起こすわけには行かない。

ベイビィ・フェイスを単独で動かすのはリスクにほかならない。ボスがメローネの能力を知らないというのは一つの大きな武器でありボスを倒しうる唯一の可能性だからだ。

遠隔自律型というのはベイビー・フェイス最大の利点だが弱点でもある。現にブチャラティチームへの初撃はスタンド自身の思考力不足から。二度目はスタンド能力を知られていたために敗北している。故に「本体が姿を見せずにいられる」という長所を捨てて、メローネが肉眼で状況判断し指示を出す事で確度をあげるのが最善だ。

あのサン・ジオルジョ・マジョーレ島での出来事からまだ半日もたっていない。

ブランクはリゾットとのことを思い出した。

2000年10月29日

「チリコンカンはテクスメクス代表料理でしょう？分類上アメリカの料理とされてますが、もとはといえばテキサスってメキシコ共和国の領土だったのでメキシコ料理とだぶる点が多いんですよ。料理つてやっぱりその土地の気候とか伝統の醸成された味があるわけで：何が言いたいかつて言うといタリアのチリコンカンは最悪です！」

その日ブランクは本部でイルーゾオの車両保険の書類を作らされていた。そこにリゾットがやってきて二人で昼食を食べに行くことになった。

二ヶ月前にできて開店後の混雑のおさまったテクスメクス料理屋に入った。ランチタイムにしては客が少なかった。そもそもローマでテクスメクスを食べたがる人間はあまりいないのだろう。

「そうか？このブリトーは旨いが」

「全然ですよ。少なくともチリソースにこのタコス合わない。キメが細かすぎる。粗さが必要なんですよ」

ブランクはかつて南半球を旅していた。そのせいか味の好みも刺激的なものに寄っているらしい。

「おまえは実は料理にうるさいよな」

「食べてみると昔食べたのと味が違うって思ってしまうんですね」

「いい事だ。昔のことを思い出すのは最近よくあるのか？」

「…そうかもしれません。いや、忘れてたわけじゃ、ないんですけど…」

ブランクは手に持っていたタコスを入れた口に入れてもぐもぐ嚙んで飲み込んだ。

「言葉にするのはむずかしい。なんて言えばいいのかな…」

リゾットは頼んだブリトーをすでに食べ終わっていて、ライム入りのミネラルウォーターのグラスを傾けていた。

ブランクは窓際の空席を見ながら、ゆっくり考えながら答えた。

「炎は『明るい』。でも触ると『熱い』。一度わかれば炎は熱くて明るいものになるじゃないですか。そういう感じですよ」

「…詩的だな」

「へへ…」

ブランクも自分のチリコンカンを食べ終わってから、遠慮がちに手を上げて話した。

「あの…詩的ついでに報告が」

「なんだ」

「僕のスタンド能力のことです」

ブランクは自身のスタンドに起きた変化を伝えた。

スタンド能力発現中でなくとも触れればスタンドをコピーできること。しかし相手のことを理解しなければパフォーマンスを発揮できないこと。以前使っていた能力はすべて使い物にならなくなったこと。

「僕は…以前と同じ仕事を受けることができませぬ。今のところマンハッタン・トランスファーぐらいしかまともに使えませぬ」

「…そうか」

「僕はクビですか？」

「そんな事はない。…元よりオレは、お前の射撃の腕をかって入れたのだからな」

「でも…弱いですよ。相手のことを知らなきやスタンド使えないなんて」

「いいや、それはいいことだ」

その時、ブランクはリゾットの言っていることがわからなかった。  
「今楽しいか」

「?はい」

ブランクの返事にリゾットは頷いた。

「リゾットさんは?」

「ああ」

リゾットは楽しい、と明言することはなかった。だがかすかに笑ってナプキンを丸め、領収書をつまんで立ち上がった。

「お前が熱弁するからにはちゃんとしたテクスメクス料理を食べてみたくなった」

「そりやイタリア中探すしかないっすね!」

今ならわかる。相手を理解しなければならぬこと。能力が変わった意味。

そして、今の自分にできること。

三人が乗り込んだのはコルス島行きフランス産ミネラルウォーターのトラックだった。島経由でサルデニアに渡る予定でいる。

三人は積み上がった箱の中からいくつか拝借し、買ってきたパンとチーズで簡単なサンドイッチを作って、車座になり話し合う。

「あのー、ブチャラティチームの話に戻るんですが、僕ら協力できないですかねえ」

「ハア?あいつらはオレたちのチームをぶっ殺してんだぞ。ありえねーッ。それに奴らも裏切るからにはオレらと同じように組織の乗っ取りを計画しているかもしれねーだろ。だったらもう戦うしかねーっつの」

「そうだ、ブランク。敵の敵は天敵っていうだろ」

「……………ん?そんな諺あったっけ?」

「だいたいお前、大好きなホルマジオもイルーゾオも殺されてメソメソ泣いてたじゃねーか。もう忘れたのか?薄情もんが」

「その件に関しては正直復讐も辞さないですよ？でも…あのボスの能力、僕たちだけで勝てるのか…」

「…一度整理するか」

トラックの中にかけてあったボードの裏にメローネがメモを取る。「まずブランク、お前がトリツシユに触れて感じたことを報告してくれ」

「はい。…ごく簡単に言うと、僕、トリツシユとよく似ている人を知っています」

「似てるっていうのは顔が？」

「いえ、魂…というと抽象的すぎますが…それが」

「はア…魂だと？お前そんな観念的なもんを持ち出すんじゃないよ。クソがツ。道德の時間でもおっぱじめる気か?! ああ？」

「だからあのとき言わなかったんですよ！…魂というよりは、肉と言ってもいいかもしれません。彼女の半分はボスの遺伝子ですからね。感じが似た手に触れたことがあるんです」

「一体そいつは誰なんだ」

「ボスの右腕と称される人物…親衛隊のリーダー、ヴェネガー・ドツピオです」

「お前…会ったことあるのか」

「まあ僕これでも親衛隊だったんで…」

「裏切者」

「う…」

ギアツチヨにチクリと言われてブランクは唸ってうつむいた。メローネはちよつとため息ついてから質問を続けた。

「感じが似てるっていうのは具体的にどういうことなんだ」

「そのままの意味ですよ。第一印象とか直感の部類です。すつごい似てて…。んー…例えば…昔の友達の写真をみたっていうか…兄弟？みたいな」

「ドツピオはボスと血縁なのか？」

「それはわかんないですけど。トリツシユに触れたとき思い出したのがドツピオさんだったんですよ。根拠は全くないんですが…勘以



外の何物でもないんですけど…とにかく頭に過ぎったんですよ。…言わなくてよかったですよ?」

「確かにな」

メローネは頷くが、ギアツチヨは貧乏ゆすりをしながらもブランクの言葉を吟味するように言った。

「…だがお前のそれはスタンド能力の一端なんだろう。もつと検討の余地はある」

「なんにせよ…ボスの正体はいずれはつきりする。ベイビー・フェイスの辿る遺伝子情報は間違いないのだからな」

「だな」

「要するに不意打ちしかねーってことですよね?」

「ああ。問題はベイビー・フェイスの接近をいかにして悟られないかだが…そもそも予知のような能力を持っているから警戒状態じゃ不意打ちすら成立しないかもしれない」

「となると来るとわかっていても避けられない攻撃か?んなもんあんのかよ」

「…爆弾とか?」

「ホワイト・アルバムの冷却もタイムラグがあるからな。予知された上で喰らわせるとなると工夫が必要かもしれねー。ブランク、お前便利な能力持つてねーのか?」

「そんな都合良くは…」

「役に立たねーな」

「…通用するとしたらグリーン・デイでしょうか。あれは一度生えればもうどうしようもないです。ただ僕のコピーでは散布範囲が違いすぎます。直に触れないと…」

「あー、そりや無理だな」

「そういうえばお前、ベイビー・フェイスはコピーできないのか?最悪片方がおとりでもう片方が…」

「ベイビー・フェイス本体はできると思いますよ。でもジュニアが産まれるかどうかは…。正直、あの能力は共感し難いので、単なるセクハラスタンドになってしまう可能性がありますね」

「いやいや。それはおかしいだろう？オレたち気心しれてるんだから完璧にコピーしろよ。それによオ、セクハラって言い方は礼を欠いてると思わないか？重要なことなんだぞ、あの質問は…」

「いや、そもそも女性に産ませるってのが異常なんですよ！生命を産み出す行為ってのが先輩の中でどう認識されてるのか理解が得意な」

「DNAが混ざり合い、2つの遺伝子をかけ合わせた子供ができる。そこにちよつと好みだとか相性がからんでくる。自然じゃないか」

「…」

「ギアツチヨ、何かフォローを入れろよ」

「とにかく…ボスの行き先で網を張るしかないようだな」

「じゃあわかるまで僕寝ますね。傷が痛くてしようがない」

「オレも起きててもしようがねーし寝るか」

「…そうかよ。お前らは揃いも揃って…」

メローネはいじけたようにボードを放り出した。ギアツチヨはダンボールを寝やすいように並べ、その上に寝転んだ。

ブランクはそのまま寝転んですぐ寝てしまった。

トラックは三人を乗せたまま道をゆく。

## サルゲイニア

2000年4月15日

初めての“カウンセリング”  
とうるるるるるるん：

ソルベとジュエライトの葬式を終えて二週間以上たった頃。つまりはチームのメンバーがようやく彼らを“忘れた”頃に、ブランクの携帯電話が鳴った。

「……」

ブランクは番号を見てからためらい、3コール目でようやく通話ボタンを押した。

「……ブランクです」

『わたしだよ。覚えているかな？ チョコラータ』

「…はい」

『今暇かね。悪いがちよつと来てくれるか？』

チョコラータが指定したのはドツピオと面接したカフェだった。ギヤング御用達なのだろうか。ひよつとしたらパツシヨ―ネの誰かが経営しているのかもしれない。

ブランクが向かうと、チョコラータだけが席に就いていた。セツコはおらず、一人でココアを飲んでいた。チョコラータはブランクが席につくと、何も言わないのいいことに同じものを適当に注文した。

「その後どうだ。葬式があったらしいな？」

「はい」

ブランクは胃がムカムカしてとてもじゃないがココアなんて飲めなかった。まだソルベの生暖かい切断された肉の温もりを覚えている。本当はチョコラータなんかと会いたくなかった。だがこの時のブランクにNOという選択肢はなかった。

「どんな気分だった？」

「……わかりません」

「ふうん。もつと会話が必要だね、わたしたちには…。セツコとはねえ、初めてあったときに話さずとも通じ合ったもんだが、そういう相

手は滅多にいないもんだよ」

「……」

ブランクが無言でもチョココーラータはお構いなしに話し続ける。

「そうだ。セッコが撮ったあの時の思い出をテープに焼いたんだ。君にもあげよう」

チョココーラータはなんのラベルも貼ってないビデオテープをブランクに無理やり渡した。ブランクは受け取り、どうすればいいのかわからなくなつて固まっていた。

「きみは、極端に言つてしまえば選ぶのが苦手なんだろう？だからまず、ノーが言えるようになるべきだな」

チョココーラータは立ち上がり、ブランクの隣に移動してきた。そしておもむろにビデオカメラを取り出し、ミニDVカセット（1990年代に主流だった磁気テープによる記憶媒体）を差し込み、本体についている折りたたみディスプレイに映像を映し、無理やりブランクに見せる。

画面には自分の血の気の失せた顔が大映しになっている。

カメラは横パンして、台上に乗った下半身のないソルベの断面を映した。カビが蛆のように断面をじわじわ覆っているのを舐めるように撮つてから、カメラは次第に顔へ近づく。玉のような汗が小さな画面でもわかるほど溜まっている。

カメラが首筋のとこまできたあたりで、ブランクは顔をそらした。だがチョココーラータはそれを許さない。顎を掴み、無理やり画面を見るように向ける。

「ほら、このシーンが一番いい顔をしてるんだってば！ジェラートの死体をほら、凝視しているこの眼。いやたまらんねえ。こういうのは何度見ても良い」

ソルベの見開いた目、その白目の血管までもが鮮明に映し出された。ディスプレイではなく、ブランクの脳裏に。

「……や、やめろよー」

ブランクは思わず顎を掴むチョココーラータの手を振りほどき、カメラを叩き落とした。カメラはブランクの手付かずのココアのカップに

当たり、テーブルから落ちた。落下音は聞こえなかった。地面の下からゆつと伸びたセツコの手がしつかりキャッチしていたからだ。

ブランクはもらったビデオテープもテーブルに放り出して窓側へ体を引く。

「……僕は……あの日の事はもう思い出したくない」

「なんだ、ちゃんとと言えるじゃあないか。うんうんいいことだ。だが過去から逃げちゃ人間は成長できない。きみは自分のやったことから目を逸らしちゃいけないんだよ」

チヨコロータはブランクのスーツの襟を掴み、無理やり着席させる。一般人の目もあるため派手に暴れることもできず、ブランクはまたソルベの拷問映像と向き合わされた。

画面では腹部に刃を入れられるソルベの顔が映っている。ブランクは吐きそうになりながらも「目を逸らすな」という言葉にバカ正直に従っていた。

「……どうして……僕にかまうんですか。放っておいてください。僕の仕事に、あなたは必要ない」

映像は自分の情けない泣き顔とジェラートの死体が交互に映したのち、ソルベの輪切り作業へまた戻った。

「そんなのわたしに関係ないね。わたしはただ自分の好奇心に従っただけだよ。きみがどう成長してくにせよ、きつと手をかけて育てたものを壊すときってのはものすごくカタルシスを感じるはずだ。今まで育てることは怠ってたけどね」

「意味がわかりません」

「じゃあ考えるんだな。きみはそれをしなくっちゃあならない。じゃないと、面白くない」

とうるるるるるるん……

とうるるるるるるん……

とうるるるるるるん……

「…もしもし」

『ブランク、今どこだ?』

「…チヨコラータ先生…そんなの言うと思いますか?」

『電話に出られるってことは一人か?』

「…はい。でも探知される前に切りますからね」

『馬鹿正直に電話に出ることないだろうに。いくらムーロクの番号だからって。…まさか留守電聞いてないのか?』

「聞きましたよ」

『ほう?それにしちや冷静だな。想像しないのか?お前の恩人がわたしに何されたか。あるいは…されてるのか』

「…先生こそなぜ電話を?」

『そりや困っているからだ。ヴェネツィア以降おまえたちの足取りがとんとつかめないからね。ブチャラティたちのほうはカルネが向かったらしいが…』

カルネとブランクは少しだけ親交があった。彼は矢を受けて生き残った口だが、何故か一向にスタンドが発現せず周囲が困っていたときにドッピオから声がかかったのだ。

手に触れ、何度か話すうちに彼のスタンド能力は恨みのパワーで動くことがわかった。恨みが強ければ強いほどスタンドは強力になる。だが、残念ながら本人は無差別に他人に憎悪を振りまくような人間でなかった。

普段は弱い。だが殺されるくらいの強い恨みがあれば最強、と報告した結果、彼も親衛隊入りしたらしい。鉄砲玉なのは目に見えていたが、自分も使い捨てのスパイなので特に気の毒とも思っただけだった。今回の任務でカルネは殺されに行く。ボスに本気で忠誠を誓っているなら喜んで従っていただろう、昔の自分のように。

「カルネくんがあつちに行くってことは、ボスは僕たちをあまり脅威に思っていないんですね」

『ああ。リーダーを失ったおまえたちはイマイチ獲物として魅力的じゃないからな。だがわたしは違うぞ。どうせおまえたちの行き先もブチャラティたちと同じだろう?なあ、どこに向かっているんだ

よ』

「…チョコラータ先生は僕を追ってるっていうのに、ボスから情報ももらえてないんですね」

『ああ、そうなんだよ。ボスもオレには近づきたくないらしいな。つまり裏を返せば、ボスもそこに行くんじゃないかと思うわけだ。お前たちの行き先にな』

「…僕も同じ意見です」

『なあ、教えてくれよブランク。そしたらよオ、おまえを殺すのを少し後回しにしたっていいぞ？一人くらいは仲間を見逃してやってもいい。なあ、ブランク、どこに向かっているんだよ』

「嫌です。頑張って探してください。…もう切りますよ」

『本当に生意気になったな、お前は。どう変わるつもりなんだ？いや、どこまで変わったんだ？』

「…会った時に確かめてください」

ブランクが切る前にチョコラータ側から電話が切れた。ブランクは携帯電話をポケットにしまい、目の前に積まれたダンボールの山をぼんやり眺めた。

なんでもいいから情報を引き出せたらと思って出たけど、結局憂鬱な気分になった。

ブランク、ギアツチョコ、メローネはコルス島を経由するサルディニア島行きの貨物船に乗った。

宅配業者の荷が大量に乗っているが、船長に金を払えばのせていくてくれるとの事なので糸目をつけずに支払った。

ただし人が乗るのに適した空きスペースはほとんどないので、一番下っ端のブランクが貨物スペースに追いやられたというわけだ。

カルネがこちらに来なかったのは幸運だった。能力を知ってるブランクに対して無意味だという判断かもしれないが、なんにせよボスの関心はもっぱら娘、トリッシュユにあるようだ。

トリッシュユを追うボス、ブランクたち、そしてブランクを追うチョコラータもいずれサルディニアに辿り着く。

チョコラータの目的は自分の殺害だけではない。むしろそっちはついでで、真意は暗殺チーム、そしてブチャラティたちと同じところにある可能性が高い。

となれば、相当な混戦が予想される。その反面、ボスを殺しうるスタンド能力を持つチョコラータが向かっているのは僥倖かもしれない。(もちろんこちらでも殺される覚悟が必要だが)

「つて…さてよ、ブチャラティたち？」

ブランクはチョコラータの言葉を反芻する。

「ブチャラティたちのほうはカルネが向かったらしいが…」

仮にブチャラティが死んでいたら、チョコラータはこんな言葉を使わないだろう。いろいろ雑なイルーゾオとかならともかく、彼がもう死んだ人間の名前を挙げるとは考えにくい。

ということは生きているわけだが…ジヨルノ・ジョバーナの能力はあの重傷すら治癒できるということなのだろうか？

ブランクは潰れた右目を無意識に触った。未練がましいとは思いつつ、やはり射撃の腕は取り戻したかった。

射撃は僕が僕であるために必要な技能だった。

二年前の自分だったら目玉を潰されようが他の特技を見出して淡々とその後を過ごしていくんだろうが、今の自分じゃそう簡単に飲み込めそうにない。

リゾットが認めてくれたこと、師匠とともに学んだ歳月をブランクは「知って」しまった。

「はあ……」

船が大きな波に当たるとき、ダンボールは危なっかしく揺れる。ロープで固定しているとはいえこれが全部崩れて下敷きになったらと思うとゾツとする。

さすがのブランクでも自分の気分が落ち込んできているのがわかる。

「炎は「明るい」。でも触ると「熱い」。一度わかれば炎は熱くて明るいものになる」



慕っていた先輩たちがバタバタ殺されて、目も潰れ、裏切りもバレて、ずつと頼りにしていたムーロ口にもきつともう会えない。命令を出してくれる人はもういない。どん底だ。

メローネはこの世界を奪い合いゲームだと言った。

僕はそうは思いたくない。だが現実はそのゲームの真っ只中にある。ボスを殺して権力のすべてを搔つ攫う。それができなきや死ぬだけだ。

それは疑いようもない事実だ。

本当に奪い合いゲームを否定するためには、まずこのゲームに勝たねばならない。

まったく、とことん矛盾している気がするが、今の自分にはそうすることでは正解を示せない。

復讐はこれからの人生をより良く生きるためにするためのものだ。

僕は生きたい。生きて、今度はきちんと自分の言葉で語れる日々を紡ぎたい。

汽笛が鳴った。もう島につくらしい。

ブランクは立ち上がり、デツキへ向かった。港はもうすぐ目の前で、ウミネコがみやみやあとうるさい。

「メローネ、ちよつと報告が…」

「こつちも重要なことがあるぜ。ベイビィ・フェイスはボスの姿を捉えた」

「マジですか。…ええと、僕の方はチョコレート先生からいまでもこつて聞かれただけです。あとブチャラティチームの方へ刺客が行ったらしいです」

「お前の主治医は何がしてーんだよ。待ち合わせか？」

ブランクフィルターののかかったほのぼのした内容にギアツチョが呆れて突っ込む。

「んー、僕を殺すついでにボスを殺したい…のかも。そんな空気出ました」

「はあ？親衛隊なのにか」

「いやあ：チョコラータ先生なら何をしても納得っていうか…」

「こつちの話に戻っていいか」

メローネは若干苛つきながら会話を遮った。ギアツチョコもブランクもハツとしてメローネに向き直った。ベイビー・フェイスの画面上にジュニアとのチャットログが表示されていた。

「空港で『父親』の姿を視認しました

「デイ・モルト！口頭にて報告しろ

「少年です。髪は、ピンクブロンド。紫色のセーターを着ている。いい靴だ。ボクもこの靴は好きだ

「少年？何かの間違いじゃあないのか。

「たしかに少年です。線が細い、こつちに気づいてない、いま、こどもにアイスをぶつけられてとまどってる

「間違いないか？

「そうです。荷物は旅行かばんひとつ、あどけないというか、言ってしまうと間抜けな顔をしている。そばかすか？とても若い。やはり少年だ。封筒からなにか出してみている

「詳しく確認できるか？

「いいえ。近づきますか？

「いや、まだいい。一定の距離を保ちつつ追跡を続行せよ。オレたちも向かう

「ウイ。細かい座標は…」

「少年…だあ？」

「ちよつと、今回の母親ちゃんと選んだんですか？僕が見たボスの背中はどうみたって成人男性でしたよ。少なくともブチャラティよりはでかく見えた。目え悪いんじゃないんですか」

「どーなってんだよメローネ」

二人はブーブー文句をたれた。メローネ本人も当惑しているようだった。

「ジュニアは画像を送れない。それに語彙力も教育に依存してるから

な…だが、大人と子どもは使い分けてる。少年の外見つてのも間違つてないはずだ」

「いまジュニアと話せます?」

「ああ」

メローネはちよつとベイビー・フェイスをいじつてブランクに向けた。ブランクは発語しながら画面に文字を打ち込む。

「ハロージュニア。えーと、ブランクです、はじめまして。僕はメローネの後輩です。後輩っていうのは…」

「いや、そういうのはいいから」

ブランクの言葉に反応して早速画面上にジュニアのメッセージが表示された。

ーボンジュール、ブランク

「きみの父親について、もう一度詳しく教えてくれるかな。えー、服のことなんだけど、変な切れ込みの入った縦編みのセーター?」

ーそう、そのとおりです。ボクのところからは背中が見えます。髪は後ろで編み込んでまとめています

「そいつで間違いない?」

ーまちがいない。何度もそういつてる。彼が父親だ!

「そっか。ありがとーばいばい…」

「ドツピオ…なのか?」

「……………信じがたい…いや、ありえない事ですが…。ええ。リゾットさんが浴びた血はドツピオのものだったようですね」

「はあくくく?じゃあボスがドツピオなのか?あ?ドツピオがボスなのか?どっちが正しいんだよ。紛らわしいぜ、クソイライラするツ!」

「お前、二年前にドツピオに触れたんだよな?その時はどう感じたよ。もっと詳しく、具体的に話せ」

ブランクはうーんと悩みながらメローネの質問に答えた。

「…正直あの頃の僕にはスタンド能力発動中しかコピーできませんでしたし、占い程度のことしかわかりませんでした。ですが…確か

に、彼は奇妙でした」

ブランクは手をグーパーしながら慎重に言葉を選び、答える。

「僕の特技はもう、占いとかと違って全然直感です。で根拠は省きませんね。彼はやや気弱で素朴な青年だと感じました。ですが一方で手の硬さ…というか肉体のですね、それと精神が釣り合っていないとは思いました」

「お前…暗殺者なんかより向いてる職業あるよな」

「僕もたまにそう思いますね。…少年だなーって性格なのに、肉体はけっこう傷んでたんです。まあそういうこともあるだろうと思っただんですけど…」

うーんと唸るメローネとブランクに対してギアッチョが提案した。

「ドツピオの正体がなんにせよ、よオー…ドツピオを生け捕りにするメリットはあると思うぜ。なんつったって唯一ボスと直接やり取りしてる部下だ。ドツピオⅡボスだとしても、オレらがボスになり代わるつもりなら、あいつの持つてる組織の連絡網はどっちにしる必須だろ」

「ドツピオⅡボスなら即殺したほうがいいと思うがな。生け捕りにしてもスタンド能力を発動されたら危険だ」

「僕は…生け捕りかな。彼が何なのか興味あるし、やっぱり組織メンバーとのやり取りの方法だとかは吐かせないと。殺すのはその後です」

ギアッチョ、ブランクの意見にメローネは意外そうなかおをした。二人の意見が合うのは珍しい…というよりは、ブランクがちやんと意見を言うのが珍しかったからだ。

「おい、マジかよ。正体が気になるってのもまあわかるが…」

「メローネ、お前が決めるよ」

「ですね」

「あー？多数決じゃなくでもいいのか。…まあお前たちの言うことも一理あると思う。ベイビー・フェイスの能力的に、結局一度物質に組み替える。事実上の生け捕りにはなるわけだな…。だが今はその後のことではなく如何に生け捕りにするかを議論したほうがいいだろう。」

状況によってどうすべきかは現場の判断だ」

「なんか頭良さそうだな」

「さすが最年長！」

「おまえら疲れてるからってなんかテキトーにほめてんだろ。目的地まではまだかかるぜ。頭が働かねーなら20分だけ寝かせてやってもいいぞ」

「やさしい！アニキ！」

「頼りにしてるぜメローネ」

「もういーから黙ってる」

チョコラータは電話を切って忌々しげにつぶやいた。背後に聞こえたのは空調の音に似た機械音と不規則な金属音だった。まるでコンテナの外からなにか柔らかいものがぶつかっているようなくぐもった音だ。

「ブランクの奴め、船に乗ってるな……」

ブランクの奴はわたしの電話から少しでも情報を得ようという算段だったのだろう。暗殺者チームの生き残りはムーロロ亡き今、十分な情報を得られない。それでも何か目的を持って移動している、ということとは独自にボスカ、ブチャラティたちの位置を掴んでいるのだろう。

「なあ……チョコ、チョコラータ……オレたち、次はど、……どこいきや……い、いいんだ？」

「あいつは船を使ってどこかに向かっている。島か……または単に陸路より安全と踏んでのことか……」

「船っていうとよー……が、外国に、でも……に、にげんのか？」

「いーやセツコ。あいつらはボスカを追ってんだ。ボスカの手がかりを掴むために必死こいてかけずってる。行き先はイタリア内のはずだ。とりあえず、フィレンツェで待機だ。直にカルネの成果がわかるだろう」

先ほど通りかかった飲食店のテレビで、ヴェネツィア空港で射殺体が発見されていた。被害者の身元は割れないというが、報道された情報からしてほぼ間違いないカルネだ。

「かるね…カルネって…あああの…えつとお」

「親衛隊のやつだ。ノトリーアスB・I・Gとかいうスタンドだったか？死後の恨みのパワーで動くスタンドなんだが、まさか役に立つ日が来るとはな」

「し、しななきやつかえねーのか？…ふ、ふべんだ！」

「ああそうだな。おい、バッテリーはよオーク確認しておけよ、セッコ。いぎつてときにバッテリー切れってのが一番ムカつくからな。予備の充電器の電池も持つとかなきやあな。移動が多いと何かと荷物が多くなつて手間だな…まったく」

チョコラータは足元において金属製の大きな箱を一度蹴っ飛ばした。そしてそれを担ぎ、バスの時間を確認する。

「しかし…それでもだ。それでも、旨い料理に下ごしらえが必要なように、これは持っていかなくつちやな」

亀の中で眠っていたナランチヤは衝撃を感じて目を覚ました。最後に覚えているのはあの何もかも食い尽くすスタンドにやられたところだ。

「ジオルノ…なんかいま外で大きな音がしなかったか？」

最初に目に入ったジオルノに話しかけると、ジオルノも目が覚めていたらしく、体を軽くおこして返事した。

「え？…そうかもしれませんね。すみません、どうも…気分が」

ジオルノも手酷くやられたらしく、起き上がったと思っただけでソファーに突っ伏してしまった。ミスタは全く目覚めた様子はなく、寝息も静かに横たわったままだ。

「オレも最悪だ…ついてねーよ…狙撃手にやられてずっとで、治ったと思っただけでチクショー。フーゴも再起不能だし…ここ数日

でいろいろ起こってわけわかんねーよ…」

「フーゴはきつとよくなりますよ。…もちろん、ぼくたちがボスを倒さなければ彼も危険かもしれません…」

「……しよーがねーよな。元はといえばオレたちのハマだもんな。それよりトリツシユが可哀相だ…」

「彼女は…思ってるよりずっと強いですよ」

「そうかな…っていうかジオルノ、お前両腕なくなっちゃまってんじやあねーか！大丈夫なのかよ。つーかだからか、治ってねーの」

「ここまでやられるのは初めてなので…辛いといえば辛いです。ですが、腕を切り落とす直前、ブローチに生命を与えました。まだその気配を感じます。きつと誰かが見つけてくれたんでしよう」

ナランチャはジオルノの冷静さに感心しつつ、先程の衝撃が気になって上を見た。亀はどこかにしまわれているのか天井は真っ暗だ。だがふいに夕焼けの空が見え、上からアバツキオが入ってきた。

「よお、オメーらちゃん生きてるか？」

「縁起でもねーこと言うなよアバツキオ。何があつたんだ？」

「ナランチャ、お前は元気そうだな。…ほれジオルノ。腕だ」

アバツキオはおもむろにジオルノに腕を投げ渡した。ジオルノは胴で受け、ちよつと苦笑いしながらテーブルにおいてくつつけようとした。

「ありがとうございます」

「礼ならトリツシユに言うんだな。今回は彼女がいなかったらダメだった」

ナランチャはジオルノの腕を固定してやる。怪我のせいでしょうどいがジオルノさえ治ればこちらのものだ。

「だから何があつたんだよ！」

「飛行機は例のスタンドのせいで墜落した。腕はトリツシユが守りきったんだ」

「エエ?!まじかよ。つーかオレたちどんだけ眠ってたんだ?!」

ナランチャはシヨックを受けたリアクションをしてみせるがオー

バーだったせいで圧迫止血していた傷口から血が吹き出た。アバツキオは呆れながらも一度きつく包帯を巻いてやった。

「そうだったんですか。サルディニアにはついたんですか？」

「ああ。沖に落ちたせいで散々だぜ。泳ぐのは久々だ。…まあ墜落したおかげでボスもしばらく正確な足取りは掴めないだろう…：ジヨルノ、テメーはとつとと全員治しとけよ」

「もちろんです」

「じゃあ…いよいよオレたち…」

「ああ。ボスの正体に近づくわけだ」



ホワイト・アルバム&ベイビー・フェイス・ジュニア

ギアツチヨは起きてすぐにメローネと運転を代わった。ベイビー・フェイスは詳細な情報を送り続けている。ドッピオは街でタクシーを拾い、どこかを目指しているとのことだった。

すでに一キロ圏内に入ったという事で二人は緊張していた。だというのにブランクは後部座席でまだ寝ている。

「こいつマジ起きねーな」

「まあ地味に一番負傷しているからな」

「…運のいいやつ。よく生きてこられたな、クソよえーのに」

「確かに強運だな。おっと」

道があまり良くないせいで車体がひどく揺れ、フロントガラスに飾ってあったアロハ人形が倒れてしまった。それを見てギアツチヨがハンドルをぶん殴った。

「チツ。てめーらがちやんとオレの車回収してりゃーこんなファミリーカーパクらずに行けたのによぉ〜！」

「忘れていたようだが、お前もオレのバイクオシヤカにしてるんだぞ」  
「チツ…」

しばらく沈黙した後、ギアツチヨが口を開いた。

「メローネ、ソルベとジェラートのことだが、お前はブランクを許してんのか？」

「許すも何も…こいつを責めても何にもならないからな」

「ずいぶん冷てーじやあねーか。メローネ、ソルベとジェラートよりブランクに情がうつったのか？」

「そういうわけではない。…こいつが来なけりゃこうはならなかったって言うなら話は違うぜ？だが…現実的に考えて、あの二人が殺されるのは必然だった」

「オレだってそれくらいはわかる。だがこいつはスパイしてたんだぞ？オレたちをずっと監視していた。ムーロロの手駒になってな」

「ああ。つーか別にオレは怒ってないわけじゃあない。だけど2年付き合ってるやこいつがどんなやつかくらいわかる。ブランクはただ

自分のことが全然わかってないバカだった。それがわかったら殺す気も失せた。何が悪いかわかってないやつを罰しても無駄だ。償いは死だけじゃあないと思う。少なくともブランクにとっちゃな」

メローネの言葉にギアツチヨはしばし黙った。そしてサン・ジヨルジョ・マツジレ教会の地下で、リゾットから受け取った血液サンプルを握ったブランクの姿を思い出した。

「僕はリゾットに、みんなにとてもひどいことをした。それを償うまでは殺さないでほしい」

「：オレはリゾットの死体を見るまでは、ブランクを殺すつもりでいた」

「そうだと思った。だからブランク連れてきたときはビビったぞ」

「あいつは自分で償うと言った。：お前が言ったとおり、償いは死だけじゃないってことなんだろうな。：なんで揃いも揃ってクドい言い回しするんだ？流行ってんのかよそういうの」

「ああ：もしかしたらオレが置いといた本を読んだのかもしれないな。情操教育がてら、本部に置く本は選んでたからな」

「マジかよ。あそこに本棚なんてあったのか」

「あるだろうが、デスクトップの下に。ホルマジオとかが結構雑誌を持ち込んでたぞ」

「あいつの事だから古本処分のついでだったんじゃないかね」

「かもな。なんかグラフィックノベルとかも知らない間に入れられたし」

「ああ：？そりゃ誰の趣味だ？」

「さーな」

二人は少しだけ笑って、前を見た。美しい海岸線が広がっている。コスタ・スメラルダの近くだからか、海はエメラルド色に見える。岩場の白がやけに眩しい。

「：ギアツチヨ、お前もブランクを一度は許してみようって気になっ

たんだろ。だったら最後まで信じてやれよ」

「メローネ、てめーオレに説教してんのかよ。別に疑ってもねーし許してもねー。処分保留にしてるだけだっつーの」

「…やれやれ。やっぱプロシユートと違ってオレたちに後輩育成は向いていないな」

ギアツチヨはふん、と鼻で笑ってから後ろを振り返りグースカ寝てるブランクに怒鳴った。

「オイ！いい加減起きろよブランクツ！」

ブランクは目をこすりながら起き上がり、キョロキョロ周りを見ながら不機嫌そうに言った。

「……………なんか僕の悪口言ってますでした？今」

「メローネがボロクソに言ってた」

「クソオ……！」

「目え醒ませよ。これからが本番だ」

「そうだ。今オレたちはドツピオの乗っているタクシーを追ってる。どこに向かってんだろうな？丘登ったところで何もねーだろうに」

「丘？こちらが高ければそれでいいんですが。…なんで丘？」

「…普通に考えて突っ込むのはオレの役割だ。ジュニアと連携して気を引き、ドツピオを物質へ変換する。で、お前らは上の方で援護」

「ジュニアはなんに化けてるんですか？」

「やつの乗るタクシーに張り付いている。ちょうどトランクのあたりだな」

ギアツチヨは無線にイヤフォンマイクを差して耳にしっかりとテープで貼り付けた。

「…よし、感度良好」

メローネ、ブランクも同じように無線を繋ぎ、常時連携できるように調整した。

「それにしても丘ですか」

「マップをみてもあの道の先は特に何もないな…お、停まったらしい」「じゃあオレは降りる。しっかりと援護しろよ」

ギアツチヨは車が完全に止まる前にとつと出ていってしまった。

メローネはすぐ地図を確認し、丘の上へ登れそうなルートを見繕ってから車を出た。ブランクもそれに従い、ライフルケースを抱えて岩場を登った。

「…お前、何メートルくらいなら撃てる?」

「当てるだけなら100…」

「近ッ」

「すみません…」

「しよオーがねーなあ…」

「うう…ホルマジオ先輩い…」

「いや、無意識だ。振ってないから。悪かったよ」

二人は一段上の遊歩道に出ると、慎重にドツピオの姿を探した。彼はタクシー運転手とひと悶着した後、路肩から海を眺めているらしい。

ジュニアはどさくさに紛れてタクシーから分離し岩場の石の一つに化けてスタンバイ中だ。

「見てるのは海じゃない。…封筒から写真を取り出して参照しているようだ。空港でも持っていたものだ」

ジュニアのチャットを見てメローネはもう一度あたりを見回した。ここは観光マップに出てくるような完璧なコスタ・スメラルダを見下ろすにはやや外れている。

「ここから見えるのはビーチと建物、石碑だな」

「何かよくわかんないけど気を取られてるならチャンスですね」

ブランクは組み立て終えたライフルを構え、左目でスコープを覗き込んだ。スコープの目盛りを調整し、風を感じる。幸い微風だ。

感覚は鈍っていない。マンハッタン・トランスファアは襲撃を悟らせないために初撃では出せないがなんとかかなりそうだ。

「ギアッチョ…聞こえるか?」

『ああ。ドツピオは見えている。すぐにでもやれる』

「わかった。ジュニアもスタンバイ完了だ」

「ブランクです。こちらもいつでもいけます」

『わかった。オレに合わせろよ』  
「了解」

ドツピオはボスに言われた通りの場所についてひとまず安心した。これから渡された写真の場所を監視しなくっちゃならない。

「それにしても…本当にブチャラティたちは来るんだろうか」

ブチャラティが裏切るのは予想外だった。カルネは飛行機を墜落させたが、それでも奴らは生きているという「予感」がするとボスは言っている。ノトーリアスB・I・Gから逃れられるとは到底思えなかつたが、ドツピオはボスの命令に従うだけだ。

ボスがやれというのならばたとえ無駄足だろうが完遂する。

アバッキオが生きていたとしたら、あの石碑の場所に必ず現れる。そしてボスの正体につながる手がかりをみつける。

ドツピオにはそれが何なのか知らされていないが、ボスの正体に迫るものは何人たりとも生かしておけない。

ブチャラティ達以外にも懸案事項は山ほどあつた。

暗殺チームはブランク含めまだ三人残っている。そのうちのメローネは能力不明だが、サン・ジオルジョ・マツジョーレ島で表立つて動かなかつたあたり、サポート系の能力なのだろう。

“知らない”というのは何よりも恐ろしい。

さらにリゾットが情報分析チームを壊滅させたおかげで、暗号化されたネットワークが一時的にクラッシュされていた。誰の仕業かわからないが、どうやら暗殺チームの裏切りに乗つかつて連中がいるらしい。

いまは各地に分散した生き残りがネットワークを再構築しているが、完全復旧には時間がかかる。

暗殺チームはチョコラータがおつているとはいえ安心はできない。

『いいかドツピオ…チョコラータを決して信用するな』

ボスが教えてくれたチョコラータの経歴は吐き気を催すほどのものだった。奴ほどのゲス野郎が暴れる機会を逃すとは思えない。

情報分析チームの殺害現場の痕跡を見るに、チョコレートはリゾットをほとんど追いつめていた。なのにやつは仕留め損ね、さらには見逃した。

やつはブランクに執心するあまりボスの安全を軽んじている。いや、むしろやつのことだ。裏切りまで考えているのかもしれない。

ボスはティツァーノとスクアアーロを唆し死に追いやつたのもチョコレートだと聞いていた。

「最終的にこの事態を收拾するのはボスの右腕である自分の役目なのだ……」

とうるるるるるん……

「もしもし？ドツピオです」

『何をしているのだドツピオ』

「ボス！すでに目的地に着きましたよ。ブチャラティたちはまだ来ていません」

『違う、お前はすでに監視されている』

ボスの声色はかなり尖っている。ドツピオは思わず体をこわばらせ周囲を見回そうとしたが、電話の向こうから険しい声で止められた。

『妙な動きをするな。そのまま、何でもないつて風を装え』

だが、もうドツピオは異変を感じ取っていた。急に鳥肌が立ち、背筋に悪寒が走った。

「な、なんだ……寒気……？」

日は照っている。風もない。4月にしては暖かい今日この日に寒気がするなんて……

ドツピオが無意識に腕を擦ろうとしたとき、背後から声が出た。

「百聞は一見に如かずって諺があるがよオ」

刺々しい声だった。ドツピオはゆっくり振り向く。全身を白いスーツが覆っている。いや、あれはスタンドだ。

「オレはことわざに一家言ある性格なんだが…この諺に対しては特に言うことはねえぜ。今、まさにオレはてめーの正体を見て確かめようとしてんだからなア」

そしてこの冷氣。暗殺チームのギアツチヨだ。

「だっ…誰ですか?!」

ドツピオは後ろに飛びのいて、すつ転んだ。臀を強く打ち、痛たと呻く。大抵のやつはそんなどんくさいドツピオを見て、おや?と攻撃を思いとどまる。

だがギアツチヨは違った。

「なるほど確かにてめーがボスだと言われても到底信じられねえーな。だが万が一人違いだろうとどうでもいい。即、やらせてもらおう!」

「てめーがボスだと言われても」だと?!

ドツピオはギアツチヨがいった言葉を正常に処理できなかった。

考える間もなく、地面が即座に凍りついた。ドツピオの靴底を覆うように氷が広がっていく。

ドツピオは既のところまで凍りつくのを飛び退いて避けたが靴は持つていかれた。靴下越しに触れる地面は異様なほどに冷たい。

凍傷になつちまいそうなくらい…いや、もうなっているか…それくらい冷たいぞ!これがやつのスタンドなのかとうるるるるるるん……

手に持ったままの電話がまたなった。ドツピオはすぐ取る。

『ドツピオ、エピタフを使うのだ。やつはお前を殺すとすでに「決めて」いる!誤魔化しの時間はない…私もすぐに向かうが、時間がかかる。それまでお前はやつの攻撃を避けなければならない!』

「なんだ…電話か? 気味悪いなオイ。だがよおーてめーはもう逃げら

れないぜ！」

ギアツチヨが手を振りかぶると、ギヤリギヤリギヤリという不快な、固いものがこすれる嫌な音が空中に響いた。

ドツピオは、ほんのすこし体を左へ傾けた。

バスツと言う音がして地面が破裂した。

狙撃されている。おそらくはブランクから。

どこからかはわからないが、ドツピオはエピタフでしっかり目撃していた。銃弾が空中で乱反射している様子を、そしてその反射でキラキラと何かが舞っているのを。

「避けるか。てめー、やはり予知のような能力を持つてんな？まあいい。お喋りはもう終いだ」

『ドツピオ、予知するのだ！次はどこを狙っているのだ』

「く…エピタフ!!」

ドツピオが見た光景は、光だった。十秒後の自分はキラキラとした光の中にいる。一体どういうことなのか全くわからなかった。

『何が見えた！』

「光だ！この光…まさか」

ギアツチヨの周囲には氷の壁が作られている。さつき見えた光はそれだ。

途端、銃弾が降り注ぎ、氷の破片が舞った。

弾丸は破片をさらに細かく砕き、ドツピオのまわりに飛散する。

「ツ…」

10秒にも及ばない時間でドツピオの周囲に細かい氷の檻ができている。歩いては動けば氷が…皮膚に…

「一歩でも動けば氷が…皮膚に…」

『まさか…ドツピオの正体に気づいているのか？』

電話から聞こえるボスの声は初めて聞くくらい焦っていた。言っていることはよくわからない。だが、今自分に何ができるといふんだ…?!

情報によればギアツチヨのホワイト・アルバムに隙はない。すべてを凍らせる能力なんて予知ができてどうこうなるもんじゃあない！



『氷の檻から抜け出せドッピオ！2メートル以内に近づき、キング・クリムゾンで即座に殺すッ！』

はい、ボス

と返事をする前に手に持っていた携帯電話が弾け飛んだ。今度は氷の壁を反射させたものじゃない。はつきり捉えた。

ここから30メートルは上の岩場にスコープの反射光が見える。

「ブランク、ためエーチクショーツ！」

だが岩場の上には「3つ」人影がある。

ドッピオはその意味を即座に理解した。

二三步悪あがきのように横へ逃れる。すると

「バラバラになりな！」

足元にいつの間にか転がっていた岩が人型に変化した。

「ベイビィ・フェイス！」

サルディニアに無事上陸したブチャラティ一行は写真の石碑へと急いだ。当然目立つ手段は使えなかったため小さなボートで沿岸をいき、近場で降りて歩いた。

その建物は地元の人にはよく知られており、観光客はあまり来ないらしい。ボスはこの島の出身だというから穴場を知っているのは当然だ。

15年前の、青年だったボスが暮らしていた地。トリツシユはどんな気分なのだろう。亀の中から出してやれないのは些か気の毒だが、用心に越したことはない。

石碑で15年分の過去を巻き戻さなければならぬ。アバツキオいわく、7〜8分はかかるそうだ。なるべく急いでリプレイしすぐに立ち去らねばならない。

「ブチャラティ、周辺20メートルには観光客以外に不審な呼吸の点はない」

いま外に出ているのはブチャラティとナランチャのみだ。ナランチャはエアロ・スミスで索敵をし、安全を確認した後、別に別の場所で待機しているアバッキオが合流する流れだ。

「よし…もう少し範囲を広げてみてくれ」

「わかった」

建物はとても目立たない岩場の影にある。海岸からも離れていて足場も悪いが、観光スポットになっているところよりも静かで落ち着いているいい場所だ。

すぐ上の道はすでに敵がないことを確認している。あとは20メートルほど上に車道がある。その斜面は岩ばかりで、敵が潜むにはうってつけだった。

「あの車道の方まで見れるか？」

「いや…もうちよつと移動しないと射程範囲外だ」

「そうか…念の為少し索敵範囲を…」

そこで、浜辺の方から悲鳴が上がった。

「なんだ?!」

二人はすぐさま駆け出した。そしてビーチに向かうならかな下り道ですぐ異変に気づいた。

「止まれ…ッブチャラティ！」

先を行くナランチャが急に鋭い声をあげ静止した。

「ブ、ブチャラティ…変なこというけどよォ…これ以上来ちゃだめだ…！」

「何？何があつたナランチャ」

「お、オレの…手に、急に湧いてきやがった！」

「湧く？何がだ、見せろッ！」

ナランチャはゆっくり振り向いた。

「…これは…！」

ヤニのような色をした「何か」がナランチャの手にこびりついている。

「坂を下った途端だ…！突然、オレの手にッ…」

「これは…スタンド攻撃か。エアロ・スミスは無事か？」

「あ、ああ。エアロは無傷だぜ！」

「では亀の中のジオルノたちに緊急事態の合図を送れ」

「了解！」

ブチャラティは浜辺に目を凝らした。何人か、死体らしきものが海に浮いている。

「どこかにスタンド本体がいるはずだが…いや、まずはこのスタンドの正体を確かめねばならないか」

浜辺のすぐ上の車道で車が止まる音がした。

「な、なんだ?!人が溺れてるぞ!!」

善良な市民が浜辺の異変に気づいたらしい。車から降り、浜辺につながる階段を降りようとした。

そこでブチャラティたちはこのスタンドの正体を目の当たりにした。

「ぎ、いやぁーっ!!」

階段を下ったはしから、男の腰からナランチャについていたものと同じ“なにか”が一斉に生えてきてそのまま粉々になった。

「これは…まさか“下る”と攻撃を受けるのか」

「そ、そうだ。ここは坂道だ…!」

「この気味の悪いのは…カビか。微生物が肉を食い散らかしているんだ」

「嘘だろ?とれねーのかよこれ!」

「ああ。とにかくナランチャ、お前はこれ以上下つちやあだめだ。そして…敵はおそらく近くにいる!追手だろうがなんだろうが、確実に始末しなくつちやあならない…!」

ギアツチヨは黒電話に“変換”されたドツピオを見て一息ついた。

「ずいぶん…あつけなかつたなジュニア…本当にこれがてめーの父親か?」

「Exactement!そのとおりです…でもまずい。メローネから応答が途絶えました。何かあったに違いない!」

「もしもし、メローネ?ブランク?オイッ!応答しろ」

『……ま……あ……は……』

無線からはざらついたブランクの声しか聞こえてこない。

「アクシデントらしいぜ。ジュニア、メローネのところへ急げ」

ギアツチヨは黒電話を拾い上げ、ジュニアに続く。だが岩場に足をかけた途端、<sup>〃</sup>どぶん<sup>〃</sup>と音を立てて手足が沈んだ。

いや、沈んだという言い方は奇妙だった。触れた岩の感覚は硬い。なのに<sup>〃</sup>めり込む<sup>〃</sup>。まるで泥にでも突っ込んだみたいだ。

「これは……」

「て、てめーが……よお。ギ、ギ……ギアツチヨ……かあ？」

「……よくよくオレには邪魔がはいるみてえーだなあオイ……」

声が出た方を振り向くと、自分と同じように全身にスタンドをまとった男が立っていた。

「てめーは誰だよ。見たことねー面だな」

「お、オレの、名前はあ……これから、これから死ぬ……お前が知る必要は、ね、ねエー……だよお！」

ブランクは自分の肩に突然走った痛みにも目を白黒させた。引き金にかけていた指を外し、おそろおそろ肩を確認する。

肩だけじゃない、背中に何本かメスが刺さっている。

「え……あ……」

腱を切られた。銃を支える腕に急に力がいらなくなり、ライフルが音を立てて地面に落ちた。

「ぶ……らんく」

メローネの声が出た。ブランクは振り返る。

「ボスを……殺せ」

そういうメローネの腹に、土色の手袋をはめた腕が刺さってるのが

見えた。

「ッ……………！ま、さか…あなたは…」

「ああ…ひさしぶりだな、ブランク。いい面構えになったじゃあないか…！」

崩れ落ちるメローネの背後に立っていたのは、オアシスを纏ったセツコと、いつもどおりの白衣をまとったチョコラータだった。

## ホワイト・アルバムVSオアシス

1998年 11月

娼婦の殺人依頼を淡々と遂行していたヴォート・ブランクを尋問した後、ムーロロは彼の身柄を預かった。

外は雨が降っていた。ブランクはくたびれたパーカーしか着ていなくてとても寒そうに見えるが、本人はそういう素振りはない。

「…なんか食うか？」

ムーロロの問いかけに返事はなかった。

「腹減ってないのか」

質問の仕方が悪いらしい。とりあえず反応を得るため、もっとわかりやすい質問にかえた。

「名前はなんだっけ？」

「…ぶらんく…」

「変な名前。…ってオレほどじゃあないか。ブランク、お前家は？」

「ない」

「家族は？年いくつだ？行くところはあんのか？」

「ない。わからない。ない」

「ないない尽くしだなアお前」

「僕は空っぽだから…」

ブランクはそう呟いて黙ってしまふ。なんだか空とか言ってるわりには寂しそうな雰囲気だった。

「…なあ、お前のスタンドはさっき言ってたデス13であってるよな？あれはどういう…」

「ちがう」

「え？」

「僕のスタンドは、みぎるー…」

「でもさっきデス13って…」

「それは、コピーした能力の名前」

「コピー？」

ブランクはただとどしく自分のスタンド能力を説明した。

スタンド発動中の本体に触れると能力をコピーすること。恩人に連れられて何人かの能力をコピーしていること。

ムーロロはブランクを行きつけのリストランテへ連れて行った。潰れるのも時間の問題つくくらいに寂れているが、このスパゲッティは絶品だった。

「美味いか」

「…味、よくわからない」

「じゃあこれが美味いって味だ！わかったか？」

ブランクは口に詰め込んだスパゲッティを飲み込んでから頷いた。「笑ってみ」

ブランクは口の端をぎゅつと吊り上げてみた。とてつもなく苦いもんでも食べたのかつてくらい眉間にシワが寄っている。

「ブサイクだなく！お前の恩人？そういうのは教えてくれなかったのか」

「おんじん…僕を捨てた」

「おや」

ブランクはとても悲しそうだった。ぱつと見は青年のようだったのに、その表情はまるで幼児みたいだ。

「僕は…なれなかったから。でいおに…」

「…ふうん。よくわかんねーけど…期待にそえずに捨てられるなんてよくある話だから気にすんなって」

ブランクは一度黙った。そしてフォークにパスタを巻き終わるとムーロロに問いかけた。

「…：僕はこれから何をすればいいですか」

「そうだな…まずは、それを食い終えて、デザートを食べよう」

ブランクは頷き、スパゲッティを食べた。デザートのパンナコッタも完食した。なんやかんや腹は減っていたらしい。

「お前に命令が必要ななら、オレが出してやるよ」

その言葉を聞いてブランクはほのかに嬉しそうだった。

「わかった。従う」

「物を覚えるのは好きか？」

「得意」

「よし…じゃあいろはを叩き込んでやるよ。よろしくな、ブランク」

「はい。…ムーロロ」

「う…く…」

ブランクは背中に刺さったメスを引っこ抜き、地面に放った。血が点々と美しい白い岩に落ちる。

「墜落のニュースを見て “飛んで” きたんだ。パツシヨーネのネットワークは便利だなあ。島の盗難車のナンバー追跡をしたら無事こうして追いつけた」

チョコラータの満面の笑みを見てると流れる血まで凍ってしまっそうだ。

「情報分析チームのネットワークは…一定時間管理者のアクセスがないと管理者以外は締め出されるはずだ…管理者アクセスには…ムーロロの、指紋認証が要る」

「ああ、切り取って使ったよ。だからここに来ているのはオレたちくらいだろうな」

「ッ…」

その光景を想像したくなかった。何度も何度も繰り返して反芻させられたソルベの解体光景がムーロロの姿でリフレインする。

ブランクはその幻想を振り払うように地面に突っ伏しているメローネを見た。血溜まりがではじめている。セツコは横に立ってビデオカメラを回している。

その視線に気づき、チョコラータが親切に教えてくれた。

「ああ、まだ死んじやないさ。傷にカビをくつつけてある。ソルベにやったのと同じようにな。…ま、それでも時間の問題だが」

ブランク、頭を回転させる。この事態をどう切り抜けるべきか、死ぬ気で考える。ジュニアの消滅条件に “スタンド本体” の死があったとしたらボスの捕獲も水の泡だ。



いや、そうでなくてももう仲間を失うのはゴメンだ。

「で、(ここ)で何をしていた？」

「……でッ……デート……」

セツコは無言でメローネを踏みつける力を強くした。チョコラータも笑顔が凍ってる。ブランクは慌てて止める。

「や、やめろセツコ！違う！今のは冗談。クソ……！」

ブランクは頭をブンブン振って頭を正気に戻す。

「僕たちはメローネの能力でボスを生け捕りにした！殺したらもう追えなくなるぞ……！」

「何?..」

この言葉にはセツコまでも反応した。メローネから足をどけてこちらをじつと見つめてる。

「聞こえなかったんですか。ボスを捕まえたんですよ！」

「はっ……ハハハッ！つくならもつとマシな嘘をつくんだな、ブランク。そんな簡単にいくわけがない」

「事実だ。僕はボスの重大な秘密を知っている……。先生、あんたもボスを殺すつもりできたんだろツ？こんなチャンス二度と訪れないはずだ！」

「…それはどうか？ボスでさえ、私のグリーン・デイからは逃れられない。今、あの海岸からカビは広がっている。いや、オレの半径10メートルにすれば嫌でも散布されたカビを吸い込む。その時点でおしまいだ」

「そうかな。ボスの能力なら殺せると思います。…だって先生はボスのスタンドを知らない。無知っていうのは力の前でもっとも無力だ」  
「……そうか。じゃあ教えてくれよ、ブランク。おまえの仲間の命と交換だ」

チョコラータはあっさりと交渉に応じた。いや、脅迫に切り替えやがった。

「や、やめろ！僕に直接やれよ！」

「うおッ！オオッ……！」

セツコがしびれを切らしてブンブン腕を振り回し始めた。それを

見てチョコラータは微笑みながらなだめる。

「慌てるなセッコ。箱を置いてけ」

セッコは背負っていた鉄製の箱を置いて準備運動でもするかのよう  
うにびよんびよん跳ねた。

「さて、セッコ…残りの暗殺チームの生き残りの…ギアツチヨだった  
か？そいつの死体を持って帰ってこい」

「うー！」

セッコは「ダイブ」した。地中を泳ぐぐもった音が足元を通過  
していった。チョコラータは自分のカウンターであるギアツチヨを  
セッコに始末させるつもりらしい。ギアツチヨの絶対零度にカビも  
クソもないからだ。

ギアツチヨは黒電話を拾い上げ、ジュニアに続く。だが岩場に足を  
かけた途端、「どぶん」と音を立てて手足が沈んだ。

いや、沈んだという言い方は奇妙だった。触れた岩の感覚は硬い。  
なのに「めり込む」。まるで泥にでも突っ込んだみたいだ。

「これは……」

「て、てめーが……よお。ギ、ギ………ギアツチヨ…かあ？」

「………よくよくオレには邪魔がはいるみてえーだなあオイ……」

声が出た方を振り向くと、自分と同じように全身にスタンドをま  
とった男が立っていた。

「てめーは誰だよ。見たことねー面だな」

「お、オレの、名前はあ………これから、これから死ぬ…お前が知る必要  
は、ね、ねエー…んだよお！」

セッコはギアツチヨをみつめる。その目には絶対自分を始末する  
という覚悟が見える。

「ジュニア！てめーは先に上行つてろ」

ギアツチヨは黒電話をジュニアになげた。ジュニアはそれを受け取り、岩場を登り始める。

セツコはキョトンとして登つてくジュニアを眺めた。

「なんで……？電話なんかもってんだ？だ、大事な電話でも………くんのかよ？」

「てめー、ヤブ医者 of 助手だな？」

「やつ…ヤブだと…？どおいう意味だ……それ…？」

「……」

こいつ、いろいろ足りなさすぎんだろ。

ギアツチヨは間髪入れずにセツコをぶん殴った。  
が、セツコはその拳を腕でガードした。この速度を見切るとなるとかなりのパワーとスピードを誇るスタンドなのだろう。奇しくも自分と同じように。

セツコは腕を押し返ししながら、余裕そうに微笑み、片手に持ったビデオカメラをこちらに向けた。

「な、なんかお前よお、お、オレと………キャラ被ってないか？そのスーツはよオ……オレのば、パクリっぽいぜ」

「んな、わけ…あるかよッ！クソがアアアツツ!!」  
ギアツチヨはホワイト・アルバムでセツコの腕を凍らせた。セツコは驚きのけぞるが凍りついたせいでギアツチヨの拳から腕が離れない。

「うオオツ?!な、なんだこれッ…！」

「このまま凍らせてバラバラにして海に沈めてやる」

ギアツチヨの挑発にセツコは咆哮を上げた。途端、どぶんと音を立てて氷が溶ける。

「オアシス！」

距離をとったセツコが拳を振りかぶり今度はギアツチヨが攻撃をガードする。

セツコは再び凍らせられないようにすぐにまた飛び退き、地中に潜

る。地中にホワイト・アルバムの冷却を届かせるのは骨だ。

「今の感じ、熱じゃねー。さっきの岩の感触からしてこいつ周りを液化化させる能力のようだな。氷も一応鉱物だし理にはかなってる…ってことか」

どうやらホワイト・アルバムとの相性は最悪らしい。やつの周囲すべてを凍らせたとしても溶かして地中に逃げられれば結局リセット。一方的に封じ込めないととなると、殴り合うしかなさそうだな。

「チツ…何がパクリだ！クソが！クソがクソがッ！本気でマジのマジでムカつく野郎だなてめーはよオツ！」

ギアツチヨは大気中の空気を凍らせ、つららを作る。地中を「潜水」する微かな音と地表に現れる僅かな波立ちを感じ取る。

発見した。セツコはまっすぐ自分の足元に向けて泳いでくる。

ギアツチヨは跳躍し空中のつららを掴んでぶら下がる。敵の能力は「地面に潜る」だけだ。だとすれば地表の標的を見極めているのはヤツ自身の身体能力に由来するものはずだ。

自分の能力でさんざん分かっているが、着るタイプのスタンドというのは本体のフィジカルで強さがかなり左右される。

相對してわかるこの強さ。相当な身体能力を有しているのは明らかだ。

ギアツチヨは空中に固定した氷柱を波立つ地面に向けて投擲した。ぼちゃぼちゃと音がして地中に突き刺さる。

セツコはさつきまでギアツチヨが立っていた位置に飛び出してきた。肩に氷柱が突き刺さっている。硬さはホワイト・アルバムには劣るようだ。

ギアツチヨはそこにすかさずセツコの周辺の空気を凍らせる。

「うッ…い」

セツコは途端に冷えた自分の全身に体を硬直させるがすぐに地中に逃れる。

ギアツチヨは着地すると同時に地面から数センチの厚さの氷を張

る。

オアシスは氷を溶かし進むことはできるようだ。だが氷は一度液体に戻ると液体のままだ。

「普通あれだけの冷気を吸い込んだら肺がやられてもおかしくねえ。こいつ、異常なまでの肺活量を持ってやがんな。地面の中を泳ぐならまあ当然か…」

じゃば…

水音がする。セツコもギアツチヨを探知できるがこちらも溶けた氷で大まかな位置は探知できる。

「スタンドパワーはほぼ互角…防御力はオレが上。だが…メローネがピンチか。しかも敵は地面の下からオレを狙い放題。なんでこうオレの敵はめんどくせーやつばっかなんだ？クソムカつくぜ…」

次顔を出したら、初撃は何が何でも避ける。直当てして押し切るしかねえ。

幸いあつちはつららが刺さっちゃう程度の脆さだ。

気密性も悪く、冷却それ自体は効く。

だがおかしい。先程から周囲に気配は感じない。撤退するような性格とも思えないのに奇妙だ。

ギアツチヨが考えている合間、突如影が足元に広がった。

「何?!」

上に広がっているのは岩場の色の泥だった。

ざばっ!

地面に水が碎ける音がする。そしてすぐにギアツチヨは自分がハメられたことに気づいた。

「オレのオアシスでものが溶けたあとよお……射程外にでたもんは、も…もとの鉱物に戻る。氷は…もともにもどんねーけどなあ…」

美しいコスタ・スメラルダの岩場は不気味に溶けた崖に変わってい

た。

ギアツチヨのいた部分には巨石ができていた。斜面から溶かした石すべてがオアシスの射程外に。出たことにより再度固まりできた岩だ。

「圧死…は、しないにしても…窒息死はするはずだ…」

セツコはビデオを回しながらニヤニヤと笑みを漏らした。

「どう…かな？おめーのパワーで砕くには…でかすぎんじゃあ、ね、ねーか？」

「ブランク、とつとと答えろ。ボスのスタンド能力はなんだ？」

チヨコラータはメローネの髪を掴み、無理やり顔を見せた。顔の半分は血で汚れている。

チヨコラータはメスをその首筋に当てこちらを睨んだ。

「ツ…ボ、ボスの能力は時間だ！時間を飛ばすんだよ！」

「時間を飛ばすだと？」

「ああ」

「どうやってボスを捕まえた？そんな能力…無敵じゃあないか」

ブランクは虚偽を織り交せて説明する。黄金比は9の事実には1の嘘だ。

「…ギアツチヨを囚にし、僕の狙撃で移動を制限してからメローネのベイビィ・フェイスで闇討ちしたんだ。ボスはベイビィ・フェイスの存在も能力も知らなかったからね。ベイビィ・フェイスは生物を物質に変換できる。ボスは今、何かモノに変えられてるはずだ…」

「…ほう。よく成功したな」

「ボスも同じ手は食らわれない…だから絶対にメローネを殺しちゃだめだ」

「ああ、それはよくわかった。いいや、それだけわかれば十分だ」

チョコレートはさつきセッコが置いていった箱を投げ渡した。縦60センチ、厚さ30センチほどの鉄の箱だ。

また、ブランクの脳裏に2年前のことが過る。

「ブランク。開けろ」

「…いやだ」

何が入ってるのか、言われなくてもわかる。

チョコレートは僕が何をすれば一番傷つくか知り尽くしている。

チョコレートはビデオを構え、ズームした。

「開けたくないのか…じゃあ先輩にお別れを言うんだな」

「…」

ブランクは箱に手をかけた。重いつちや重いが、せいぜい5キロくらい。蓋は留め具を外すとスライドするようになっていた。

留め具を開けて、蓋を持ち上げる手が止まった。だがメローネの首にはもうメスが食い込んでいる。

「ツ…わかつてる…開けるよ…」

ブランクは意を決して、蓋を一気に開けた。

箱の中はブランクの髪の色と同じ朱の布地のクッションで内側を張ってあった。まるで棺みたいだ。

その中に、頭と胸部だけになったムーロロが納められていた。

「うツ……………」

ブランクは吐き気のあまり思わず手で口を抑えた。

傷口、箱、苦悶の顔。最後に見たムーロロの顔とソルベが死ぬ寸前の顔。全部が脳みその中でぐちゃぐちゃに混ざり合う。

「その顔だよ。それを楽しむために来たんだ。ボスはいわゆる、棚ぼただ」

「む…ムーロロ…」

「いやー、大変だった。あのときより時間もないし、久々だったからな。必要臓器は揃えておいたんだが、ここまではもたなかったか…ちよつと触ってみろ。まだ温かいかもしれない」

ムーロ口の痛みを想像する。

手足を切り取られ、縫い合わされ、切り取られ、視界も聴覚も奪われて、腹を割かれる。その間死ぬことも叶わず、この男を喜ばす悲鳴を上げる他ない。

地獄を。

「うツ…ああ……」

「そいつの為に泣く必要なんてない。お前を利用して組織をしつちやかめつちやかにしようとした卑怯ものだ。恥知らずだぞ？こいつさえいなけりやお前は仲良しクラブでのほほんとしていられたんじゃないかって…考えたことなかったか？」

チヨコラータはブランクの涙が小さな棺に落ちるのを見て爆笑し、ビデオを回した。

ブランクは息ができなかった。酸欠で真つ白になりそうな頭の中にはち切れそうな憎悪が湧き上がってくる。考える暇もなく、口から言葉が飛び出てきた。

「殺してやる…！」

ブランクの言葉にチヨコラータは更に高らかに笑った。

ブランクは気づいたら駆け出していた。落ちたメスを拾い、投げようとした矢先に腹部にもすごい痛みが走って体勢を崩し、地面にそのまま勢いよくぶつかった。

「い……ったい、なに…がツ…」

口から大量の血が流れ、下腹部がとてもあたたかくなった。ブランクは痛んでいる部分に手をやる。

「え……」

6日前、ローマでチヨコラータに矢を撃ち込まれた部分からの出血だった。

もうとっくに治ったと思っていたのに急に傷口が開いたのか？いや、そもそもこんな血が出るような傷じゃあない。内側からずたずたに刻まれたかのような痛みだ。



「一体どうしてって顔をしているな、ブランク」

ジューツという音を立ててカメラのレンズがこちらにズームする。チョコラータはこちらへ歩いて近づいてくる。

「遠く離れたグリーン・デイのカビを温存しとくなんて、前までのオレじゃできなかった。だが、不思議とな…お前と会って話をするうちに、オレの能力も成長したらしいな」

チョコラータは足でブランクを仰向けに転がす。メスを持った手を思いつきり踏みつけ、指の骨を砕いた。

「……ッ……」

「お前のおかげだよ、ブランク。お前と話しているうちに、オレはオレの欲望にもう一度きちんと向き合うことができたんだ。本当に、本当に感謝している」

チョコラータは手を伸ばし、潰れた右目にそのまま指を突っ込む。

「ギッ……あ………!」

「ああ…眼窩の内側っていうのはすべすべしてて気持ちがいいな」

「ッ………!あッ……!ゲ……」

「なあ、このまま指を突っ込んで、脳味噌からカビを一斉に生やしたらどうなるんだろう。ぶっちゃけ試した事はあるんだが…お前はあの時何を見るんだ？興味がある」

ブランクの首からも血が吹き出てきた。痛みでチカチカする視界の中、ビデオカメラに自分が映るのが見えた。

腕を振り回そうがチョコラータはお構いなしだ。

「オレも成長したんだ、お前も成長してるはずだろ？それとも、成長してその程度なのか？最後の最後に無抵抗で死んでいくつもりか？」

「ちッ…がう………待って、るんだ…」

「は？何を…」

「ベイビー・フェイス!」

ジュニアの接近にチョコラータはギリギリのところまで気付いた。だが肩口を狙った一撃を正確に避けることはできない。

だからチョコラータは自分で腕を切断した。

「何ッ……?!」

ジュニアは驚きのあまり追撃ができなかった。チョコラータはそのまま飛び退き、倒れたブランク、ジュニアと距離をとった。

「こいつが…ベイビィ・フェイス、なのか…なるほどな……」

## グリーン・デイとブランクの『ミザール』

「うっ…」

ジュニアの拳にはカビが付着していた。

ジュニアは受肉したスタンドだ。カビの攻撃も通るらしい。振り落としたジュニアの腕にびっちりカビがついているのを見て唸った。

だがすぐに自身を分解し、カビの部分だけ切り捨てて再度自分の体を構築した。多少体は小さくなるがこれならば動ける。

「なるほど、物質に変えるだけじゃなく、スタンド自身も変身できるんだな？そしてオレに近づくことは近距離パワー型…か？妙だな」

チョコラータは片腕を自ら切り離れた割には元気そうだ。この元医者では自分の体を切り刻むことも得意らしい。

残った腕で気絶しているメローネを指差し、ジュニアに、まるで出来の悪い子に言い聞かすように言った。

「忘れんなよ。…メローネとブランクの体内のカビをな。二人の命は未だオレの『お気持ち』次第なんだぜ」

ブランクは右目を押さえて起き上がる。体が痛みで制御できないように、血を吐いてまた倒れてしまう。

「ブランク！起きてください！」

ジュニアが必死に呼びかけるがブランクはなんとか上体を起こすだけだった。首からも血が溢れ、下手したらメローネよりも血塗れだ。

「ボス本体を確保してんだろ？オレにわたせ。そしたらこのままオレも大人しく帰ってやるよ」

「ブランク…」

「…ジュニア、だめだ。どー考えてもウソだ。それを…あいつに渡すくらいなら、ジョルノたちにくれてやれ…」

ブランクは血を拭いながら言った。

チョコラータは余裕からか笑顔だ。なんなら腕の切断面はカビで保護しているおかげで出血もない。

ジュニアは生理的嫌悪感で一杯になって、どうすればいいのかわからなくなる。指示をくれるメローネは死にかけていて、自分の決断次第で殺すことになる。

今まで生まれてきた数多のジュニアたちの心に情というものはなかった。だが、今回の彼は違った。

メローネが死ぬことが自分の存在にどう関わってくるのかわからなくて恐ろしくなる。

「死ぬ」ことはない。きっと。

だが、自分が一人で世界に放り出されてしまうのは死ぬのと同じくらい怖いような、そんな気がした。

メローネが助かる可能性が1%でもいい。あるのならば、それに賭けたい。

「……ブランク、すみません」

「やめろ…ッ！ギアツチョと、それ持って逃げろ…！」

ブランクの声を無視し、ジュニアは黒電話を取り出してチョコラータに向けて投げた。

チョコラータは黒電話を受け取りジロジロと観察した。

「本当にこれがボスカ…？信じられねーな。能力を解除しろ」

「その前にメローネをわたせ！ブランクのカビも解除しろ」

「スタンドのくせにいつちよ前に交渉か？いいぜ」

チョコラータはジュニアをあざ笑う。そしてグリーン・デイがゆつくりメローネを持ち上げ、思いつき崖の外へ投げた。

「メ、メローネ…ッ…！」

落下は即ち死だ。カビが全身を食い尽くし、メローネは確実に死ぬ。

ブランクは力を振り絞り、ボスを狙撃していたライフルまで跳んだ。スコープを覗く余裕なんてなく、ほとんど盲撃ちだが、構わず引き金を絞る。

「クラフト・ワーク！」

運良く銃弾が一発メローネの体に当たった。そして銃弾はそのまま空中に“固定”される。

「ジュニアーツ！メローネを物質に変換しろツ！！」

「器用な奴だよまったく……」

ブランクが叫ぶのと同時にチョコラータは再びメスを投げた。ブランクは振り向きざまにライフルを構え、チョコラータに向けて撃つた。

だが先程踏み砕かれた右手は、骨が皮膚を突き破った傷口からカビに食われていたらしい。人差し指と小指が引き金を絞つてすぐに崩れ落ちる。

「ク……ッ、医者アアーツ！かかってきやがれ！」

ブランクは構わずライフルをぶん投げた。そして自分の体に刺さったメスを抜き構える。

チョコラータは投げつけられたライフルを片腕で弾き飛ばす。ブランクはすかさず、がら空きの脇腹にメスを投げる。

脆くなつた指がまた崩れ落ち、飛び散った。

「おまえのそのあまつちよろいスタンドで……ッ！運命をどうこうできるなんて思い上がってるんじゃないツ！ブランク！」

メスは刺さった。だがチョコラータはお構いなしだった。

ブランクの顔面にチョコラータのパンチが叩き込まれる。ブランクはあえなく倒れ、青空を見上げた。

チョコラータは腹に刺さったメスを抜いてから自分の腕を拾い、あつという間に縫合して元通りにした。

メローネはすでにジュニアの手によって回収されたらしい。ブランクはしっかりと目で確認した。

チョコラータはまたビデオカメラを回し、仰向けに倒れたブランクを撮る。

「悪いが……お前と遊んでちや本格的にこつちがやばいみたいだな。名残惜しいがとどめを刺すツ」

「……そう……だね。僕も名残惜しいよ」

チョコラータは急に膝に力が入らなくなり、かくと地面に膝をつ

いた。

「やつとあんたの中身に届いた…やつとだ」

「な…なぜ膝が…？脚に、力が…」

先程ブランクが投げたメスが刺さった部位から、病巣のように真っ黒な痣ができている。そこからベコリと、まるで事故った車のバンパーみたいになべツコリと腹が凹んでいた。

「いやッ…これは痣なんかじゃあないッ…！これは…！これはッ！」

「『グリーン・デイ』！あんたのホンモノと違って、何かを媒介しなきゃ遠くには届かない貧弱なカビだし、高低差による細かい制御はできない。一度発動したら目の前の餌を食い散らかすだけだ」

「て、テメエ…！オレの…オレのスタンドを、このオレに！食らわせやがったなチクシヨオオオオ…ッ!!」

「僕に手加減する器用さはないから…あつという間に『致命傷』だ。もうあんたにカビを操る力はないッ！」

「なめてんじやあねーぞブランク！テメー一人を道連れにするくらいは余裕だぜ！」

チヨコロータはカメラを投げ捨て、ブランクの首に手を伸ばした。ブランクはもう骨しか残ってない右手でそれに抵抗するが、握られた端からカビの胞子に巢食われていく。

「ブランク！」

大声がして、ブランクの背後からジュニアが崖を駆け上がって跳躍した。

「させるかよ！このゲスがアア…ッ!!」

ジュニアの拳がチヨコロータの頭部にめり込んだ。そのままジュニアは殴り抜ける。そしてラツシユを叩き込む！

「てめーは苗床がお似合いだ」

チヨコロータは三メートルほどぶつ飛ばされ、ぴくりともうごかなくなつた。ブランクの傷口のカビも消え、腹と首の痛みが消える。ジュニアは捨て台詞を吐いた後、地面に崩れ落ちた。

ブランクはなんとか立ち上がり、ジュニアの体を起こした。腕を起点に体中からカビが萌芽している。チヨコロータは最後の力を振り

絞ってジュニアだけでも確実に殺そうとしたらしい。

「く、くらつていた…みたいですね…ヘマをしました」

「ジュニア…ごめん、ありがとう」

ブランクはそつとジュニアの体を撫でる。体温を感じるっていうのはなんだか不思議だ。

「メ、メローネはすぐ下の道路の縁石にしておきました。きっと、すぐに…手当をすれば…」

「わかった。…またね」

「ま、またはないですよ…あつたら嬉しいんですけどね…」

「おつかれ…」

ジュニアはブロックみたいになって、最後にはそのへんの石と見分けがつかなくなるくらい、バラバラになって死んだ。

「泣いてる…場合じゃ、ない…か」

ブランクは立ち上がり、チョコラータが倒れているあたりを睨んだ。

チョコラータの死体のそばから人影がゆっくり、立ち上がる。

「まさか、この私と相對するのが…ヴォート・ブランク。お前になるとはな…」

「ヴィネガー・ドツピオ…いや、ボス…!」

「どう…かな?おめーのパワーで砕くには…でかすぎんじゃあ、ね、ねーか?」

ぐちゃぐちゃに溶けたコスタ・スメラルダの岩場と、やけになだらかでつるつるした石の塊。チョコラータとブランクがやりあっているところから70メートルは離れた道路で、セッコはその岩をビデオに撮っていた。

「こいつはもう動けない…はずだ。…そうだ…チョコラータに連絡…えつとお…どのボタンだっけ?」

セッコは太もものポケットから携帯電話を取り出した。ウンウンうなりながらなんとか通話ボタンを思い出し、チョコラータにコール

する。だがチョコラータは電話に出ない。

「チョコラータ?…な、なんで…でねーんだ?なんかあ、あつたのかよ」

セッコはギアツチョコが閉じ込められている岩とチョコラータがいるはずの崖の上を交互に見る。

「アツ…死体をもつてこいつって言われたのにこれじゃあ運べねえ!…どーしよう…クソくふ、ふぎけやがって」

セッコはしばらく迷った。だが崖の上から妙な音が聞こえた。サプレッサーを通した銃声だ。

「チツ…ギ…ギアツチョコ。て、てめーはか、観光名所…にでも、なるんだな…」

とにかく今はチョコラータのもとへ戻ろう。

セッコはチョコラータの元へ向かおうとした。だがギアツチョコの岩の下からぴしゃぴしゃという水の音がして立ち止まった。

「なんだ…?雨漏り…じゃなかった、水漏れ…か?」

次いで岩に亀裂が走った。セッコがそれを覗き込もうとした刹那、氷の塊が岩をぶち破って「発射」された。

「ダアあああッ!うばあー?!あ、危ねエーじゃねーか!!」

「クソカスが…こんな岩ぶち砕くために…スタンドパワーを滅茶苦茶消費したじゃあねーか。ろくな飯食ってねーのによオ〜!」

ギアツチョコは泥に飲み込まれる直前、スーツに空気を取り込むと同時に更に分厚い氷の装甲を作り出していた。一度凍結を解除し、滲み出た水を凍らせ、また解除し、ほどよく水が浸透してぶん殴る。

めちやくちや単純に岩を砕いて出てきたのだ。

「てめーオレをあんまナメてんじゃねエエー!!」

「お、お前ッ!しっ、しぶてえーんだよ!!」

セッコは再びダイブする。どぷんと地中に頭まで浸かった瞬間、全身が硬直した。

「な…アツ?!固い!!いや、つつ…冷てえ!」

「反応の遅れが命取りだったなモグラヤロー。この地面に染み込んで



る水はオレがじつくりじつくり冷やした水だぜ」

「オ…ッオアシスッ！」

セッコは慌てて泥化を急ぐ。だがギアツチヨは勝ち誇ったように高らかに咆哮する。

「そしてそういう水は！衝撃を与えた途端瞬時に凍るッ！」

そして振り上げた足をそのまま凍らせた地面に叩きつけた。

足は地面に食い込み、ブレードの先端に骨を砕く手応えがあった。セッコのくぐもった悲鳴が地面の下から響いてきた。だがやつの死体は上がってこない。むしろより深く、深く溶けて潜っていくような振動を感じる。

「頭は割ったはずだ…。なのに動くだど？しぶてーのはどっちだよ…」

ギアツチヨは息切れしながら呟いた。そこに突如銃声が鳴り響く。聞き慣れたブランクのライフルの音じゃない。拳銃の音だ。

銃弾がホワイト・アルバムの左膝の部分にめり込んでいる。

「てめー！ギアツチヨ！オレたちを追ってきたのか?！」

「だあアアア…ッ!!だからッ！なんでオレにはこう邪魔が入ってばっかなんだ超ムカつくぜッ!!クソがア…ッ!!」

「うっせー！今度こそ仕留めてやるからなッ！」

「テメーらといちやつくのも悪くねえ！だがオレたちの目的はテメーらなんかじゃあねえーんだよっ！すっこんでろ、雑魚がッ！」

ギアツチヨは跳躍した。空気中に氷の柱を作り出し、それをどんどん登っていく。

ミスタは柱を折るために数発撃つ。

「バカの一つ覚えみてーに撃ちやがって！」

だがギアツチヨもいちいちジェントリー・ウィープスで弾き返すなんてだるい真似はもうやめた。氷を砕かれるのならば崖から別の氷柱をはやし、それを這い登ってメローネたちのもとへ向かう。

「ミスター！上にはすでに、シオルノとナランチャが向かっている。オレたちで挟み撃ちにするぞッ！」

「ああ！」

セッコは前頭葉にできた傷を抑えながら、必死にチョコラータにコールした。だが電話には誰も出ない。何度かけなおしても、チョコラータは出ない。

「…チョコ…ラータ…まさか…負けた、のか？」

セッコの携帯を持つ手ががくがく震える。ずっと信じていた、ついできていたチョコラータが負けた？

「チョコラータ、負けたなんて嘘だよな？…お、オレの信じてるあんたが…よオ！」

地中を潜り、セッコは崖の上を目指す。

チョコラータの携帯に繰り返し繰り返しコールしながら

とうるるるるるるん……………

とうるるるるるるるん…

とうるるる…

「…ここまで…ここまで事態が悪化するとはな」

ボスはブランクの方を向いていなかった。チョコラータの死体を見ながら、淡々と言葉を発する。

ブランクはドツピオと同じ服を着た、なのに全く凄みの違うその背中をみてゴクリと息を呑み、攻撃が来てもいいように構えを取る。

血を失いすぎて立っているのがやつとだ。スタンドを出せたとしてもろくなパワーも出せやしないだろう。

足元のおぼつかないブランクに、ディアボロは語りかける。

「言え。お前はどの能力を使って私の正体を見破った？」

ブランクは息を呑む。真実をそのまま伝えればボスはメローネを絶対に、確実に殺すはずだ。トリツシユよりもベイビー・フェイスのほうが脅威なのは明らかなのだから。

だったら自分は勝利のために、嘘を突き通さねばならない。メローネが生きていれば、ボスを追跡することは可能だ。命の優先順位は明らかだ。

「……………僕自身の力だ。面接のとき、僕はドツピオに触った。トリツシユにも触った。…僕にはわかるんだよ、魂の形が」

「それで…ブチャラティ達を追い、ドツピオを見つけたということか。…まさかたったそれだけの事に足を掬われるとはな」

「……………」

「だが不確かな憶測をもとにここまで思い切れたとは思えん。さらに、ブチャラティたちを追っていたと言うならば、ドツピオの背後を取れた理由もわからん…お前たちにはもう一つ、確証があつたはずだ。言え、真実を。そうしたら苦しまず殺してやる」

誤魔化しなんて通じないようだ。ブランクはいよいよ神様にお祈りをすべきかもしれない。

とうるるるるるるるん……………

とうるるるるるるるん…

とうるるる…

突如、電話がなった。二人はハツとして音のなる方に目をやった。ブランクの目の前に、チョコラータの電話が落ちていた。

「ツ……………」

ブランクは咄嗟に電話を取ろうと手を伸ばす。

「電話をとった瞬間、お前を殺す。真実を言わなくても、お前を殺す。コールが鳴り終えるまでにするか。お前の命は、それまでだ」

ブランクは深呼吸をして天を仰ぎ見る。どうせ真実を話す気はな

い。自分は殺される。

なんて美しい青空なのだろう。

その空に、一筋の雲が走っているのが見えた。

「あ……」

ぶうん…

聞き慣れた憎きプロペラ音。

「エアロ・スミスツ……！」

ブランクがつぶやくと同時に、飛行機が頭上を通過し、まっすぐボスへ掃射した。

そしてブランクは電話を取り、通話ボタンを押す。

ブランクは低く、小さな声で告げる。

「……セツコ…崖を、崩落させろ」

「今ツ……！確かに時が飛んだぞ！」

ジオルノが鋭く叫ぶ。ナランチャも頷き、レーダーに集中した。

「大きい呼吸の点を撃った！だがその呼吸は消えてない。健在だッ」

「となるとやはりそちらがボス……！カビのスタンド使いはもう死んだ、小さい呼吸の点は……暗殺者チームの生き残りか」

「もうすぐそこにいる！……どうするジオルノ」

「どうもこうもない！……ここでボスを倒すッ……」

ジオルノとナランチャはかける。もうボスの姿が見えてもおかしくない。呼吸の点があるのはここから2メートルほど高い、道路からちよつと離れた岩場らしかった。

ジオルノは上を見た。だが駆け出し、踏み込んだ地面の感触が突如変化する。

沼に脚を突っ込んだような感覚だ。

「なっ……これは……！」

ナランチャもジオルノも、その異常事態にとっさに対処するすが

思いつかなかった。

地面が急に泥状に変化している。しかも効果はおそらく斜面全体に及んでいる。

「まずい…地すべりだ！」

泥化した地面の上に転がる岩が斜面を滑り落ちていく。

「ジョルノ！」

ジョルノはナランチャの腕を掴み、すぐそばの木にしがみつこうとする。だが根を張る地中深くまでも泥になっているようだ。

「一体何人のスタンド使いがここにッ…！」

このままじゃ落岩に巻き込まれる。上から落ちてくる岩をゴールド・エクスペリエンスで砕いても土石流のようになったこの斜面を落ちたら重傷は免れない。

「ジョルノ！エアロで亀だけでもッ…！」

ナランチャの言葉にジョルノは頷く。だが

「スパイス・ガール！」

亀の中からトリツシユが出てきて、足元の泥化していない大きな岩を殴った。

「トリツシユ！出てきちゃ…」

柔らかくなった岩の中に三人はくるまり、地面をボヨンボヨンと落ちていく。

「何言ってるの。出てこなきゃ全員死んでるわよッ！それに…いるわ！感じる!!父がすぐそばにいるわ！」

「キング・クリムゾン」

キング・クリムゾンがとらえたのは「崩落する地面」そして巻き込まれ落ちていくブランクの姿だった。

セッコのオアシスのフルパワーだ。この斜面全体が滑落する。

エアロ・スミスの弾丸に当たる心配はない。だが何より重要な

は、〃ブチャラティたちはもういる〃と言うことだ。

ディアボロは目を凝らす。肉眼でだってわかる。

あの石碑の前に、一番いてはならない人物が立っている。

「アバツキオ……ムーディブルースですでにリプレイを〃開始〃しているなツ?!」

ブランクはすでに土砂に飲み込まれかけている。仮にブランクの始末を優先してアバツキオを逃し、自分の過去を知られるリスクをとるべきか。

「ツ……やはり、ブランク！まずは貴様だ」

時は再び正常に流れ始める。ブランクは驚きの表情でこちらを見ている。目と目があった。

「ボ、スツ……！」

だが、足が突然引つ張られた。

「ボス、てめーが……てめーがボス……なんだな……オイ。あと……あと少し、だったのに……よオ」

死んだと思っていたチョコラータが鬼神のような表情でこちらを睨み、脚にしがみついていた。

「死に損ないがツ……」

チョコラータの作り出した一瞬がブランクを逃がす結果に繋がったのは皮肉に他ならない。

ディアボロがチョコラータにとどめを刺す頃にはブランクはすでに崖から落ちていた。

さらに、エアロ・スミスはまだ飛んでいる。そしてこちらに銃口が向いている。落ちたブランクを追えばブチャラティチームとぶつかるだろう。

そして地中から腕が一本、生えてきた。

あの泥色のスーツはセツコのものだ。

「ツ……」

ディアボロはすぐさま時を飛ばした。そして身を翻し、すぐさま標

的を切り替える。

「ナランチャ！また時が飛んだぞ。上にはまだ誰かいるか？」

「あ、ああ！いるぜジオルノ。ぶちかますッ！」

エアロ・スミスは掃射を開始した。

ふにやふにやの岩から出ると、あたりの光景はすっかり変わってしまった。先程の場所から10メートルは落ちている。

「そこにいんのはジオルノか?！」

さらに下の方からミスタとブチャラティが走ってくる。崩れる岩場に足を取られてはいるが二人は無傷だった。ジツパーで危機を回避したのだろう。

「ミスタ、ブチャラティ！」

ブチャラティはトリツシュを見て驚愕する。

「トリツシュ、亀の中へ戻れッ！」

「待つて！父の気配が消えたわ」

トリツシュはお構いなしに、上を凝視して叫ぶ。

「何？じゃあ一体上にいるのは…」

「上に敵がいるんだな。誰であろうがとにかく仕留めとくべきだ。オレは行くぜッ！」

ミスタは拳銃を構え、早速崖を登り始める。続こうとするナランチャをブチャラティが止めた。

「…嫌な予感がする。ナランチャ、お前はアバッキオに退避するよう合図をおくれ！」

「わ、わかった！」

「ジオルノ、お前は“退避”だッ！トリツシュを必ず護れ」

「…ッ…わかりました。気をつけて」

ブチャラティ、ミスタは崖の上へ。そしてナランチャは海岸へ向かった。

ジオルノはトリツシュに亀の中に入るよう促した。  
「すぐにここから退避します。さあ亀の中に」

「ちよつと待つて。ジオルノ…声が聞こえるわ」

「声…？」

ジオルノはすぐにゴールド・エクスペリエンスを出して、地面に手を当てて生命エネルギーを探知する。たしかにすぐそばの岩陰に誰かがいる。だが死にかけだ。

「トリツシユ…早く亀の中へ」

「待つて…ここから見えるわ。あれはッ…！！」

ゴールド・エクスペリエンスがその人物を押しつぶす岩を砕いた。遠くから見たことないが、たしかに見覚えがある。暗殺者チームのメンバーだ。苦しそうに呻き声を上げている。

「…両足の骨が砕けている…腹部にもかなりのダメージだ。よく生きているな…」

「ジオルノ…この人を助けないの？」

ジオルノはしばし悩んだ。この男はおそらく、トリツシユを分解して連れ去ったスタンドの本体だ。さらに高い追跡能力を持っている。

おそらく暗殺者チームをここまで導いたのは彼だろう。状況からしてトリツシユを追ったとは考えにくい。

だとすれば彼らは何を追跡していたのか？

答えはおそらく…

「…命だけは助けます。全部治してまた襲撃されても迷惑ですしね…」

「そ、そう」

トリツシユはほつとした。ジオルノならここでこの男を見捨てても不思議じゃないと思つたからだ。彼はとても賢く冷静で、この数日間で驚かされることばかりだった。

だが、同時にそこに恐ろしさも感じるのだ。

ジオルノたちとほぼ反対側に位置する崖で、ギアツチョは氷により滑落を逃れた。だが上に登りきつて見つけたのはセツコとチョコラータの死体だけだった。



ボスの姿もなければ気配もない。メローネもブランクも生死不明だ。もう、ボスを追う手だては何もない。

「…これで…終わりなのか？」

メローネだ。メローネを探さなければならない。仮にあいつが生きていればジュニアで追跡が可能だ。

ギアツチヨはすぐにメローネと、ついでにブランクを探し始めた。血の跡を見つけてたどると、すぐにブランクを見つけられた。

「ブランク！メローネはどこだ？」

「わからない。…うえ、上にボスがいる。早く…」

「チツ。もういねーよ！消えた」

「クソツ！…すぐ、僕もメローネを探す…」

ブランクは起き上がろうとした。だがブランクの右腕は肘から下が岩の下敷きになって、完全に潰れている。

「ヒツ…い、…痛くないッ！逆に怖いッ」

「お前ほんと使えねエツ！」

ギアツチヨはキレた。ブランクはいつもみたくおちやらけて返すのではなく、神妙な顔をしてうつむいた。

「ごめん…すぐには行けなさそうだ…」

「ハナからテメーに期待してねーよ！」

「ほんとに…ごめん…」

ギアツチヨの予想に反してブランクは今にも泣き出しそうな声で謝罪した。

「…ああ…ったく。クソツ！いいからそこで寝てろ。お前なんてアテにしてねーよ！」

「ごめん…」

ブランクはそうつぶやいて気絶してしまった。ギアツチヨはため息をついて、呼吸を確認した。

死んだわけじゃないなら放つところ。

メローネを探す途中、新入りが岩場を下っていくのが見えた。上か

らもミスタとブチャラティの声がある。あまり長居するとまたやり合う羽目になりそうだ。

メローネはすぐ見つけた。目立つ場所に横たわっていたからだ。腹部に服が破けたあとがあるが、傷はない。ただ両足はぐちゃぐちゃだ。

「クソ…オレはこんなんばつかかよッ！」

ギアツチヨはメローネを担ぎ、ブランクのもとに戻った。

「……ブランク、お前まだ戦う気あるか」

ギアツチヨの問いかけに、ブランクは目を覚まし、力強くうなずいた。

「あるよ。…あるに、決まってる」

「ここにいたらブチャラティたちが来る。だがお前の腕は岩に完全に固定されてて動かせねえ」

ブランクはギアツチヨの言わんとしていることがわかった。すうと息を吸ってから答えた。

「…わかった。自分でやるよ」

「できんのか？」

ブランクは頷いた。

ギアツチヨは氷で鋭利な刃物を作り出す。ギアツチヨはマチユテに似た氷の柄にあたる部分に布を巻き、滑り止めにしてやった。ブランクはそれを受け取ると、弱々しい笑顔で言った。

「…すぐ冷やしてね」

## ABOUT THE BLANK

ブランクは氷のマチュテを振り上げた。肘より少し下に狙いを定める。どうせカビに食われて使い物にならなくなった手とはいえ、切断するのはゾツとする。

重たい刃。これならば一刀両断できる。

つばを飲み込んでから一気に振り下ろす。

「うッ……！」

さつきチヨコラータにカビでやられたときとは違う痛みで脳が痺れる。

ギアツチヨの氷がすぐに切断面を包み、止血をする。だが痛みはそう簡単には麻痺しない。

「チツ…まずいな」

上の方から何かが動く気配がした。ギアツチヨは囁くように言うと、メローネと岩から解放されたブランクを担ぎ上げて崖を猛スピードで下った。

内臓がえぐられた痛み。そして体が切断される痛みがブランクを襲う。失血も相まって、ブランクはそのまま気を失ってしまった。

そして、痛みは過去を呼び覚ました。

## ABOUT THE BLANK

ヴォート・ブランクはかつて“アンドレア”と呼ばれていた。

と言ってもそれは本名ではなく、ビデオパッケージに記載される役名にすぎない。

1989年、ルーマニアでは人々が民主化を求め、革命が起きた。当然国内は混乱に陥った。ブランクはそのさなか、自分の名前を失くしてしまった。

親もなく、保護者もなく、ブランクは物心ついたころ、いつも腹をすかせていた。覚えているのは、ノミまみれの寝床と、『蠅の王』に出てくるような大人不在のストリートチルドレンの王国だ。

そこでは自分の意志を叶えることは困難で、ブランクは言われるがままに年上の命令に従うことでなんとか日々の糧を得ていた。

そんな子どもにも目をつけたのが、革命の波に飲まれ地方に追い出された元ギャングだった。

そのギャングは似たような境遇の子供を集めて一つの施設に入れた。こうしてブランクは名無しの誰かから『アンドレア』になった。

そして子供たちにトーナメント制の殺し合いをさせ、ビデオにして国外の変態に売りさばっていた。

『アンドレア』は優勝候補として計4本のビデオに出演し、優勝した。その間、『アンドレア』は自分の心が傷つかない術を身に着けた。

空っぽになればいい

自分はここにいない

施設にいる子どもが『アンドレア』だけになって、かわいい服と美味いご飯を食べれるようになってから、売れっ子女優の最後を飾るタイトルは『殺人幼女残酷処刑』だと告げられた。

『アンドレア』はただ「そんなもんか」と思った。六歳か七歳かの子供にしてはあまりにも達観した感想だったが、自分の心を守るために空っぽになったのだから仕方がない。

『アンドレア』はカメラが天井に取り付けられた台の上に乗った。手足は鎖で固定される。台自体は安物のテーブルだが、シックな布がかけられ、百合の花と十字架が飾られていた。

そういう趣向らしい。

『アンドレア』は目をつぶり、アンフェタミンを飲まされた。なるべく長く意識を保っておくためだ。こういうビデオは、早々に死ぬよりは苦しんで苦しんで事耐えるほうがウケる。

“アンドレア”は猿轡を噛まされる前にお祈りをしろと言われた。

慈悲深き聖母マリア

主はあなたとともにおられます

主はあなたを選び、祝福し、あなたの子イエスも祝福されました

神の母、聖マリアよ

罪深い私達のために、今、死を迎えるときも祈ってください  
アーメン

“アンドレア”が祈り終わると、三台のカメラそれぞれに処刑人がその腹を搔つ捌く大振りのナイフを見せびらかす。

業務用の高価いカメラ。ビデオの値段に応じて画質を変えて売っている。一番安いビデオは画質を荒くダビングする。最高額を払った一人だけに、マスターテープが渡される。

“アンドレア”の白い下腹部にナイフの切っ先が押し付けられる。ぷつりと、ぶどうの皮が弾けるような感覚がして血が溢れていく。

刃はゆつくり、内臓に到達する。じわじわと体内に挿入されたナイフは、“アンドレア”の子宮のある位置で一度止められる。

「罪には罰をー」

“アンドレア”はこの男が信仰など持ち合わせていないことを知っている。罪も罰もここには存在しない。

殺すものと殺される者がいるだけだ。

ナイフが横に捻られた。絶叫がフロアに反響する。絶叫に合わせて指揮するかのようには、男はナイフを抜き差しし、下腹部をミンチに変えていく。

自分の死がエンターテイメントに還元されつつある中、痛みと絶望に沈みつつある頭を突如響いた銃声が意識を覚醒させた。

“アンドレア”の上に男が倒れ込んだ。ひゅーひゅー息を必死でしているが、全く効果がないようだ。それもそのはず、肺が撃ち抜かれている。

ドアは空いてないのに、この密室にどうやって銃弾を撃ち込んだの

だろう。その時はわからなかった。

苦しんでもがく男を目にして、*「アンドレア」*の空っぽの心の中に、不意に憎悪がいっぱいに満ちた。*「アンドレア」*は倒れた男の首筋に目一杯首を伸ばし、噛み付いた。

そんな事しなくても男は死ぬだろう。だがその真つ暗な感情は自分でとどめを刺さずにはいられなかった。

首の肉を食いちぎり、吐き出す。男の血が顔面にかかって、ようやく殺意が消えていくのがわかった。同時に、自分の命も。

薄れていく意識の中、ドアを蹴破つて侵入してきた人物が必死に自分を助けようとしてくれたのがわかった。

*「ジョンガリ…その子はもうだめだ」*

*「いや、まだ助かるかもしれない。おいッ！なんでもいいからなにか喋れ。気を失うな」*

ジョンガリと呼ばれた男は*「アンドレア」*の手を握り呼びかけた。

後ろからドタバタと他に侵入してくる音がしたが、*「アンドレア」*の視線は空中に漂う不思議な形のかなかに釘付けになっていた。

*「…あれは…はな？」*

*「マンハッタン・トランスファーが見えるのか？」*

*「きれい……」*

こうして、*「アンドレア」*は死んだ。スナッフビデオを売りさばいていたギャングかぶれのゲス共は、雇われた暗殺者により全員闇に沈んだ。

そして次に目が覚めたとき、真つ白な病室で自分を助けてくれた男と再会した。

*「何もかも、忘れたほうがいい」*

男はそういった。

全体的に色素の薄い男だった。目の下に特徴的な入れ墨を入れてるせいか、エキゾチックな香りがする。

*「わかった。…大丈夫、もともと、空っぽ……だから」*

*「空っぽ？」*

*「…なにも……感じない、ことにしたんだ」*

その言葉に男はしばらく黙った。そして自分の頭上を指さした。  
あのあるときにも見えた花に似たなにかがふわふわと飛んでいた。

「見えるか？」

「うん」

「……お前の才能を試してみないか。新しい自分になるんだ」

「新しい、自分……」

「そう。……まず、名前からはじめよう」

やっと思い出した。

僕を助けてくれた恩人の名前を。

ジョンガリ・A。

自分に“ヴオート・ブランク”を与えてくれた人。

1998年 4月

イタリア、フィレンツェ。

「ブランク」

ジョンガリはとても、悲しそうな顔をしていた。あんまりに悲しい顔をしているので、ブランクまでなんだかそわそわしてしまう。

「ブランク、お前とはここでお別れだ」

「どうして？」

「……オレは一度故郷に戻る」

「僕も行く」

「だめだ」

「なぜ？」

ジョンガリはブランクから目を逸らした。最近、ジョンガリはサングラスをかけている。光が眩しいのだ。今はちょうど日が高く登っている。

「……お前は、ここでオレに戻るまでとりあえず生きていろ。いいな」

「……僕も行くよ」

「だめだっていつてるだろう。……ブランク、オレは……もしかしたら視力を失うかもしれない。そうしたら、もうお前の面倒は見れない」

「どうして？僕が杖になる」

「…やめろ」

「僕、なんにでもなれる。…なるよ…だから…」

「やめてくれッ！」

ジョンガリの怒声に、ブランクは体を硬直させた。

「お前は、お前だよ。プツチの言う通り、オレが馬鹿だったんだ。これは罰なんだ」

ジョンガリの失意に沈んだ顔の理由が、ブランクにはわからなかった。目が見えなくなることが狙撃手にとってどれだけの打撃か。

そして、ジョンガリが何を悔いているのか、想像力にかけていた当時のブランクにはわからなかった。

「……………僕は……………どうすればいいですか？」

「…また、新しい人生を始めろ。何もかも忘れて」

「なにもかも、忘れて…」

「そうだ。オレのことなんて忘れろ。そして自分を見つけるんだ」

「……………命令ですか？」

「そうだ」

「……………わかりました」

そうやって、僕は馬鹿正直に命令を守ってしまったんだ。

ジョンガリはそれを何より悔やんでいたのにね。

本当に僕はバカだ。大バカなんだ。

「おい…ブランク。おい。いい加減起きろよ」

ブランクは、自分を呼ぶ声で目を覚ます。気絶していたらしい。頭にモヤがかかっている。最後に覚えているのは…港で車をパクってるギアツチヨの後ろ姿と、眠そうなメローネ。車内から見上げる美しい青空。

あとの記憶は全部混ざり合っていて断片的だ。酷い悪夢と二日酔いに苦しむ雨の日って感じの体調だ。



「メローネ………え？全部夢……？」

「な、わけないだろ……何ならもう今、貧血で死ぬかも。オレ」

ブランクはそばの岩場にもたれかかるメローネを見てぎよつとする。かなり顔色が悪いし、乾いた血がこびりついたまま落とせていなかった。

それでようやくさつきまで何が起きていたか思い出し、顔にかかった前髪を掻き上げるために右手をあげようとした。

「え……う、おっ？え？えっ?!う、腕がない?!」

ブランクは自分でビビって仰け反った。するととたんに体中が傷だらけで痛むのがわかる。

さつきまで見てた夢だとか感傷だとかはまとめて吹っ飛んでしまった。

腕は肘のすぐ下で切断されていてベルトで縛ってあった。今の動きで落ちてしまったが、周りに氷をくるんだ上着が巻き付けられてあったらしい。

「自分でやったのも覚えてねーのか？」

「お……思い出した！え？僕、大怪我じゃないですか……」

「そーだよ。オレも腹ぶち抜かれて、新しい内臓詰められたよ」

「え？誰に……」

「まったく覚えてないのか。ジョルノだよ。し、ん、い、り」

「なんでジョルノがメローネを……？」

「さあな。ギアッチョに聞いてもらうように頼むか？」

ブランクはハツとしてあたりを見回す。腕に巻かれていたのはギアッチョの上着なのに肝心の本人がいない。

「そーだよ。ギアッチョは？」

「あいつはブチャラティたちを追っかけた。奴ら、なんか目的があるようだったからな」

「ぼ、僕も……行かなきゃ」

ブランクは立ち上がろうとするが、貧血で気が遠くなってすぐ倒れ込んでしまった。

「……お前死にかけじゃあないか」

「そうでもないよ。メローネよりはマシだ」

「オレが立ち上がれねーのは足がグツチャグチャに砕けてるからだよ。…あいつらそっちは治療してかなかった」

「なんだよそれ。ケチだな」

ブランクはよろめきながらもゆっくり立ち上がった。酷い有様だ。腹の傷も首の傷も致命傷ではないが、素人の応急手当じゃそのうち限界が来そうだし、右目は再度えぐられたせいで異物感がすごい。

右腕に関してはもはや痛みすらあまり感じない。

ブランクはメローネを見た。メローネもボロボロだが、派手さでは自分が勝っている。

メローネは痛々しいブランクの姿を見て、なぜか悲しげな笑みを浮かべた。

「もう銃撃てなくなっちゃったな」

「…まあ、なんとかなるよ」

左手はまだ残っている。

それに、大切なことを思い出せた。自分がどうしてこうなったのか。

封じ込めていた絶望の記憶と原体験は、*“ヴォート・ブランク”*に欠けていたものそのものだった。

魂は、経験の積み重ねで形成されるのかな

そうだよ。今は過去の積み重ね。

過去からは逃れられない。

古傷のように、不意に痛みだす。

僕は何もかも奪われ尽くして、消えてしまう寸前だった。

誰も知らない祭壇の上で、未来を奪われた。

でもジョンガリは助けてくれた。気まぐれや打算かもしれない。それでも、僕はもう一度この世界に居てもいいよと言ってもらった。

ジョンガリは僕を置いていったけど、ムーロクに会えた。

結果出会えた。自分を呼び覚ましてくれる人たちに。

そして、たくさんのものを与えてもらった。

ブランクは自分の左手をゆっくり広げた。手のひらに握られていたのは、一枚のカミソリだった。

「それは…」

「いろいろ失ったかいはあった。…思い出した。僕が、名前をもらった時のことか」

メローネはブランクの目を見た。

一昨日はボートの上でメソメソ泣いていたくせに、急に大人びた顔をするようになった。こいつの目は覚悟を決めた目だ。

「僕のスタンドの本当の力が、今わかったよ。大丈夫…リゾットの望みはまだ果たせるよ」

「…そうか。じゃあもうオレの説教はいらないな」

「ふッ…あれが説教ですか」

メローネは無理して行くな、なんて言わない。自分がブランクでも、きつと行く。

志は同じだと確信できる。

本当に、子どもの成長っていうのは驚くべき早さだ。

メローネはこうやって勝手に傷ついてへこたれて立ち上がって、目まぐるしいブランクを見ていると、なんだか老けた気分になる。

本当に青臭いやつ。見てて恥ずかしくなってくる。

こいつの過去に何があったかなんて、どうでもいい。こんな稼業に手を出すんだからどうせ悲惨だ。

自分の過去だってありふれてはいるが悲劇的だし、チームの全員そうだろう。

ただ、オレたちはそこから変われなかった。

勿論それはそれでいい。ギャングの世界で生きるのならば、それ以外にどうしようもない。スタンド能力なんて「魂の写し鏡」に毎日向かい合わされていれば、今の自分が不変だと錯覚するのも、無理はない。

でも、お前は違うんだな。

自分を直視しても、そんなに傷ついても前へ進むつもりなのか。

「さて…。ギアツチョに追いつかなきゃ。メローネは文字通り足手まといなんでここで寝ててください」

ブランクの生意気な口調にメローネはハツと鼻で笑う。

「じゃあジュニアを連れていけ。ボスの血液はまだある」

「えっ？母親は？」

ブランクの疑問を無視し、メローネはベイビィ・フェイスを弄って画面を見せた。

「何言ってるんだ。ほら、番号えらべ」

ブランクの表情が凍る。そして血を失って蒼いはずの顔がわずかに紅潮する。

「いつから知ってたんです？」

「二年過ぎしてりゃわかるだろう？…いや、ギアツチョとかペツシは知らなさそうだが…」

そういえばメローネは汗の味で血液型がわかる男だった。それくらい簡単にわかるんだろう。

ブランクは両手で頭をかかえようとした。だが腕がないので無理だった。

「でも、僕は子どもがうめないよ」

「問題ない。要は染色体の話だからな」

「クソーツ！男性ホルモンとかまで手を出してたのにツ！」

ブランクは地団駄を踏んで悔しがった。だがメローネは無視してベイビィ・フェイスを指差す。

「あー、そういうのオレには関係ないから。はやく番号選んで」

ブランクの動揺に反してメローネはどうでも良さそうだった。ブランクはため息をついてから画面をよーく見た。

「ま、まじか。ボスの子どもか…。感慨深いや。…じゃあ18番」

ブランクが選んだ画像を見て、メローネはベイビィ・フェイスを再度いじくる。

「…お前こんなのが好きなのか？なかなかいい趣味してんだな…」  
「それはマジでセクハラでは」

突然背筋に悪寒が走った。思わず背中に手をやるが、腕がない。ブランクは静かにキレてまた地団駄を踏む。

「よし、3分後に出産だ。教育はこつちでするから行っていいぞ」

メローネはそう言って、心底疲れたと言いたげに寄りかかった岩に体を預け、目を閉じた。

「…その、僕は男のつもりで生きてきたので！こういうのはこれつきりにしてください」

「あっそう。というか今も昔も女扱いしたことなんかないだろうが」

「あ…確かに」

「いや、プロシユートは結構気を使ってたかも…」

「うわー！マジ？もうやだ！恥ずかしい」

メローネは煩そうに目を開け、手で追っ払う仕草をする。

「とにかくもういけよお前、うっせー。傷にさわるんだけど」

「あんたマジで僕の扱い雑だよな。…じゃあ…行ってきますね」

ブランクは背中を向けて歩き出す。体はボロボロだが、しっかりとした足取りで。

「ギアツチョコを頼んだぞ、ブランク」

「……うん。まかせて」

僕はヴォート・ブランク。

スタンドは『ミザルー』で、年齢は多分16歳くらい。

メキシコ料理が好き。ボードゲームが好き。

青空が好き。

風に香る草花の匂いや、砂漠の匂いが好きだ。銃のグリップのザラザラも、本部の革張りのソファアの感触も好きだ。

みんなが好き。大好きだった。

僕がそれを台無しにした。

僕はたくさん失ったけど、まだやるべきことは残ってる。

約束した償いを、僕はやり遂げなければならない。  
でもそれだけじゃあない。全部終わったらやりたいことがたくさんあるんだ。

これが、今僕について言えること全部。

## 目的地はローマ、コロッセオ

コスタ・スメラルダの海岸は離れてみれば見るほど無残な姿に変形していた。

ナランチャは走りながらちらつと横目でそれを見て「うつひゃー」と呟いた。

ある種の観光名所にはなれるかもしれないが、そのおどろおどろしさじゃ以前のような客は見込めないかもしれない。

いったい何人死んだのだろうか？ビーチにいた人間自体は少なかつたとはいえ、あのカビのスタンドはあまりにも強かった。

誰が倒したのかわからないが、よくやったと褒めてやりたいくらいだ。

エアロ・スミスはナランチャより一足先にアバッキオの元へ向かった。丘を下ったので肉眼で確認できないが、アバッキオの周囲10メートルには呼吸の点は確認できない。

そばのビーチにいた観光客も先程のカビの騒ぎで死んだか逃げたかしたのだろう。

「アバッキオ〜！」

ナランチャは叫んだ。もうアバッキオはすぐそこだ。

だが突如、レーダーに新たな呼吸の点が現れた。しかもそれはアバッキオめがけ、一直線に進んでいる。

「エアロ・スミス！」

ナランチャに迷いはなかった。すぐさまその点めがけて撃ちまくる。

エアロ・スミスの弾丸は不審な呼吸の点をぶち抜いた！と思った途端、奇妙な感覚が襲ってくる。レーダーに急に硝煙反応がどつと映った。自分が撃ったと思った弾数よりはるかに多く。

「あ……」

そして呼吸の点は健在だ。さらにさつきより五メートルも離れた位置に移動している。

「これが時を飛ばすってやつかよ！アバツキオ動くなッ」

オレのエアロじや太刀打ちできない

ナランチャは冷静に自分の能力とボスの能力の相性の悪さを自覚していた。だがアバツキオを見殺しになんてできるわけがない。

アバツキオのムーディー・ブルースはそのままに何者かに変わろうとしている最中だった。アバツキオは警戒の体勢を取る。

「ナランチャー！いるんだなッボスが！」

「そうだ！もう目の前…ッ！」

背中だ

ナランチャの位置から背中が見えた。

アバツキオがエアロの射線と重なるように駆け出してやがる！このままナランチャが撃てば時を飛ばされ弾はアバツキオを蜂の巣にする。

「見え見えの罫だぜ！」

ナランチャはエアロを少し移動させ、容赦なく撃ち込んだ。

再び時が飛んだ、いつの間にか弾は打ち尽くされ、地面に煙がたっている。それがわかってすぐ、ナランチャはアバツキオの周囲に円を描くように撃つ。

「アバツキオッ…！」

ナランチャは走りながらレーダーを見た。呼吸の点が一つしかない。

ボスとアバツキオが重なっているんだ。ボスはアバツキオを今、まさに殺そうとしている！

ナランチャはそう思った。そしてありったけの弾を装填し、駆け出した。

と同時に、アバツキオがこちらに叫ぶのが聞こえた。

「違うぞナランチャー！ボスの狙いはお前だッ！！」

「なッ」

ナランチャは背後から不吉な気配を感じた。

呼吸の点が重なっていたのはアバツキオとボスじゃあない。自分



とボスだったのだ。

「キング・クリムゾン」

そして、すべての時間が消し飛ぶ。

「ナランチャ・ギルガ。全く、わたしにとつてはまるで意味の無いスタンド攻撃だが、その索敵能力は厄介だ。邪魔になる前にここで退場してもらおうッ！」

ナランチャが驚愕と絶望の次に感じたのは、熱さだった。肩口から心臓にかけてが、ものすごく熱い。

ナランチャはいてえよ。と言おうとしたが、口から出てきたのは血のあぶくだけだった。

「ナランチャーッ!!」

ディアボロはナランチャの血を払い、アバッキオを見た。アバッキオもこちらをしつかりと見ていた。

皮肉だ。15年前の姿を再生しにきて、このディアボロの今の姿を目撃することになるのだから。

アバッキオのムーディー・ブルースはリプレイを途中でやめたのか、スタンドそのままの姿でこちらに拳を振り上げている。だがなんと虚しいことか。

「くだらん能力、取るに足らないパワー。お前ごときのためにツ…このディアボロがどれだけ骨を折ったか」

キング・クリムゾンの腕は無慈悲にムーディー・ブルースを貫き、アバッキオは倒れた。赤黒い血が白い岩に広がっていく。

「……誰であろうと、わたしの永遠の絶頂をおびやかすものは許さない」

アバッキオは空を仰ぎ見て事切れた。あれだけの騒ぎがあったのに空は変わらず青く、高い。

とにかくこれでムーディー・ブルースだけでなく、エアロ・スミスまでも始末できた。イレギュラーな出来事は多々あったが、やはり生まれ故郷はついている。

すぐにブチャラテイたちが来る。

ディアボロはドツピオに代わり、救護隊の方へ走っていかせた。ドツピオの記憶は混乱しているが、そこから生じる違和感を無視させることができる。それがドツピオの美点だ。

ドツピオは救護テントで一通りの検査を受けてる途中、小脇に抱えたパソコンに気づく。

「…あれ。いつの間にぼくはパソコンなんて持ってたんだ？」

するとパソコンからゲームみたいな電子音がなりひびく。

とうとうーるんツとうーーるんツ

「うわっ?!…ああ、これがパソコン電話? ってやつかな。どれ…」

ドツピオはノートパソコンを開き、ちよつと悩んでから電話のようにパソコンを耳と口に当てた。ちよつと頭を食われてるみたいに見える。

他の患者や看護師は白い目でそれを見ていた。

『わたしのドツピオ…』

「ボス!あの、すみませんぼく…なぜか救護テントにいるんですが…」

『いいのだ。今はそのままやり過ごせ。目的は半分達した』

「半分…ですか?」

『今はここに潜み、その端末を使いこなせるようにしろ。わたしの正体へ近付こうとするものをお前が突き止め、始末するのだ』

「わかりました。ボス…」

『暗殺者チームは何としても殺さなければならぬ。だがもうこの島にいるべきではない。一度場所を変えるぞ』

「もちろんです!ボス。」

アバッキオ、ナランチャの死体を見てブチャラテイはショックを受けた。

死体の周りには大量の弾の跡があったが、それだけの攻撃をしてもボスには一つも当たらなかったのだろう。血などは落ちていない。

確かに、ボスの能力から考えるとナランチャの弾は避けられるし、ア

バツキオに至ってはリプレイ中で無防備だ。

判断を誤った。ナランチャ一人で行かせるべきではなかった。あるいは、アバツキオを一人で放置しておくべきではなかった。カビのスタンド使いに目もくれなければこうはならなかった。

「オレの……せいだ」

「ブチャラテイ」

血に染まる砂浜を見て、ブチャラテイは今まで聞いたことのないような悲愴な声で言う。傍らに立つミスタがブチャラテイの肩に触れた。

「ッ……急ぐぞ。ここは危険だ。はやく……行かねーと」

「ああ……」

ジョルノもすぐにやってきた。アバツキオ、ナランチャの死体を見てさすがの彼も動揺をみせた。そして、ジョルノはアバツキオが砕けた岩のかけらを握っているのに気づいた。

「ブチャラテイ……この岩のかけらは……」

ジョルノはゴールド・エクスペリエンスでそれに触れた。かけらは小さな蝶になり、石碑の方へと羽ばたいた。

「これは……」

石碑の裏に残されていたのは、男の顔だった。

「アバツキオはリプレイを終えていたのだ。…ナランチャが、時間を作ったおかげで……これを残すことに成功したんだな」

3人は青空のもとに立ち尽くした。しばらくして、ジョルノが二人を並べてうつすら開いた目を閉じた。すぐに見つけてもらえるように、傍らに大きな木をはやした。まるで空が眩しすぎないように傘をさしてやってみたかった。

「……行こう。…もう騒ぎになっている。こっちにも人が来てしまおう」

ブチャラテイの言葉に返事はなかったが、全員ボートに乗り込んだ。亀の中のトリツシュには、ミスタが何が起きたか説明した。

説明を終えるとミスタは船の操縦を任せられ、ブチャラティと、ジョルノが亀の中へ入ってきた。

ボスの顔を解析にかけるのはジョルノが任せられた。砕いて持ってきたボスの顔にトリツシユは嫌悪に満ちた眼差しを向けた。

「父が…いいえ、父と呼ぶことすら、もうやめるわ。ボスは…絶対に許してはならない」

「そのとおりだ。…素顔は割れた。だが見つかるかどうかはまだわからない」

「ボスの姿がわからない限り…オレたちに勝ち目はない」

ブチャラティは珍しく弱気に見えた。トリツシユはかけるべき慰めの言葉が見つけれなかった。

「…暗殺者チームがもしかしたら、ボスの正体を掴んでいるかもしれない」

「奴らが?」

「追跡能力を持つ男はまだ生きています。彼らがボスの襲撃に成功し、何者かの邪魔がはいり失敗したのだとしたら…もう一度、その能力でボスを追うはず」

「では最悪、彼らを追いかけることになるわけか…」

ブチャラティもジョルノも思案する。そこにトリツシユがおおずと提案した。

「ねえ…彼らとは協力できないの?」

「オレたちは暗殺者チームのメンバーを殺している。はつきり言って、難しいだろうな」

ブチャラティはたった一度言葉を交わしたブランクという少年を思い出す。彼ならば話を通じるかもしれないという予感があるが、生きていのかどうかもわからない。

コスタ・スメラルダの崖のうえ、二人の死体と共にもう一人分の血痕が残されていた。崖下に消えた血痕が意味するのは、これから先決して楽観的な想像に賭けてはならないということだ。

「だめですね…いろんな警察の犯罪者データベースにも該当者ゼロ。

故人も、行方不明者も」

「ボスならばそういつたデータを消していても不思議じゃあないな。……だが可能なのか？あらゆる人生の足跡を消して、この世で生きることが」

「これまで……なのか？もうぼくたちだけの力ではボスを倒すことはできないのか？」

すると、タイミングを見計らったかのようにパソコンの画面にノイズが走り、奇妙なグラフィックが浮かび上がる。そして割れた音声で、何者かがジョルノたちに語りかけた。

『いいや……やつを……ディアボロを倒す方法は……ある……！』

夕日に照らされたコスタ・スメラルダには続々と警察、救急車両、マスコミが押しかけ、カオスが形成されつつあった。

ブランクはチョコラータの死体を漁った後、近くの土砂の中からムーロロの入った箱をなんとか探し当てた。

「今回ばかりはチョコラータの悪趣味に助けられたよ……」

蓋を開け、無残な姿のムーロロにしばし黙祷する。そして意を決して、ムーロロの口をむりやり開いた。

ブランクはムーロロに出会ってからパソコンの使い方を一通り叩き込まれたあと、左の奥歯の裏に特別な鍵を仕込んでいると教えられていた。

歯にかぶせてある詰め物を取り出し、丸められた小さな紙片を取り出す。これこそが「裏口の鍵」だ。

「ごめんねムーロロ。あとで必ず迎えに来るから」

ブランクは箱を抱きしめてから、草の上にそれを置き直して走り去った。

港には大量の報道陣が集まっていて騒々しい。ブランクは街が見下ろせる丘に座り、片腕でパソコンを弄っていた。

パツシヨーネ情報技術部が誇る監視ツールのバックドアを使い、公的機関や空港、港の監視カメラにアクセスした人物を徹底的に洗っている。裏口の鍵を使えば指紋認証など必要ない。全権限フリーパスだ。

ブチャラテイたちがどこに向かったのかは不明だが、彼らは彼らでボスの痕跡を見つけたはずだ。アバツキオのムーディー・ブルースが何かしらボスの過去の痕跡を捉えたと仮定すれば、サルディニアの死亡者名簿や犯罪者データベース等にアクセスしてもおかしくない。

そうでなくても、監視カメラへの不正アクセスを辿れば、ブチャラテイたちの姿そのものを捉えることができるはずだ。

片手じやりにくいな…。とブランクがイライラしていると、急に首筋に汗が垂れるような感覚がして思わず悲鳴を上げた。

「うわッ…え？何…」

肩にもぞもぞ動くものがあるのに気づく。髪に絡まっているそれはベイビィ・フェイス・ジュニアだった。前のジュニアよりトゲトゲが少ない。

「……ママ…」

ブランクは苦笑いする。

「僕の話はブランクって呼んでくれる？」

「ぶ、ぶらんく」

「うん。……えーと。メローネ元気？」

「お、お腹減った」

「あー…そうね…船で食べたパンの残りがあるよ」

ジュニアにぺっちゃんこになったパンを渡すと、構わずもぐもぐと食べはじめた。

「うま…うま…」

「おお…こう見ると結構かわいい…」

ジュニアはそのまま肩に座っていた。メローネと何かしらやり取

りしているのかもしれないがブランクには知る由もない。

「いどう…いどうどうするの」

「ん？ああ。あっちの方にヘリポート代わりに開けた原っぱがあるんだ。あそこからテレビ局のヘリをパクるよ」

「ヘリ？」

「うん。ほら、あの飛んでるヘリの本社ってフィレンツェのあたりだろ。でも事件が事件だし局に戻らず一度降りるだろうから…」

「わかった」

ジュニアはそう言うと黙ってしまふ。ブランクはちよつと困りながらもパソコンいじりを続行した。

ブチャラテイたちの回線はすぐに見つかった。警察の顔認証システムに割り込んでいるようだ。やはりアバッキオが無事ボスの顔を手に入れたらしい。

だが妙だ。その回線は無理に切断されている。それも外部の手によって。ブランクは更に解析を進める。どうやら誰かがそこに割り込んだらしい。

そこでヘリが降り立つのが見えたので、一度中断しすぐに泥棒へ切り替えた。とにかくこの島からは出なければならぬ。

クルーたちが降り、警備が手薄になるまで近場に潜んだ。その間にブランクはギアツチョの携帯に電話をかける。残念ながら留守電だ。

ギアツチョはギアツチョでパソコンが達者だから、独自に情報収集しているはずだ。なるべく早く早く連携したかったが仕方がない。メッセージだけ残すことにした。

「もしもし？僕です。生きてます。今どこですか？向かいます。…僕はジュニアと一緒にです。これからヘリを盗んで本土へいきます。あ、ブチャラテイたちの使っている回線は発見しました。何者かからコンタクトがあった模様です。内容については解析中です。気づいたらかけなおしてください」

それだけいうとすぐに切り、ヘリのそばで一服している運転手を気絶させて運転席に乗り込んだ。

「へりの運転は…ガムテープで固定するか…？」

ブランクが後部座席で紐かテープかを探していると、沈黙していたジュニアが肩から降りてきて運転席に座り、エンジンをかけた。

「えっ。何やってんの？」

「へりコプター、操縦、おそわった」

「メローネえ…！」

「まかせて」

ジュニアは慣れた手付きでスティックを握り、ペダルを踏み、あつという間に離陸した。

「『目標』のもとへ向かう？」

「うん。ちなみにどこ？」

「上空一万メートル。東へ向かっている」

「なるほど飛行機か…とりあえずそっちに向かおう」

ジュニアは頷いて舵を切った。

ブランクは靴の中敷きから白い粉の入った袋を取り出し、鼻で吸った。アンフェタミンはやり過ぎると良くないが程度を知っていればボロボロの体も新車みたいにキビキビ動かせる。

お守りですつと持っていたが今が使い時だろう。

それを見てジュニアが言った。

「ドラッグ？」

「やむなくね…あ、教育には良くなかったかな」

「いいや、ドラッグをやる親は『ベネ』だって、メローネが」

「へー。ほんとどうかと思うよ、メローネの価値観は。先輩だから今まで遠慮して言わなかったけど、変態だよねあの人」

「ジュニアに食わせちまえばよかった、とメローネが言ってます」

「わ。伝えないでよー」

パソコン上ではソフトが通信内容の再現を試みているが、ノートパソコンなせいもあり思うように進まない。ブチャラティに接触を試みた側の回線は嚴重に暗号化されており、同じく割り出しには時間がかかりそうだ。

片手でやりづらそうにしているブランクを見てジュニアは尋ねる。



「体は、痛くないの?」

「痛いよ。でも平気さ。僕はもう、体から何を失っても大丈夫。怖くないよ」

「どうして?」

「大事なことを思い出したからね。肉体がどんなに奪われても、魂は損なわれない。だって魂は…これまで過ごした時間は、経験は、誰も奪うことはできないだろ」

パソコンから音が鳴った。ブチャラテイの回線に割り込んだ人物の現在位置が割れた。だが音声通話が長かったおかげで早く突き止められた。ローマのコロッセオだ。

「…ジュニア、ボスは今どこ? 正確な場所を言える?」

「ボスは…下降中。地上へ。地図と照らすと…ローマの国際空港だ」

「なんでボスもローマに…」

ブランクは空港の乗客リストを参照する。ドツピオの名前はない。

ブランクはその後もブチャラテイたちと謎のコロッセオの人物の通信記録を解析しようと試みた。画像データが送られたということしかわからなかった。

だがもう一つ妙なアクセスを発見した。ブランクと同じプロクシサーバーを経由するアクセスだ。つまり、パツシヨナーの監視システムを使って同じものを調べてる人物がいる。

そこで電話がかかってきた。

「はい」

『ブランク、オレだ』

「ギアツチヨ、今どこです?」

『ローマの小型飛行機の発着場だ。そっちは?』

「まだ洋上です。ローマとは都合がいい。…僕も20分ほどでつきますから、合流しましょう」

『ボスはどこだ?』

「ジュニア」

「フィウミチーノ空港から降りて市内に向かっていきます。この速度は車だが…バスだと思う」

『なるほど。細かい座標を言え。オレが行ってカタつけてやる』

「待ってギアツチヨ。ボスは僕らを捨て置き、ブチャラテイたちを追っている。…それはなぜだと思おう?」

『あ?なんでだ』

「DNAをつかんでる僕らより重要なものがそこにあるからだ。ブチャラテイたちの回線を突き止めたのは僕だけじゃあない。…現場に残っていたチヨコ先生の私物を漁ったんだけど、パソコンが消えてたよ。あの人のパソコンは今、全ネットワークを自由に閲覧できるようになってる」

『ボスはそれ使ってブチャラテイたちのもとへ向かっているのか?』

「ああ。正確にはブチャラテイたちが向かっているであろうところ。もつと言うならば、ブチャラテイたちにコンタクトをとった人物のもつとだ」

『そいつはどこにいる』

「ローマ、コロッセオ」

『…コロッセオの人物の正体は何であれ、オレたちよりもボスにとって脅威ってことか』

「そうです。行くならそつちでしょう。僕もすぐ向かいます」

ブランクはパソコンをカチャカチャやってブチャラテイたちに似た人物が写ったらログが出るように調整した。そのキーの音を聞いて、ギアツチヨは不思議そうに尋ねる。

『…お前そんなにパソコンいじれんのになんで今まで出来ねーふりしてたんか?』

「や…それは…余計な仕事しなくて…」

携帯電話から罵声が聞こえてきたので、ブランクは聞かずに切った。

ジュニアは無事着陸まで完了させた。メローネの教育がすごいのかジュニアの性能がいいからなのかはわからないが、今度のジュニア

も優秀だ。

ジュニアは一般人にも見えるスタンドなため、ブランクはヘリ内にあった機材用のバックに彼を入れて運んだ。

ブランクはとりあえず現場からとんずらして、ジュニアにご褒美としてサンドイッチを買ってやった。

それを食べ終わるとジュニアはブランクの肘から先のなくなった右腕をバッグの中から手を伸ばして触っていった。

正直痛いので触ってほしくはないのだが、するがままにさせた。ギアツチヨとの待ち合わせ場所へ走っているとき、ジュニアがふいに話した。

「ブランク。メローネからの連絡はもうこない」

「えっ」

「緊急手術になるって」

「はー…びっくりした…死んだかと」

「ぼくはブランクをささえるように言われた」

ジュニアはブランクの右腕にぶら下がった。そして姿が変わり、メタリックな色をした義手になった。

「えー?!かっ…かっこいいい……!」

「ちゃんとは動けない。形を作ってるだけで、複雑な機械にはなれないから」

「…いや、十分だよ。ありがとう。これなら身軽だね。……これさ、変形できたりする?」

「できるよ」

そう言っただけで義手はさっきまで乗っていた飛行機のステイックに変わった。見てくれだけは昔読んだ日本の漫画みたいだ。単純なものなら変形可能らしい。

「やばい。かっこよすぎる!!サイボーグ!」

ブランクは嬉しくてブンブン腕を振り回した。ふさがっていない傷口から血がドロドロと流れ出してきたのですぐにやめた。

ローマ、テベレ川にかかるサンタンジェロ橋でブランクとギアツ  
チヨは落ち合った。

ギアツチヨはバイクに跨っており、相変わらずイライラしていた。  
「おせーぞブランク！ジュニアはどうした」

「じゃーん！ニュー・ジュニア！」

ブランクはターミネーターみたいな見かけに変身した義手ジュニ  
アを見せつけた。ギアツチヨは目を丸くして眩いた。

「クソかつけえじゃねーか……！」

ギアツチヨの後ろに乗り、ジュニアの化ける義手の指し示す方向を  
確認する。ボスは今コロッセオ方面へ向かう道路だろう。指し示す  
手が時折停止することからして、変わらずバスに乗っているようだ。

「ボスは近いです」

「ボスはもう同じ手は喰らわねえ。ベイビー・フェイスの奇襲はもう  
通用しない」

「ですね」

「加えてブチャラティどももこっちにきているしな」

「コロッセオにいる人物って一体どんな……」

ブランクが言いかけると、急に義手がぐわんと動いた。

ジュニアの声が緊迫感をはらんだものになる。

「目の前だ。……くるっ！」

ローマの夜、オレンジの該当に照らされた道路。二人の目の前を一  
台のタクシーが走り抜けた。

ガラス越しに、横顔。サルディニアで一度は捕らえたドツピオの姿  
が見えた。

「チツ……追うぞ！」

ギアツチヨはアクセルを踏む。今二人が追いついたことを悟られ  
てはならない。一定の距離を保ちながら二人は会話する。

「ギアツチヨ。僕はコロッセオにつく前にボスをやるべきだと思う  
！」

「……じゃあコロッセオにいるヤツはどうするんだ。ボスの敵だろう

が、ブチャラティどもに協力しようとしている以上、オレたちの敵だと言える」

「ブチャラティが着くより前に両方やつつけばいいじゃないですか！」

「虻蜂取らずにならなきゃいいが。そういえば……なんでアブとハチなんだよ。両方刺してくる虫ケラなのになんで取ろうとするんだ？ムカつく言葉だぜッ」

「あー、取るっていうのはぶっ殺すって意味らしいですよ」

「あアツ?!このオレに口答えすんのかテメーは」

「こんなところでキレなくても」

「…だが両方やつつけるってのは賛成だ。気に入った。オレがボス、お前がコロッセオのやつだ」

「別々ですか?」

「オレは一人のほうがやりやすい。待ち伏せじゃないなら尚更な」

「僕はボスを倒す自信がありますよ!」

「どーせ自殺覚悟の特攻だろ。弱いやつはすぐそういう発想に至る」

「…覚悟の上です」

「お前、師匠とかいうのに生きろって命令されたんだろ」

「…それは……もういいんです」

「ああ?趣旨替えか?」

「……たしかにそれは言われましたよ。でも、そんなの聞く義理はないんです。自分で決めなきゃ。決めたことを、絶対にやり遂げる。この身がどうなろうと……」

ブランクのやや熱の入った言い方に、ギアツチヨはため息混じりの冷めた声で返す。

「ブランク、お前はよオ……覚悟の意味を履き違えてねーか?」

「え?」

「捨てばちと覚悟は違うだろ」

ブランクは押し黙る。ギアツチヨはそのまま言葉を続ける。

「大体オレはまだお前が裏切ったこと許しちゃいねーぞ。命で支払えば償えると思ってるんじゃないやあねえ。オレに許されたいなら生きて、ボ

スの首をもつてこなくつちやな」

「ギアツチヨ…」

ブランクは今の自分の表情を見られなくてよかったと思った。

「それにオレがボスと当たるのは暗殺者チームの基本ルール、勝算が高いヤツがやる。それに従っただけだ」

「……わかった」

ブランクは何も言わなかった。左手でギアツチヨの肩をぎゅっと握り、前に行くタクシーを睨んだ。

ギアツチヨは座席から腰を浮かせる。代わりにブランクが後ろから手を伸ばしハンドルを握る。ホワイト・アルバムが発動し、冷気がブランクの顔面にかかる。

「…ブランク」

「ん？」

標識が見えた。

コロッセオまで50メートル

「ビビってるか？」

「まさか」

「よし、じゃあ突っ込むぞ」

「おうよッ！」

## 『ダイヤアボロ』

2000年 夏

リゾット・ネエロは実は本部にいる時間が一番長かった。会議や打ち合わせがない日もよく一人で椅子に座り、本を読んだり映画を見たり、あるいは単に酒を嗜んだりしていた。

自宅はもちろんある。だが、どうにも居心地の悪さを感じていた。仕事柄すぐ引き払えるようにあえて持ち物は少なくしている。

もちろん自分の姿、素性を掴まれない自信はある。現にスタンド使いになって6年、誰も家までやってきて自分を殺そうとした人物はいない。

それでも、家のものは増えてないし、いつまでたっても寛げない。反面、本部はものがかかり増えていた。メンバーが各々仕事道具や不用品を持ち込んだり、単に誰も捨てない物品が一室に溜め込まれている。酒瓶も大量に転がって煩雑としている。

でもリゾットは何もない自宅よりはまだリラックスできる。

ブランクは夏の間だけ、昼間は本部に入り浸っていた。以前理由を聞いてみたところ「部屋にクーラーがない」からだそうだ。

「砂漠で暑いのはなれてるんですけど、湿気がどうも…」

ブランクは本部で本を読んだり、算数の勉強をしたりしていた。特に邪魔ではないのでよく同じ部屋にいながら無言で日が暮れるまで過ごしていた。

ある日リゾットはふと頭に浮かんだ疑問をブランクに投げかけた。

「ブランク、お前は生まれながらのスタンド使いだったか？」

ブランクは読んでいた雑誌から顔を上げて聞き返す。

「それ以外にあるんですか？」

「ああ。むしろパッション・ネ構成員のほとんどが試験を受けてスタンド能力を手に行っている」

「え？資格制度かなんかがあるんですか？」

フラワーコーディネーターみたいなのを想像したのだろう。ブランクは混乱したような顔をしていた。

「資格か。そう言っても差し支えはないな。通常、組織に入ろうとするとポルポのテストを受ける。その際、資格を問われる」

「テストってどういう？」

「まず：ライターの火を渡される。それを一日消さずに守りきれば合格、と伝えられる」

ブランクはニヤツと笑って言った。

「ははーん：裏があるんでしよう」

「その通り。消す消さないは問題じゃあない。消したあとライターを再点火すると、ポルポのスタンド、ブラック・サバスが現れ矢を刺す。すると資格のあるものは生き残り、スタンド能力を獲得する」

「いじわるなテストですね」

「その通り。もつとも正式に入団を希望するようなやつはそうヤワじゃあない。死ぬやつは想像よりも少ないらしいがな」

ブランクは感心したような顔をしてから、なんとなしにリゾットに尋ねた。

「リゾットさんはなんで組織の門を叩いたんです？」

「：復讐だ。よくある理由だ」

ブランクはキョトンとした顔をした。無理もない。今までリゾットはどうして自分がここにいいのかを誰かに語ったことはない。言葉の裏側の意味を汲み取ってほしいなんて望んでもいない。

始まりは、飲酒運転だった。まだ幼いところが馬鹿なドライバーに轢き殺された。

司法は子どもの命を奪った男にたった数年の刑期で赦しを与えた。だからリゾットが代わりに制裁を与えた。そこからずっと、自分は何がりを進んでいる。それだけの話。

この世は実に馬鹿げている。

人々は仕組みに盲目に従う奴隷に過ぎない。目の前には正義や善はなく、ルールという名の血の通わない迷路が横たわっている。

その迷路でやれることといえば、自分が損をしないために、あるいは得をするために他人を踏みつけにする工夫だけ。



リゾットが足を踏み入れたのはあらゆる社会の中でも最も残酷な迷路で、そこでは血と暴力がすべて。

そしてルールは、ボスが決める。

毎日が耐え難いものへ変わっていく。もはやリゾットの心は諦めに支配されつつあった。

人間は、その血が心臓を巡る限り欲望のために他人を傷つける。

暴力という刃は生きている限りその身から捨てることはできない。

そして最後、自らの刃は己自身を切り裂き、死ぬ。

リゾットは自身のスタンドから、人という生き物の逃れようのない運命を感じ取っていた。

「あ…」

ブランクが小さく声を上げた。見ると、窓の外は雨が降っていた。夕立だ。

「洗濯物、干してたのにな」

ブランクはうんざりしたような顔をしてこう付け足した。

「モンド、カーネ」

リゾットが目を丸くしていると、ブランクが反応した。

「師匠が言っていました。イタリアの言葉なんですよ？」ありやりやーなんてこったー”って意味だつて」

そういえばブランクの第一言語は英語だった。イタリア語は勉強して覚えたというから、普段はスラングはあまり言わない。

「むかし、聞いたことがある気がする」

リゾットは誤魔化すように言った。

本当は、きちんとした意味を知っている。だがその意味は今の自分にとつては刺さるものだった。

Mondo Cane

死ぬほどでもない絶望の積み重ね。

そういうときに使う言葉だ。

「お腹減ったなあ…よしー！ご飯でも作りますかね。リゾットさんのぶ

んも作りますよ！」

「ああ」

ブランクは台所に置かれた空き缶と酒瓶を腕で退けてまとめて袋に落とした。缶詰と鍋といつのものだかわからない調味料を適当に鍋に放り込んで行く。

「何を作る気だ」

「無難煮」

「…なるほど」

別に美味しい料理が食べたいわけではなかったのでスルーした。ブランクはたまに何かを作っているが、メンバーからは特に褒められなくてもけなされてもいなかった。

理由は出されたものを見てすぐにわかった。本人の無難煮という言葉通り、無難な具材が無難な味に仕上がっている。美味しくもまずくもない。

「料理は好きなのか？」

「好きではないです。でもよく師匠のご飯作ってました。僕はどんな食材でも無難に仕上げられるので。だから『無難煮』なんですよ」

ブランクの断片的な昔話から伝わるのは、長らく砂漠にいたこと。メキシコやキューバにも行っていたらしいこと。そこで師匠に狙撃を教わったということ。

そしてその思い出をとても美しいものとして記憶しているらしいということだった。

「砂漠はね、夜はとっても寒いんだけど、建物にも、何にも邪魔されな  
いから星が空いっぱい広がってるんだ」

ブランクは無難煮をパクパク食べながら、空の広さを手でなんとか表現しようとして手を上へ伸ばした。

「僕、地球が丸いのは知ってるんですけど。普通に生きててそんなこと意識しないじゃないですか。でもいっぱい広がった星空を見ると、それがわかるんです」

きつと脳裏にはその夜空が浮かんでいるのだろう。本当に、出会ったときとは比べ物にならないほど表情豊かになったものだ。

「端から端まで、全部いつペンに見ることができないくらい、星屑が広がってるんですよ。空の中にいるみたいだ」

それは自分には想像できないくらい、美しいのだろう。もう、自分はそのなぶうに純粹に感動することなんてないような気がした。

でも、いつかそんな光景を見てみたいような気もする。

ローマのオレンジの街灯で彩られた夜に、派手な破壊音が鳴り響いた。

ブランクがハンドルを握ったバイクはドツピオの乗るタクシーへアクセル全開でぶつかつた。ギアツチヨはそのまま屋根に飛び移り、瞬時に車体全体を冷やした。

タクシーはスリップし、街灯に衝突した。

クラクションがずっと鳴り響いている。タイヤは四輪とも凍りついていて、窓ガラスは衝撃で粉々に砕け、道へ飛び散っている。

ブランクは前輪が外れかけたバイクからすぐに飛び降りて着地した。

ギアツチヨはタクシーの背後にたち、後部座席に誰もいない事を確認しすぐにブランクにハンドサインを送る。タクシーは黒煙を上げ、燃えはじめた。

ブランクはバイクを捨てて全力でコロッセオめがけ走る。

ホワイト・アルバムが瞬間的に冷やせる範囲はじつは狭い。

大気中の水分を凍らせるジェントリー・ウィープス。日に何度も使つてりやバテ気味なものも当然だ。

ボスの射程、おそらく半径2メートルを一瞬にして極低温にするだけの力は何回分も残っていない。

ボスが自分を殺しに接近する、たった一回に賭ける。

ホワイト・アルバムの装甲は砕けることはない。

失敗して喰らっても致命傷には至らないと思いたい。

「ボス相手にその希望は甘すぎるわな」

地面はどんどん凍っていく。隠れていようが逃げ出そうとしようが、誰もギアツチヨのホワイト・アルバムの極低温からは逃さない。

「やはり追ってきたな」

ディアボロは当然のように無傷だった。一瞬のうちに攻撃を予知し、窓を破壊して時を飛ばし身を潜めるのは容易だ。

奴らが確実にこのディアボロに追いつくことはわかっていた。だがブランクは脇目も振らずコロッセオに向かっている。やつもまたブチャラテイたちとコンタクトをとった人物を割り出したらしい。

チヨコラータの死体から奪ったパソコンはシステムの全権限が与えられており、不正アクセスのもとを辿るのにそう時間はかからなかった。だが、内容まではわからない。

ただ、端的に言えば予感がしたのだ。

娘がいるとわかる数日前にも感じた不吉な予感。全く同じ感覚が背筋を走り、自分の行き先に影を投じた。

「オレは直感を信じる。…コロッセオにはオレの絶頂を阻む何かがある。運というものは悪いときはことごとく悪い。ヴェネツィアでお前たちを仕損じた結果何度も辛酸を舐めさせられた。だからここで確実に始末してやる」

キング・クリムゾン は再びすべての時を消し飛ばす。

飛ばされた時間を認識できるのはディアボロただ一人。絶対零度は静止の世界？笑わせる。

キング・クリムゾンは飛んだ時の中、世界に干渉することはできない。空気は冷やされ続け、霜はおり、星は流れる。

故に攻撃とは時を飛ばし、その間に予備動作を行い、他者が時間を正常に認識できるようになるその瞬間致命傷を与えること。

予測可能、防御不可能の攻撃。

ギアツチヨのホワイト・アルバムの反応速度にもよるがやつの防御力ならひよつとしたら致命傷を免れ、時を飛ばそうとお構いなしの冷却を食らわせてくる可能性がある。

防御力もさることながら瞬発力に自信があるのだろう。でなければいまここで当たるといふ判断はできない。

ならばこちらも最大限の力を以ってしてねじ伏せる。

ギアツチヨは時間が飛んだと直感的に理解した。何かが急に自分の背後に現れたのが音でわかった。

自身の半径二メートルにジェントリー・ウィープスで作り出した氷片のたてる音が攻撃の合図だ。

「接近した」とわかれば十分だッ！」

ギアツチヨは即時周囲の空気を冷却する。そして回し蹴りを叩き込む。

「っ……！」

だが粉々に砕け散ったのはボスじゃない。先程ドツピオを乗せていたタクシーの運転手だ。いつの間にか入れ替わっている。

そしてまた時間が飛ぶ。背骨に強い衝撃が走り、前へつんのめる。装甲は無事だが防御しそこねたお陰で衝撃はしっかり伝わった。

ボスは接近を避けて道路標識を折ってぶん投げてきやがった。

その道路標識が落ちる前に、また時間が飛ぶ。

「うッ……?!」

気付けば腹に折れたポールの切っ先が当たっていた。

この先歩行者優先

標識の向こうに、ボスがキング・クリムゾンの拳を振り上げこちらを見ている。

炎に照らされるその顔は、ドツピオの面影など微塵もない悪魔のよ  
うな笑みを携えていた。

そしてキング・クリムゾンは渾身の力を込めてポールを突いた。想像以上のパワーだ。ギアツチヨはすぐにポールを握り、切っ先がこれ以上装甲に食い込まないように冷却する。

「なるほど。その装甲は相当硬いなッ……！」

また時間が飛んだ。

今度は空気の流れも何もなかった。焼けたタイヤが目の前に投げ込まれ、そのベタつく煙がヘルメットに付着し、凍る。

「あッ……?!」

ギアツチヨは視界を奪われ、自身の周囲への警戒をコンマ数秒損なった。ボスはその隙を逃さない。

だが、地面を踏み込んだのとほぼ同時に銃声が聞こえた。

「チッ……！……！やっぱりピストルズでも当たらねえ。軌道を完全に読まれてるぜ！」

「……あの後ろ姿。間違いない、ボスだ」

ブチャラティたちはボートを使い、車を使い、ようやくローマにたどり着いた。

コロッセオまであと40メートルというところで爆発音が響き、ギアツチヨが殺されかけていたのを見つけた。ブチャラティとミスタが亀の外に出て現場を偵察していた矢先のことだった。

まさかすでに暗殺チームも、そしてボスまでもがコロッセオに集結していたとは。

ミスタは弾を装填してからブチャラティの方を見る。

「交戦してるのはギアツチヨだけだな？あいつに当たっちゃまった……生き残りはあいつだけか？」

「さあな。いずれにせよここでボスにコロッセオに到達されるのはまずい！男がまだいるかどうかわからないがこの騒ぎはもう知っているだろう。今すぐ行かねば」

「じゃあオレとジョルノでボスを食い止める！ブチャラティ、トリツシュを頼んだぜ」

ミスタは亀を投げ渡した。ブチャラティはしっさりそれを抱いた。亀の中からジョルノが出てきて、前方をにらみつける。

「行ってください、ブチャラティ」

「ああ。ボスを殺せるチャンスがあれば殺せ。…いいな」  
「当然だ！」

ジャツと音を立ててシリリンダーが回転した。

ギアツチヨは気がついたら顔面に銃弾を食らっていた。

この攻撃…拳銃使いのミスタか？また時が飛んだのか。

その認識が一瞬曇った勘を冴え渡らせた。銃弾の熱が今は有り難い。その熱が消える前に一瞬周囲の冷却を解除し、手で汚れを拭う。炎のオレンジに照らされたミスタとジョルノが走ってくるのが見えてギアツチヨはブチ切れた。

「チクシヨー！ツ！オレに当ててんじやあねえ！グイード・ミスタ！ぶち殺されてーのか!!」

「うるせー！狙いはボスだ！今たしかに背中が見えたぜツ…ここで殺ればよオー！焦る必要はねえからな！」

「ぎけんなツ…！ボスをやんのはオレたちだ…ジエントリー・ウィープス!!」

ギアツチヨは叫ぶ。おそらくこれが最後のジエントリー・ウィープスだ。密度は低いが、半径10メートルに氷の檻が構築される。

その檻の破壊された部分にギアツチヨは先程打ち込まれたポールをぶん投げた。

ミスタもそれを察しセックス・ピストルズを放つ。

「イクゼツ…！オメーラ気合イレテケエーツ！」

「コノ氷デ弾道ヲ攪乱スルツ！時間差攻撃ダ！」

ギヤギヤギヤギヤギ

檻の中を跳ね返りながら弾丸はディアボロを捉えた。キング・クリムゾンにより弾は一発外れる。だがピストルズは外れた場合にも跳ね返れるよう、氷片を指している。跳ね返った弾が外れようと止ま

らない限りピストルズはディアボロを狙い続ける。

「小細工をしたところで…」

仕掛けがわかってすぐにディアボロはピストルズの一匹を捕まえ、握りつぶす。

ミスタの脇腹にでかい傷ができる。

「よくやったミスター！ボスの体にゴールド・エクスペリエンスで作ったてんとう虫をつけることに成功したッ！これで位置は完璧にわかるッ」

ジョルノは暗がりに向けて指差す。確かに今誰かが動いた。

ミスタが叫ぶ。

「テメーもつと冷やせコラー！ッ！」

「ハア?!無茶言うんじやあねエッ！」

ジョルノは炎のゆらめきが不自然に揺れるのを目撃した。

「また時が飛んだぞ！」

そしてジョルノめがけてバイクの残骸が投げられた。ジョルノはゴールド・エクスペリエンスでバイクを叩き壊す。反射的に三人は背中を合わせて全方位を警戒する体勢をとった。

足元に広がった水溜りに波紋ができる。水はギアツチヨの足元から凍りついていく。

ボスの姿は見えない。

ジョルノは生命エネルギーを探知し、その方向を指差す。

「そこだッ！ミスタ撃てッ」

ミスタは撃つ。だが音を認識することはできなかつた。気づいたときにはジョルノの首めがけて振り下ろされたキング・クリムゾンの腕が、ジョルノの顔の半分ごと凍りついていた。

「やはり狙いはジョルノだったな！このまま氷漬けにしてやるぜボス…ッ！ジョルノごとなあッ！」

ギアツチヨはボスの攻撃対象を完全に予期し、“捕らえた”と確信した。だがキング・クリムゾンのそばに立つボスの手にはいつの間にか奪ったミスタの銃が握られていた。



「一発だ。オレがお前たちを仕留めるのには一発でいい」

「ツ…まさかこの水ツ…そしてバイクは…」

「ジョルノがつぶやく。」

銃口が火を吹いた。そして、火種は炎となり、周囲に爆音を轟かせた。

遠くで事故でも起きたかのような大きな音がして、ポルナレフは双眼鏡を使いあたりの様子をうかがった。

コロッセオで待つ男。ブチャラティたちに矢の力を与えようとしている、かつてのスターダストクルセイダー。ボスを倒す希望を与えるためにこうして待つてはいるが、どうもその希望も風前の灯らしい。

だが自分には待つことしかできない。誰かがたどり着くと信じて。  
チキチキ……

金属のこすれる音が聞こえ、ポルナレフは瞬間的にチャリオッツ剣を抜いた。背後に忍び寄る何者かはその切っ先を躲し、気配を顕にした。

ポルナレフはそちらを向く。遮られていた月明かりが忍び寄ってきた人物を照らした。

それは、赤毛の瘦身の少年だった。全身傷だらけだがしつかりとした足取りで、ゆっくり一歩歩み出た。青い瞳がポルナレフをまっすぐ見据えた。

「お前は暗殺者チームの…」

「僕はヴォート・ブランクだ。あんたはボスの何なんだ？ 答えろ」

ブランクは手ぶらだった。スタンド像が出ていないにも関わらず、不穏な殺気をはなっている。

ヴォート・ブランクという名は資料にあった。裏切り者の暗殺者チームの一員で、他者のスタンドをコピーするスタンドを有している。となると半端な憶測で敵の力量を図るべきではない。足元をす

くわれる。

ポルナレフが黙っていると焦りにも似た声色でブランクが言った。「聞こえないのか！僕の仲間が、死ぬ気で時間を作ってる。ボスももう少し目の前まで来ている」

遠くから、また爆音が聞こえてくる。ポルナレフは慎重に答える。

「わたしはポルナレフ。ディアボロはこの体の仇だ」

「ディアボロ…？」

「やつの名だ」

「…ポルナレフ、ブチャラティたちになぜコンタクトをとった？ディアボロは僕らを殺すことより、あんたを優先してこっちに一直線に向かっている。あんたは何を隠し持ってたんだ？」

チキチキチキチキチキチキ

「お前たちこそ何故ボスを倒そうとする。麻薬ルートのためか？金？権力？そんなもののために戦っているやつに答える筋合いはない」

「金だつて？バカバカしい。僕らの動機はただひとつだ。汚名返上、そして仲間の名誉回復だ。必ずこの手でボスを地獄に送る。それが今、僕がここにいる動機だ」

チギツ

ひとときわ大きい金属音が聞こえた。同時に、ブランクが怒鳴る。

「話してもらってからな！ポルナレフッ」

途端腕が捻り上げられ、車椅子の車軸が歪んでポルナレフは地面に投げ出される。

「シルバーチャリオッツ！」

チャリオッツに以前のようなパワーはない。それでも相手に距離をつめられないため弧を描くように剣を振り抜くつもりだった。

ブランクもチャリオッツの斬撃の届く範囲を見極め、剣先を避けるつもりだった。

だが

「え…」

ブランクの頬からは血が垂れている。

「いつ…切られた？」

「いつ剣を振り切ったんだ」

二人はほとんど同時に、息を呑む。

「まさか」

階段の影から、足音が響いた。

「まずい…いつの間に…ッ」

「ボス…いや、ディアボロ…」

そして、長い影が踊り場に差す。

「この一連の出来事は、過去に打ち勝てという「試練」だとオレは受けとった。人の成長は未熟な過去に打ち勝つことだとな…」

あらわれたのは「ディアボロ」。

「そうだろう。J・P・ポルナレフ。過去は、ばらばらにしても…石の下からミミズのように這い上がってくる」

## 悪魔を憐れむ歌

ディアボロが来る！そう感じた瞬間、ブランクはポルナレフの肩を掴みとにかくこの場から逃げ出そうとアーチから「外」を目指した。だが気付いたときにはなぜか下の階に二人して落ちていた。

「こっちだ」

ブランクが何が起きたか理解する前に、声の主はポルナレフのもう片方の肩を持ち上げ走り出す。ブランクは慌てて足並みをそろえて、自分たちを窮地から救った人物が誰か確認した。

「ブチャラティ……」

ポルナレフが先にその人物の名前を呼んだ。

「ボスは一直線にあんたを目指していたらしい。…ポルナレフ、と名乗っていたな。何か探知されているんじゃないか？」

ブチャラティは先程のブランクとポルナレフの話聞いていたらしい。出てこなかったのはブランクの出方を窺うためだろう。

ポルナレフは探知と聞いて苦々しい顔をした。

「……だとしたら、パソコンしかない…入念に出処は隠したつもりだったんだが…」

「僕もそれを逆探知してきたんだ」

「なるほど…知らない間にネットワークまでも組織の手の内に落ちていたとはな…ぬかっていた」

「情報技術チームは優秀なので！」

ブチャラティはジツパーを使い巧みに先程の場所から距離をとっていく。

「そんな事はどうでもいい。約束通りオレはここにきた。ボスを倒す可能性とやらを教えてもらおう」

「僕のほうが先に着いたんですか？」

ポルナレフを支えるブランクの手がたまたまブチャラティの手に触れた。紙に触れたような感覚にブランクは思わずブチャラティの顔を見てしまった。

どこか大怪我でもしているのか？死んで何日か経ってる死体の皮

膚みたいだ。

ブランクは思わず心配して尋ねてしまう。

「ブチャラティ、あんたどこか…」

だが割り込むようにジュニアが叫ぶ。

「ブランクッ！ やつが動き出した！ さっきの階から時計回りでこちらに迫ってきている」

「距離をとったところで…だな」

それを聞いてブチャラティは思案する。ポルナレフは担がれながらブランクの方を向いた。

「…一つ聞きたい。ブランク、なぜオレを担いで逃げようとした」

「はあ？」

ポルナレフは険しい声で尋ねる。ブランクはポルナレフの言いたいことがわからずにキョトンとしていた。

「なぜだ！ 答えろ！ 殺しかけといて何考えてやがるんだ」

「別に殺そうとなんてしてねーツツの！」

ブランクは文句を言いながら頬から垂れる血を拭おうとした。だが袖にはすでに血がついていた。

また時間が飛んだのだ。

ジュニアの腕がディアボロのいる方向を指差す。だがキング・クリムゾンで時間を飛ばされているせいでこちらからすれば瞬間移動しているように見え、かなり混乱しているらしい。

「大まかな方向と距離だけでいいッ！ 半径…5メートル。それより入られたらヤバイぞ」

ブチャラティとブランクは歩調を早める。ポルナレフは脚がない分軽くぎりぎり運べるが、成人男性は結構重い。

全力疾走には程遠い。これではすぐに追いつかれる。

「また飛んだ！ あっちも走って接近してくる」

ジュニアは焦った声で告げる。

「クソッ！ ジリ貧だ」

ブランクはこのままじゃ逃げられないと悟った。どうにかしてこ

ここでボスを迎え撃ち倒さねばならない。

“捨てばちと覚悟は違う”

ブランクの頭の中ではギアツチヨの言葉がぐるぐるまわっていた。ブチャラティはブランクの方を向き、静かな覚悟を決めた目をして言った。

「ブランク、オレたちは目下のところピンチだ。協力する気ではないが構わないな」

その冷静さにブランクは面食らいつつ頷いた。

「…しようがないですね。いいでしょう」

「ジヨルノたちはおそらくやられた。…ここにいる三人でボスを倒すしかない」

ブチャラティは次にポルナレフを見た。ポルナレフもその目を見て、一瞬沈黙してからブランクに自分がなぜここで待っていたかを話し始める。

「……オレが持っているのは“矢”だ。やつを倒す、おそらくは唯一の手段になる」

「じゃあ出し惜しみしないで今すぐ使ってボスをやっつけてくださいよー！」

「ダメだ。オレには使えない。だからブチャラティたちとコンタクトをとったのだ」

「ブランク！走り続けて…！距離、10メートル！」

「“矢”がスタンド能力を目覚めさせることは知っているな？」

「ああ」

「相応しいものが自らのスタンドに“矢”を刺すと、スタンド能力のさらにその先の能力が目覚めるのだ。キング・クリムゾンは無敵だが、矢により進化し、レクイエム状態になれば可能性はある」

「そつ…そんな事あるかあ?!」

「レクイエムはすべてのものの精神を支配するのだ！矢の力さえ制御できれば勝機はある。だが同時に、やつには絶対に渡してはならない」

ブランクがいろいろと質問しようとする、それを遮るようにジユ

ニアが大声で叫んだ。

「ブランク！真上だッ！来るぞ！」

「ステイツキイ・フィンガーズ！」

「キング・クリムゾン！」

ブチャラティは上に向かってがむしやらにラッシュを繰り出した。確かにブチャラティのステイツキイ・フィンガーズがこの中で最もパワーが強いだろう。だがそんなことをしたらまつさきにボスから攻撃される。

それでもブチャラティは自分の体の状態を理解し的確に対処したのだ。自分以外時間を稼げる者はいないと。

キング・クリムズンはまずブチャラティを狙った。双方の目の前がブチャラティの飛び散った血で真っ赤に染まる。

「シルバーチャリオッツ！」

ポルナレフはとっさにチャリオッツでブランクと自分を今空いたばかりの天井の穴にぶん投げた。着地したばかりのやつと入れ違いだ。若干の時間的猶予が生まれることになる。

だがブランクもポルナレフもまた走って逃げようなどと考えていなかった。

ブランクはポルナレフの肩を支えて立たせた。

ポルナレフは時が飛ばされたと認識してからすぐにチャリオッツでやつの射程二メートルを薙ぐつもりでいた。ポルナレフの考えうる唯一のディアボロ対策だが、エピタフを持つやつに通じるかは分らない賭けだ。

ブランクは小さな声で自分の腕になったベイビー・フェイス・ジュニアへ話しかける。

「ジュニア…ギアツチョ待ってるときに話したこと覚えてる？」

「うん。…でもうまくできるかわからない」

「失敗しても怒らないよ。…やってくれ」

かつーん…

かつーん…

また、足音だ。ディアボロが階段を使ってやってくる。

「ヴォート・ブランク。仲間のほとんどはブチャラテイ達に殺された。メローネだったか？そいつの潜伏先もすでに組織の刺客が向かった。ギアツチョもすでに倒れた。たとえ生き延びても、お前に何が残る？」

悠長にブランクに話しかけてくるのは一体何のつもりだろうか。それとも今更諦めるとでも思ってるのだろうか。

「…僕は…」

何か言った気がする。

だがまた時が飛んだ。ジュニアの指し示す方向が急に変わる。

「お前は空のままにいるべきだった。情に溺れた結果、お前は全てを失い、ここで死ぬ。お前に引導を渡すのはわたしだが、降り積もり、かたを付けなかった過去こそがお前の真の死因だ」

ディアボロは慎重を期してエピタフで未来を見る。10秒後、ブランクは腹をぶち抜かれ血を吐き出している。

「キング・クリムゾン」

ディアボロは時を飛ばし、ブランクの背後に回りこんで拳を振り上げた。

「時よ、再始動しろ！」

そして気付いたときにはキング・クリムゾンの拳がブランクの胸郭を貫いていた。ぼちゃ、と音がして拳分の肉片が地面に飛び散った。支える力が消え、ポルナレフが肩からずり落ちる。

シルバー・チャリオッツの斬撃もまたエピタフによって予知されていた。剣は空を切り、気づけばディアボロはポルナレフの目の前に立っていた。

ポルナレフは息を呑む。

だが、倒れたはずのブランクの方から血を吐き出す音がして、ディ



アボロは振り返った。ブランクは膝をついてはいるがまだ生きていた。それどころか、急に話しだした。

「1956年…ギロチンで処刑された首に意識があるか、調べた人がある…それによると…斬首後15分は反応があったとか」

「…ブランク…何を…」

ポルナレフは脈絡のない話を始めるブランクを見て困惑した。ディアボロもだ。

確かに胸は貫いた。サン・ジオルジョ・マジョーレでのブチャラティのように、しばらくは動けるのかもしれない。だがそれにしては無駄話がすぎる。

それでもブランクは話し続ける。

「それって要するに…重要な血管さえ押さえれば、身体をいくら刻まれようとぶちまけられようとちよつとの間は生きていられるってことだろ。…そんなの二年も前にチヨコラータ先生が教えてくれたけどね」

よくみると出血箇所を押さえるブランクの右腕には、先程まで義手となっていたジュニアが人型にもどっていた。

「ベイビィ・フェイス！身体を再変換しろ！」

「お前ツ…自分の胴体をあらかじめ切り離し、物質に替えていたのか！」

「一回全身やられたことがあったんでね！そしてもうあんたは僕の射程に一度入った。一度入ったなら意識も無意識も関係ない。あんたはもうおしまいだ」

チキ…

聞き覚えのある音がする。皮膚の下で何かが蠢いた。

チキチキチキチキ…

「くらえ…メタリカ」

そして一斉に、それが「芽」をだす。

鉄分から生成された何本、何百本という無数の針が。肉の中で根を張るように。

肉を掻き回す湿った音と皮を引き裂く乾いた音がほとんど同時に聞こえた。そしてチャラチャラチャラ…と針が地面に落ちる音も続いてする。

ブランクは自分の足元の血溜まりが急に広がっているのをみて時が飛んだのだとわかった。

「クソッ！殺し損ねたッ！射程外に逃げたな」

だが間違いなくやつのは体はミンチ入りの革袋のようになっていないはずだ。

「ブランク、だめだ…パーツのいくつかは修復できないくらい飛び散ってしまった！」

「構うもんか！四肢が動けば十分だッ…！」

ベイビィ・フェイスは物質化したブランクの肉片を掻き集め、はめ直しながら泣きそうな声で叫ぶ。

肉との接合は鉄分で針を作り出して縫い止めている。死ぬほど痛い、薬物のおかげでなんとか動いている。

「ブランク、やつは腕から肩にかけて負傷した！今どこにいる！」

ポルナレフは叫ぶ。ブランクは転びかけながら彼のもとへ近づき、ジュニアはボスの位置を探知し指差す。

「あっちだ！血痕のある方向へ7メートル」

「僕らは動く必要はない！僕の半径3メートルに近づいたら最後、体中をずたずたにしてやるッ…！かかってこい！」

「いや、おかしい！ボスは離れていく！」

「逃げるつもりかッ…」

ブランクが立ち上がり、ボスを追うために走り出そうとしたとき、穴の空いた床。下のフロアから声が聞こえてきた。

「ブチャラティッ！そんな…！」

聞いたことのある女の子の声だ。見て確かめるまでもない。トリツシュ・ウナがコロッセオにいる。

いつの間ここにいたのか…まさかブチャラティが亀を持っていたのか。

ボスが離れていくのはひよつとしてトリツシユの存在に気がついたからか？

それともやつぱり逃げるつもりなのか？

いや、全部罫で逃げるふりをして僕を殺す？

ブランクの頭の中に様々な考えが浮かんで消えた。貧血気味の頭じゃどれが一番あり得るのか考える余裕がない。

ただ一つ確かなのは、自分がボスの3メートル圏内に入り、攻撃対象を「認識」しなければメタリカによるとどめはさせないということだ。このまま無差別に『ミザル』のメタリカを発動させた場合、ポルナレフもトリツシユも殺してしまう。

とにかく、ボスに近づかなければ。

ジュニアの指し示す方向はトリツシユのいるフロアに続く階段だ。ブランクは穴へむかって大声で怒鳴った。

「トリーツシユ！ボスが向かってるぞッ！今すぐ身を隠せ！」

そして階段へ駆け出した。しかし

びちゃ

と、なにか液体が落ちる音を聞いた。その刹那、ブランクの視界が真っ赤に染まった。

ブランクは慌ててそれを拭う。そしてジュニアが鋭く警告を発した。

「真後ろ…ッ！2メートル！」

びちゃ、と。音が聞こえた瞬間ブランクは背後の気配へとメタリカを発動させた。

爆ぜるような音を立てて血中から作り出されたカミソリが肉をつぶし、皮膚を切り裂いた。

殺った。

確信を持ってブランクは振り向いた。だが、そこにあったのは「左

腕”だった。

「ッ……！」

そして再び世界でただ一人、ディアボロだけが認識できる。『時間』  
がはじまる。

「腕一本はお前と、お前と暗殺チームのしぶとさへの称賛ということ  
にしよう……ヴォート・ブランク」

ディアボロはすでに柱を破壊し、その岩をブランクめがけ投擲し  
た。圧倒的パワーを誇るキング・クリムゾンの岩石投げだ。脳髓をぶ  
ちまけて死ぬだろう。

「近づけなくても、お前を殺す手段などいくらでもある。貴様のよう  
な野ねずみがこのオレを……あるうことか……ここまで損耗させるとはな  
身の程をしれ」

時が再始動し、振り向いたブランクの顔に岩が命中した。骨の碎け  
る音と湿った何かが崩れる音がし、悲鳴を上げる間もなく、ブランク  
は仰け反って倒れた。

ディアボロは自分の傷口から流れる血からメタリカのスタンド像  
が消えるのを見た。

ブランクの死体を確認しようとする目を細めた。だがすぐに違和感に  
気づく。自分を探知し続けるベイビィ・フェイスの右手が消えてい  
た。

ディアボロは鼻で笑った。

「ベイビィ・フェイスッ……！」

「この後に及んで不意打ちなど、このオレに成立するわけがないッ！」

ジュニアの不意打ちは不発に終わった。キング・クリムゾンが腕を  
振り払うだけで事足りた。

壁に叩きつけられたジュニアは全身が千千になる痛みを感じて、そ  
れっきりにだった。

キング・クリムゾンにより省略された過程は自らの死を認識するこ  
とすら不可能だ。

ポルナレフは突然吹っ飛んだブランクを見て今度こそ終わりだと確信した。自分の斬撃は見切られている。血の垂れ方で時が飛ばされたかどうかかわかって、タイミングをずらされれば意味がない。

「リゾット・ネエロの…死者のスタンドまで使えるとは…してやられた」

トリツシユは体を硬直させた。全身が凍りつくような、あの気配。父が…ディアボロがいる。もうすぐ目の前に。

ようやく辿り着いたというのに、全員やられてしまったのか。

トリツシユは腹に穴の空いたブチャラテイの体を抱く。こんなにひどい怪我なのに、出血がほとんどない。いや…それどころか死んでしばらくたつたかのように体が冷たい。

なにがなんだかわからなかった。ただ、前にもまして邪悪な気配に震えることしかできない。

強くなつたと思つたのに。

だが今ディアボロを前にして、自分の心の中には恐れが満ちている。勇気を奮い立たせ、立ち向かいたい。でも…

階段からは血が垂れてきていた。さつき叫んでいたブランクのものだろうか。

トリツシユはブチャラテイの頭を抱きしめる。

「ブチャラテイ…」

「トリツシユ…」

トリツシユの声を聞いて、ブチャラテイのまぶたがぴくりと動いた。ブチャラテイはそのまま手をゆつくりと上げて、トリツシユの腕に触れた。

「ブチャラテイ…！あなた…生きて…いるの？」

トリツシユの驚きにブチャラテイは途切れ途切れになりながらも「逃げる」と呟いた。

「死にぞこないどもが次から次へと鬱陶しい。まるで小蠅だな」

ポルナレフは再びディアボロと対峙した。もはや希望は潰えたかのように思えた。ポルナレフは布越しに矢に触れる。自分がチャリオッツに矢を使うのとみすみすこいつに渡してしまうのと、どちらがマシか。

ディアボロはきつと、いつか矢の本当の力に気づいてしまう。そしてやつならば自分のためだけにこの「すべての精神を支配する力」を使いこなすだろう。

ポルナレフはディアボロの後ろで倒れているブランクを見た。ちようど頭部に砕けた岩の欠片があり、顔は見えない。だが出血こそあるものの、頭部は潰れていない。

ぴくりとその唇が動き、顔と岩の間からボロボロとブロック状の何かが崩れ落ちた。その色は、ブランクが「ジュニア」と呼んでいたスタンドの体と同じ色だった。

それを見て、ディアボロが再度ブランクの死を確認しようとする前に、ポルナレフはシルバー・チャリオッツを抜いた。

「悪あがきを」

キング・クリムゾンがチャリオッツを殴りぬいた。だが殴り抜けたのは甲冑のみだった。

「そんなの読んでいるぞ。狙いは本体のお前だッ！ジャン！！ピースー  
ル・ポルナレフッ」

スタンドでの防御無しでキング・クリムゾンの破壊力を防ぐなど不可能だ。慌ててスタンドを戻そうとしたところで間に合わない。だがポルナレフはそのまま、甲冑を脱いだチャリオッツを突っ込ませた。

ポルナレフはキング・クリムゾンの攻撃を食らい、倒れた。

カラン

乾いた音をたて、チャリオツツのレイピアが地面に落ちた。

ディアボロはポルナレフの血を振り払い、トリツシユの気配を追おうとした。腕をなくしたとはいえ娘たった一人、どうとでもなる。

まずはブランクの死体を確認しなければ。

頭を潰した感触はあった。だが死んだふりをしてディアボロが近づいてくるのを待っている可能性もある。

石の転がる音がした。

「…ジュニア…きみたちに、何度助けられたことか…」

やはり、予感どおりヴォート・ブランクは立っていた。

「一体何度叩きのめせば死ぬんだ」

「僕も自分の打たれ強さに感服してます」

では先程の攻撃をどうやって躲したのか？岩は確実に頭に入っていた。

理由はその顔に付着した肉片を見ればわかった。

右腕に化けていたスタンド、ベイビィ・フェイスが体表を覆ってクツシヨンの役割を果たしたのだ。

自分が振り払い殺したジュニアはほとんど死にかけの残骸だったのだ。

ディアボロは怒りで我を見失いそうになった。だが、見覚えのあるものが先程殴りぬいたブランクの胸部に刺さっているのを見て、怒りは動揺に変わる。

ディアボロは立ち尽くした。なぜこうも想定外のことばかり起こる？どんな悪運が自分につきまとっているんだ。何もかも、二年前暗殺チームの愚か者が自分の正体なんか嗅ぎ回ったせいだ。

「その矢…ッ！なぜそれがここにある！」

「さあね。でもこれであんたを倒せるなら、体なんていくらでもくれてやる！僕は魂を殺せぬものなど恐れないぞ」

あなた達にあえてよかった

「……………あれ？」

ブランクは自分の手をグーパーしてみるのが、何も変化がない。メタリカは自分の体内に発動できる。だから穴の空いてる胸にさしたのだが、力が満ちてくるだとか光に包まれるだとか、そういうことは全くなかった。

「何だ…？威勢のいいのは口だけか」

だがブランクにだけは判った。

自分のスタンド能力が予想通りのものであることが。そして矢によりその箍が外されたことを。

「キング・クリムゾン！すべての時間は消し飛ばす！」

ディアボロだけが認識できる時間。すなわち、自分だけが『存在』する世界を動く。

そこは世界の果てに似ている。すなわち、自分だけの孤独な世界。だからこそ、キング・クリムゾンの能力は帝王の名にふさわしい。

「なるほど。これがあんたの見てる世界なんだな」

「なっ…」

ブランクはこちらを認識している。

ありえない。

やつはキング・クリムゾンの吹き飛ばす時間の中を、ディアボロだけが存在する世界を確かに捉えている。

「これが…矢により引き出されるスタンド能力…」

「まさか…オレのキング・クリムゾンのコピーしたのかッ！」

「いいや。僕のスタンドは、相手をコピーするもんじゃあない」

ブランクのはぐらかすようなこたえにディアボロの頭に血が上った。



「だからなんだ、死にかけの分際で！時を飛ばすまでもない。ねじ伏せてやるッ……！」

キング・クリムゾンが殴りかかった。だがブランクはディアボロの拳をはじいた。

ブランクの背後には、ぼんやりとだがたしかに、人のかたちをしたヴィジョンが浮かんでいた。

幻のようなスタンドヴィジョンは白い指をキング・クリムゾンに無理やり絡める。

振りほどこうとしてもなぜかキング・クリムゾンの腕は微動だにしない。まるで岩に埋まってしまったように微動だにしない。

「……共感だ。僕のスタンドは……相手に共感する能力だったんだ。共感に……思い出に時間も、死も、生も関係ない」

そのスタンドの指が、深く手の甲に食い込んだ。そして、ふいにキング・クリムゾンが消失した。ブランクのスタンドに吸い込まれたかのように。

ディアボロは言葉も出なかった。ただ、動けないでいた。

矢の力？

あり得るわけがない。

なぜスタンドが消えた？

幻覚を見せる能力か？

頭の中を混乱が覆い尽くしていく。そして混乱は端から敗北の予感に染まっていく。

「そして……これが矢で引き出される……スタンド能力のそのさきだ」

ブランクは自分の左手を胸の前で握った。後ろのスタンドの形が、霧が晴れたかのようにくつきりと浮かび上がる。

その形は見間違えようがない。キング・クリムゾンの姿だった。

「スタンド能力を……いや、もはや魂と言ってもいい。それを奪う。それがこの矢によりもたらされたスタンド能力を超えた力」

奪われ続けたブランクの至る場所。

空だったブランクの本当の力。

相手の魂に共感し、それを奪う。  
それが、すべてのものの精神を支配する力。ブランクのミザル  
が行き着く果て。

「あんたの世界を見てわかった。僕らはしよせん、時の奴隷だ。だが、  
この認識されない孤独の世界にいたって、復讐の刃からは逃れられな  
いぞー！」

矢はもう一つの福音をもたらした。  
奪った能力はブランクの中で花開く。

「僕はリゾットの望みを叶える」

時が飛んだ。ディアボロは初めて自らのキング・クリムゾンをくら  
い、その理不尽さを思い知った。

気づけばブランクは目の前にいて、ディアボロに抱きついていた。  
ジキツ…と音を立てて、地面から生えた鉤がディアボロの足を固定  
した。

動けなかった。動けないまま、ブランクの胸から流れる血がべつた  
りと自分の腹につくのを感じた。

そしてあの音が聞こえる。

チキチキ…チキチキチキ…

「やめろ！オレから離れろ！その薄汚い手を退けろ！」

「…僕も痛い。でも、僕は罰を受けて当然だから」

ブランクの胸の出血が針に変わっていく。

キシキシキシと音を立ててディアボロとブランクの体の間で膨張  
して、皮膚を突き破っていく。

ディアボロの切断された左肩からも傷口を埋め尽くさんばかりに  
カミソリの刃が発生していく。

刃はチャラチャラと音を立て地面に積もっていく。刃は落ちてす  
ぐ、化学反応でも起こしたかのように一緒に流れてきた血を吸収し、  
さらに大きなナイフやメスに変わる。

「でもあんたの感じる痛みは違うぜ。この刃は、今までお前に奪われ続けた誰かの痛みだ」

ブランクが腕を回した箇所から、チキチキと皮膚下で刃物が肉を切り裂き、内側へ突き進み体を破壊していく。

「やめろ！やめろ！やめろ！このオレがこんなところでツ！こんなやつに…」

ブランクの傷からも、たくさんの刃が飛び出している。これまでの傷全てから、自分を切り裂く刃が血の代わりに吹き出す。

これは復讐心だ。復讐とは引き裂かれた魂の咆哮だ。

時には自らの憎悪が、自らを引き裂く。

まるでリゾット・ネエロの生き様そのものだ。

過去になにがあったかなんてわからない。でもこんな魂の形を見ると、なんだか悲しくなる。

ディアボロの口から血が溢れ、項に流れてきた。温かい。その血はすぐにカミソリの刃に変わって、服の隙間に落ちていった。

ディアボロは崩れ落ち、そのまま動かなくなった。

大量の血が針まみれの床に落ち、またより一層鋭い針と刃物の山になる。広がっていく血はどんどん刃物に変わっていった。

刃物は集積すると磁力によりよりあつまり、大ぶりのものに再生成されていく。周囲はまるで剣の樹がはえてるかのようだった。

あたり一面に、針と剣が侵食していく。メタリカの原則である自然界にある鉄分がどうかの法則を無視して、わずかな鉄分を元に多量の刃物が“生えている”のだ。

夜闇の星が鈍色に反射して、銀の世界にいるみたいだ。

美しい空が急に暗転してようやくブランクは自分を支える力がもう残ってないことに気付いた。

「あれ…ちよっとやり過ぎたかな…？」

よくよく自分を見ると、本当にひどい有様だ。

首からも、腹からも、針がどんどん生成されている。傷口周辺からポロポロと針が溢れ、肩に積もって落ちていた。右目からはカミソリの刃が、涙の代わりに落ちてている。

薬が切れてきたのか、それとも傷を視認したからか、ものすごく痛い。

「あはは…す…す…」

胸からは大量に血が流れていた。血中の鉄分は地面に落ちる前に徐々に形を成していき、落ちる頃には一つの刃物となっていた。

ブランクは制御しなければと思うが、もう立つことができない。

そのまま膝を突き、地面に伏した。自分の下に広がっていく血はすぐに針に変わり、傷口に突き刺さる。

ボスの言うとおり、生き延びたところでほんとに何もなくなっちゃうな…。

いや、ここで死ぬならあんま関係ないか。

レクイエムは僕が死ねば終わるんだろうか。

星はもう、まっくらでみえない。

「……なんか…疲れちゃった…」

でもこれで、償えたかな。

ギアツチヨは許してくれるか微妙だけど、リゾットの望みは叶えたよ。

でもなぜかな…ここで、一人で死ぬのはとっても悲しい。誰もそばにいないのは、ひどく寂しい。

これが、僕へのほんとうの罰なのだとしたら、きつと世界で一番ひどい罰だ。

大切なものを見つけたあとだと、死ぬのはとっても、怖いんだね。気づけて良かった。

ギアツチヨは熱を感じて目を覚ました。

爆発の瞬間、ホワイト・アルバムの装甲を厚くすることに失敗した。息切れもいいところだったしそれはしようがない。頭部を覆うヘルメットだけ頑丈にできただけでも御の字だ。

熱の原因は頭以外の全部だ。

「クソ…燃えて…やがるじゃねーか…クソツ！オレは何回爆発に巻き込まれりゃーいーんだオイツ！クソがアツ！」

怒鳴った途端腹部に明確な痛みを感じた。

見ると車のバンパーだがなんだかわからん部品が深々と食い込んでいた。貫通はしていない。だが、衝撃は内臓に届いてしまったらしい。

ノビていて動かなかったから激しく痛まなかつたようだが今のブチギレでズキズキ痛みだした。

「クソツ！ありえねーツ…」

怒れば怒るほど逆効果だがその状況にますますムカついてくる。

燃える現場から這い出して、早くコロッセオに向かわねば。

よく見るとやられてるのは腹だけじゃない。

気絶している間、氷が熱で溶かされたらしく、右脚の皮膚が水ぶくれを起こしている。肋は何本か折れてるし、多分足甲のどつかもいかれてる。

絶対的防御力を誇るホワイト・アルバムがここまでやられるとは思わなかった。同時に、やはりキング・クリムゾンは自分に倒せなかつたであろうことも悟る。

防戦一方。攻撃手段にかけていた。

消耗さえしてなければと思うが終わった戦いに言い訳したところで何も始まらない。

コロッセオに気を取られてか、とどめを刺されなかつたのは運が良かった。

確かに普通ならもう戦闘不能だ。普通なら動けねーがそんなの根性で乗り切れる。

だいたいブランクがあんだけ欠損して動けてるのにここでへばる

わけにはいかねえ。

ギアツチヨは立ち上がり改めて周囲を見回した。

ジヨルノ・ジヨバーナとグイード・ミスタも爆発でやられている。ミスタはほとんど死にかけてるが、ジヨルノは生きていた。片脚を車体に潰されてはいるが死にはしないだろう。

ボスの腕を氷漬けにしたときに張った氷は結果的にジヨルノをも助けたらしい。生命を作り出すという能力があればそのミスタも助かるだろう。

もつとも車体に押しつぶされた体が燃えてしまうのが先かかもしれない。

「ああ…クソ…調整さえ利いてりやまとめて始末できてたのによオ…」

ギアツチヨはフラフラした足取りでコロッセオへ向かった。だが途中で目眩がして倒れてしまう。内臓が中で破裂してるのか、皮膚の下にたぶたぶ血が溜まっているらしい。

しかたなくガラス片を刺し、血を出して凍らせて止血する。だがそのせいか意識が遠のく。目の前に地面が見えて、頭に衝撃が走った。生温かい。自分の血を見ることなんてかなり久々だ。

ホワイト・アルバムという無敵の能力を身に着けて以降、ギアツチヨは怪我なんてそうそうしてなかった。

こんな傷でへばっていると、アイツらに見られなくてよかった。

ギアツチヨがもう一度立ち上がるうととき、後ろで瓦礫を崩す気配がした。振り向くと、ジヨルノが片足を自分で切断して燃える車の下から這い出していた。

ブランクはあの日の祭壇の上に寝ていた。

倉庫をちよつと改装しただけの儀式部屋。コンクリの壁にかけられた十字架。掃除しやすいように、部屋の端に排水溝がある。

台上には百合の花と十字架があった。

司祭の格好をした男が立っていた。

男はブランクの体の中から臓器をどンドン抜き取っていく。

痛みもなく、血も流れなかった。

やがて、両手両足を縛られたブランクの体から、ぜんぶの臓器が抜き出された。

天井に向かって、空っぽの胴体が口を開けている。

司祭に扮した男は部屋の暗がりには消えた。

それっきり、誰も来ない。ずっとブランクは繋がれたままだ。

そうだよ。こうなることもあり得た

ジョンガリが来たのはたまたまだ

そもそも、もつと前に子どもたちの殺し合いに負けてたかも

みんな透明になった

いのちはなかったことになった

僕も、そうなるはずだった

気づくと、誰かが祭壇の傍らに立っていた。

どうしてか、顔が見えない。

「それは特別かわいそうなことじゃなければ、お前が弱かったからとかそういうわけじゃあない。ただ世界がそういう仕組みなだけだ」

聞き覚えのある声だ。低くて落ち着く、諦念に満ちた声。

「報われない。奪われ続ける。そういう世界だ」

そうかもしれない。それは真実だ

少し前にも、同じことを言われた気がする

「僕はそうじゃないと思いたいよ」

ブランクは言った。

「たしかに、みんなハゲタカみたい僕から奪っていく…。でも僕も、いろんなものを奪っていたよ」

生きるため殺した孤児院の仲間たち。

狙撃手として殺した名もしれぬ兵士。

暗殺者として殺した数々の個人。

そして、裏切り者として見殺しにしたみんな。

「僕はそれに気づかなかった。ディアボロと、実のところ同じか、もつと悪い。だから、罰を受けた」

どうすればいいんだろう

どうすれば許してくれるかな？

これで許してくれるかな…

「オレは怒ってないぜ」

また、別の誰かが立っていた。ブランクから顔はよく見えない。

本当に？

「あたりまえだろ。オレに付き合ってくれたんだから。オレたちのゲームは終わった。よくやったな」

「勝ちだか負けだか…もうわかんないけどね…」

もう一人の寂しげな声の男が言った。

「ブランク、世界は円のようなものだ。

与えたり、奪ったりが循環する輪だ。

別々に存在するんじゃないし、境界線があるわけでもない。残酷な世界も、美しいものも同じ円の中にあり続ける。

お前はその輪の中で生きてかなくなっちゃならない」

じゃあ僕はこれまでちゃんとその環の中にいたんだね…。

「これまでも、これからだよ」

「でも今いるここは…まるで世界の果てみたいだ」

誰にも干渉できない、僕だけしかない場所。

輪から外れた場所だ。

キング・クリムゾンにより吹き飛ばされる時間の中のように。

「くらい…」

ブランクは、かつてジョンガリが破った扉に手を伸ばした。鎖の錠のかかった扉。とうぜん届かない。

それでも手を伸ばした。



トリツシユは天井に空く穴から、胸に矢が刺さったブランクを一瞬見た。そしてすぐに苦痛に悶える声が聞こえてきて、トリツシユは上の様子を見ようと、おそるおそる階段を一段登った。

だが上げた足の膝にいつの間にか、一本の針が刺さっているのを見て体が硬直した。

針の先端はよくみると外側を向いている。続いてもう一本が膝からぷつりと皮膚を突き破り生えてきた。

「な…なんなのよッ！これは」

トリツシユは思わず階段から退く。天井の穴からは悲鳴と、チャラチャラチャラチャラ…という金属音が聞こえてきた。

「トリツシユ…ここは…離れたほうがいいかもしれない」

見るとブチャラテイの体の傷からも大ぶりのハサミが飛び出していた。トリツシユはブチャラテイの肩を抱き、下へ向かう。

一番下に到達し、ブランクとボスがいるはずのフロアを見ると、カミソリの刃と針とがアーチからこぼれ、その刃物が落ちながら寄り集まり剣に変化し、地面に突き刺さった。

「なんて光景だ」

「ブチャラテイ…一体何が起きてるの？」

ブチャラテイの体にはメスが突き刺さっていた。落ちてきたものだろう。血はやはり、あまり出ていなかった。

「ブチャラテイ！またあたしをかばって…」

「当たり前のことだ。怪我はないか」

「…これくらい、平気だわ。…これは、スタンド能力なの？」

チキチキチキ…

刃が擦れ合う音がとても耳障りだ。

「矢の力が暴走しているのかもしれない。とにかくどういった能力なのか見極めないことにはどうしようもないな」

「上よ…多分、上に登ると傷口が開くんだわ。さつき針が出てきたのは、4日くらいまえに擦りむいた膝だもの」

「…傷か……」

自分の体を見るブチャラテイ。とても生きていられる傷じやないのに、彼は動いている。トリツシユは胸にわいてくる不穏な予感を振り払おうとした。

「ブチャラテイ……！」

そこでジョルノの声がし、二人は振り向く。

驚くべきことにジョルノはギアツチヨと肩を組んでやってきた。よくみるとジョルノの左足のズボンが千切れていた。剥き出しの足は妙に汚れていない。

「ジョルノ！どうしてその人を……」

トリツシユを無視してギアツチヨはブチャラテイに尋ねた。

「ボスはどうしたんだよ」

「おそらくブランクが殺った。だが…暴走状態に陥っている」

「どういうことですか？」

「それよりもミスタは……」

「最低限の治療をしておいてきました。動けるようになるには時間がかかる……」

「オイッ！どーいうことかって聞いてんだろーがッ！とつとと答えろッ！」

ギアツチヨはジョルノの肩を振りほどき地面に放り出した。

かわりに手を差し出したブチャラテイの傷をすぐにジョルノは補う。

あのと看、ジョルノはギアツチヨの内臓を補うのと引き換えに、足が完全に接合し歩けるようになるまで肩を借りる条件を出した。

ギアツチヨはしばし悩みはしたが承諾し、律儀にここまでジョルノを運んだのだ。

「ここで待っていた男はスタンド能力を進化させる『矢』を持っていた。ブランクはそれを使いボスを倒したが…その能力の制御を失ったらしい」

「ちらりと見えたわ。胸に矢が刺さっていた」

「はあ…？何やってんだアイツは…」

地面から生えた幾百本もの剣は、星の僅かな光を拾って集め、氷のように冷たく光る。

それはさながら剣の山。針の水草。

上階からこぼれ落ちるカミソリの刃は雪のようにも見えた。

遠くで見れば美しいが近くで見るとなんとおぞましいことか。

「これは…メタリカ、なのか…？あいつ使えたのかよ」

「ああ。スタンドの発動条件は『上がる』ことだ。上に登ると傷口から見てのとおり、針と刃が生成される」

「…スタンドのみならばどうにかなりますか？」

「さつきステイツキイ・フィンガーズで試したが傷口からハサミが生えてきた。いずれにしる射程外だがな」

「ここから3階までか…矢を彼から取り戻せば、このスタンドは終わるんですよ」

ジョルノがなんとか方法を考えていると、ブチャラテイがすでに決めていたことのように提案した。

「オレがいこう。この体ならば…どんなに傷ついても支障はない」

そのブチャラテイを見て、ジョルノは彼がとつくに死んでもおかしくない傷を負ってなお、痛みをほとんど感じてないことに思い至った。

二人のやり取りを無視してギアツチヨは躊躇いなく階段に向かった。それ見てトリツシユは思わず声をかける。

「だめよ！あたしもさつき登ろうとした。でも何日も前の擦り傷でも開いたわ」

「なんだテメー…外野は黙ってる」

トリツシユはギアツチヨの気迫に押されてだまる。

「これはオレの仲間の不始末だ…オレが行くのが筋つてもんだらうが」

「しかし…傷は？」

引き留めようとするブチャラテイにギアツチヨは半分キレながら

反論した。

「ああ？それにテメーらよりはマシだろ。ブチャラテイ、なんだその体。生きてんのか？気持ち悪りーぞ」

ギアツチヨは忠告を振り払うように手をシッシと振ってから階段へ歩きだした。

「待つてください」

まだ引き止めるジョルノにプツツンしかけるギアツチヨだが、腹の痛みを思い出して抑えた。

「トリツシュ、ブランクは心臓に矢を刺したんですか？」

「ええ。ちらつと見えたときは…」

「じゃあこれを持って行ってください」

そう言つてジョルノはてんとう虫のブローチを渡した。

「てめー…なんのつもりだ？見返りに何をタカるつもりだ」

「そんなものはいらない。ただ、助けられるようなら助ければいい。それだけだ」

「……ムカつく奴だな」

ギアツチヨはそれだけ言つてすぐに階段へ向かった。今度は誰も引き止めなかった。

ギアツチヨが階段に足をかけ一段登ると、腹にチリチリとした痛みが走り、白い上着にまた血がにじんだ。

それだけじゃない。右足の水ぶくれが弾けて、ズボンの内側からカミソリの刃が飛び出てきている。ギアツチヨは一瞬体勢を崩す。

「いつてーなッ！クソ…」

壁についた手の、数日前の擦り傷からもカッターの刃が押し出されるようにして生えていた。

階段は登れば登るほど、建物に侵食する刃物の密度が増していた。登れば傷から切り裂かれるだけじゃなく、地面にも壁にも剣やら刀やらがはえているのだ。

進むのなんて正気の沙汰じゃない。

「ブランク、テメー…マジで覚悟しろよ…」

だが何よりも痛むのは腹部だ。ボスにやられた傷で内臓がズタズタになっていつてるのだろう。

だがギアツチヨの心を占めるのは痛みよりも遥かに大きな怒りだった。

「償いはどうした」

一歩一歩、地面の針を踏みしめて階段を登っていく。

「首持ってこねーと許してやんねーって言ったろーが」

踊り場を通過すると、上のフロアが見えた。剣の刃が扉のように行く手を阻んでいる。もうズボンが血でビチャビチャで、しかもそれがどンドン針に変わっていくものだから気持ちが悪い。

「ボスの死体もそこから出さねーと、殺したって証明できねーだろーが！オイツ！これどかせブランクッ！」

剣の扉の向こうから反応はない。

「クソガキが…っかそもそもオレはテメーのことはずっと気に入らなかつた。弱いし、空気読めねーし、飯奢らされるし…それなのに来てやったんだぜ。礼だけじゃ足りねーぞ」

口から垂れる血がカミソリの刃になった。口の中がジャリジャリしてくる。舌の奥からでてきた刃を一枚地面に吐き捨ててギアツチヨは怒鳴った。

「ここ数日で突然悟ったようなコト言いやがって。テメーの全部が超ムカつくぜツ!!暴走だがなんだかしらねーが、へばってんじやねーーツ」

そして腕を振りかぶり、思いっきり剣を殴った。氷で覆った拳が剣を打ち砕き、氷にも似た刃の空間が顕になった。

折れた破片が転がった先に、ブランクはうつ伏せになって横たわっていた。傍らにはボスの死体もあった。その少し遠くにもまた誰かが倒れている。

「ブランク…」

ギアツチヨはブランクを仰向けに起こし、口の前に手を当てて呼吸を確かめた。わずかだがまだ息をしている。胸からはまだ血が細い筋になって流れ出している。

「どうやら傷口に生成された無数の針で失血死は免れているらしい。バカだなお前……自分だけ傷つくことが偉いとも思ってたのか？」  
もちろん返事はなかった。紙のように白い肌はどす黒い血で汚れている。

矢を抜かねば。

暴走の至る果てがどうなるかはわからないが、はやく終わらせてやらないとだめだ。

「死んでも恨むんじゃないぞ」

ギアツチヨは先程折った剣先を握り、ブランクの針の心臓へ突き立てた。抜き身の刃で自分の手も切れるが、もうかまわない。

そのまま心臓へ刃を入れる。無数の針が剣をひっかく不快な音が聞こえた。そして剣先に硬い何かが当たる。きつとこれが「矢」だ。

ギアツチヨはそのまま力を込めて、心臓にしつかり剣を沈めてから、てこのようにして心臓を引きずり出した。

吹き出す血は、もう刃に変わりはしなかった。

そして先程ジオルノから受け取ったてんとう虫のブローチを、心臓へ変身しつつあるそれをブランクの胸に押し込んだ。

刃は突如霧散した。それを見てジオルノはすぐに階段を駆け上がった。ブチャラテイ、トリツシユもあとに続いた。

ジオルノがつくと、ブランクはちようどまぶたをひらいた。

ブランクはジオルノを見て少しだけ口角を上げ、言った。

「……きみは……ジオルノ・ジョバアーナだね」

「そういう君は……ヴオート・ブランク」

ジオルノはようやくブランクと出会った。アバツキオのリプレイで見た姿よりも生身のブランクはずっと優しげに見えた。

ブランクの胸にはまだ深い傷がある。ジオルノはブランクの傷を塞ぐためにゴールド・エクスペリエンスを出した。

ブランクは黄金のスタンド像を見て、ジオルノを見て、目を閉じた。

「これは…君の心臓か…？あたたかいね」

ブランクの言葉を聞いて、ジオルノはわずかに微笑んだ。

「……………オレへの礼はどーした」

ブランクの上半身を抱えるギアッチョは呆れ気味に言った。ブランクは薄く目を開けて小さな声でいった。

「ギアッチョ。僕は…光を見たよ」

「はあ？意味わかんねー…」

ブランクは意識を失ったようだった。ギアッチョはキレる気力もなく、半笑いする。

「ああ…クソ疲れたぜ…」

自分の下に広がる血溜まりを見て、意識が遠のく。ジオルノがそれに気づき、ギアッチョの顔を見た。

「結局…てめーら漁夫の利だな…：ラツキーな奴らだ…」

そう言っただけでもギアッチョも気絶してしまった。

先程治した腹部の傷が刃で開き、さらにスタンドで体の内側へと切り開かれていたらしい。その刃が消えたせいで出血は夥しい量になっていった。

ジオルノはギアッチョの腹の傷も治した。ゴールド・エクスペリエンスは損なわれた部品を作り出すだけなので、足に負った火傷やフーゴの時の凍傷のような面の傷はどうしようもなかった。

かなりの痛みだったろう。

その痛みを乗り越えて仲間を助けに行ったのだ。その尊い精神にジオルノは自分たちを突き動かす正義の心と同じ流れのものを感じた。

ブチャラティも同じだった。

どれだけ傷付いても、自分の意志を貫く。そして時には仲間がそれを助け、正す。

自分の信じたいと思っていた道を彼らもまた歩いていた。

はじめは殺し合うべき「敵」だった。だが、今となっては奇妙な絆さえ感じる。

ジオルノは傍らに転がった心臓に埋まった鏃を抜き、ハンカチで包

んだ。

彼らから誉を奪う事は黄金の精神からは程遠い。今はただ、彼らの支払った代償に敬意を表する。

「……トリツシユ…結局オレたちが君にしてやれたことはあまりなかったな」

ブチャラティは隣にいるトリツシユにそう呟いた。トリツシユはブチャラティの横顔を見て、そのどこか穏やかな瞳がもつと遠くの、どこでもない何かを見つめているのがわかった。

「そんな事はないわ。それに…」

トリツシユはブランクを見た。

初めてあったとき、あの子はまるで片翼をもがれた雛のようだった。

だがディアボロを前にしたあの子の顔は違った。

どんなに傷ついても、失つても、それにはきつと意味がある。それと向き合つて意味を見つけようとする限り。

「あなた達にしてもらった事は、忘れない。その価値を決めるのは、あたしだわ」

「……そうか。トリツシユ、君はとても強くなったよ」

「ありがとう、ブチャラティ。ミスタ、ジオルノ。ここにいないアバツキオとナランチャ、フーゴも…」

あなた達にあえてよかった。

「本当に、ありがとう」





「やっぱり手が無いのは落ち込みますね…」

「問題なさそうだな」

「あと体がすごくおもしろい」

「それはなんか食べれば治るだろう」

ギアツチヨは食ったら治る論を振りかざす傾向がある。

「それよりもあのあとどうなったんですか？僕ら揃って病院にいるのに一番驚いてるんですが」

「ああ…」

ギアツチヨはかなり嫌そうな顔をした。

「あいつらだよ。まじで理解できねえ」

「はあ？」

言葉足らずなギアツチヨにメローネが補足するように言い足した。

「アイツらはオレたちを始末する気はないとき。一連の騒動はドツピオと親衛隊の反逆…というふうにまとめようとしている。だがはつきり言って収束する気配はないな」

「はあ…」

ブランクは点滴を引き抜きながら事態を飲み込もうとした。メローネが持っているのは情報分析チームの管理者権限を持つブランクのパソコンだから、ブチャラティたちと一緒にいろいろ工作しているんだろう。

だが裏工作なんかでどうにかなるとは思えない。サルディニアの件と言い、騒ぎが大きくなりすぎた。『ボス』本人が収束を宣言しなければだめだ。

「まあぶっちゃけお前待ちだ。あの新入り…ジヨルノはお前が決めるべきだよ」

「なんで僕」

「お前がボスを殺したからだよ」

ブランクは今まで下っ端だったのに急に重要な交渉を任せられそうな気配がして、ちよつと顔を顰めた。

「ジヨルノ・ジヨバーナ…。あいつは危うい。何を考えているのかわからん」

「オレも同感だ。策略を巡らすタイプじゃないようだが、言葉は通じるのに違う世界のやつと話してるみたいだ」

ギアツチヨ、メローネはジョルノに対して懐疑的らしい。嫌いだとか相容れないというよりかは理解不能という感じだ。確かにボスの座を狙っているかもしれない人物が死にかけの「敵」を助けるなんてギャングの常識では考えられない。

それにやつらとは何度も死線を交え、結果的にこちらはチームの殆どを失っている。わだかまりがあつて当然だ。

「僕が思うに彼は…」

ブランクが言いかけたとき、ノツクの音がした。

ドアを開けて入ってきたのはジョルノとミスタだった。

「ブチャラティは？」

「彼は…」

「あいつはもう足を洗った」

「はア？ありえねーだろそんなんツ！お前らのリーダーじゃなかったのかよツ」

ギアツチヨがキレながら言うとミスタは「一身上の都合だ！」とキレ返し病室が騒がしくなる。

改めてジョルノと向き合つたブランクは何を言えばいいかわからず目を泳がせた。そんなブランクにジョルノは落ち着いた態度で提案する。

「外で話しませんか？二人だけで」

「あ、うん。そうだね。ここうるさいし」

ブランクはメローネにアイコンタクトをとつた。メローネは行ってこいと言いたげに小さくうなずいた。

ブランクは入院着一枚だったがあまり気にせず、ジョルノとともに病室を出た。

昼下がりで心地の良い気候だ。平日なのだろうか、見舞いの人は少ない。二人は自然と屋上へ足を向けた。

屋上にはたくさんシーツが干してあり、太陽の光を反射して白く

眩い。ベンチにすわるとネアポリスの美しいレンガの町並みが見える。海の青は前に見たときよりも青く、深く見えた。

「…僕さ、前に君とあった事があるんだよね。覚えてる?」

「いいえ、記憶にありません」

「敬語はやめようよ。僕、君のこともつと知りたくないんだ」

「…確かにそうだ。ぼくたちはちゃんと知り合わないと」

ジョルノ・ジョバァーナは美しい顔立ちをしていた。その顔に、どこか見覚えがあるような気がする。どこで見たんだろうか。思い出せないけれど、どこか懐かしい。

ブランクはなんとなく気まずくて、頭に浮かんだ事を話してみる。

「君のスタンドは、すごいね。与えられるんだもの。僕、ずっと誰かにいろんなことしてもらって、与えられて来たんだよね。今度は心臓まで君からもらっちゃった。落ち込むよ…」

「君はボスを倒した。それだけでいろんな人に未来を与えたんだ。そうは思えないのか?」

「…:…:…:そうか。なるほど。そういう考え方もあるのか」

ネアポリスの空。気持ちのいい青と雲の白のコントラスト。初めて見るような気がする。

「ジョルノ、君はこの騒動が起きる直前に入団したよね。なんでギャングになろうなんて思ったの?」

ブランクの間ジョルノは目を丸くしてから、なにかためらうように目をそむけた。もう一度こちらを見るとときに微笑を浮かべ、またすぐに平静な顔に戻る。

なんだか背伸びした少年みたいだ。事実、彼は自分と大して年の変わらない少年だった。

「…:口にするのは、なんだか気恥ずかしいな。…:…:ぼくは昔、ある人に助けてもらったんだよ」

「ある人?」

「ぼくは日本人とのハーフだね。黒髪でいかにもいじめられっこって感じだった。母親にもあんまり可愛がられてなかったし…:義父から

はよく殴られてた。気づいた頃にはすっかりひねた子どもになっていたよ」

「そーはみえないですね」

「ある日、怪我をしたギャングの男をかばったんだ。その日から周りの景色が変わった。だれもぼくをいじめなくなったんだ。その人はぼくをずっと影からまもってくれていた。決してそれを表に出したりせず、ただ無言でね。その日からぼくはギャングスターに憧れるようになった」

「…君も誰かに助けられたんだね」

「ああ。それを思い出すと…不思議と勇気が湧いてくる。わかるかな」

「なんとなくわかる」

「そうか。そうなんじゃないかと思った」

「…ふ。なるほどね…」

そりやギアツチョやメローネと話が通じないわけだ、とブランクは納得する。

だってこんな眩い夢を見てるやつなんて今まで世界中のどこだつて見たことない。

王道

彼の歩む道はそれだ。そしてそれにふさわしい精神を持っている。さらに、生み出し与えるという天賦の才がその道を照らしている。

魂の形がわかるブランクには嫌というほどにわかる。彼の黄金の精神が。

「でもさ…正しいことばかり、善い事ばかりでできるわけないよ。光があれば闇がある。そして…この闇は濃すぎる」

闇は暗殺チームや麻薬チームだけじゃない。売春、裏ビデオ、賄賂、誘拐。この世界の裏側に巣食う暴力と奪い合いは、それがなければ成り立たないものがあるから存在するんだ。

裏世界をいくら照らしたって、より濃い闇がどこかで生まれる。光には、シミのような影がついて離れない。それが世界だ。

「それは嫌というほどわかつている。でも、ぼくは暗闇の中を切り拓

いていく。どんなに困難で、犠牲があっても。それが正しいことならばね。ぼくは自分が正しいと信じたことをするだけだ」

「だから僕らを殺さなかった？」

「そうだ」

「じゃあ、僕があのまま世界をめちやくちやにしようとしてたら君はどうしてた？」

「その時は君を殺して止めただろうね」

「なるほど。いいね」

燕が1羽、二人の上を飛んでいった。ジオルノはその軌跡を目を細めてみていた。

「ブランク、君のことも教えてくれるか。どうしてボスと戦ったんだ？」

「え、みんなから聞いてない？」

「君の口から理由を知りたい」

ブランクはかなり悩んで話し始めた。

「はじめは命令されたからだよ。でもそのせいで……本当に大切なものを失った。だから償い、なのかな。うん。いや、それだけじゃないんだけど」

ブランクは自分の頭に渦巻く考えをよく噛み砕きながら言った。

「僕は、ずっと僕がどういう人間なのか知らなかった。だから……いろんな動機はあるけど……僕は、僕の魂の形を知るために戦ってたのかもしれない」

「見つけられた？」

「多分。……僕はね、できれば誰かに与えられるような人間になりたいと思った。でも……結果的に、僕は“矢”で奪う力を手に入れたわけだ。皮肉だよ。結局いろいろ駆けずり回って見つけた自分は理想の自分ではなかった」

「ぼくはそれは違うと思う。君のスタンド能力がどんなものでも、行為自体の尊さは損なわれない。それを忘れてはいけけない。それに……君自身が何者であるか結論付けるにはまだ早すぎる」

「……そうだね」

ふいに、メタリカに自分を引き裂かれたときに見た夢を思い出した。

あの地下室に横たわり、孤独に閉じ込められる夢。誰かが僕に言うてくれた言葉を。

お前はその輪の中で生きてかなくつちやならない

そうだ。僕は生きなきやいけない。前に進み続けなくちやならない。そうしてできた道を、最後に振り返ってようやく僕がどんな人間だったのかがわかるんだ。

「…ジョルノ、僕は、君を信じたいと思ってる。君の行く道に興味がある。でもそれには、ほんの少し僕の臆病が邪魔をするんだ」

ブランクは恐る恐る左手を前に出した。

「握手を…してくれないかな。そうしたら、きつと僕は君を本当に信用できると思うんだ」

「…ああ、わかったよ。ブランク」

ジョルノ、手を握る。

離してからブランクの手をそつとつかみ、その手のひらにあの矢を置いた。ブランクは驚いてジョルノの顔を見た。

「ぼくは君たちの栄光を横取りするような卑怯者ではない。この矢は、そしてボスになる権利は君と君のチームが勝ち取ったものだ。ぼくは、君たちの選択を尊重する。君たちが仲間を殺した僕たちを許さないと言うならば、それも仕方がない」

ブランクはかなり驚いた。その誠実さに思わず笑ってしまう。

「…僕らみんな、君に命を助けられてるんだよ？ずるいよ。そんな人を殺せるわけがない。それに君のことはよくわかった」

ブランクは手の上に乗った矢を見た。あの日心臓に刺さった矢。とても痛かった。今も左胸にはまだ違和感がある。でも、ジョルノからもらった新しい心臓はちゃんと鼓動を刻んでいる。

「僕は君が望むなら、ボスって立場を君に譲りたい。僕はボスの器じゃないからね。ただし…矢は僕がもつ」

ジョルノはかなり驚いた顔をしていた。ブランクをしつかりジョ

ルノの目を見て言った。

「この矢が保険だ。君が僕の仲間を退けたりしないようにする抑止力だよ。そして：君がちゃんと光の道を進んでいるかぎり、僕は君と手を組もう」

「願ってもない話だ。だが：はつきり言って正気じゃあないよ、君は」  
ジョルノは笑ってる。ブランクもつられて笑った。

「僕は人を見る目があるんだよ」

「きみの仲間は賛成してくれるとは思えないけど」

「多分二人ともめっちゃ怒る。でもボスは絶対やりたがらないよ、じゃない？内紛あつた組織のボスとか絶対やだね。君のほうが変わるんだよ！」

病室にもどると爽やかな気分の二人と対照的に空気が重かった。  
ギアツチヨとミスタが喧嘩していたのかもしれない。

「まとまったか？」

メローネがまつさきに尋ねた。

「えー。僕ジョルノにボスをやってもらおうと思うんだけど…」

「はあ?!責任とってテメーがやれよツ!!」

「えー…でも年功序列ならメローネだよね？」

「絶対やだ」

ギアツチヨは案の定キレた。ブランクはむりやりメローネに矛先を向けたが、メローネは即答だった。

「ギアツチヨは？」

「絶対やだ」

ブランクはほらね?と言いたげに肩をすくめた。

「オレははつきり言って気に入らんねーし、信用しきれねー。どっかで確実にオレたちを始末しようって気になるんじゃないやあねーか？」

「そこらへんはちゃんと大丈夫。矢は僕がもらったんで。もしそんなことしたら矢を使ってめちゃうくちやにしてやりますよ」

ギアツチヨはまだ納得できていないようだった。メローネはじっくり考えをまとめてから口を開いた。



「オレも不満がないわけじゃない。ブチャラテイならば適任だと思いが、いなくなつた以上やつが選んだお前しかいないだろう。ジョルノ・ジヨバアーナ」

すでに「暗殺チームはボスを護るためあえて裏切り者となつた真の英雄」という筋書きができている。あとはボス自身が表に立ち、それを肯定すれば名誉の回復は果たされる。

「誓えるのか？ディアボロみてーに誰かを踏みつけにして安寧を貪るクソツタレになんねーって…テメーらに殺されたオレたちの仲間に誓えるのか？」

ギアツチヨは低く、暗い声で改めてジョルノに問う。

「誓います。死んでいったぼくたちの仲間の魂にも」

ジョルノは凜と答えた。ギアツチヨはジョルノの瞳に嘘がないかをしっかりと、さすような眼差しで見た。

「……チツ。オレは見張つてるぜ。そのバカだけじゃ見落としがあるにちがいないーからな」

「巻き込み事故みたいにデイスられた…」

「……まあつまり、これでまとまつたってわけだな？」

どうやらミスタはこの病室に長居したくなさそうだった。ブランクも彼に目を潰されたので苦手意識がある。

「詳しいことはまた日を改めよう。まだ入院中だというのにすまなかつた」

ミスタとジョルノはそう言つて辞した。

二人が扉を閉めてから、ギアツチヨはブランクを睨みつけた。

「お前とんでもねー決断したな」

「任せたくせに」

「まあでもやりたくないしな。ボスなんて。リゾットがいりや任せられたが…」

三人は黙つた。近いうちに、「ボス」の収束宣言後に葬儀が執り行われる予定だ。

確かにブチャラテイたちに対しては簡単に割り切れない感情が

あった。だが一先ず、裏切り者という汚名は返上される。  
そうして、ようやく鎮魂歌を奏でることが許されるのだ。

「そーういや光つてなんだよ」

「ん？そんなこといった？」

「とぼけてんじやあねーぞ。気絶する前そう言ってたぞ」

「うるさいなーホント。ここ、病室だよ？つーかなんでギアツチヨ  
だけそんな元気なんだよツ」

ギアツチヨとブランクは喧嘩を始め、メローネは苦笑いしながら  
ベッドに横たわった。

ネアポリス郊外にあるちいさな家に、一台の車が止まっていた。普  
段人の気配はないが、今日は二人の人間がそこを訪れていた。

「素敵な家だわ」

トリツシユはリビングに入ってすぐそう言った。本当に素敵な家  
だった。窓から見える景色が特に素敵だ。

ブチャラティは鍵をテーブルにおいて、椅子に座ってその窓の向こ  
うを見た。

「ここから、海に沈む太陽が見えるんだ」

「住んでいるの？」

「いや、所有しているだけだ。中心部へは、少しだけアクセスが悪い  
しな」

「急ぎの用さえなければ十分だわ」

トリツシユの言葉にブチャラティは微笑んだ。

「近くにうまいリストランテと、学校もある。静かでいいところだ。  
：君が、新しい人生を歩み出すにはふさわしいとおもう」

「ブチャラティ、本当にいいの？こんなに世話になって…」

「気になるなら、大人になってから家賃を払ってくれればいいさ」

ブチャラティの冗談にトリツシユはとても優しい笑みを浮かべ、窓

を開けた。春の暖かな風が吹き込み、白いカーテンがかすかにたなびいた。

もうすぐ日暮れだ。ネアポリスの海は日に照らされると、まるで金の海のように光り輝く。

キラキラと太陽の光を反射する波。潮の香りをかすかに運ぶ風。穏やかな時間。

「ブチャラティ。あたし、この旅であなたのことをもっと知りたいと思っただの」

「それは…光栄だな」

トリツシユは自分がかんまり恥ずかしいことを言ってしまったことに気づき、慌ててブチャラティの方を振り向いた。

「か、勘違いしないでよ。別に変な意味じゃあないわ！」

「わかってるよ」

ブチャラティはさもおかしそうに、笑う。

わかってないじゃない…

そう思いながら、トリツシユは赤くなつた頬を隠すように廊下に出て、階段を見つけた。

「二階も見てごらん。どっちかの窓が閉まりが悪いが…両方がいい部屋だから」

「ええ」

階段を登る足音が聞こえて、ブチャラティは瞳を閉じ、ゆっくり背もたれに体を預けた。

もうじき海に日が沈む。

黄昏時に、この街は美しい黄金の輝きを放つんだ。

トリツシユ、君がここでこの黄昏を一日の終わりに眺めてくれたらと思う。

君がここで、今日一日で起きたいろんなことを噛み締めて、明日を生きてくれたらとても嬉しい。

そうならば、オレは自分の進んだ道を、自信を持って振り返れる。アバッキオとナランチャにも胸を張って会いに行ける。そしてその道を、自分の進んだ道を誰かが続いてくれればと思う。

「ブチャラティ。…窓、閉まりが悪いんじゃないわ。すぐ上に燕が巣を作っていたの。フンが詰まっただけだわ。ねえ…」

トリツシユは階段を降りて、早くブチャラティに燕を見せてやりたくて呼びかけた。だがリビングから返事はなかった。

「ブチャラティ？」

暗殺チームの葬式は合同で行われた。

各チームのリーダー、幹部が訪れるかなり大掛かりな式だった。ボスとして名乗りを上げたジョルノも出席した。

当然組織はまだ混乱していて、葬儀に来なかった幹部も数名いる。完全に騒ぎが収束するにはまだ時間がかかるだろう。

ブランクは地位的には参謀だったが、特に誰からも注目されていないかった。個人的にはありがたいが少しだけ寂しい。なのに仕事だけはちゃんと割り振られ、3日後にはポルナレフの遺体を祖国に運ばねばならない。

式がおわり、誰もいなくなった墓地の駐車場でブランクはメローネの車椅子に体重を預けながら、協会の屋根にある十字架をぼーっと眺めていた。

昨日はムーロロの葬儀で、神父の話も祈りの言葉もだいたい覚えていた。

信仰のない自分には、一言一句、誰に向けてもほとんど同じの教えなんてあまり意味がないと思った。でも、それに意味を見つけることが信仰なのだと思う。語るコードが違うだけで、届けたい思いは同じ

だ。

ギアツチヨは建屋でいろいろな手続きを済ませていた。書類や墓地の話だろう。二人が病院にいる間いろいろ手はずを整えたのはギアツチヨだった。

「メローネ」

「ん？」

「僕、暴走してたとき夢を見たんだ。僕は昔、体から大切なものを奪われた。夢の中では、師匠は助けに来てくれなくて、僕はこのまま死ぬんだなって思ったんだ。でもね、誰かがかわりにドアをぶち破ってくれた。そして目が覚めたんだ」

「へー」

メローネは相変わらず無関心そうだった。でもメローネはこういう会話を後々いじってくる。

「…メローネ、ありがとう。僕をここにいさせてくれて。あの日、ボートの上で諭してくれて」

その言葉を聞いてメローネは急に腹をおさえるように前かがみになり、ヒクヒク肩を震わせて笑いだした。

「お前ほんつとうに恥ずかしいやつだな！」

「なんで笑う?!そこは違うだろうが!こんなに素直に礼を行ったのに!少しくらい照れたりしろよ!!」

車椅子をガタガタ揺らしてキレルブランクとまだ笑っているメローネをみて、ギアツチヨは本気で呆れていた。

「何盛り上がってんだよ」

「お、ブランク。ギアツチヨにも言ったら?」

「ぜったいやだ…」

「なんだと?テメーオレをなめてんのか!クソがッ」

遠くで神父がそれを迷惑そうに見ていた。

メローネを病院に収容し直した後、退院したブランクとギアツチヨは暗殺者チームの本部へ行った。

ブランクはここに泊まるつもりで、ギアツチヨはそれに付き合っただ。

ドアを開けるといきなり物が散らばっていた。

「きたねー」

「家探しされてたからな」

ギアツチヨは電気をつけて構わず中に入っていく。いつもみんなが座っていたソファアのまわりは少しだけ片付いていた。

改めて見ると家探しとかは置いといて、汚い。特に酒瓶が溢れかえっているのが気になる。

ブランクは入った当初こそ掃除を頑張ったものの、片付けを上回るスピードで酒瓶が堆積していくので見ないふりをしていただけだ。

「このあたりは片付けたからまあ寝れるだろ」

ギアツチヨはソファアのあたりを指差すが、正直他と違いがわからなかった。

「ギアツチヨの掃除は雑すぎる…」

「文句があるならテメーでやれ。下っ端の仕事だろ」

「僕は実質ナンバー2です。敬語使ってください」

「ビール瓶で殴ってやろーか」

「すみません…」

ブランクは転がった酒瓶を拾った。まだ中身が入っている。よくみると中途半端に中身が残ってる瓶ばかりだった。みんな飲み会るときに部屋に残っているぶんを把握せずに買い込むし、そもそも飲みきろうという意識がないのだ。

「もう飲んじまおうぜ」

「賛成」

ギアツチヨも瓶の山を見て同じことを思ったのか愉快的な提案をした。ブランクも同意し、大量の瓶をテーブルに置いた。

次にブランクが意識を取り戻したのは盛大なゲロ音が聞こえてき

たからだった。

ギアツチヨが吐いてるらしい。

二人の頑張つて飲みきろうという努力が床中に転がっていた。

ブランクは起きて、コップ2つに水を注ぐ。

ふらふらになつてきたギアツチヨにそれを渡すとギアツチヨは一瞬でそれを飲み干し、お代わりを要求してきた。素直についてやり、自分も水を飲む。

「いつも思うけど、酒弱いよね」

「お前はなんでそんな強いんだ」

「こればかりは体質ですね。才能！」

水を飲み終わるとギアツチヨはブランクの向かいのソファアーに寝つ転がった。メガネを放り投げて眉間を押さえている。

この部屋には、いろんな思い出がある。自分が初めてここに来たとき、この部屋には10人いた。

ブランクの椅子はずっとパソコンの前に置かれたただの椅子だった。

2人、ブランクが死に追いやった。

そこから8人になって、今はもう3人しかいない。からっぽだ。

僕はこの空虚を受け止めなきゃいけない。

喪失を乗り越えて、そしてこれからまた、残った絆を失う恐怖から逃げずに生きていかなきゃいけない。

でも同時に、新しい絆を繋ぐこともできる。

奪い、与える。相反するこの輪の中で。

ちやんと覚えているよ。

君が扉を破ってくれたんだ。

一番僕を嫌っていた君が、血みどろになりながら手を差し伸べてくれた。

僕はそのことを絶対に忘れないよ。

「…ギアツチヨ」

「ああ?」

「君の手に触れてもいい?」

ギアツチヨは眉間から手をどけず、片手をこっちへ差し出した。

ブランクはその手におそるおそる触れ、そのあつさをしっかりと感じた。

「…ありがとう」



バッド・トリップ

00. ギャンブラー：過去

暗殺にも繁忙期と閑散期があり、その依頼数は季節に結構左右されている。経済関係の依頼は月末に固まったり、人間関係のもつれは意外と秋に多い。

つまりまるまる一ヶ月、全くやることがない。そういう時期がある。

召集もかからない。依頼がない。そんな日が二週間続いた頃に本部へ行くと、暇な連中がたむろしている。

その日はイルーゾオ、ペツシ、ギアツチョ、ブランクの四人が揃い、テーブルを囲んでいた。

もう一人、ホルマジオもいたが、今は仮眠室で寝ている。彼の場合は暇なのではなく、昨晚徹夜でプロシユートと飲み明かし家に帰っていないだけだった。

テーブルの上にはトランプのケースがおかれており、ブランクがディーラーよろしくシヨットガンシヤツフルを披露していた。

「次もまたポーカーで？」

ブランクの問いかけにイルーゾオが若干悩ましげに、自分のおさげをくるくるともて遊びながら答えた。

「金かけたところでよオー……このメンツじゃ盛り上がりにかけるぜ。賭け金が堅実なんだよ」

「だって……そもそも手持ちが少ないんですぜ、オレたち新入りは」

「僕もメローネ先輩への借金の利子が……」

「付き合ってやってんのにしらけてんじやねーよ」

しょんぼりするペツシとブランクに、片手間にクロスワードパズル雑誌を読んでいたギアツチョが文句を言った。

低迷したテンションにゲームはもうお開きかと思われた。だがそこでブランクが妙案を思いついたと言わんばかりに立ち上がり、こう

提案した。

「そうだ。罰ゲームをかけることにしません？」

「は？」

「超単純。負けたら罰ゲーム。罰ゲームはみんなが紙に書いて箱にも入れて、敗者がひく」

「いいね！」

ペッシはそれが気に入ったらしいが、イルーゾオはちよつと躊躇った。

「なんだかがキつぽくねえか？」

「でも罰ゲームの発案は僕らですよ。どうせえげつないものばかり揃うに決まっています。ゲームに緊張感が生まれますよ」

ブランクの言い分はそれなりに筋が通っているように思えた。それにまあ、金を失うことよりも恥をかくことのほうが嫌だ。緊張感という点では悪くはないかもしれない。ギアツチヨも雑誌を放り出してやる気をもせた。

「のった」

「…まあ試してみるのも悪くねーか」

早速各々適当な紙に罰ゲームを書き出した。ペッシはちよつと悩んでいるようだった。

「罰ゲームか…自分で引く可能性もあるんだよな？」

「負けなきやいいんですよ負けなきや！」

ブランクはサラサラつと書いて折りたたんだ。ギアツチヨも書き終わったららしく、トランプのケースに札を入れブランクに渡した。

四人とも札を入れ終わると、ブランクがカードを配りだした。

「……オーケー。では種目は」

ババ抜き

「シンプル…」

「故に奥深い！」

「まあ敗者ははっきりしてんな」

ババ抜きは知つての通り、順番に手札を引き合い、数字を揃えて捨てていき、最後までジョーカーを持っていたプレイヤーの負けというシンプルなゲームだ。

手札の一番多いペッシからブランク、イルーゾオ、ギアツチヨの順で回る事となった。

ペッシの札からブランクが早速一枚引いた。揃った札を捨ててイルーゾオの方へ向ける。

「オレすぐ顔に出ちやうんだよなあ……」

ペッシは口をへの字にして自分の手札を見た。その表情を見てギアツチヨがニヤツと笑う。

「ふん。ペッシ……左端のがジョーカーだろ？」

「や、やめてくれよ！」

「おおっと凶星か？」

「も、もうオレ自分の手札見ねえ！」

ペッシはギアツチヨから引いた札を手持ちに加えてからぎゅつと目を瞑つてしまう。

「じゃあ僕が確かめちゃお。……お、マジだった」

ブランクはしめしめと、先程ジョーカーだと疑われた左端の札を引いた。

それを見てイルーゾオは呆れ顔だ。

「お前馬鹿なのか？」

「フツ……バカはイルーゾオ先輩の方ですよ。僕はあんたを絶対に罰ゲーム沼に沈めるつもりなんですからねッ」

ブランクは手札をシャツフルしてからイルーゾオに提示した。

「このオレにジョーカーを引かせる気かア？面白え」

しかしブランクの勢いに反して、イルーゾオはジョーカーを引かず数字を揃えて手札を捨てた。

淡々とゲームは進み、ペッシの残り一枚をブランクが引いた。

「オレイチ抜けだ！」

「……ぬう……」

ブランクの手持ちは3枚で、イルーゾオがさつとそこから一枚引い

た。

「おオーつと？どうやらオレも揃っちまったみたいだな」

イルーゾオは厭味つたらしく笑い、自分の手をパーにしてブランクに見せた。

「ギアツチヨ先輩……」

ギアツチヨの持ち札は残り一枚だった。ババ抜きは二回連続して誰かに引いてもらうことはできない。つまりブランクはギアツチヨの手札から引く他ない。

「…てめーが引く番だぜ」

「ぐ…」

「早く引けよ、オレのラスト一枚を」

「クソオオー！ーッ！」

ブランクは悔しきで顔をあげられないままギアツチヨの札をとった。ブランクの手元にはジョーカーとクローバー、ハートの4の札が残っていた。

「バアアーカ！」

「策に溺れやがって」

「チクシヨー！あんた地味にカンがいいなあ！」

イルーゾオはゲラゲラ笑い、ギアツチヨもくすくす笑ってブランクをコケにした。ペツシだけが申し訳なさそうな顔をしてブランクに気づかわしげな視線をやっていた。

「なんかゴメンな、ブランク」

「いいえ…こればかりは僕が愚かでした…」

ブランクは泣く泣くトランプケースにしまわれた罰ゲームくじを引いた。おられた紙を開くと、そこに書かれていたのは

“床に座る”

「ぬるいー！」

「誰だこんなぬるい罰ゲーム書いたの！」

ペツシがおずおず手を上げるとギアツチヨは大きなため息をこれ

みよがしにつき、乱暴に次の罰ゲームの札を書いてトランプケースにしまった。

「次はもつとやベーやつにしろよな」

「お、おう……えーつと……」

ペツシ、ブランクもささつと罰を書き、再びトランプをシャツフルした。

「じゃ……今のはお試しということ。気を取り直してババ抜き再戦といきましょうか」

ブランクは同じ失敗を二度は繰り返さなかった。ペツシも今回は初手でジョーカーを引くことなく、またも一番に上がった。

今回はブランクがジョーカーを持っており、イルーゾオにひかせることに成功した。イルーゾオとギアツチヨ間でジョーカーは往復し、最後の最後、イルーゾオはギアツチヨの眉間の血管の浮き具合でジョーカーを判別する方法を発見して勝利を収めた。

今回の罰ゲームは「酒をコップ一杯一気飲み」というシンプルなものだった。イルーゾオの書いた罰で、ギアツチヨはヌルいぜと言いながらジンを一気した。

だがギアツチヨは特段酒に強いわけではない。一気は堪えたのか、早くも顔が赤らんでテンションが上がっていた。

「ババ抜きなんてやってらんねーぜ！飽きた！もつと戦略性のあるものにしろッ」

「ではローリング・ストーンなんてどうでしょう？」

ローリング・ストーンはまず手札八枚がプレイヤーに配られる。そして一番最初のプレイヤーが場に好きなカードを出す。次のプレイヤーは場に出されたカードと同じマークのカードを出さなくてはならない。

全員が同じマークのカードを出せた場合、最も数字の大きいカードを出したプレイヤーが次に最初にカードを出せる。

同じマークのカードが出せない場合、場にだされたカードをすべて引き取らなくてはならない。そして引き取ったものが次に最初にカードを出すことになる。

はじめに手札がなくなったものが勝利となり、以下の順位は手札の枚数で決まる。今回の場合は最も手札が多いものが罰ゲームを受けることになる。

「なんだよ、単純なゲームだな」

「結構運で左右される気が…」

「いや、最初にカードを出す人間が圧倒的有利ですよこれ」

ブランクはじっくり考えて自分の札を見た。ギアツチョもメガネを直しながら手札を確認していた。

「ブツクサ言つてねーでとつとやろーぜ」

イルーゾオが促し、先程イチ抜けたペツシがダイヤの6を出した。次々とダイヤが出され、Kを出したブランクが親になった。ブランクはクローバーの3を出し、場にはカードがどんどん溜まってくる。

4巡目、イルーゾオが親になったときについてペツシがカードを出せなくなった。

「えっ…うわ！マジかよお…こんな枚数捌ききれぬわけがねえ！」

20枚近くに膨れ上がった自分の手札を見てペツシが悲鳴を上げる。

案の定ペツシは手札を捌ききれず、ギアツチョの上がりで無事最下位が確定した。引いた罰ゲームは

「タバスコ一気飲み」

「一気飲み好きだなオイッ！」

これにはギアツチョがキレた。案の定イルーゾオの書いた罰ゲームだった。

「オッ…オレ、タバスコは嫌いじゃあないけどさ…こんなに飲んだら流石に、体に悪いんじゃないやあ…」

「ああ？罰ゲームなんだから当然だろうが。それとも罰ゲームもマンモー二用じゃなきやだめか？」

イルーゾオはここぞとばかりに挑発する。見え見えの挑発だったがペツシはムツとした顔でタバスコの蓋を開けた。

「…飲むよ。こんなの余裕だ。マンモー二なんて言わせねえ！」

「ペツシアニキイ……！」

ペツシは迷いを振り払うようにタバスコを一気飲みした。当然その味覚を超えた辛さ、痛みに悶え苦しむ。

「ペツシ、ほら飲め」

ギアツチヨがいかにも水っぽく差し出したのは先程のジンの残り  
で、ペツシは飲んだ途端ぶっ倒れてしまう。

「こ、これは流石にプロシユート兄貴に怒られるのでは……？」

「こねーこねー。息もしてるし大丈夫だろ」

「しばらく再起不能のようだな。……よし、3人で次だ」

ギアツチヨは目が据わっていた。シラフのイルーゾオとブランク  
だったがお互いがお互いに罰ゲームを仕掛けたため降りようなど  
とは言わなかった。

「……では、さつきと同じで？」

「ああ」

ブランクは手際よくカードを配り、第二戦が始まった。

「じゃあさつき三位だったブランクからでいいか？」

「やったーラツキー！」

「デツキ構築は完了だ。いつでもいいぜ」

「……デツキ？」

ギアツチヨは自信ありげにメガネをクイツと上げた。

「見えたぜ……このゲームの勝ち筋がな」

ブランクはそんなギアツチヨをみてイルーゾオに小声で囁いた。

「彼、そーとー酔ってませんか？」

「ああ。こういう酔い方は見たことねー……」

「早く出せブランク！」

「は、はあ……」

ブランクは場にクローバーの7を出した。イルーゾオが次にQを  
出し、ギアツチヨが8を出す。一巡目はクリアされ、イルーゾオが好  
きなカードを出せる。

だが3周目、ギアツチヨはカードを出さずに場に出ていた8枚を回  
収した。

「おやおや?」

ブランクが煽り気味に笑ってもキレたりしなかった。それがなおさらイルーゾオとブランクを不安にさせた。

だが5巡目でギアツチヨがカードを回収した狙いが見えた。残り手札三枚ともなると確実に出せないマークがでてくる。

そこでイルーゾオはギアツチヨの初回の負けの理由がわかった。

だがギアツチヨは序盤にあえて負け、親になることで場をコントロールしていたのだ。どのマークでも最強のカードが出せるように。

「チツ…なるほどな…奥が深いぜ」

ギアツチヨがどんどん手札を消化して一番に抜け、ゲームは終わった。結果はイルーゾオの最下位だ。

いやいや引いた札に書かれていたのはものすごく汚いブランクの文字だった。

「メローネの服を着る」

「…?!」

「おっ! ついに引きましたねえ!」

「てめえツ…! ふざけてるのかっ…!」

「いやあ…」

思わずブランクに掴みかかるイルーゾオにギアツチヨが野次を飛ばす。

「罰ゲームなんだからやんねーとなあ! 年上え!」

タバスコと酒の暴力から復活したペツシもじつとりとした目でイルーゾオを見ていた。

「逃げるんですかい? イルーゾオの兄貴よオ…」

「クソツ…!」

「まあまあ…イルーゾオ先輩が肌を見せるのが嫌って言うのなら、毛布をかぶっていただけでも構いませんよ?」

ブランクの挑発はかなり効いた。しかもほか二人の視線はマジであり、乗らざるを得なかった。

「うるせー! 恥ずかしくなんかねーよッ! このイルーゾオ様を舐めてんじやあねーぞ」



イルーゾオは立ち上がり、ロツカールームへ向かった。

「ペツシも復活したし大富豪しようぜ。ベタに」

「いいですね」

「特殊ルールはどうする?」

ギアツチヨ、ペツシ、ブランクが和気藹々としている横でイルーゾオはメローネの服を着て縮こまっていた。

お情けでマスクをかぶることは免れたが、上半身の更に右側だけ寒い状況に身体がなれない。ヤケになって酒を煽り、配られたカードを確認した。

大富豪はオーソドックスで、さらに戦略性も必要なゲームだった。ブランクを叩き落とすならばここである。

だがブランクも負けるわけには行かない。次の罰ゲームはさつきよりも過激なものになっているに違いなかったからだ。

「ジーザス……!」

だがブランクは唸った。手札にあつた最強のカードはQで、あとは連番でもなんでもないカードしかない。ここにきてトランプの神様は微笑まなかった。

そしてカス札しかないブランクは順当に負けた。

泣く泣く罰ゲームを引いてそこに書かれた内容に悲鳴を上げた。

「『ホルマジオのポーズに線を追加』?!誰だよこれ書いたの!」

「オレだ」

ギアツチヨが片手を上げて答えた。

「ギアツチヨ、お前かなり酔ってるんだな」

「や、やらねばなるまいですか?僕はホルマジオ先輩をこの中の誰よりも尊敬しているの?!」

大体のことなら素直に従うブランクだが、一番世話になっているホルマジオに対してのいたずらは流石に躊躇った。だがむしろそれが最高にいいじりがある。

「全員やってんだぞ?」

「今更逃げんのかア？」

「裏切り者」

「恥知らず」

「くっ…クソ…！そんな…！」

ここぞとばかりに飛んできたブーイングにブランクは挫けそうになった。唯一ペツシだけが優しくげにブランクの肩を叩いた。

「たしかに、最高難易度のミッションだ。オレ協力するよブランク…！」

「ペツシアニキ…！そっち方向に援護してくれるんですね…でも嬉しい！」

ブランクとペツシが肩を組んで友情を確かめあっているのを見て、イルーゾオはヘツと鼻で笑った。

「オレはごめんだぜ！あいつキレるととんでもねーんだぞ」

「イルーゾオ、てめー薄情だな」

「ああ?!ギアツチヨ、お前まさか…」

「オレはのるぜ」

「かなり酔ってるな！貴様」

ギアツチヨは二人に加わり、今度はイルーゾオが煽られた。

「この薄情者が」

「インチキのスタンド」

「おさげ」

「寒そう」

多勢に無勢だった。それに、どうせ実行するのはブランクだ。イルーゾオは大きなため息をついてから膝を叩いた。

「てめーら…：…あーもうわかった。しょおーがねーなあー！」

「いえーいー」

ホルマジオはまだ仮眠室で寝ている。立てた作戦はめちやくちやシンプルだった。ブランクが侵入、実行。

ホルマジオが目覚め命に危険が及ぶ場合、マン・イン・ザ・ミラーでブランクを引きずり込み脱出する。

「結局オレ頼みの作戦じゃねーか」

「頼りにしてますよ先輩」

「てめーはこういう時だけ調子いいんだよな」

「何をおっしゃる。僕は先輩がいなくてここでめっちゃ褒めてるんですよ」

「いるところで言えッ」

ブランクは手にしたカミソリで十字を切った。

「ではいつてきます」

「死ぬなよ」

「グッドラック…」

「ちゃんとおしゃれに剃り込んでこいよ」

「無茶苦茶だあ…」

ブランクは靴音をたてないように裸足で仮眠室に忍び込んだ。ホルマジオは奥のベッドで寝息を立てていた。二日酔いなのか寝苦しそうだ。

ブランクは深呼吸してカミソリを握った。ホルマジオの坊主には古傷の線が二本ある。もう一本入れるとのことだが、中途半端な右の線を生え際まで伸ばしてもいいかもしれぬ。

恐る恐るホルマジオの頭に手を伸ばし、脳内でイメトレした。いざ剃り込み！と坊主に触れた瞬間、カミソリを持ったブランクの手をホルマジオが掴んだ。

「何の用だよ…」

「ギャアーンッ!!」

「あんだけ騒いでりや病人だつて目を覚ますぜ。…で、何するつもりだったんだテメーはよオ…」

「あ…ああ…」

ブランクはとっさに手鏡を翳そうとしたがポケットに伸ばす手も捕まえられてしまう。

「た、助けてーッ！」

「ブランク！助太刀に来たぞ」

そこでペッシが扉を開けて現れた。ジンの空き瓶を構えている。ホルマジオは寝起きに連続して見せられる不可解な光景に困惑して

いた。

「アニキ！」

「オレに構わず逃げろーッ」

ホルマジオは突っ込んでくるペッシの頭をぐつと鷲掴みにしてベッドに倒した。そのスキにブランクは鏡を取り出した。

「マン・イン・ザ・ミラー！ホルマジオ先輩をかつさらってくださいー！」  
そのブランクの無茶振りにイルーゾオは応えてしまった。

「イルーゾオ！てめーまでグ…」

鏡の世界に引きずり込まれたホルマジオはプツツンしながらイルーゾオの姿を探した。だがその姿が目に入った途端怒りは霧散した。

メローネの服を着たイルーゾオが佇んでいる。しかも身長差のせいでパツツパツの。

「お前………そ、その格好はオレを笑かすため……じゃあねーよな？」  
「あ」

イルーゾオは酔いと熱狂のせいで自分が傍から見てやばい格好をしているのを忘れていた。

「違うッ！これは……これはアレだ。罰ゲームで！」

ホルマジオはもう言葉が話せないくらい笑って腹を抱えて蹲っている。

「笑ってんじやあねえよッ！」

「笑うなっていうほうが無理だろーがそんな格好！」

「クソッ！全部ブランクのせいだッ……あのヤローこうなったら意地でもホルマジオと戦わせてやるー！」

イルーゾオはブランクを探した。見つけ次第鏡の世界に引きずり込んでやろうとしたが何処にもいない。ソファアの上ではギアッチョが爆睡しており、ペッシも一緒に消えている。

「あいつ逃げたなッ！」

「はあく……久々に死ぬほど笑えたな。じゃあそろそろ出してくれ」

「そういう趣旨じゃねーんだよこれはッ！」

イルーゾオは怒鳴ったが、もはや何を言ってもやつてもホルマジオはツボに入るらしく、ブルブル震えて笑いを必死に噛み殺していた。「ヤベーなそれ。宴会芸にできるぜマジで」

「しねーよ！クソツ…あいつらアー！」

ブランクはペツシとともに、颯爽と本部に現れたプロシユートをダシにして脱出に成功した。プロシユートは忘れ物を取りに来ただけだったらしく、午後のティータイムがたら二人を落ち着いたカフェに連れてきた。

「はあくプロシユート兄貴の知ってるお店はどれもこれもおしやれで素敵ですね」

「お前も美味しい店はちゃんと覚えておけよ。嗜みだ」

ブランクは危機から脱した安心感に包まれながら紅茶を啜った。ペツシもココアをかき混ぜてからプリンを食べる。

「タバスコのせいで味がわからねえ…！」

「タバスコだあ？」

「は、ははは…」

ブランクとプロシユートのパンケーキも届き、みんなある程度食べ進むとプロシユートがブランクにたずねた。

「イルーゾオとホルマジオとはどうだ？うまくやれてるか」

「ああ、それはもう！二人共なんやかんや優しいですし頼りになりますよ。大人！」

「そりやよかったじゃねーか。…正直心配していたんだ。ホルマジオはまあともかく、イルーゾオはかなり我が強いからな」

「たしかに若干意地悪だよな…あ、悪口じゃあねーですけど、兄貴」  
「まあ言いたいことはわかるぜ」

プロシユートはペツシの面倒を見てるとはいえ、同じく新入りのブランクに対して気にかけていたようだった。

「そーですねえ。兄がいたらあんな感じなのかもしれませんね。でも

僕は好きですよ。イルーゾ先輩はもしかしたら僕の事あんま好きじゃないかもしれませんが…」

「そうか？かなり可愛がってるようにみえるが」

プロシユートの言葉にブランクは少しだけ驚いた。

「ほんとですか？」

「ああ。やっぱ弟分ができる意識も変わるんじゃないか？」

「弟分かあ…でももしかしたら今日でそれも終わりかも…」

「お、オレも一緒に怒られるよブランク…」

「一体何したんだ？てめーら…」

ペッシとブランクが襲われている謎の焦燥感に、プロシユートは半笑いだった。

ブランクが本部に帰ると誰もいなかった。ちゃんと謝ろうとしていたのに肩透かしを食らい、そのままソファーに寝転んだ。

雑誌を読んだりしているうちに眠くなり、家に帰るのも面倒くさくなつてそのまま寝た。

次に目を覚ましたとき、時計は夜の11時を回っていた。

「…ん？」

腹のあたりにメローネの服がかけられていた。シャワールームへ続く廊下から気配がし、ブランクは上体を起こしてそつちを見た。

「げえっ！イルーゾ先輩…」

廊下の奥から出てきたのはいつもの服のイルーゾ先輩だった。みんな帰ったのかと思つたが飯でも食べにでかけていただけらしい。

「あ、てめーブランク。よく呑気に寝ていられたな」

「い、いやあ…その。逃げたのを謝りに戻ってきたんですけど…」

「謝んなら最初から逃げるな。つたく…そのメローネの服、お前がクリーニング出しとけよな」

「あ、そーいう…」

「……で」

「ん？」

「何しに戻ってきたんだよ。さつき言ってたろーが」

「ああ……逃げてすみませんでした」

「よし」

イルルゾオはそう言ってミネラルウォーターのボトルを取りソファアに座った。

「そうそう。お詫びの印も持つてきましたよ！ほら」

そう言つてブランクが差し出したのはテレビに繋ぐ家庭用ゲーム機だった。すでに配線が完璧に整えられている。

「トランプとかだるいですから、今度からこれの勝敗で賭けましょう！」

「もう絶対罰ゲームは賭けねーぞ」

「まーまーそう言わず。ほら、F—M E G A！やりましょうよ」

ブランクはコントローラーをイルルゾオに差し出し、電源を入れた。

「今からか？」

「徹夜で。どーせ仕事なくて暇だし。ゲームやれるのギアツチヨ先輩かイルルゾオ先輩くらいじゃないですか。やろーよオ」

「詫びじゃなくて自分のために買ってきたのかよ……」

と言いつつも、イルルゾオは自分の車体を選択した。

「しようがねーな……じゃあお前、負けたらメローネの服な」

「えっ……それは……ぐぬぬ……いいでしょう……負けませんよ」

「冗談だよ。バーカ」

## 01. グレート・ギグ

フランスは国土の半分以上が農用地となる農業大国であり、特に北部は大規模な耕作地帯が広がっている。

ミスタが車窓から見渡す限り一面の小麦畑が広がっていて、金色の穂がそよ風に重たい穂首を揺らしている。

ミスタはレンタカーのハンドルを握っていた。そして後部座席にはブランクがいて、ずっとピコピコと携帯ゲーム機を弄っていた。ゲームボーイという名前のそれは、たしか以前、ナランチャが欲しがっていたものだ。

ブランクは暗殺チームのメンバーと話してるときなんかはナランチャと少しだけ雰囲気似ている。だがイタリアからここまで、半日以上の移動時間中にその明るい、ガキっぽい面は見れなかった。

「…ふあ」

ミスタがあくびをするとブランクはゲームから視線を外し、ミラー越しに視線を投げる。

「運転、かわりますか?」

「ああ? いや、いい。多分もうすぐつくはずだ」

単調な風景に普通なら眠くなるが、道が悪いために車体がかたがた揺れるのでそうもしてられない。

二人はフランス北部、ノルマンディ地方にあるリヴァロ村の近くの小さな街を目指している。

「リヴァロチーズ食べたことあります?」

「あー。多分。つーか飛行機で出たのがそれじゃあなかったか?」

「そうでしたっけ。乳製品、お腹壊しそうで残しちゃったんだよな…」

「ふうん…」

お互い気まずさを感じてるせいもあり、会話は終始ギクシャクしていた。

ミスタはブランクの右目を撃ち抜いた張本人だ。ブランクが腹に一物抱えていたっておかしくない。ジオルノのゴールド・エクスペリエンスの能力で右目も右手も治せるはずなのに、なぜかやつは義手の



まま。治してもらったのは耳だけだった。

あてつけか：？とミスタは思っていた。もしかしたらそんな疑念のせいで余計に気まづくなっているのかもしれないが。

ジョルノがボスに成り代わって一ヶ月。

ミスタはかつて親衛隊が担っていたボスの護衛を一手に引き受けていた。

あの一連の騒動はすべてドツピオと親衛隊に罪を擦り付け、暗殺者チームとブチャラティチームの名誉を回復させ、トリツシユは無関係の被害者として発表された。

暗殺者チームは名ばかりのチームになり、メローネはかつてのペリーコロのシマを引き継ぎ、ギアツチヨは賭博を仕切る権利を得て、兩名とも幹部入りした。

ブランクはかつてのドツピオのポジションを手に入れた。組織内の人事をすべて掌握する権限を持ち、反逆の恐れのある人物と片っ端から「面会」している。

ボスの正体に納得しなかったものは去り、反逆の目があるものは厳重に監視されている。幹部やチームリーダーなど、抜けた穴はこの一ヶ月でジョルノとブランクにより埋められつつある。

ブランクの人事掌握。それはすなわちソウルステイラーの力を使ってスタンド能力者を選別していることに他ならない。

ミスタはあの矢を、ひいてはその引き出される力を「危険だ」と思っていた。

そのことについてジョルノに問いたただす機会があった。

「ネアポリス中学高等学校の宿舎」

ジョルノはまだ学校に通っている。パツシヨーネが経営権を買収したおかげで、宿舎の一番いい応接室も、校長室も好きに使える。

組織の話をするときには決まって応接室だった。ミスタはガキの頃よく親が学校に呼び出されていたのを思い出すので少し嫌だった。

「ジョルノ、いいのか？あいつに矢の力を使わせて」

「制御訓練の一環だ。とても上手く行っているよ。それに、暴走されるのが何より困るだろう？」

「だったら有効活用……ってか」

「そういうことさ。……もつともスタンド能力を剥奪する必要のある幹部はまだいない。むしろ地元のごロツキのほうが悪質のようだ」

「そいつらもブランクが審査するののか？」

「いや。当分はそこまで手は回らないだろう。なんせ……」

ジョルノの目の前のテーブルには分厚い資料と何枚かの写真が広がっていた。ミスタはそれにちらりと目をやった。

「麻薬チーム、か」

「ああ。ブチャラティの悲願。叶えるにはまだ時間がかかりそうだ」

麻薬チームは召集に応じない。

麻薬はディアボロが持っていた組織最大の資金源だった。それを生産し、流通させていたのがリーダーのマツシモ・ヴォルペ。そしてそれを守るために集められた精鋭たちだ。

ジョルノの新体制では麻薬はまっさきに排除される。呼び出しに応じないのはそれを察してのことだろう。

さらに悪いことに、混乱に乗じて他のギャングからオファーを受けているらしい。

「ヴォルペは抹殺する他ないだろうな。ほかは……どうだろう。出方次第ではあるが、資料を読む限りじゃ恭順は期待できないな」

ジョルノは憂い気な眼差しで写真のヴォルペを見ていた。そこに宿る光は慈悲でもなんでもなく、陶器のような冷たさを孕んでいる気がした。

した。

「……まあこっちはこっちでぼくが手を尽くす。君は別の仕事をしてほしい」

「オレに？お前の護衛以外の仕事か？」

「ああ。フランスに行くブランクの護衛だ」

「なんでオレ？ギアツチョでいいだろ。親睦旅行でもしろってか？」

「なにも仲良くしろって言うてるわけじゃあないさ。君は護衛というよりかは監視だよ」

「……ジョルノ、おまえはやっぱり抜け目ねーよな」

「正直、ボスの座を手に入れるためにリスクを払ったという自覚はある。すべての精神を支配する力なんて、存在するだけで脅威だからね」

「正直よくわかんねーけどな。オレたちが見たのは針山みてーな光景だけ。ソウルステイラー…だったか？スタンド能力を奪うつっーのも発動条件は触れることなんだろう？」

「それに関してもブランクがすべてを正直に話してるとは限らない。いや、彼自身もそのときは死にものぐるいでわからなかっただけかもしれない」

「ようするにオレたちはなんも知らねーってことか？」

「そのとおり。ぼく以外の視点で、彼を観察してほしいんだ」

「それでオレにお鉢が回ってきたわけか」

「そうだ。それにきみはどうも、彼に苦手意識を持っているようだから」

ミスタは指摘されてうう、と唸った。

「どうもなア…：気まずいんだよ。あいつの目を潰したのはオレだろう？新しい眼球入れないのもよオー…：なんかの意思表示なんじゃないかって思っちゃって」

「ブランクはそんな性格じゃあないよ」

「そうか？いつも二人つきりで話してるだろ。その時オレの悪口とか言ってるじゃあねーのか」

「まさか。むしろ褒めていたよ」

「なんて？」

「ギアツチヨより心が広そうだし、メローネより普通って」

「…それは褒めちやいねーだろ」

そして現在ブランクの右目には新しい眼球が入っており、その上から海賊のような眼帯を巻いて保護している。眼球はこの旅に出る直前、ジヨルノに作ってもらったらしい。

「目の調子はどうか？」

「え？ああ。嵌めただけなので：すぐに定着はしませんよ」  
「そうか」

ジョルノとブランクはかなり密に面会している。護衛としてジョルノの身辺にいるミスタはしよつちゆう顔を合わせていた。だが二人の間で交わされている会話は謎だ。

「…ああ、見えてきましたね」

ブランクはその街のすぐそばにあるというチーズ工場の看板を指さした。道も新しく舗装されてガタつかない。

「…：さて。さすがにもうちちゃんとした服に着替えないと」

ブランクはそう言つて上着を脱ぎ、シャツを脱ぎ、用意していた黒い葬送用の礼服に着替え始めた。二人共一応パツショーネの代表としてここに来ているので、みつともないシワを作らないようスーツは別で持ってきた。

ミスタは視線を前へ固定した。着替えなんてわざわざ見たくない。ブランクは着替え終わると赤毛をオールバックにして後ろでまとめた。眼帯をはずし、一度は潰れた右目を開いた。右目の周りには火傷と細かい裂傷の跡があり、ギョツとするような色に変わっている。それが見えないように右側の前髪だけ少しおろして、全体にワックスをつけ始めた。

「ミスタはどこで着替えます？」

「ああ。オレは目的地について車止めてからでいい」

ポルナレフの住所はブランクが一人で遺体を送り届けた際に調べた。公的記録に記載された住居はパリ郊外の集合住宅だった。出迎えたのは昔ポルナレフの面倒を見ていたという老婆だったが、身内でもなければ10年は会ってないという。

ただ遺体の引き取りには同意し、後に連絡するから帰ってほしいと頼まれた。

そして一月後の今、彼の故郷と思しき街に正式に呼ばれた。

指定されたホテルの駐車場でミスタは着替えた。

「やっぱり帽子ないと誰だかわかりませんね」

礼服のミスタを見てのブランクの一言。

「何回か見てるだろ？」

「どうも慣れなくて。こう…物足りないカンジ？」

「悪かったな」

「いや、悪いとは言ってますよ」

またギクシヤク。どうも息が合わない。

ホテルはこぢんまりとした古い建物で、ドアを開けるとベルが鳴った。受付に人はなく、音を聞きつけて奥から上等なスーツを着た男が出てきた。年齢は40代くらいだろうか。背は低く、目つきは鋭い。とてもホテルの支配人とは思えない愛想の悪さだった。

「ブランク様…ですね？」

二人はてつきり葬儀に出るのだと思っていた。だがその男の醸し出す雰囲気ときたら不吉な知らせを告げる陰気なカラスみたいだ。

現に、次に出てきた言葉はこうだ。

「ポルナレフ様の死について、いくつかお聞きしたいことが…あります」

ブランクは口をへの字にしてからミスタをちらつと見た。立場でいえばブランクのほうが上なので、ミスタは「答えろよ」と言うように視線を男にやって促した。

「誰もしれぬ方にお話しすることはありませんね」

「オット…これは失礼しました。私は、スピードワゴン財団のものでして…」

「スピードワゴン財団ですって？」

その名は当然知っていた。石油で財を成したアメリカの大財閥。だがなぜポルナレフの死からその財団の名が出てくるのだろうか。

「我々にはポルナレフ様の死の真相を知らねばならない理由があるのです。当然、あなたが知りたいであろうこともお教えいたしましょう」

「…わかりました。いいですよ」

頷くブランクにミスタは慌てて耳打ちする。

「いいのか？ほんとにスピードワゴン財団のやつかも怪しいぜ」

「まあ罨でも別に、なんとかなりますよ」

矢の力を持つている余裕か。ブランクはこともなげに言った。

「それにそういう時のためにあなたがいるんですよね？」

「…おっしやるとーりだぜ」

スピードワゴン財団の男に導かれるままにホテルの階段を登り、一室に通された。そこで待っていたのは先程の男と打って変わって人の良さそうな笑みを浮かべた老人だった。どこかペリーコロに似ている。

先程の目つきの悪い男は一礼して部屋から出ていった。

「ようこそいらつしやいました。お呼びたてして申し訳ありません。私はジン・グレイブス。ポルナレフさまとスピードワゴン財団との連絡役でした。…とはいえ、5年以上前から彼から連絡はなく、今回の訃報が届いたわけですが…」

「僕はヴォート・ブランクです。ポルナレフさんのことは大変残念です。今日はてつきりお葬式があるもんだと思ってきましたのですが」

「葬儀はあす執り行われます。この街の近くに彼の故郷があります。…一日早くお伝えしたのは、私の個人的な動機からです。私はポルナレフさまに一体何が起きたのか、知らなければならぬからです」

「なるほど。お気持ちをよくわかります。ポルナレフさんは僕たちギヤングの抗争に巻き込まれる形で亡くなったわけですから、僕たちにはきちんとして説明する義務がありますね」

ブランクはオールバックの髪をなでつけた。その仕草は映画に出てくるキレ者のギヤングのようだった。ミスタはメローネから誰かになりきるのが彼の性だとは聞いていたが、実際見てみると迫力があつた。さつきまでゲームボーイをいじってたやつとは思えない。

「とはいえ部外者の方に我々の内情すべてをお話することはできませんので、ポルナレフさんに起きたことのみお話ししましょう。ポルナレフさんは組織を私物化し反逆を企てた『ディアボロ』なる人物との個人的因縁を晴らすべく、同じくディアボロと敵対する我々に接触したのです。彼の協力もあつて我々は勝利し、ディアボロを斃しました。結果的に彼の命を救うことができなかつたのはこちらとしても

胸が痛みます」

「ディアボロなる人物がポルナレフさまを殺害したのでしょうか？」

「あなた方はディアボロを知らなかったのですね」

「ええ。私が知っているのはポルナレフさまが“矢”を追い、イタリアに渡ったところまでです」

「…そうですか。まあ僕もそのへんは聞く暇がなかったので、彼の身体を不具にしたのがディアボロらしいということくらいしか」

「“矢”は…」

「…矢？」

「ポルナレフさまは、矢を持っておりませんでしたか？」

「…さあ。彼の私物は調べさせてもらいましたが、そういったものは…クロスボウかなんかが趣味だったんですか？」

「いえ。…左様ですか」

「……なんにせよ。彼が共闘してくれたからこそ僕は今ここにいます。感謝しかありません」

ブランクもなかなか大した嘘つきだ。相手の訝しげな眼差しに顔色一つ変えず堂々としている。矢のことなんて知らぬ存ぜぬで通すつもりらしい。

ジヨルノの指示があつたのだろうか。なんにせよミスタに口を出す権限はない。

グレイブスを名乗る人物は静かに目頭をハンカチで押さえた。それを見てブランクは付け足す。

「僕は…ポルナレフさんに助けてもらったことを忘れません。…よかつたら、彼のことをもつと教えてくれませんか」

「…ええ。そうですね。私とポルナレフさまは、死闘をくぐり抜けたわけでも長く友人だったわけでもありません。ですが彼はとても、良い人でした。あなたには彼のことを少しでも知っていてもraitai」

グレイブスとの面会は日が沈むまで続いた。ポルナレフが13年前、DIOという人物と戦い、その縁でスピードワゴン財団とコネクションを持ったこと。ある特殊な“矢”を回収するために世界を飛

び回っていたこと。各国で起きたトラブルにグレイブス氏があくせくと対応したこと。などなど、思い返せば楽しい日々を語った。

ブランクとミスタはただ聞いて、頷き、笑った。グレイブスの語るポルナレフはとてもいきいきとしていて、まるで彼がまだ生きていて、これからひよっこり戻ってくるような気さえした。

「ああ……すっかり遅くなってしまいました。夕食は、ホテルでお召し上がりになりますか？もう街のレストランは閉まっているでしょうし……」

「……そうですね。いただきます。いいかなミスタ」

「ああ。ごちそうになろうぜ」

「ではロビーでお待ちください。……話をきいてくれて、ありがとうございます  
ございました」

「いえ。こちらこそ」

二人はホテルのロビーに座り、窓から街を眺めた。街灯がすくなく、とても暗い。だが静かで落ち着く夜だった。

「なかなか愉快な人だったんですね、彼は」

「みたいだな」

「もつとどうにかできなかつたのかな……」

ブランクはとても悲しそうな顔をした。ときおり見せるこの顔が、ミスタの心の中に残る疑問をいつも掻き立てる。

「……なあ、やっぱり本当はオレたちのこと許せないんじゃないのか」「へ？」

「オレたちはお前の仲間を殺した」

「……もう思い上がらないでくださいよ！少なくともミスタとジョルノは殺してないでしょ。それに、ジョルノには助けてもらったし……恨んでませんよ」

「そうなのか？おまえがフーゴと会おうとしないのはそういう事なんだと思ってた」

「……ああ。いましたねそんな人」

ブランクは視線をそらし、窓の外を見た。ミスタからは火傷の残る右目が見える。右手は最新型の義手で手袋に覆われている。ジョル



ノに頼めばきつとすぐ新しい手をつけてもらえるのに。

「別に、許すとか許さないとかじゃないですよ。ただ今は…楽しかった日々を思い出すと、悲しくなる。だからです」

「…そうか。すまない」

ブランクがいえいえ、と返すと目つきの鋭い男が夕食の支度ができたと呼びに来た。

料理は老人が作っていたらしい。広い円形のテーブルには皿が4枚置かれていた。

「げえっ！4枚！皿が4枚あるぞッ…！」

「はあ？そりやそうでしょうよ。フォークもナイフもグラスも4。4人なんですから…」

「4つて数字は縁起がわりーんだよ！不幸な出来事はいつも4が絡んできやがる。昔近所で猫の子どもが…」

「ちよつとー！」

騒ぎ始めるミスタの襟首をつかみ、ブランクは食堂入り口までひっぱってく。

「あつちの機嫌損ねるのはよくないですよ！ただでさえ大嘘ついてるんですから、穏便に！いいですねッ」

「でもー！」

「でもじゃない！そーだ…ほら！取皿を追加してもらいましょう。そしたらお皿は5枚になる。とにかく、静かにしましょう」

「…嫌な予感がするぜッ…！」

ブランクはなおも抵抗を示すミスタを変人を見るかのような目で一瞥しテーブルについた。

「疎餐ですが…」

「いえ。とんでもない！美味しそう！」

出されたのはタラの包み焼きとポトフ、パンとサラダだった。短時間にしては凝った料理でブランクはもうフォークを持ってかまえている。

「いただきますー！」

ミスタも渋々席について食べ始めた。だが確かに味は美味しい。格別だ。だがテーブルにいるのは4人：4人だ。しかも自分のポトフにはなぜか！星型に切られたにんじんが4つも入っている。

「ブ…ブランク……」

「ん？」

「にんじん、一個取るか一個オレに渡せ」

「は…？」

「いいからはやく。オレの皿に4つ入ってるんだよ！4はだめなんだよオレはよオ！」

「ミスタ…あなたもなかなか…そのう。難儀ですね…」

ブランクは呆れながらにんじんをひとつ奪って口の中に放りこんだ。

ブランクはグレイブスとポルナレフが星型のにんじんの話をしていたことがあったとかなんとかで盛り上がっていた。目つきの悪い男は黙々と料理を食っている。同じテーブルでもテンションは二分されている。

ホテルの部屋に通されてもミスタの気分はずっと4の不吉なオラで曇っていた。

クローゼットからハンガーを出そうとしたら、ハンガーも4つ。ホテルに入ってから急にこれだ。頭がクラクラしてきた。

「オレが神経質になってるだけか…？」

さつきブランクに不審者を見るような目で見られたのが効いている。ブチャラティやジョルノだったら軽く流してくれるのだが（もちろんミスタにとっては重大事なので流されるのも微妙な気持ちになるのだが）、変人扱いをもちに受けたのは久々だ。

ミスタは上着だけ脱いでベッドに倒れ込んだ。移動の疲れが結構来ているようで、すぐに眠気に襲われ、そのまま眠りに落ちてしまった。

しかしミスタは下の階から聞こえてきた物音で目を覚ました。時計は午前2時を回っている。

ブランクは隣の部屋で、そちらは極静かだ。なんにせよこんな時間に物音がするというのは十分不審だ。ミスタは拳銃を握りしめ、そつと部屋のドアを開けた。

廊下は窓から差し込む月明かりで青白くてらされている。下からはまだ人のいる気配がする。ミスタは慎重に階段を降りた。木の軋む音がやたら大きく聞こえる。

二階の廊下は明かりがついていた。息を殺し音の主がどこに潜んでいるのかを探る。鼻孔に血の匂いが漂ってきて、ミスタは引き金に指をかけた。

ドアが半開きの部屋がある。そしてその部屋から伸びる影がゆらりと動いた。

ミスタは躊躇いなく撃った。

ピストルズは確実に手足の関節を破壊する。∴はずだった。次弾に乗ってるNO. 5が叫ぶ。

「ミスタ……ハズシタツ」

「は？そんなことありえねーだろ！」

「弾同士ガブツカツテ事故ツタミテーダ！」

「お前たちに限ってそんなこと起きるわけ……ッ！」

ミスタは駆け出し、半開きのドアを思いつきり開いた。廊下の先に誰かが倒れている。その床には血溜まりが広がっていた。

「撃ってきたのは……アンタかあ……」

その血溜まりのすぐ横に、ライトスタンドを持った男がいた。ホテルでまずミスタたちを出迎えた、目つきの悪い男だった。

「∴そのスタンドを置け。そこに転がってるのはグレイブスさんか」

「あ？ああ。うんうん。……そうだよ」

「なぜだ」

「なぜ？なぜってまあ……理由はいろいろあるよな。いろいろ……」

「おい、そのライトスタンドをおけっつていつてるだろ」

「2つのことを同時に指示すんじゃないやねーよ。あのなあ、人間っていうのは、考え事してるときに他のことに脳のリソースをさくとな、両方パフォーマンスがおち」

ミスタは無言で手に向けて撃った。

弾は今度は貫通した。先程のピストルズの事故がスタンド能力によるものなら今回の弾を避けないのはおかしい。

「いってえええええー！」

男はライトを取り落とし、穴の空いた手のひらを凝視し叫んだ。

「命乞いの最後のチャンスだ。何が目的だテメー。喋ったら重傷ですましてやるよ」

「ライトを落としたってことは…そっちのほうがついてるからなんだ」

「は?」

「そんで、それはアンタにとってツイてないってことだ」

「さっきからお前は何言って…」

バチン

頭上から突如聞こえてきた破裂音に驚き見上げると、天井のシーリングファンの固定具がさっきの事故って外れた弾丸でぶっ壊れていた。

シーリングファンは回転したままミスタの頭めがけて落ちてくる。

ミスタは避けようとしたが、何故か足がもつれて転んでしまう。すると先程男が落としたライトの破片が腕に突き刺さった。痛み思わず身をよじるとコードがぐちゃぐちゃに絡まって身動きがとれなくなってしまう。

「なんだこれは…ッ！」

「おおうツイてないねえー。ついてないだろ?さっきからずうつと…」

ミスタの肩の上に突如スタンドのビジョンが出現した。猫のような頭をした出来損ないの標本みたいな像だ。猫らしく、自分の前足をなめている。

「オレのスタンド、グレート・ギグは運を操作する!オレの能力にかかればどんな凄腕のガンマンだろうと、ギャングだろうと、とんでもない不運に見舞われて勝手に自滅するってわけだ。これってよオウ最強、だよな?」

「何が目的だ」

「ッ矢」に決まってるだろうが。アホかテメー」

「矢？一体何だそれは。ちっとも見当つかねーぜ」

「ハッ！嘘ミエミエだぜッ！オレは知ってるんだよ。ポルナレフが肌身はなさず矢を持つてたこと…そしてッ！ディアボロを追ってたのもぜえーんぶな！農場から姿を消されたときはマジに焦ったぜ…オレの企みがバレたんじゃあないかって…な」

男はミスタに蹴りを入れた。ミスタはそれに乗じて転がり、背中に回ったまま固定された銃を向け、引き金を引いた。

しかし、転んだ衝撃で撃鉄が折れていたらしい。何度引いても手応えがない。

「むだむだ。何するにしても悪い結果になんだよ、おまえは」

「クソッ！」

目の前には空薬莢が4つ転がってる。ああやっぱり、4つて数字は死ぬほど縁起が悪い。

「なんの騒ぎです？」

廊下からのんきな声が聞こえてきた。ミスタはすかさず叫ぶ。

「ブランク、来るな！」

「おわっ！なにこれ」

ブランクは廊下からこちらを覗き、驚愕の声を上げた。

「矢はこっちか？」

男はブランクの方へあるき出そうとした。ミスタは足をひっかけようとするが、上から重い時計が落ちてきた。そればかりか柵まで倒れ、完全に全身押しつぶされてしまった。

そしてミスタの肩に憑いていた猫のスタンドがブランクに飛びかかった。距離を置こうと一步引いたブランクは転がってた薬莢を踏んですっ転ぶ。

「いたアッ！」

「グレート・ギグ！てめーはもう何やってもうまくいかねーぜ」

男は仰向けに転んだブランクに馬乗りになり、ポケットナイフを突

きつけた。ブランクは抵抗するが、脱げかけたガウンが不自然に絡まって動けなくなる。

「なんじゃこりゃー！」

「ブランクー！そいつのスタンドは不運を呼び寄せる」

「はあ?!」

「さあ矢の在処を吐きな。てめーが何者かなんて調べはついてる。パッションネのNo. 2様よオ！テメーが持つてねーならボスカ？おい。言えよ」

男はブランクのシャツを引き裂いた。そしてズボンのポケット、インナーを触って確かめると急に笑い出す。

「なんだ？お前女じゃあねーか！ラッキー。じゃあ隠す場所は穴の中とかかな」

「とんだゲスですね。ですがその推理はあたりと言わざるを得ません」

「アバズレめ」

「……でも、僕に触れたのはアンラッキーですよ。あなた……」

ブランクがそう言うと、右目から急にぶしゃ、と血が溢れ出した。

「は?」

男が間拔けな声を出した途端、ブランクの膝が男のみぞおちを蹴り抜いた。

「穴は穴でも目玉の穴でした」

ブランクの背後にいたはずの猫はいつの間にか男の方へすり寄っていた。腹をおさえてうずくまる男に、ブランクはあつかんべーをする。

右目のあった場所に見えたのは矢じりだった。

「は?え……」

そしてブランクは男の頭めがけ、踏み潰すつもりで蹴りを入れた。

「大丈夫ですか?ミスタ」

「いや……お前護衛いらねーじゃん……」

「今回はたまたまですよ」

ブランクはミスタを助け起こすと、出血している目玉から矢じりを

引き抜いた。

「ジヨルノに目玉にしてもらってたんですよ。いざつてときはメタリカで潰して生き物じゃなくしちゃえば刺す手間も省けますから」

「痛くねーのか」

「ちよつと痛い」

グレイブスの方を確認すると頭を殴りつけられたようで意識がない。頭の傷ということもあり、救急車を要請した。だが警察に巻き込まれるのは厄介だったので最低限の治療で済ませ、ホテルを出ることにした。

ブランクは拘束した男の方を見て言った。

「これは君の望む結果を引き寄せる能力のようですね。人を幸せにすることもできるのに、他人に不運を呼び寄せることに使ってきたのは残念です。これは僕が貰っていきますね」

グレート・ギグはブランクの足元へ擦り寄り、霞のようになって消えた。

レンタカーに乗り込んでからブランクは眼帯を巻き直した。怪我をしたミスタを気遣ってか、ブランクが運転席に率先して乗った。

ミスタは後部座席からブランクを見た。ブランクの開けた胸元に、ひどい傷があるのが見えた。

レクイエム暴走時にブランクは心臓を失っている。その時の傷なのだろう。左胸全体にひび割れのように広がる、隆起した傷。呪いでも受けたみたい在所々がまだどす黒い血の色をしている。

とても生々しい傷だ。

「ブランク…それ」

ミスタの視線に気づき、ブランクは寂しげな顔をしつつも（なぜか）胸を張って答えた。

「僕の秘密を知られてしまいましたね…。でも僕、ホルマジオ先輩のようなビッグな男に憧れてて…あ、スタンドはリトルでしたが…」

「いや隠せよ」

「おっと失礼」

ブランクはあわてて胸元を直した。そして車を発進させ、街を出る。深夜二時の農地は真つ暗で、夜空に広がる星がやけに明るく見えた。

「葬式：出れずに帰る羽目になるとは：」

「きつとまたスピードワゴン財団からコンタクトが来るだろ」

「あーあ。ツイてないな。こんな遠くまで来たのに：」

ミスタは後部座席に寝っ転がり、窓から星を眺めた。しみじみと夜空を見上げるのは久々かもしれない。

「素朴な疑問なんだが：お前なんで男の格好してるんだ？」

「そりゃこの稼業、女より男のほうが得ですからね」

「組織のNO.2まで登りつめたらあんま変わんないか？いや、お前のその生き方を否定してるわけじゃあないんだぜ。なんとなく思っただけで」

「：考えたことも無かったですね。でも僕、この格好が一番しっくりきます。それだけですよ」

「そうか。悪かったな変なこと聞いて」

「いえ。僕からも聞いていいですか？」

「なんだよ」

「4が苦手なのに、なんで四輪車には乗れるんですか？4月は家から出られないとかがありますか？月の第4週は？四足獣は飼えなかったりしますか？」

「や、やめろッ！連呼するのはやめろ！そんな神経質じゃあ生きてけねーよ！」

また移動に半日かけて、ネアポリスについたのは夕方だった。ブランクは学校にいるジョルノに会いに行くのはめんどくさかったので全てをミスタに任せ、自分は暗殺チームの本部へ戻った。

3人それぞれ新しい役職を手に入れたが、ここを溜まり場のようにしてたまに集まっている。

ブランクに至ってはもうそこに住んでいると言ってもいい。

本部に行くと、メローネがソファで寝転びながらパソコンをいじっ



ていた。ブランクを見るとおかえり、と言って座り直した。

「……あのさ、僕が女の格好したら女装かな」

「は？…まあ服によるが…お前ゴツいから女装に見えるかもな」

「そうだよね」

「急にどうした」

「いや…。その…僕の性別、チームで誰が気づいてました？」

「あ…たしかイルーゾオがオレに聞いてきて…ホルマジオとプロシユートに相談して…」

「あいつが言いふらしたようなもんじゃねーか！えー。イルーゾオ先輩はなんで気づいたのかなあ…」

「理由までは聞いてないな。でもペッシは知らなかったろうし、ギアツチヨは多分まだ気づいてねーぞ」

「うーん、あの人に至ってはなんで気づいてないんだらうって感じですよ」

「なんで帰ってきて早々そんなこと聞くんだ？ポルナレフの葬式でなにかあったのか」

「いや。葬式はいろいろあって出れなくて、その上暴漢に体を弄られました」

「レイプじゃん」

「いや、言い方の問題ですね」

「矢の力があるからって調子に乗っていると痛い目見るって言っただけ」

「別に痛い目なんて見ていませんよ！」

「心配して言ってやってんのに…前みたいにならなくても助けてやれるわけじゃあねーんだぞ。オレもギアツチヨも」

「…でも、僕たちはずっとチームですよ。魂の！」

「サムい…」

「さめた大人め」

ブランクは部屋の奥に消えた。メローネは時計を確認した。もう夕飯時だ。

ブランクは着替えてやってきた。いつものスーツじゃなくてタイ

トなサマーセーターとスキニーという中性的な格好だった。

「飯行くか」

「奢り？」

「おまえのか？パツシヨーネ参謀さまさま」

「ご冗談を。先輩」

## 02. エリンニ

「パンナコッタ・フーゴ…」

フーゴの名を呼ぶのは、数年ぶりに会うかつての級友だ。背の高い、物憂げな瞳の男。

「マツシモ・ヴォルペ…」

男の足元には少女が倒れていた。シーラE。自分が助け出さなければいけない少女。フーゴは彼女を写真でしか知らない。どんな音楽が好きか、どんな食べ物が好きかも知らない。

それでも、助けなければいけない。

シーラEは浅い呼吸を繰り返し、朦朧とした顔で床を掻いている。辛そうだった。推察するに、麻薬の中毒症状が出ているのだろう。

「ナイトバード・フライングから逃れたのか？ 一体どうやって」

「ぼくは…何もしていない」

やけに静かなフーゴの様子に、ヴォルペは「おや？」と首を傾げた。ブチギレて教授を半殺しにしたイカれたパンナコッタ。そして殺人ウイルスを使う狂犬、ブチャラティチームのフーゴという肩書からかけ離れていたからだ。

「…大学時代とずいぶん変わったな、フーゴ。まあお互い様だが、牙でも折られたのか」

「そうかもしれないな。…だが折られたわけじゃあない」

静か、というのは間違っていないかった。だがどうやら「まだ」静かなだけらしい。ヴォルペはあらためて、フーゴを睨みつけた。フーゴも同様にヴォルペを見つめ、視線を外さない。

「なあ…フーゴ。パッショーネに意味があるのか？ あいつらは危険とみなすや否や、能力を奪う。与えたくせに、だ。あまつさえ、オレは抹殺対象だとよ。そんな勝手が許されるのか？」

「…ソウルステイラーは能力を奪うだけじゃない。改良し、また与えることができるそうさ。はじめからおとなしくしていれば抹殺対

象になんてならなかった」

「ハッ…『改良』か。欺瞞もいいところだな」

ヴォルペは嘲り笑った。おかしくておかしくてたまらないと言いたげだった。

「スタンド能力は精神エネルギーの形そのものだ。オレ自身の魂だ。それを勝手に変えられるだど？ふぎけるな。そんなのは冒涇だ！」

広い地下空間にヴォルペの罵声がこだまする。冷え冷えとした空気が肌をさすようだった。

「出せよ、おまえのパープルヘイズを。オレを殺しに来たんだろう」

「……ぼくは…」

「オレが一度こいつを手にすればシーラEは死ぬ。使い方はこいつのスタンドでわかったからな。そしておまえの殺人ウィルスとやらも無効になる…はずだ。なんてったって生きてるかどうかも怪しいもんな」

フーゴは両手をきつく握りしめた。

「ぼくのスタンドは役立たずだ。誰かれ構わず、無差別に殺してしまう、どうしようもない能力だ」

下を向き、頭の奥をきつく締め付ける罪悪感を絞り出すように、言った。

「ぼく自身もそうだ。ぼくはあの日敗北した自分を…いまだに許せていない」

メツシーナ海峡に面した港、ヴィラ・サン・ジョヴァンニにて。

一人の男がちょうど200メートルほどむこうの古い倉庫を双眼鏡で見張っていた。男の名前はサーレー。彼は数ヶ月前、運悪く『ポルポの遺産』を巡りミスタと戦った。その際に負った傷がオレンジ色の髪の毛の生え際に生々しく残っている。

港は太陽が沈みかけていて、あたりは黄金に彩られたかのようにだつ

た。双眼鏡越しに見える海運会社の所有していた煉瓦造りの古い倉庫の壁も海と同じ色に染まっている。

サーレーは双眼鏡から目を離し、時計を確認する。そして後ろに控える今回の「任務」をともにこなすメンバーをちらりと見た。

一人はズツケエロ。コンテナに寄っかかり遠くを見ている。そこそこ長い付き合いだ、こいつの眠そうな目はいまだに何を考えてるのかよくわからない。

そしてもう一人はかなり小柄な女。いや、ガキと言ってもいい。彼女の名前はシーラE。同じローマ地区の構成員だったらしいが、今回の任務が初対面だ。こいつもズツケエロと同じく協調性のかけらも見せず、フアツシヨン誌を興味なさげにめくっている。

「お前は何やらかした？」

サーレーが話しかけると、シーラEは億劫そうに頭をもたげ、大きなため息をついてから答えた。

「あんたたちこそ」

質問を質問で返すとは、肝のすわったガキだ。もつとそのくらいでなければこんな世界で生きていけないし、こんな任務にまわされる事もなかったろう。

「オレたちはブチャラティ共を襲っちまった。早とちりでな」

サーレーの答えを聞くと、シーラEは思いの外素直に答えた。

「私は…昔、ブランクと揉めたの」

「ブランク？ブランクってあのソウルステイラーか？」

ソウルステイラーという単語に会話に参加する気を全く見せていなかったズツケエロまでもが反応した。シーラEはますます白けたような顔をして答える。

「そう。あのソウルステイラーさまさまよ。…あんなやつ、参謀の器なんかじゃないわ。どうやってジョルノさまに取り入ったんだか…」

シーラEはやけに挑発的だ。まるでその不敵な発言に二人がどう反応するかを見ているようだった。サーレーはそれをシーラEの強がりにとつた。

「おい。いいのか？そんなこと言って。うつかりチクつちまうぞ」

「あら。なんで私があんたたちを口封じするって思い浮かばないわけ？」

だがシーラEも負けていなかった。

「なんだクソアマ。やんのか？」

「私は構わないわよ？元々ローマのチンピラとじゃ実力が違うんだから。私は元親衛隊よ。もつとも…ブランクのせいで降格させられたんだけどね」

不敵さに裏打ちされた実力は、やはりあるようだった。だが一方で降格についてはあまり触れられたくないようだった。サーレーとしてもソウルステイラーの過去に関わる話はあまり突っ込みたくなかった。

というのも、ヴォート・ブランク。通称ソウルステイラーに関する話は例の『ボスの娘騒動』以降、『ボスの正体』並みの不穏さをもって各所で囁かれていたからだ。

「はっ。どーりでこんな任務に回されるわけだけ。おれたちやみんな、新ボスに楯突いたってことか」

「…新、じゃないでしょ。迂闊なこと言うんじゃないわ」

ズツケエロが鼻で笑う。

「公然の秘密みたいなもんだろ」

「…そつちも発言には気をつけな」

「どつちにしろ任務を成功させなきゃお陀仏だぜお二人とも」

そんな三人が回されたのは、キレモノ揃いの麻薬チームの殲滅任務だった。

「つたく…急造チームにや荷が重い任務だと思わねーか？なあズツケエロ」

「ああ。でもこの任務を成功させなきゃ能力を奪われちゃうからな。オレたちに選択肢はねーってわけだ」

「噂じゃソウルステイラーにスタンド能力を奪われたやつは廃人になるそうじゃねーか。なあ、こえーよなあシーラE」

「…ふん。成功させればいい話でしょ」

シーラEはファツション誌を投げ捨て立ち上がり、コキコキと首をストレツチし始めた。

そんなシーラEを見て、ズツケエロが急に口を開いた。

「お前ソウルステイラーに会った事あるんだよな？」

「だからそう言ってるでしょ。2年くらい前のことよ」

「どんなやつなんだ？ほとんど姿を見せないだろ」

「当時はふつーのチンピラにしか見えなかった。…でも…あいつも元暗殺者チーム。イルーゾオと同じ、冷酷なゲス野郎に変われないわ」

「イルーゾオ」という名前には並々ならぬ憎悪が込められているように思えた。だがそういうところに無頓着なズツケエロは呑気な声で言った。

「チンピラ？脚がグンバツの女って聞いたぜ、オレはな」

「あ？オレは隻腕隻眼のガンマンって聞いたが…」

「あんたら、噂話が趣味なわけ…？ひよろつとしたどこにでもいそうなチンピラよ。ちょうどサーレー、あんたみたいだね」

「へっ…そりやさぞかし威厳がねえんだろうな。誰も見たことがねーってのも納得だ」

「失敗したら会えるかもね？能力を奪われるときとか」

「そもそも生きて帰ってこれんのかって話だろ」

「ああ。だからきつちりこなすぜ」

太陽が水平線に沈みきり、あたりは次第に薄闇が立ちこめていった。サーレーは腕時計を確認して呟く。

「時間だ」

ローマ コロッセオの地下

真実の口から左にコロッセオをまわり、小さな海鳥の掘られた石畳を少しずらすと、小さな鍵穴が見つかる。

そこを開け、地下へ続く階段を下ると、奇妙な空間が広がっている。荘厳な柱に古代ローマ様式の彫刻の施された大空洞だ。

その回廊を抜けると、さらに地下へ進む階段が見つかる。そこは人工物というよりは自然物のような石柱が並んでいるが、よくみるとその柱の一本一本に「顔」が彫られている。その彫刻はローマ人というよりももっと荒々しい印象で、エキゾチックな顔立ちをしている。

その最下層は更に広い空間になっており、中央に場違いな安っぽい椅子と机が置かれていた。それを挟むようにして、五人の男が神妙な顔をして佇んでいた。

「このポルナレフ様の残した日記と資料で……とりあえずのところ、あなた方のお話を信用できると判断いたしました。……こんなところに身を隠していらしたとは」

揃いのスーツを着た三人の男の中で一番小柄な老人が言った。この三人の男はスピードワゴン財団の人間で、揃いとはいえかなり仕立てのいいスーツを着ているところからそれなりの地位のものだと察せられる。

対面するのはジョルノとメローネだった。パツシヨーネのボス、そして実質No.3といえる幹部が揃っての会合だ。政治家相手でもそうそうない組み合わせといえる。

ジョルノが口を開く。

「それで、先日うちの幹部を襲った男の身元はわかったのでしょうか」「はい。男の名前はギヨム・トマ。29歳、出身はフランスで21のときに入団。スピードワゴン財団アメリカ本部で5年働いた後、ポルナレフさまを探し出し、サポートをするためにチームで欧州へ赴き、その後消息を断ちました」

ジョルノも矢を狙って待ち構えていた男のことはブランク、ミスタから聞いていた。当然彼から奪ったスタンド能力のこともだ。

「おそらくポルナレフさまの持つ矢の力に気づいたのでしょう……そしてやつ一人ポルナレフさまに近づき、機会を窺っていたのです」

「その男はスタンド使いだったと報告を受けています。その事実はこちらで確認済みでしょうか」

「いいえ……我々は入団者がスタンド能力者かどうか必ず確認していま



す。彼は少なくとも8年前はスタンド使いではありませんでした」

「ではポルナレフさんの持っていた“矢”を使用して後天的に能力を得たと？」

「…いえ、それはありえません。ポルナレフさまは絶対にスタンド使いを増やすようなことをしませんから」

「では…一体どうやって？まだ我々の知り得ない矢が存在するとしても？」

「その可能性も捨てきれません。矢、もしくは類似の品。…あるいは“スタンド能力を与えるスタンド能力者”の存在。あらゆる可能性が考えられますが、我々は後者だと睨んでおります」

能力を与える能力。ブランクのソウルステイラーは奪った後、能力を成長させ持ち主に返すこともできる。類似の力を持つものがある可能性も捨てきれない。

「だとすれば特定は困難…と」

「ええ。もちろん常に捜査はしておりますが…」

「わかりました。ギョム・トマの件は一度おいておきましょうか。…このイタリアでスピードワゴン財団の方が次々と消えている、その件のほうがあなた方には急ぎでしょう」

「ええ。おっしゃるとおりです…」

左端のスーツの男が机の上に資料を出し、メローネがそれを受け取った。

「行方不明者一覧です。…そして、こちらの方は読んでこの場で破棄していただきたい」

「…わかりました」

ジオルノはメローネとともに資料を読んだ。その内容の衝撃にジオルノの資料を読む手はしばしば止まり、メローネもまた驚きのあまりつばを飲み込んだ。

「……………ほとんどオカルトじゃあないか」

「コロッセオ地下空間から出て、送迎のリムジンに乗り込んでからようやくメローネは口を開いた。

「傍から見れば、スタンド能力もオカルトだ」

「そりゃあそうだが。…オレはおちよくられてるのかと思ったくらいだ」

メローネはうんざりと言いたげだった。行方不明者の資料だけ受け取りはしたものの、どうせ死体は見つからないだろう。

「で…スピードワゴン財団の人間は、〃それ〃を狙う何者かに殺された…と」

「ああ。〃それ〃の回収が矢の所有権の条件だとあちらは暗に言っているわけだ」

「矢の奪還に本気で動かれちゃあこつちとしても困るしな。事実、この組織はソウルステイラーという恐怖の鎖でなんとか体裁を保ってるっていうのが現状だからな」

「悲しいことに裏世界の安定はまだまだ遠い話ってことだ。わかっているよ」

ジョルノの達観したような言いぶりにメローネは噛み付いた。

「ほんとうにわかっているのか？ジョルノ。オレがおまえと組んでるのは、それしかなかったからだぜ。そしてそれが多数派だ」

残念ながら、ジョルノの志に真に感動し、暗闇の荒野を歩いてゆこうと決意できるものは少ない。

それが普通だ。それが人間だ。

だからこそ、ジョルノは標にならなければいけない。

ジョルノはメローネをまっすぐ見つめ返し、堂々と答える。

「わかっているよ。だかそれも次第に変わってきているだろう？そして…麻薬チーム、彼らの殲滅でようやく切り替わるはずだ」

メローネは視線を窓の外にそらした。

「それもブランクの仕事じゃあねーか」

「彼女が心配？」

「……彼な、彼」

ジョルノのちよつとからかうような口調にムツとしてメローネは

咳払いしつつ答える。

「…あいつは実際、適任だよ。あいつの前じゃどんなスタンドだってまな板の上の鯉だからな。ただあいつは断るってことを知らないだろう」

「今回は彼自らの提案だよ。人選もね」

「はあ…？あいつはマゾヒストなのか…？」

「ぼくも…無理する必要はないと常々言ってるんだが」

「…おまえらいつも何話してるんだ？密室で。変なことしてないよな？」

「驚くほどに仕事の話しかしていないよ。…あつてもこの前は二人で寿司を作って食べたな。ブランドが昔一度食べたのが忘れられないからって、魚を持ち込んで」

「変なことしてるじゃあねーか…」

ネアポリス中心街から外れたバー、グアルティエロ。パンナコッタ・フーゴはそこでピアノを弾いていた。

現在フーゴはペリーコロの息子、ジャンルツカの元でこのバーの用心棒を任されている。

フーゴはギアツチョの絶対零度の前に敗北し、重度の凍傷を追って一週間後、ようやく意識を取り戻した。そしてその頃にはフーゴを取り巻く環境はガラリと変わっていた。

死闘を繰り広げたはずの暗殺者チームが英雄として祭り上げられ幹部となり、トリツシュ・ウナは無関係の少女とされ、ボスが正体を明かした。

長らく謎とされていたボスの正体がジョルノ・ジョバアーナだと思っていたとき、自分はたちの悪い悪夢の世界にとらわれているのかと思つた。

病室に訪れたジョルノことボスは事の顛末をフーゴに語った。そして、仲間の死も。

フーゴは鍵盤に指を乗せた。奏でる曲はショパンのノクターン第二番。客がいないときは、こうしてフーゴの引きたい曲を弾く。

ここに来る客は比較的カタギが多い。立地が観光客も安心してうろつける駅付近だし、通りに面している。マフィアの「表の顔」としては上等の場所で、本当なら用心棒なんてそうそう出番がない。

でも自分はここで甘んじて飼い殺されている。ジオルノはもつといい仕事を回すことができると言ったが、フーゴは断った。他に、何かを望んだりほしくない。

世界は変わった。  
でもぼくは、いまだにあの日の敗北にとらわれている。

カランカラン：

ドアベルが鳴り、客が入ってきた。時計はとづくに12時を回っている。深夜の入店は珍しい。

客はポニーテールの女だった。明るい茶髪に、バカみたいにおつきなりボンをつけている。瞳の色に合わせた黄色のパレオの下には拳銃。明らかに堅気じゃない。

「ねーねーピアノってさあ」

女はピアノをひくフーゴの背後に無遠慮に立って、演奏なんてお構いななしに喋りだした。

「十本の指を全然違うふうに動かすじゃん？フツー無理くない？それってさー、訓練でできるようにしてるってことでしょお？」

フーゴはそれを無視して曲を弾き続ける。パッショーネの人間か、敵対するどこかのチンピラか知らないが、何をしたいのかわからない以上、相手にする必要なんてない。

「自転車に乗るのもさあーよくよく考えると、すっげーイミフメーなことしてるじゃん？足をぐるぐるぐるぐる…でも大人になっても覚えてるでしょ。そう考えると、体に染み込ませるってちよーだいじ。

「そう思わない？」

女はわざわざかがんで顔を覗き込んできた。視界の端に女のポニーテールの先端がチラチラと映り込んで気が散った。

「きみのピアノも、ちいさいころ染み込まされたの？パannaコッタくん！」

「うるせーぞ！テメーの目はフシアナかアーツ？演奏してるのが見えねーのかッ!!」

フーゴはプツツンし、女めがけて拳を振り抜いた。だが女は平然と右手でそれを受けた。

女の右手はギキツ…つと金属が軋むような音を立ててフーゴの拳をがっしりと掴み、離さなかった。

「噂通りのキレ者だねえ！Pannaコッタくん」

パツシヨーネのやつか。それも見かけによらずに武闘派らしい。

そう判断した途端、フーゴの怒りはフツとさめた。それをわかってか、女は拳を離し、一歩下がってわざとらしく顔の横でピースをしなから言った。

「ボクはくくおんちゃんです！イエイウ！情報技術部新チーフだよんッ！ブイブイッ！ピースッ」

「……………」

「えっ…無視…？」

「…………情報技術チームがぼくに何の用だ」

「そりゃ飛び込みの仕事のお知らせだよー！Pannaパーン出世チャーンスッ」

くおんと名乗る女はドラムロールを口ずさみながら、ピアノのそばのテーブルに勝手に資料を並べ始めた。

「…断るといふ選択肢は？」

「あるわけないじゃんッ！」

くおんはビシツと指でフーゴを指さし、決めポーズだといったげにウィンクした。

とんでもなく厄介そうな任務に、今まで見たことないタイプの女が相棒。嫌な予感がする。そしてそれは避けられないらしい。

### 03. デプレッション

「ふう…ふう…ふう……」

息の荒い男がトイレに駆け込んできた。フーゴはそれを横目でちらりと見た。冬だというのに脂汗をかいて、上着を半分脱いでシャツの袖をまくっている。

男は個室に駆け込み、ゴソゴソやった後スッキリした顔で出てきた。

どうみても、クソをひり出したって感じじゃあないな…。

フーゴは手を洗ってすぐにその場から立ち去った。ジャンキーなんて関わり合いたくもない。薬物で身持ちを崩すなんて、自分は愚かだと札をつけて歩いているようなものじゃないか。

だが、巷にはそんな奴が溢れている。そして、自分たちの組織が、その土壌を形成している。

「うちの子がね、急に高価いラジカセを買っていたのよ…」

いつものリストランテに行った。ちょうどフロアの隅でブチャラテイが掃除係をしている従業員から相談を受けているところだった。神妙な、ささやくような声で女はいう。

「問い詰めたら…受け子をやってるんだって。恥ずかしげもなく言うの。誰のって聞いても答えなくって…ねえ、ブチャラテイ…もし売人に心当たりがあるんなら、子どもを巻き込まないように言ってやってくれないかね…」

「わかりました…こちらで探してみましよう」

最近組織はヤクを売り捌いてるのを隠しもしなくなった。フーゴはヤクの話が出るとブチャラテイの表情が強ばるのに気づいていた。普段冷静で感情を表に出さない彼が唯一自分をコントロールしきれない瞬間。過去に麻薬絡みでなにかあったのだろうと容易に想像できた。

だからといって無闇やたらに過去を詮索したりはしない。それが礼儀だ。

「ブチャラティ」

「ああ、フーゴか。聞こえていたか？」

「ええ。子どもに受け子をやらせてるやつがいるんですか？とんでもないクズがいたもんですね」

「ああ。まったくだ…」

受け子とは要するに金と薬の受け渡し役だ。客と直接会うのを嫌がるやつが犯罪とは無縁の市民に小金と引き換えに片棒を担がせる。

はつきり言っつて、そういうのに抵抗がないやつは将来的に顧客になる可能性が高い。もちろん子どもも例外ではなかった。

「何人か心当たりはあるからこれから当たってみる」

「ブチャラティ、ぼくも手伝いますよ。手分けしたほうが早いでしょう」

「そうか？それは助かる」

これでもフーゴはブチャラティチーム最古参だ。少なくともミスタ、ナランチャよりはチンピラたちに話が通りやすいだろう。

フーゴは車で空港に向かった。

空港につくと、真っ先にタクシー乗り場へ行く。目的の人物はすぐに見つかった。

彼の名前は涙目のルカ。空港で私営タクシーを牛耳ってるケチなチンピラだ。そういうゆすりたかりだけでは生計は成り立たない。いくら巻き上げても上納金はパーセンテージで決まっている。

下っ端たちはだいたいそんな感じでヤクザ稼業に真摯にうちこんでも大した金にはならない。だから大抵は副業をしている。ルカも例外ではなかった。

フーゴと目が合うと、ルカは鼻をすすり、ハンカチで涙を拭いた。やつの目はシヨバを巡る喧嘩でぶちのめされて以来涙が止まらないと聞いている。よくみるとまだ頬に傷跡が残っている。

「ブチャラティんこの…フーゴ…：さんでしたっけ？どうかしました？」

ルカは言葉遣いこそ丁寧だが、なんとなく不遜な感じがした。フーゴは静かに苛ついた。

偉くもない、たまたま喧嘩で最後まで立ってただけでイキってる間抜け。そういうやつは嫌いだ。

「いえね、ちよつと噂を耳にしまして。あんた、ヤクを売り捌いてるそうじゃないか。子どもに受け子をやらせてるんだってな？」

もちろん証拠はないが、カマ掛けとして断定口調を使った。だがルカは悪びれもせず首を縦に振った。

「ああ。許可をとって売ってんだ。何が悪いっていうんです？そもそも麻薬はあんたたちの管轄外だろ」

「…いいや、管轄内だ。子どもを犯罪に巻き込むな」

「…：売っちゃいないですよ？さすがにね…でも、働きたいやつと人手がほしいの、需要と供給ってやつですか？それが噛み合ってるってだけじゃないですか」

「覚えてたての言葉を使ってるのはバカみたいだぞ。とにかくぼくは子どもに受け子をやらせるのをやめろと忠告してるんだ」

「いちいちうるせーな！オレらはオレらで納得してやってんだよ！文句言うなら仕事も娯楽もろくにねえーセーフに言えよ！」

フーゴは返事はせず、拳でルカの頭を殴りつけた。ルカは吹っ飛び、地面に落ちて起き上がることはなかった。

「…今日は食いっぱぐれたな」

「はい！というわけでもないここに書いてあるとおりにんだけど…」

くおんの広げた資料に載っていたのは見覚えのある男の顔だった。

「ヴォルペ…？マツシモ・ヴォルペが…抹殺対象だと？」

「えっ?!知ってる人？すっごーいぐうぜん！」

なんだか適当なやつだ。フーゴは自分があしらわれてるように感じ、若干不快になった。だがそれよりもボローニヤ大学の頃の同級



だったヴォルペとの思わぬ再会のほうがはるかに注意をひいた。

尖った印象を受ける骨格に、イギリス系の細い鼻筋に細い眉と目。間違いない、ヴォルペ本人だ。

資料の下に記されているのは彼のスタンド、マニック・デプレツシヨンの能力だった。

「麻薬を生み出す能力…こんなものがパツシヨナーの麻薬ビジネスの正体…か」

「あつもちろんこれだけじゃないよ？ やっぱねえ、ウィードは産地で選ぶ人もいるから。…とはいえ市民に流通してる安価なのはほとんど彼のだったみたいだけどね！ 質がいいのは金持ち専用くカリブ直送安心品質…まあそのルートもコカキが管理してたから他のギャングに売られちゃったかも」

フーゴの脳裏にブチャラテイの顔がよぎり、心臓がずきりといったんだ。

長らく彼を見ていたフーゴは知っていた。彼は口にはしなかったが、麻薬に対しては複雑な思いを抱いていたに違いなかった。

自分がその元凶とこんな形で関わることになるとは思ってもしなかった。

「ぼくが選ばれたのは彼と同級だったからか？」

「えっ？ 違うんじゃないかな？ 初耳だし。えつと…そうだね。まずは経緯説明だね！ 車でやろっか」

メランコリーに陥りかけたフーゴをガン無視して、くおんはヴォルペの資料を回収し、細かくちぎって灰皿の上で燃やし始めた。

「ちよつと待ってくれ。まだ店が…」

「えー？ どーせこないよ客なんて。いつこくをあらそう？ らしいのでハイ！ 車へゴー」

フーゴは振り上げたくなる拳をぐつとおさえた。だがこのくおんは任務を持ってきた以上、フーゴより立場は上だ。あの日からポツキり折れたフーゴには舐めた態度の女をぶん殴るほどの激情を持ってずにいる。

くおんはフーゴの返事も聞かずに店を出て、乗ってきたらしいワゴ

ン車に乗り込んだ。ナンバーから見るとレンタカーだ。

車が発進し、夜の街を抜けていく。誰かを轢き殺しても構わないといたげなスピードの出し方だった。くおんは路地を抜けると唐突に話した。

「麻薬チームの討伐はほんとにボクらの任務じゃなかったんだよね。ていうか、前任がちよつとしくじったのねー」

当初、麻薬チーム殲滅メンバーはサーレー、ズツケエロ、シーラEの三名だった。ヴィラ・サン・ジヨヴァンニにてビットリオ、コカキの撃破には成功したらしい。

作戦終了予定時間、港に派遣された斥候は重篤な麻薬中毒の症状の状態で倒れているズツケエロを発見し、その近くでビットリオと刺し違えたと見られる重傷のサーレーとともに回収した。

「なんと！麻薬チームの武闘派二人は仕留められたんだけど…代わりにシーラちゃんが攫われちゃってさ。それでホントはその後を引き継ぐはずだったボクと君の出番ってわけ！いえーい大抜擢ッ」

「大抜擢？」

そんなわけ無いだろう。という意図を込めてくおんをにらんだ。だがくおんはそれにニコニコと笑顔で応じ、全く気にしてない様子だった。

「女の子を助けに行くナイトだよ。光栄だよね！でもこのヴォルペとアンジェリカも多分手強いよ」

「麻薬を生み出す能力に…幻覚を見せる能力…なのか？さっき燃やした資料に書いてあったのを見るに、戦闘能力が高いとは言い難いが」「まあたしかに、シンプルな強さはコカキとビットリオの方が勝るね。っていうかむしろサーレーとズツケエロはよく倒したと思うよ！シーラちゃんさうのに手間取っただけかもしれないけどさ」

「…逆に言えば残りの二人は正攻法では倒せない」と

「そうだね。そうかな？ん…詳しくはわっかんないやー！」

「…こんな情報なんて言えない。不正確すぎる」

「もー、文句言わないでよー！かわいそうでしょ！こんだけわかったのってすごいよ？あの二人は不死身だね！今は怪我と中毒で死にか

けだけど」

「……」

フーゴは「ぼくはお前に文句を言ったんだ」と言いたいのをぐつとこらえた。

「よし。他になんか思い出したら適宜言うよ！」

車は高速に入り、くおんはアクセルを踏み抜く。法定速度なんて全く気にする様子はない。それほど急ぎなのか、そういう性格なのか。態度からは掴みかねる。

「さつきははぐらかされたが、ぼくときみがこの任務に選ばれたのはなぜだ？」

「え？あー……」

くおんははじめて困ったような、なんとも言えない渋い顔をした。

「ボクの上司、ムーロロって人なんだけど……実は前の騒ぎの元凶みたいなの？結局有耶無耶になったんだけど……それでちよつとね」

「ああ。なるほど……」

どうやらくおんも自分と似たような立場らしい

二人とも「ボス」の秘密に関わっているというわけだ。それに前任のメンバーのうちズツケエロは聞き覚えがある。ブチャラティがポルポの遺産を取りに行く際襲撃してきたやつの名だ。

つまりこの麻薬チームの殲滅は組織にとつての懸念事項をまとめて潰すいい機会とも捉えることができる。

病院に訪れたジョルノからそんな気配は感じられなかったが、ミスと彼を除く組織のトップは元暗殺者チームが占めている。彼らならばフーゴを切り捨てる理由は十分にある。

「パンナコッタくんのこともちよつと知ってるよ。情報チームだからね！暗殺チームとバトったんでしょ？事情知らなかったとはいえずいてないねー」

「なんだ。知っていたのか……」

「そりゃねーっていうかく知ってるからヤバイんだよ。やんなつちやうね」

組織に忠誠を誓わないものはソウルステイラーに能力を奪われ

るという。

ソウルステイラーはかつて敵対した暗殺者チームの狙撃手、ヴォート・ブランクだ。だがヴェネツィアで敗北した自分は彼と戦ったことはない。それどころか顔も知らない。

あれからおよそ三ヶ月、ブランクからの連絡は未だにない。彼の仲間を殺したのは自分のパープル・ヘイズだ。なのになんの音沙汰もないのは不気味だった。

だが、おそらくこの任務が終われば会うことになるだろう。彼は怒るだろうか？それとも自分を許すのだろうか？わからない。

自分にはもう抗う権利すらないような気がした。

「シーラちゃん、無事だといいいね。なんでさらわれたのかわかる？あつ！そういえばパンナコッタ君って大卒だっけ？なんかめっちゃ頭いいんだよね！」

「名前で呼ぶの、やめてくれないか」

「えっ。なんで？だってボクはくおんだよ？」

「意味がわからないんだが。…とにかく嫌なんだ。大体、初対面なのに馴れ馴れしいぞ。立場以前に礼儀が…」

「じゃあパニーって呼ぶね！」

フーゴは助手席の前を蹴った。破壊音が聞こえ、グローブボックスのフタが空いて中身が床にこぼれ落ちた。

「うわーッ?!これ経費で落ちるかな?!この前ウィリーやって壊したバイクは駄目だったんだよね」

「知るかッ！」

「まーまーリラックス！気楽に行こうよ」

フーゴはもう一回グローブボックスを蹴った。今度は蓋が完全に取れてしまった。だがくおんはもう経費のことは忘れたのか、ケロツとした顔で気遣わしげな声を出した。

「でも麻薬チームも気の毒だよな？」

「お前…無敵か…?」

「だってできる事をしてるだけだよ？それを否定して、死ねって。かわいそー」

「そのできごとってのが許されないことなら、しかたないだろ」

「そお？じゃあパンナコツタくんは生きてるだけでめーわくだからしね！って言われてもいーの?!」

「……………そうだな。言われても、仕方ない」

「な、なによ。急にそんなトーンダウンしなくてもいいじゃん。話に聞いてたのと違うなあー…」

くおんはシーラEの話ペラペラ喋っていた。フーゴがあからさまに興味なさげな顔をしてもお構いなしだった。

この能天気さは、強いて例えるならミスタとナランチャを足してそのまま割らない…。そんな感じた。

「人間の肉ってよオゝ美味しいのか？まずいのか？」

そんなことを話していたミスタのことを思い出した。ナランチャはやめろよといいつつも想像が止まらなくて余計ミスタを饒舌にしてしまうし、アバツキオもそれを止めずに静観していた。

ああ、そういえば一連の出来事は、奇妙な彫刻家の件を片付けてすぐのことだったな…

フーゴの無反応さにしびれを切らしてか、くおんはクラクションを鳴らしながら文句をたれた。

「ねえ、ボクたちチームなんだよ？もっと打ち解けようよ」

「…どうせこの任務だけじゃあないか。だったら必要ないだろう」

「でも同じ組織だよ？それに、情報技術チームに君を勧誘するってのもかねてるの。頭いいんだよね？きみ」

「パソコンはあまり触ったことないんだ」

「むいてると思うよ！…いや向いてないかな…キレてぶっこわしそ  
う」

フーゴはくおんを思いつきり睨みつけた。それをみてくおんはにやははと笑う。どうしてか、彼女が組織のものだとわかった途端、正面切って怒ることができない。

「思ったよりはキレイないね。遠慮はあるんだ。前はそうじゃなかったでしょう？ブチャラテイの隠し玉だったもんね」

こいつは心を読んでいるんだろうか？

さつきから、フーゴを怒らせたのかとしか思えないほどの確かな言葉を投げてくる。

「…もう彼はいない」

「仲間がいなのはかなしい？」

「うるさいな」

「わかるよ。ボクも大事な仲間いっぱい死んだから」

「じゃあ聞くまでもないだろう」

「えー？じゃあボクと一緒に気持ちなの？パンナコッタくんは。だとしたら…相当〃かなしい〃だよ！手首切っちゃうくらい！」

「運転に集中してくれないか。あんたの与太話に付き合うのは疲れた」

「つれないな」

フーゴは目を瞑り、これ以上会話をする意志がないことを示した。くおんは今度はその意図を汲んで黙ってまたアクセルを踏みスピードを上げた。掴めないやつだ。

単調な景色に目を奪われるなんてことはなく、フーゴはいつの間にかうとうととしていたらしく、気づけば車は高速を降りて一般道を走っていた。

「パンナコッタくんパンナコッタくん」

「その呼び方やめてくれないか」

「ほら見て」

くおんの指差す方向には海が広がっていた。そしてその手前に煙がいくつも上がっていた。道を照らすライトに沿うようにオレンジ色の光に黒い煙が照らされている。街全体で交通事故が同時多発的に起こったかのようだ。

「…一体どこを指摘しているんだ？」

「シチリアだよ！オルティージャ島！すてきー！これから港でボートをかっぱらいますー」

くおんは双眼鏡を手渡ししてきた。フーゴはそれで事故の起きた場所を見る。一番近い現場は何が起きているのかなんとか視認できた。車が一台ガードレールにつつこんで大破している。

「さて…と。えつとー…どうする？走り抜けちゃおつか」

「まだ敵の攻撃方法も射程距離もわからないんだぞ」

「でも急がなきゃ。時間がないんだよ」

くおんはフーゴの返事を聞かずアクセルを踏む。こいつには人の話を聞く気は一切ないどころか、ちよつと前の会話を覚えてるだけの集中力もないらしい。

「幻覚を見せる能力、麻薬を生み出す能力。この攻撃は幻覚を見せる方だろう。となると敵の攻撃のトリガーを慎重に見極める必要がある。事故ってる車がある以上スピード出して突っ込むのは得策じゃない」

「じゃあ足で走ろっか」

くおんはすんなり納得して車から降りて屈伸し始めた。フーゴも同じく車から降りて、真つ暗な海を遠目で眺める。

「ぼくのスタンドは…あまり、使い勝手が良くない。無闇に突っ込んで敵と出会っても役に立たないかもしれない」

「何言ってるの。結局最後にものをいうのはフィジカルだよ」

そう言ってくおんはその場で宙返りをした。情報チームのくせに身体能力は高いらしい。驚いた顔をしたフーゴにニコツと笑いかける。

「ボクが抜擢されたワケをとくところーじろ。だね！」

「ねえー…マツシモ。本当に、本当に？本当にあるの？」

「ああ。何度も確認しただろ。しつこいくらいに何度も。間違いない」

アンジェリカは震える指先でシーラEを撫でた。シーラEは脂汗を浮かべて眠っている。ヴォルペの能力、マニック・デプレッション

で生成された麻薬を打たれ昏睡状態に陥っているからだ。アンジェリカはアンジェリカで、血液がささくれだつ、痛みを緩和させるために麻薬を打ったばかりだ。二人共朦朧としている。

ヴォルペはヨットを操縦している。真っ暗な海面を滑るようにして、目的地へ向かっている。

「でも、できるのかなあ…。何百年も、何千年も昔のことなんて、あたしにはなかったことと同じに思える」

「できるできないじゃあない。させるのさ」

アンジェリカは夢うつつだ。それでも彼女の能力、ナイトバード・フライングはしっかり仕事をこなしている。はるか彼方、陸の方で煙が上がるのが見えた。誰かが幻覚に囚われ、死んだのだろう。

「この入れ墨…とつてもキユート」

アンジェリカが鼻をすすった。つう、と垂れる鼻血に全く構わない。ヴォルペは舵からちよつと手をはなし、それを拭ってやった。

「ねえ、ほんとに追手はいるのかな」

「さあな。コカキがやられて、ほんとうにオレたちだけ、孤立無援になっちゃったな」

「それを手に入れたら、どこに行くんだっけ」

「忘れたのか？ フランスに抜けて、それからシベリア、アラスカ、そしてアメリカ。長い旅になるぞ」

「ああ、そうだったね。楽しみだなあ。その頃には、もう体は痛くないんだもんね、マツシモ」

「ああ。だから安心して、お前はスタンドに集中しろ。誰の邪魔も入らないように…」

アンジェリカは目を閉じた。シーラEと並ぶと姉妹みたいに見える。

アンジェリカはナイトバード・フライングで追手と思われる自分の足跡を追いかけるものに無差別に幻覚を見せている。ほとんど自動で動いているとはいえ、《感じ取る》には集中力が必要だった。

アンジェリカはこんな難病にさえなっていなければ、もっと瑞々しく、輝くような太陽の下で学校に向かう無邪気な少女になつてたはず



だった。

生まれは、選べない。運命は、選べない。

能力をソウルステイラーに委ねればアンジェリカを然るべき医療機関へ預けるといふ話もあった。だがヴォルペはそれを飲まなかった。

医療でどうにかならなかったから彼女は自分のそばにいる。それに、ボスの座をまんまと乗っ取った奴らの言うことなんて信用できなかった。

麻薬チームの四人はその事実を知っていた。取引を飲んだとしても待っているのは終わらない、掃き溜めをさらうよりも惨めな日々だろう。

そしてなにより、アンジェリカと引き離されることが自分にとって半身をもがれるほどの苦痛だということに気がついたからだ。

自分なしで、アンジェリカがシラフでいる日々を耐えられるだろうか？ 誰よりも寂しがりなアンジェリカ。かわいそうなアンジェリカ。

中毒になるのは麻薬だけじゃない。関係そのものだって毒になりうる。

それを自覚してなお、崖っぷちに追い詰められればられるほど、手放しがたく思えて愚行に走ってしまう。

“石仮面”という荒唐無稽な手段にすぎるほどに。

## 04. ナイトバード

1999年1月 ブランク入団から一月

「人に恨まれる覚えは…少なくともこっちに来てからはないんだけど」

シーラEは身動き一つできないまま、視界いっぱい広がる地面を見つめ続けることしかできなかった。

顔を上げることはできない。なぜならば首周りには大量のパイプやらボンベやらがくっついており、しかも体全体がそういった鉄類にガツチリと固定されてしまっているからだ。

「にしても指定場所が廃工場とはね…ほんとラッキーだった。それに君の能力は特段僕と相性が悪かったみたいだしね。今回は僕の運が良かった」

シーラEはイルーゾオをおびき寄せるために偽の暗殺依頼を出した。イルーゾオ向けの、人をさらひ甚振るゲスな仕事を。

だというのに、指定場所に来たのは赤毛のひよろい新顔だった。それは無警戒に廃工場に来て、フェイクのターゲットの写真を見ながらキョロキョロしていた。

シーラEは当然肩を落とした。だがフェイクの依頼を出した以上、引き下がることはできなかった。シーラはその見慣れないチンピラの顔が組織の情報にあるかどうか確認するため、あわててパソコンをとりだし電源をつなげた。残念ながらリストにそれらしき人物はみつからなかった。

だが暗殺チームの新入りであることは間違いない。シーラはイルーゾオの情報を搾り取ろうと自身のスタンド、ヴードゥー・チャイルドで襲いかかった。

ヴードゥー・チャイルドは殴った箇所には唇ができて、攻撃を受けた者の深層心理を読み取り、最悪のことばを吐き続けることができる。初対面の赤毛にも容赦なく、その場で身動き取れなくなるような心の吐露を吐きかけたはずだった。

なのにごいつには言葉が全く響いていない。

「僕は空っぽだからさ…何を言われてもなんとも思わないんだよね。噛み付いてくるのには参ったけど」

ブードゥーチャイルドの唇を作る能力は解除させられた。だがシーラはまだ諦めてはいなかった。相手の油断を待って再び襲いかけ、今度は迷わず喉笛を噛みちぎるつもりだ。

「…で、君は…えーつと…シーラ？シーラちゃんっていうのか。ふうん…パツシヨーンの人じゃん。同士討ちはご法度じゃなかったっけ？」

目の前にぼとりと財布が落ちてきた。所持品を漁られ、パツシヨーンのバッジを見つけられたらしい。名前の方はクレジットカードか何かでわかつたんだろう。

ゲツ。こいつ札はおろか小銭も全部抜いてる！せこいやつ！

「で、なんで偽の依頼を？内容から察するにイルーゾ先輩をおびき寄せたかったのか？」

「…あんに…関係ないでしょ」

「あるよ。イルーゾ先輩は僕の世話役なんだ。君にまた粘着されると面倒だろ」

「ハッ…じゃああんたもゲス野郎のお仲間ってわけね」

「ギヤングなんてやってるのはみんな同じ穴の貉だと思うけどね。君も僕も」

「程度が違うわ。私はあいつをぐちやぐちやにしないと気がすまないッ！裏世界に住むクズには同じクズになっても、自身で裁くしかないのよ」

赤毛は鬼気迫る形相のシーラを見てきよんとしてから言った。

「ああ…もしかして復讐ってやつ？」

無関心が透けて見える口調にシーラはブチキレそうになった。だが身体にのしかかる鉄の重みと冷たさがシーラをギリギリ正気にとどめた。そんなシーラの心境を知ってか知らずか、赤毛は更に踏み込んでくる。

「君の復讐はよりよく生きるためにすること？」

「ちがう、姉さまの無念を晴らすため。それができれば、私の命なんてどうなったっていい」

「姉さま?」

「そう。あんたの先輩が殺したの。私は絶対に許さない…」

「ふうん…そういう復讐もあるんだね」

赤毛は無感動に言った。そして数秒考え事をするかのような間をおいてからまた話し始めた。

「僕、チームに入ったばかりだからわからないけど…イルーゾ先輩が昔なにしても全然不思議じゃないな。君のお姉さんはお気の毒に。まあ、正直どうでもいいけど…」

「いかにもゲスの仲間らしい発言ね」

「だって僕は酷いことをされてないからね」

赤毛はかがみ込み、シーラの耳に顔を近づけ小声で言った。シーラからは赤い毛先しか見えない。

「でも…君が先輩を殺すと仕事に支障が出るから、復讐はさせないよ。このことはドツピオさんに報告する。ボスの右腕だ、わかるか?」

ドツピオという名を聞いてシーラは息を呑んだ。赤毛はその反応を静かに観察している。

「なんであんたみたいなたつ端がドツピオさまの名前を知ってるの」

そう聞いてからシーラは後悔した。この言い方や自分がドツピオと通じる親衛隊だと言ってるようなものだ。

「もし君が今後もパツショウネで、本気で復讐を果たしたいなら…僕がいなくなつてからのほうがいいね」

「私を殺せばそんな危険なくなるわよ」

シーラは挑発する。だが赤毛は意にも介してない様子でそのまま立ち去ろうとしていた。足音が遠ざかっていく。

完封された。反撃の機会もとどめも刺されない、完全な負けだ。

「チクショウ！死ね!」

シーラの罵倒に、だいぶ遠くから返事が聞こえた。

「変なの。人は必ず死ぬよ。いつかね」

シーラがその赤毛の名を知ったのはだいぶあとになってからだつた。

くおんはシカのように軽やかに走っていく。フーゴは3メートルほど間を空けて彼女に続く。フィジカルが物を言うと言公言するだけあつて走りはハイペースだ。

先程双眼鏡で見た事故現場を通り過ぎる。車の中で運転手が血を流して伏せている。死んでいるのか生きているのかわからないが、かまっている暇はない。

市街地に入った。事故があつたにもかかわらず街はしんと静まり返っている。くおんは港へ続く商店街の入り口でピタリと止まり、フーゴを見た。フーゴもくおんの顔を見て頷いた。

「妙だな」

「ね。……でも生き物は複数いるよ」

くおんは首はほとんど動かさずに周囲を目だけで見回した。野生動物みたいな勘が働いているのだろうか。フーゴに感じ取れない何かの気配を掴んでいるらしい。

「…ぼくにはわからないな」

「いや。感じる。でも人…っぼくはないな…」

くおんは腰に下げた拳銃を取り出した。ベレッタ92だ。さつきまでのおどけた態度と打って変わって真剣な眼差しで暗闇に目を向けた。

「……近い」

「何…?」

ふうーっ……ふうーっ……

不意に荒々しい呼吸音が聞こえた。背筋に悪寒が走り、フーゴはとつさに体を左へ仰け反らせた。

直後、風を切るような音がして、さつきまでフーゴの頭があつた位置に鉄パイプが振り落とされていた。

「おっ…」

くおんが銃口を向けるより早く鉄パイプの持ち主にフーゴの拳が叩き込まれた。

男の顔面には拳がガツチリめり込んでいる。だがぶつ倒れることなく、鉄パイプを再び振りかぶろうとした。

その時、くおんの銃口が光り、銃声が二回轟いた。男は両膝の関節を破壊されがくりと体勢を崩す。フーゴはさらにその背中に蹴りを叩き込んだ。男は前へ吹っ飛び、地面に血の跡を残しながら転がる。だが鉄パイプは決して手放さない。そればかりかこちらを睨みつけて立ち上がろうと藻掻き始めた。

「こいつ、普通じゃあないぞッ！」

「パンナコツタくん、これ！」

くおんは反対側の腰に下げていた銃をフーゴに投げ渡した。男の口からは歯が歯肉からぶら下がっているだけでなく、頬の内側からも犬歯が飛び出していた。それだけの力で殴られたら脳震盪を起こすか頭蓋骨が割れるかで再起不能になるはずだ。

「ひーッ…痛くないのかな？アレ」

「いいや…おそらく感じてないんだ」

そうこうしているうちに周囲に同じように荒い呼吸を繰り返す、うつろな目をした人間が集まってきた。まるで男の血の匂いに釣られてきたかのようだ。

それを見てくおんはため息を吐き、フーゴの言葉の意味を理解した。

「なるほどね…マニック・デプレッション、応用が利くんだ」

「こんな使い方ができるとはな」

「ヤクでぶっ飛んでるっていうより、これじゃあゾンビだねゾンビ。ゲームみたい！」

「馬鹿なことを言ってる暇は…」

フーゴの言葉を遮るように、叫び声が聞こえた。くおんの背後から男が一人まっすぐ走ってきた。くおんは冷静にその男の額に銃床を叩き込んだ。

「ゾンビなら弾の無駄うちはご法度だからねッ」

「いや、場合によるッ」

フーゴはくおんに組みかかろうとしたもう一人の頭を一発で撃ち抜く。

「あは、やるじゃん！走ろう、パンナコツタくん！」

それを皮切りに大勢の中毒者たちが二人をめがけ走り出した。

二人もすぐに駆け出す。行く手を阻む有象無象を蹴散らしながら、てつきりくおんはなにかしらスタンド能力を使うかと思ったが、全て格闘技で応戦している。戦闘向きの能力ではないのだろうか。

襲い掛かってくる連中は単調な攻撃しかできないため対処は容易だった。だが数とスタミナがありすぎるため戦闘は余裕とは言い難い。やつらは殺さない限り襲ってくる。

フーゴはごみ捨て場から非常階段、屋上を経由して港へ行けるルートを発見した。くおんもフーゴのあとに続いた。これで地上に行くよりは遥かにマシなはずだ。

真夜中の海はタールみたいに真っ黒だ。夜の闇との境界でチラチラと港町の灯台の光が瞬いている。

「あの漁船をパクラウッ！」

くおんはそう言って走るスピードを上げ、ショートカットと言わんばかりにはしごを無視して三階の高さから飛び降りた。さすがに怪我をすると思っただが本人は平気そうだ。

フーゴははしごを使ったが後ろから中毒患者たちの唸り声がどんどん迫ってくるせいでもともと飛び降りる形になってしまった。

「はやくはやく！」

フーゴが漁船に飛び乗る頃にはもうエンジンをかけられたらしく、すぐに飛沫を上げて港から離れていく。マニック・デプレッションで強化された人々は次々に海に飛び込んでこちらに向かって泳ぎ始めるが、次第に波の間に消えていった。

「よし…大成功！あとは島に行って、ヴォルペを止めるだけだねッ！

「いえいう！天才！」

くおんはエンジン全開で船を走らせる。飛沫が顔に当たった。走って火照った体が潮風で冷めていき、次第に頭も冴えてきた。

フーゴは宙ぶらりんになっているいくつかの疑問についてくおんに聞いてみる事にした。

「なんでヴォルペは島に向かっているんだ？海外に逃げるならもっと別の方法があるはずだ」

「んーっと…順を追って説明しないとだめなやつなんだよね…」

くおんはちよつと考えてからフーゴの疑問に答え始めた。

「今回の任務、麻薬チームの件がなかったならギアツチョがやる仕事だったんだよ。紆余曲折だね！ギアツチョはわかる？」

フーゴはその名前を聞いて拳を握りしめた。

「元暗殺チームの…」

「知ってるんだ」

「ああ。……戦って負けた相手だ」

「あはっ！じゃあ生きてるだけで大したもんじゃん！自信持ちなよ」

くおんはフーゴの重たい口調とは裏腹に感心したような褒め言葉を口にする。フーゴも流石にもう慣れたが、まるでくおんの耳にはお気楽フィルターでもかかっているのかというくらいにポジティブだ。

「一応言っておくが腕相撲か何かじゃあないんだぞ」

「わかってるよ？でもなんか気にしてるっぽいんだもん。慰めたんだよ！」

「余計なお世話だ」

くおんはフーゴの素っ気ない対応を相変わらず歯牙にもかけず、ニコニコしている。

「でねでね、ローマである財団の人間が攫われているって報告があがってね。調査を進めてったら、ギアツチョが回収するはずだったブツを麻薬チームも狙ってるっぽいってはんめーしたので、いろいろな兼ね合いで殲滅がシーラちゃんたち、ボクと君が回収って割当になったんだよ」



「そのブツっていうのはヴォルペにとって逃亡よりも優先するほどの品なのか」

「んー、ボクはそう思えないけど…考え方は人それぞれだよねえ」

「一体それは？」

フーゴの質問にくおんはニヤツと笑い、芝居がかった口調で答えた。

「人を不死身にする仮面さ」

フーゴは不意に出てきた不死身というワードに気を取られ、きよとんとした顔をしてしまった。

「聞き間違いじゃあないよな？さっきのゾンビみたいなたとえか？」

「ちがうよ！マジだよ！本当にあるんだもん」

「そんなオカルトを信じて、ヴォルペがこんな事をするとは思えない」「確証があつたんだよ。…ま、シーラちゃんをさらつたあたり、使い方までは知らないのかもしれないけど…もう使われてたとしたらヤバイねー」

どうやら聞き間違いでも冗談でも比喻でもないらしい。一体どんな状況に追い込まれたら不死身の仮面なんかを欲しがるとのさだろう。フーゴにはさつぱりだった。

だがそれが実在して、今後脅威になるといふのならば、対策を練らなければならぬ。

「ぼくのパープルヘイズは生き物に対して無敵と言っている。だが不死身に効くかはわからないぞ」

「そこらへんはどうでもいいんだよ。ノリだよノリ」

真剣なフーゴに対してくおんは投げやりだった。確かに、上としてもこちらの成功率なんてどうでもいいのかもしれない。

組織にとつては不都合な真実を知ることと裏切り者の共倒れがベスト。最悪の場合、裏切り者が勝ち残つてもより強力なスタンド使いを差し向ける準備があるはずなのだ。

フーゴは暗澹たる思いに駆られ、思わず問いかけた。

「どうして組織に居続ける？」

「え？もしかしてボクにきいてる？」

「こんな危険な任務にあてがわれるくらいなら、足を洗って普通に働くなり、外国に逃げれば良かったろう」

くおんはうーん、と少し悩んでるような声を出してから答えた。

「それを言うならパンナコッタくんこそだよ？組織は今かなーりグダグダじゃん。ボスの挿げ替えは成功したけど、幹部は軒並み入れ替えられた。何人か暗殺されたし、裏切り者には処刑命令が出てる。この討伐任務も、あわよくば口封じって狙いがあるんだよ？どーしてそんなところに居続けたいの、パンナコッタくんは」

「…きみは情報チームのチーフなんだろう」

「そりゃパーソナルデータはわかるよ。ブチャラティチームで何してきたかとか、誰といちばん仲良かったかとか、君がとても優秀な人間だつてこともね。でもそれを見ると尚更、ギャングに固執する必要なんてないように思えるけど？」

「そうか。傍から見るとぼくはそう見えるんだな」

確かに、その気になれば外国で身一つでどうにかできるかもしれない。大学を放逐されたときと比べれば選択肢はたくさんある。

なのにぼくはネアポリスから出るなんて思いつかなかつた。その理由について考えようとすると、今も服の下に残る凍傷の跡がつっぱるような気がした。

ボートが風を切って海に行く。波があたつて飛沫が飛ぶ。くおんは舵を握ったまま沈黙を守っている。

フーゴの頭にまず最初に浮かんできたのは、全く唐突で、答えになつてない、今はなき過去の風景だった。

「あの、リストランテ。行けばだいたいブチャラティ、アバッキオ、ミスタ、ナランチャのうち誰かがいて…エスプレッソを飲んでた」

ブチャラティチームのたまり場だったリストランテ。スパゲッティを頼んでおけばハズレはないが、実はピザはそこまででもない。それに切り分けるものを頼むとたいいミスタが4に固執し、いつものジnkスの話を持ち出してくる。

その時の光景が突然フーゴの頭によぎつたのだ。

「バカみただが…ぼくがここにるのは…そう。まだあいつらが

そこにいるような気がしてならないからなのかもしれない」

「……………わかるかも、それ」

「…おまえ、てきとうに答えてないか？」

「そんなことないよ！…僕にもあるんだ、二度と帰れない場所ってやつが」

目の前に島らしき影が見えてきた。フーゴは追求するのをやめて、目の前に見えてくるはずの港の明かりを目を細めて探した。

だがそこで突然、エンジン音と漣の間に不自然な何かか聞こえたのだ。

る、れ…

ら…ら…

らら…ら

「今、歌ったか？」

「はあ？なアーに言ってるんだよ、フーゴ」

「…え？」

目の前にいるのはナランチャだった。カプレーゼをフォークに突き刺しながら、こちらを見つめている。口の端にはトマトの種がついている。

フーゴはグラスを口につけていて、危うく中身をこぼしそうになっていた。

「遅えな、ブチャラティ」

ナランチャの左手にはミスタが座っていて、椅子を傾けて出口の方を見ている。いつものリストランテだ。ミスタの向かいのアバッキオは最近買ったMDでなにか曲を聞いている。

フーゴはグラスを取り落とし、席を立った。水がこぼれ、グラスは割れてしまい、ナランチャが悲鳴を上げる。

ぼくはさつきまで…

さつきまで？

突然頭が霞がかったようになり、自分が何を思い立ち上がったかわからなくなる。フーゴは眉間を押さえ、テーブルに手をついた。真っ白なテーブルクロスだ。

「何だ、どうしたんだよフーゴ……」

アバツキオが面倒臭そうに破片をナプキンの上に集め始めていた。ナランチャは心配そうに、というよりは不気味なものを見るような目でこつちを見つつ「なんだア？フーゴ、頭痛か？」と声をかけている。

ミスタは机の上のシミをバンバン叩くようにして拭いている。

「……す、すまない」

強烈な違和感に襲われ、フーゴはまた席に座った。だがその違和感の原因がわからない。まるであつという間に箱にしまわれてしまったかのようなだった。

「そんな調子で大丈夫かよ。ブチャラテイの連れてくるやつってのがもし幹部だったら、見苦しいところ見せられねーんだぜ」

アバツキオはヘッドホンを外して言う。

「大丈夫だ。さつきはちよつと……寝ぼけてた」

「お前居眠りしてたのかよ！」

ナランチャが笑う。いつものように。つられてミスタも笑いだし、フーゴは怒った。

そうだ。確か今日はブチャラテイがある人を紹介したいと言ってみんなを集めたんだった。

仕事上大切な取引相手ならばいつものレストランに呼んだりしない。だからきつと恋人だ！とミスタが盛り上がり、ナランチャと賭けをしていた。地域の自警団をしているぼくたちチームに、そういう浮いた話は今までなかったから一大イベントだ。

そう。そうだった。

それで待ってる間にナランチャが腹が減ったとごねてカプレーゼを食べだし、ぼくはそれに呆れていたんだった。

そうこうしていると、レストランのドアが開いてそこからブチャラティが入ってきた。傍らには女性が立っていた。

「またせたな、お前ら」

「えっ…ブ、ブチャラティ…まさか紹介したい人…って…！やっぱり…!？」

ナランチャががくがく震えながらブチャラティに尋ねた。ブチャラティははにかみながらその女性を紹介した。

「彼女はトリツシュ・ウナ。とても親しくしている女性だ。トリツシュ、彼らはオレの仲間だ」

「はじめまして、トリツシュ・ウナです」

フーゴ以外全員が立ち上がり、ブチャラティの周りに集まった。フーゴは何故か立ち上がれないまま、ワンフロア向こうでわいわい騒いでるチームを見ていた。

柔らかな日差しに包まれた全員を見てると、脳の奥からじんわりと幸福な気持ち湧いてくる気がした。それと同時に、なにか大切なものまで麻痺していつてるような気もする。

ナランチャが楽しそうにトリツシュに質問をしている。ブチャラティとどこで知り合ったのか、確かに気になる。トリツシュは笑顔で、時々ブチャラティと視線を交わしながら楽しそうにそれに答えている。

アバッキオはきつとブチャラティがトリツシュを連れてくることを知ってたに違いない。目を細め、幸せそうな二人を見ている。

「ん？フーゴ！お前まで彼女連れてきたのか」

アバッキオが窓の外を見ながら言った。フーゴが窓の外に注目するより先にブチャラティがその人物を中に招き入れた。

「うわー、なんかお邪魔じゃなかったですか？ごめんねっトリツシュ…ボク、たまたま中覗いただけなんだよ〜」

声が聞こえた。確かに聞き覚えがある。だが背の高いアバッキオとミスタに遮られて姿は見えなかった。

「邪魔なんかじゃないわ。あなたと私も彼らと同じくらい仲がいいもの」

「ああ。きみもよければ一緒にお茶をしよう。椅子を用意してもらわなきゃな」

ナランチャたちがワイワイとその人物をからかい始めた。

「よお！フーゴが恋しくてきたのか？」

「茶化さないでよくナランチャー！」

「お熱いね」

その人物は、柔らかな日差しに包まれていて姿が曖昧だった。鴨居をくぐって、少し影になったこちら側に来てようやく姿がはっきり見えた。どこからか潮の匂いがした。

「やあ、パンナコツタ・フーゴ」

そこに立っていたのは全身ずぶ濡れの人物だった。赤毛が目元にかかっているせいで表情はよく見えない。ただ隙間から見える青い瞳はとても冷たい。

レストランにはあまりにも場違いな様相の“彼女”に、フーゴはまるで本当にレストランでたまたまあったかのような自然な挨拶をした。

「やあ、くおん」

## 05. パープル・ヘイズ

「…はじめまして…といってもいいよね」

「来るなら言ってくればよかったのに」

「くおん」はフーゴの目の前、ナランチャが座っていた席に腰掛けた。濡れて額に貼り付いた前髪を右へ流した。

オレンジ色の髪はいつもより深みのある赤に見える。光の加減のせいだろうか。それとも濡れているからだろうか。

いつもはポニーテールだった気がするんだが…気のせいかな。

「…くおんは、甘い好きじゃあなかったよな。ダイエット中だったか。ぼくは少しくらい太っていたって気にしないけど…」

「ふうん。そうなの？僕、彼女と一緒にご飯食べたことないから…」

くおんは真っ直ぐフーゴを見つめる。その右目の周りは火傷のあとがある。

くおんの顔に傷なんてあったらどうか…？

フーゴの不思議そうな顔に気づいて、くおんは唇の端を歪める。

「安心して。くおんはちゃんと実在するよ。情報チームのチーフだし、こういう性格だし、服装もだいたいこんな感じ。…変装がてら色々やってたんだけど…海で全部落ちちゃったね。もし会うことがあったら友達になってあげてよ」

「…あ、ミスタたちの言う事ならあまり気にしないでくれ。ぼくたちはまだそういう関係じゃあないのに、勘違いしているんだ」

くおんは机の上のカップを右手で持ち上げた。手袋をしてないむき出しの鉄の義手が見えた。匂いを嗅いでから飲まずにそれを置く。

そういえば、香りを感しない。

強烈な違和感に襲われながらもフーゴはくおんに話しかける。

「今日は…なんでここに？」

「僕がここにるのは、僕のスタンド能力のおかげさ。あの矢、精神を支配する力というだけあるよな。アンジェリカの能力を介してだが、他人の夢にこうして入る事が出来た」

彼女の言っていることがよくわからない。だがフーゴは「へえ」と、

まるで世間話をしてるかのような相づちをうつ。

フロアをまたいだ向こうではみんながわいわいとなにか話しているが、フーゴには後ろ姿しか見えない。不思議と輪郭がぼやけている気がして、目を擦った。

フーゴの視線の先を追って「くおん」はちらりと後ろを見やった。そして向き直ると、どこか寂しげな顔をして言った。

「ここがさつき言ってた戻りたい場所なんだね。素敵だ。いつまでもここにいさせてあげたいのはやまやまなんだけど、時間がなくてね……」

「…そうだな。ヴェネツィアにはまた行こう。結局、教会にはいけなかったから……」

よく見ると「くおん」は左右の目の色が違う。それに火傷のあとに囲まれた右目はちよつと焦点があつてないように見えた。

「パンナコッタ・フーゴくん。道中で君のことはそれなりにわかったよ。割と楽しかったね」

突然、頭がガンガンと痛みだした。脳みその中で何かが暴れているみたいだ。フーゴは思わず額をおさえた。

「僕は君のことを許すべきか、ずっと観察してた。君は僕の大切な人を二人も屠ったからね…それも、とびつきり残酷な能力で」

「くおん」はそんなフーゴに構わず話し続けている。頭痛のせいで彼女の声がわんわんと反響している。

そこでフーゴは、さつき割ったグラスの破片が手のひらに突き刺さっていることに気づいた。

「君がその能力通り、獰猛で救いようがない人間だったら僕も悩まずにすんだよ。でもそうじゃあないから、困るよね」

フーゴはおそるおそる破片を抜いた。深々と肉に食い込んでいたガラス片。傷跡からは血が流れ出しているにもかかわらず、全く痛くない。

「……………きみは……」

目の前にいる人物を再び見つめた。そうだ。彼女の顔はたしかに



くおんだが、フーゴの知ってるくおんじやない。

「…きみは…誰だ…？」

「僕はブランクだよ。ヴォート・ブランク」

気づくと、二人はポンペイ遺跡の広場に立っていた。見覚えのある鉄製のゴミ箱と、崩れかけた壁と、鏡がある。

「なぜ…ぼくに、会いに来た…？」

「僕にも大切な人がいたんだ」

そこには二人以外の誰もいなかった。ゴミ箱に書かれた文字は反転していない。ここは一応「現実」になるのだろうか。だかなぜか濃密な人の気配がして、フーゴははっとして鏡を見た。向こう側に人影が見える。

「復讐をしに来たのか？」

「正確には、そうするか決めかね」

フーゴの頭からどんどん靄が晴れてきた。それにつれ左腕に打撲の痛みや悪寒や、体の感覚も戻ってくる。

ブランクの濡れそぼった髪をよく見ると、髪束のところどころにくおんの髪色と同じ明るい茶色が残っている。カラスプレーでも使っていたのだろうか、どうやら濡れて落ちたらしい。

たしかに、ソウルステイラーといえは赤毛だ。面識がないとはいえ、くおんが赤毛ならきつと警戒していただろう。

フーゴは、いつか自分はソウルステイラーに値踏みされ、生殺与奪権を行使されるだろうとは思っていた。だがまさか、こんなにすぐそばで自分を観察するとは。

ソウルステイラー。魂を奪うもの。あるいは狙撃手、暗殺者。目の前にして感じるのはいそれらの肩書きにそぐわない、同じ年くらいの若者で、例えばジョルノのような凄みや、暗殺者たちのような殺気があるわけでもなかった。

「僕の師匠は、復讐をよりよく生きるための第一歩だって言っていた。でもリゾットは…暗殺チームのリーダーだったんだけど…復讐を果たしてから人生が終わっちゃった。僕にはよくわからない。なんの

ために復讐なんてするんだろう…。君はどう？」

くおんに化けていたときは打って変わって、ブランクの口調は落ち着いた、穏やかなものだった。そのせいもあって、とても大人びた印象を受ける。

「ぼくは復讐する相手がいない。強いて言うとならば、あの日負けたぼくを…許せない」

「…質問を変えるよ。君が僕だったら、復讐するかな」

「わからない。でも…自滅するよりかは殺される方がいいとは思う」

「君は自分が嫌いなのか？」

「…：嫌い、とは違う」

沈鬱な表情のフーゴを見て、ブランクは肩をすくめて少し軽めの口調で言った。

「…逆に僕が君だったら…ヴォルペみたいは無茶な逃走をしてたかもって思うよ。やけっぱちになって、無謀な賭けにでてたかも」

「やけっぱち、か。たしかに、ぼくはそうしかねないな」

フーゴは無意識に握っていた左の拳を開いた。あの日、自分で切り落とした左手。ジョルノに与えられた左手を。

手の中からゴポリと音がしてあぶくが浮き出した。急に周りが暗くなり、全身が凍えそうなくらい冷えていった。グラグラ世界が揺れ、ポンペイ遺跡の風景が揺らぐ。

「…そろそろ時間だ。決めてくれ。目をさませば、君は誰もいない現実に戻らなきゃいけない。目を覚ましたくないなら、ほっといてあげる」

シラクサ、オルティージャ島アレトユーサの泉

ら、らら……ら……らら……

風の音に負けそうなくらい弱々しい途切れ途切れの歌声が真つ暗な泉に響いていた。美しい女神、アレトユーサが姿を変えたと言う伝

説がある。

その柵に腰掛けて危なっかしく足を揺らす少女がいた。アンジェリカ・アツタナシオ。『血液がささくれだつ』奇病に侵された彼女の唇からは赤い血が流れ出している。本人はそれに気づいてすらいなののか、暗闇をぼうつと見つめながら細かい声で歌い続けている。

アンジェリカの体はヴォルペの麻薬が切れかかり、痛みと禁断症状が徐々に出つつあった。もう少し経てば病氣由来の全身の激痛が襲ってくる。だがアンジェリカはヴォルペとともに目的の教会に行くことを拒んだ。

敵を撃破するためにはすこしでも近いところにいたほうがいい。絶対にヴォルペを守るのだという意志が、麻薬でラリったアンジェリカの理性を現実には踏みとどまらせていた。

汗が異常に出てきた。アンジェリカは予備の薬が入った注射器を取り出す。手ががくがく震えてうまく刺せない。

その震える手を、手袋をした手が後から優しく包み込んだ。途端、痛みが消えていく。

後ろに立つ誰かがアンジェリカを抱きすくめた。その温もりに、全身の痛みや不安がじんわりと溶けて麻痺していくような心地になった。

「マツシモ…?」

「うん」

「ちゃんと足止めしてるよ。心配しないで」

「そうだね」

大きな手はアンジェリカの頭をゆつくりと撫でた。慈しみに満ちた手で。

アンジェリカは目をつぶる。鳥のさえずりが聞こえた気がして、後ろを振り返ろうとした。

だがやんわりと、頭を押さえて止められた。

「寂しい思いをしてきたんだね」

「…え?なに、マツシモ…よく聞こえない」

「優しい夢をありがとう」

「えへへ…なんだか、抱きしめられても痛くないよ。なんでだろう」  
後ろの誰かがより強く抱きしめた。アンジェリカの視界に赤い髪が横切った。

「…マツシモ…？」

「おやすみ」

その後アンジェリカは自分に何が起きたのかわからないまま頭を撃ち抜かれ、死亡した。まるで殺された瞬間が消し飛んだように、マツシモに抱きしめられたという幻覚に意識が取り残されたまま死んだのだ。

背後に立っていたブランクは、崩れ落ちるアンジェリカの亡骸を丁寧に横たえ、吹き飛んでしまった頭に腰に巻いていたスカーフをかけた。

ブランクは幻覚にかけられた時点でアンジェリカの精神構造を知り、鳥をとらえ、コピーしたのだ。ミザルーの…いや、矢による進化はとどまるところを知らない。

ボートの転覆では溺死しかけたとはいえ、ブランクはヴォルペにも、石仮面により生まれる吸血鬼にも負けることはないだろう。

「…さて…フーゴはちゃんと起きただろうか…」

「パンナコッタ・フーゴ…」

「マツシモ・ヴォルペ…」

フーゴは目の前に立つ男の名を呼んだ。かつての級友、そして今は殺さなければならぬ相手。

二人がいるのはドウオモ。オルティージャ島で最も大きい、もとは古代アテナ神殿だった教会だ。だが外観と比較して、内部はシンプルなルネサンス期の設計だ。

その最奥、守護聖女ルチアの祭壇のすぐそばにヴォルペと、人質のシーラEがいた。シーラEは床に倒れ浅い呼吸を繰り返している。

「なあ：フーゴ。パツシヨーネにいる意味があるのか？あいつらは危険とみなすや否や、能力を奪う。与えたくせに、だ。あまつさえ、オレは抹殺対象だとよ。そんな勝手が許されるのか？」

「：ソウルステイラーは能力を奪うだけじゃない。改良し、また与えることができるそうだ。はじめからおとなしく服従していれば抹殺対象なんてならなかった」

「ハツ：『服従』！欺瞞もいいところだな」

ヴォルペは嘲り笑った。おかしくておかしくてたまらないと言いたげだった。

「スタンド能力は精神エネルギーの形そのものだ。オレ自身の魂だ。それを勝手に変えられるだど？ふざけるな。そんなのは冒涇だ！」

広い地下空間にヴォルペの罵声がこだまする。冷え冷えとした空気が肌をさすように感じられる。

ヴォルペは壁の一角を思いつきり蹴りつけた。生身の人間の物とは思えない威力だった。ガラガラと壁が崩れる。

「出せよ、おまえのパープルヘイズを。オレを殺しに来たんだろう」

「：ぼくは…」

ヴォルペはその崩れた壁の中から何かを取り出した。人の頭より少し小さいくらいの、楕円形の石だ。これが回収しなければならぬ『ブツ』なのだろう。

ヴォルペの手に渡る前に：というのは果たせなかった。もう戦って勝ち取る他ない。

「オレが一度こいつを手によればシーラEは死ぬ。使い方はこいつのスタンドでわかったからな。そしておまえの殺人ウイルスとやらも無効になる：はずだ。なんてったって生きてるかどうかも怪しいからな」

フーゴはシーラの顔をもう一度みた。あどけなさの残る顔立ちは苦悶の顔で歪んでいる。彼女にも理由があつて任務が与えられた。

誰しもが理由があつてここにいる。フーゴ自身もだ。

「ぼくのスタンドは役立たずだ。誰かれ構わず、無差別に殺してしま

う、どうしようもない能力だ」

フーゴは下を向き、頭の奥をきつく締め付ける罪悪感を振りほどくように言った。

「ぼくはあの日敗北した自分を……いまだに許せていない」

フーゴは、目が覚めた時にそばに置かれていた拳銃を構えた。

ヴォルペの居場所の書かれたメモと、くおんの髪をまとめていたりボンでまとめられていたベレッタだ。

それを見るとヴォルペはマニック・デプレッションを出現させ、その針を自ら腕に刺した。能力により過剰に生命エネルギーが引き出される、命を削ることも厭わないヴォルペの切り札。

フーゴは引き金を引いた。それが合図となった。

ヴォルペはマニック・デプレッションによって研ぎ澄まされた感覚で、フーゴの狙いは頭だと見抜いていた。フーゴの指が引き金を引くのとほぼ同時に、頭の位置をずらす。放たれた弾丸は二発ともヴォルペの髪を何本か引きちぎるだけで後ろの壁に当たった。

フーゴはなおも発砲する。一発はヴォルペの太腿に当たるが、まるで効いていない。相手は生命エネルギーで強化された体だ。関節を破壊するか足そのものを吹き飛ばさない限り倒れないだろう。

ヴォルペが腕を振り上げた。強化された脚力と腕力ではガードしたとしてもそれをやすやす貫通するだろう。

フーゴはとっさの判断でかがんだ。ヴォルペのパンチは空振る。だがヴォルペは全力で踏み込んだ脚でそのままフーゴを蹴った。

フーゴはそのまま吹き飛ばされて床を転がった。衝撃に白黒する頭でも、とっさにガードした右腕の骨が砕けているのがわかった。

フーゴは銃を持ち替えヴォルペを狙う。だがヴォルペはとっくに狙うまでもないほど至近距離に飛び込んできていた。フーゴはとっかく撃った。だが攻撃の甲斐なく再び床に組み伏せられた。

ヴォルペはフーゴの顔を殴る。その衝撃で手から銃が吹っ飛び、流れ出た血で視界が真っ赤に染まった。

ヴォルペはフーゴの首に手を回し、骨を折らんばかりの力で絞め上げた。真紅に染まった世界で、鬼のような形相のヴォルペが怒鳴る。

「なぜパープルヘイズを出さないッ！自分のウイルスに冒されるのが怖くなったか」

「…そうだ。ぼくは死ぬのが怖い」

投げやりに生きて結末にたどり着くのは簡単だ

ぼくはパープルヘイズを自分の安全が完全に保証されている時か、死ぬ瀬戸際にしか使ってこなかった

何度あの日を振り返っても、ぼくはパープルヘイズという切り札をどう切ればよかったのかわからないままでいる

だが結局、全ては過ぎたことだ

ぼくはギアツチヨに瀕死に追い込まれ、最後に左手を切り離し、釣り竿のスタンド使いを殺した

それが結果だ

ぼくはあの日判断に自信が持てず、ずっとその場から動けないでいた

けれども立ち止まって、二度と戻れない道を眺めるだけの日々はもう嫌だ

ブチャラティたちについていけなかった自分のままなんてごめんだ

自分で道を決めなきやまるで意味がない

「組織だとか忠誠なんてクソ喰らえだ…この任務も、お前の生死もどうでもいい…」

フーゴは右手でヴォルペの腕を掻きむしりながら、砕けた左手の指先に拳銃が触れるのを感じた。今まさに死にそうだっていうのに不思議と頭が冴えてくる。

「ぼくは生きるために戦う。生きてなきや道を選ぶことはできないからだッ！」

フーゴはヴォルペの腕に突き刺さったままのマニック・デプレッションの棘に自分の手のひらを思いつきり押し付けた。

マニック・デプレッションの効果でもう絞りきったと思っていた力が空から湧いてくる。

フーゴは血でぬめる床についたヴォルペの足を蹴り払い、傷みの消え去った右手で銃を掴み、デタラメに引き金を引いた。

ヴォルペはなおもウイルスを使わないフーゴに激高し叫んだ。

「臆病者ッ！」

そして腹に空いたいくつもの穴を見て、痛みこそないものの自分の命に関わる傷だと悟る。とっさに仮面を自分の顔につけようと振りかぶった。

終わった。ヴォルペもフーゴも確信したその時、恐ろしく冷ややかな声が聞こえた。

「止まれ」

唐突に聞こえてきた命令に、ヴォルペは思わず静止してしまふ。途端に自分の立つ床が抜け、フーゴごと真つ暗な闇に飲まれた。手から仮面の感覚が消え、温い液体が這い回るような不快な感覚が腕から全体に広がった。この感覚は知っている。アンジェリカのナイトバード・フライングに違いなかった。

「ッ……」

ヴォルペは声のしてきた方向を見た。そこは教会の入り口だったはずの場所だが、いつの間にか朝焼けに照らされる運河が広がっていた。

運河の真ん中に立っているのは、赤毛の少年だった。

「ソウル……ステイラー……」

ヴォルペは平衡感覚を失い、その場に倒れそうになる。だがこの場所には床なんて存在しないかのように、落ちる感覚がずっと続き、吐きそうになる。

そのヴォルペをソウルステイラーはただ見ていた。

「……アンジェリカは……」

ソウルステイラーは答えなかった。それでヴォルペはすべてを察した。

ヴォルペはフーゴが差し向けられたと気づいたとき、てっきり彼に



自分を殺させるつもりなのだと思っていた。だがどうやらとんだ思い違いをしていたらしい。

「どこまで…傲慢なんだ。お前は…」

ヴォルペはそうつぶやくと、フーゴの上に倒れ込んだ。石仮面は地面に落ち、血に反応して針を出した。ブランクは胸から詰めていたらしい布をひっぱりだして仮面を拾い、そのまま包んだ。

フーゴはヴォルペを押しつけてから、ブランクをじっくりと見た。ソウルステイラー、話に聞いているよりも遥かに強い。能力を奪うスタンドだとは聞いていたが、その性能を向上させ自分で使うことができるとなると、複数の能力を既に有してしまった彼を倒すのはほとんど不可能だろう。

道中、*“くおん”* がやけに気楽だったのもこの力さえあればあらゆる敵を無力化できるからだだったのかもしれない。

本当に任務の成功なんて念頭になく、自分を観察しにきていただけなのだ。

ブランクは右腕の義手からコードを引っ張り出していじくった。ノイズ音がどこからか聞こえてくる。どうやら義手に無線を仕込んでいるらしい。

「こちらパンサー。標的を拘束。マスクも回収した。繰り返す。標的を拘束。マスクも回収。オーバー」

『…拘束？標的は生きてるのか？オーバー』

「ああ。標的も人質も生きてる。救護を要請する。オーバー」

『チツ…てめー余計な情けかけたんじゃないやあねーだろうな。…すぐ向かわせる。おまえは待機だ、オーバー』

ブランクはそれを聞くと布で包んだ仮面を胸部に収納した。得体のしれない針が出るのを見てよく急所にしまえるな、と思いつつ、それもまた*“彼女（彼？）”*らしいと感じた。

「…くおん…きみが、ブランクだったのか…」

「そうだよ」

「なぜヴオルペを抹殺しなかったんだ？君なら殺せただろう」

「…殺さなくても勝てたからさ」

見かけもそうだが、口調以外もおんとはかなり雰囲気が違う。演技一つでここまで変わるものかと感心しつつ、シーラEのそばに屈んで拮抗薬らしきものを注射するブランクをまじまじと見つめていた。

ブランクは視線に気づいてか、ちらりとフーゴを見たあと気まずそうな間をおいてから話しかけてきた。

「……体」

「え？」

「ヴオルペの麻薬で一時的に麻痺してるみたいだけど、ぐっちゃぐちやじゃん。多分もうすぐ痛みだすよ」

フーゴは自分の体を見た。意識があるのが不思議なくらいにグチャグチャだ。麻薬で痛みは感じないが、あからさまに肋骨が折れている箇所がある。右腕はところどころから骨が飛び出ているし、おそらく殴られた顔もひどいことになっているんだろう。

「シヨック死しないといいね」

「…ああ」

話題が尽きてしまった。ブランクは勝手にフーゴの手当をはじめた。その沈黙にいたたまれなくなつて、フーゴは尋ねる。

「きみは…どんな夢をみた？」

「……イルーゾオがね、新しくホームシアターを作ったから見に来いって言うんだ」

ブランクはフーゴの傷口を縫いながら話し始めた。

「映画なんてろくに見ないくせに、面白そうと思うと手を出しちゃうんだよね。金遣いが荒いんだよ、あの人は。だから僕は浪費癖はなんとかした方がいいって忠告したんだ」

長い前髪が顔にかかっているせいでフーゴから表情は見えなかったが、とても穏やかな口調だった。まるで、子どもに物語を聞かせる母のようだ。

「そしたらなぜか、車両保険だとか月々の電気代の書類を渡されて僕が家計簿つけるハメになつてさ。僕はテメーの母ちゃんかよつてく

「らい、先輩の家計は知ってたんだ」

ブランクは糸を切って、脱いだ手袋で傷口を縛った。

「ある日クレジットカードの明細で、僕が前に欲しがってた小型のバイクが買われてたのを見つけた。カレンダーを見ると、僕が入って三年のお祝いが近かった」

ブランクと初めて目があつた。澄んだ青色の瞳は誰かを責めるようなものではなく、ただひたすら哀しそうだった。それを見てフーゴは何も喋れなくなった。やっと絞り出せたのは謝罪の言葉だった。

「……………すまない…」

「君が謝ることじゃないでしょ？」

そう言つて、また二人の間に沈黙がおりた。ブランクはそれに気まぐさを感じてか、急に恥ずかしそうに顔をしかめながらフーゴの方をちらりと見た。

「……………あのさ」

「なんだ？」

「…僕のくおんの演技はマジで演技だから。そのー、ほら。いえいう、とか…本物のくおんはまじでそう言うんだけど…うー…僕は絶対言わないし、こんな明るくないし…それにこの女装！女装は本物もやつてるからで…」

ブランクはまだ弁明を続けていたが、フーゴは急に襲ってきた痛みでそれ以上聞き取ることができず、そのまま気絶した。

次に目を覚ましたのは、4月と同様、病院のベッドの上だった。

そして季節はあつという間に過ぎ、いつの間にか秋も深まつていた。もう上着を羽織らないと肌寒い。フーゴは黒塗りのベントレーの後部座席に乗せられ、ネアポリスの郊外へ連れられていた。

車を運転するのは本物のくおんだった。指定された場所にやってきた運転手の第一声を聞いてフーゴはかなり衝撃を受けた。

「運転手のくおんちゃんですッ！いえいう！このクルマ、組織のなんぞで安全運転で行きまッショー！ぶいぶい！ピーーッス！」

ブランクの化けていたくおんと違い、本物のくおんは黒髪をポニーテールにしてゴスロリを着ている。だが運転態度は概ね同じだし、何も無いのに鼻歌を歌っているあたりはものすごいデジャヴだった。

くおんは込み入った路地を抜けると一息ついて話しかけてきた。

「ねーねー、きみブランクさまと仕事してたんでしょっ!? すっごいね！ ブランクさまってさあ、ちよおークールだけど優しくってさあ、ステキでしょー！」

「ああ…まあ。たしかにクールだな」

テンションがブランクの演じるくおんそのもので、フーゴは思わず笑ってしまふ。くおんは理由がわからずキョトンとしながら首を傾げる。

「えっなんで笑うの?! まさかブランクさまからなんか聞いてる?」

「ああ。なんというか、聞いてたとおりの人だって…」

「ええーっ！ 感激！ ふわー…うふふ！ ねえねえボクのことなんて言ってた?…でもやっぱ、あんま聞きたくないかも！ 悪口じゃあないよね? あー！ 言わないで！」

くおんは目的地につくまでずっとそんな感じで勝手に話したり、照れたり、笑ったりしていた。

フーゴはそんなくおんをみて、なるほど確かに自分が苛ついてないときならば、こういうのを可愛いと思えるのかもしれないと思った。

車が止まったのは郊外の邸宅だった。小高い丘の上にあり、美しい森を爽やかな風が抜ける。邸内は普段使ってなさそうで、家具のほとんどに白いシャツがかけられていた。

通された部屋は書斎だった。壁一面に隙間なく本が詰まっっていて、実用性よりも美を重視したラインナップだ。その部屋の窓際のデスクにはブランクがいて、持ち込んだらしいボロボロの本を読んでいた。入ってきたフーゴを見るとそれを置いて会釈した。

「顔、元通りになってよかったね」

「ああ…おかげ様で」

「早速仕事の話で悪いけど…今回の任務は麻薬を撲滅したい人、厄介

者全員に死んでほしい人、君に会いたかった人：等々色々な思惑が重なった結果、一番マシな形で収束したわけだ」

ブランクは最後に見たときよりもっと凛々しく、男性的に見える。本当によくここまで自分を変えられるものだと感じしてしまう。

「ぼくはあの仮面が何なのか、もう詮索するつもりはありません」

「かしこまなくていいよ。…ま、アレに関してはそれがいいね」

ブランクはぱん、と手を顔の前で合わせてフーゴの顔を改めて見つめた。

「ソウルステイラーは、スタンド能力を奪ったあとに進化させて返すこともできるんだ。君の殺人ウイルスは制御できたら強い武器になるだろう？組織でも過去を帳消しにして押し上げられるよ。今回の報酬として、どうかね」

ブランクは生身の左手をフーゴに向けて差し出した。だがフーゴはそんな試すような笑みを浮かべてるブランクに苦笑いを返し、それを辞した。

「この能力を手にしたとき、これが自分かと絶望した。スタンドつていうのは魂のエネルギーの形だからな。見るのも嫌だ。認めたくない…。でも、それが自分だ」

ブランクは目を細め、微笑む。フーゴは自信を持って彼に答える。

「きみにスタンドを進化させてもらうのも、魅力的だ。でもそれではぼく自身は何も変わらないし、ぼくじゃない。ぼくに必要なのは力じゃなくて、もっと小さなことだから」

「…そっか。いいね。僕もそう思う」

ブランクは手を引っ込め、何かを思い出すように目を瞑った。どこか悲しげだけど、優しい表情だ。フーゴはそれを見て、ずっと聞きたかったことを尋ねてみた。

「ぼくに復讐するかは決まった？」

「まだ。でもね、僕はきっと君を殺さないよ。殺したからってスッキリ解決することじゃあないしね」

「…そういうものだろうか」

「そうだよ。君だって、本気でキレたあと、ぶん殴ってスッキリするこ  
とあった?」

「…たしかに」

「でしよ?」

二人は微笑みあった。

そのあと二三金の話をしたあとに、フーゴは部屋を退出した。ブラ  
ンクは最後に「さようなら」と言って手を振った。

どうやら今日は別の訪問客もいるらしい。フーゴが玄関に行くと、  
ちょうど扉が開いて人が入ってきた。小柄な短髪の少女だった。

どこかで見覚えがあるなと思いつつ、軽く礼をして去ろうとした。  
するとすれ違う直前、少女の方からフーゴに声をかけてきた。

「ねえ…あなた、パンナコッタ・フーゴ?」

「はい。そうですか」

改めて少女の顔を見て、フーゴはそれが前回の任務の救出対象、  
シーラEだと気づいた。髪を切っていたせいでパツと思ひあたらな  
かったのだ。

「あたし、あなたにお礼を言わなきゃいけないの。…あなたは知らな  
いと思うけど、あなたはあたしの大切な人の仇をとってくれた」

「…そうだったのか。…いいんだ、お礼なんて」

「ううん。ありがとう」

フーゴの返事も待たずに、シーラは礼を言い終えんとすぐ廊下を進  
んでいった。

フーゴは深呼吸してから振り向いて、シーラを呼び止めた。

「よかったら、今度ゆっくり話さないか。スパゲッティのうまい店が  
あるんだ」

シーラは目を丸くしてから、ちよつとだけ微笑んで答えた。

「いいわ」

そして、客が帰って誰もいなくなった屋敷にはブランクだけが残っ

た。ブランクは腰掛けながらぼう々と天井を眺めていた。そうして30分ほど無為に過ごしていると、外でエンジン音がして乱暴にドアを開ける音がした。

ギアツチヨが迎えに来たらしい。ブランクは立ち上がったのろのろと上着を羽織った。もうその頃には書斎の扉はノックもなしに開かれていて、まだ支度を終えてないブランクを見てギアツチヨがはあーっとため息をついた。

「どんくせーな、オイ」

「まだ約束の5分前だろ」

ブランクは適当に髪をまとめ、ネクタイをポケットに突っ込んで邸宅を出た。ギアツチヨの新車に乗り込んで一息ついた。

これからローマに行つてSPW財団の人間と打ち合わせだ。

ギアツチヨは自分で運転するのが好む。幹部になつても他人に運転させた車に乗るのを嫌がつて、好きな車を乗り回している。

高速に入るまでは新しいチームがどうかとか、メローネがどうかとか、適当な雑談をしていた。一通り話のネタが尽きると、ギアツチヨはいつもより静かな口調で言った。

「ヴォルペが自殺したそうだ」

「…そう」

「予想はできただろ。あいつはスタンド能力も仲間も、将来も何もかも失った。そういうやつがすることは一つしかねエ。なんでお前、アンジェリカは殺せてヴォルペはそうしてやんなかった」

「それは…：…だつて…」

「だつて？」

ブランクはネクタイを結びながら、ほんの少しだけ固まった。

「私は…アンジェリカは…彼を愛していたから」

ギアツチヨは黙つてブランクを見た。

ブランクはソウルステイラーでナイトボード・フライングを奪う時、アンジェリカの精神に踏み込みすぎたのだらう。ブランクの瞳にはあろうことか涙が溜まっていた。

それを見て、ギアツチヨは片手でブランクの頭をぶつ叩いた。

「ふあ?!なんだよ!あたらしいめんたまとれちゃうだろ!」

「いい加減目を覚ませ。それは悪い夢だ」

「…わかつてるよ。わかつてるけど…」

ブランクは本物の瞳から零れてきた涙を拭った。ブランク自身、それが自分の涙なのかアンジェリカの涙なのかわからなくなっていた。ただ、痛烈な寂しさと悲しさが抑えようのないくらいに溢れてくる。

それを振り払うように、ブランクは頭を思いつきり仰け反らせ、空を見た。もう夜が来る。

「忘れんなよ、お前はお前だ。いつまでたっても手のかかる、オレの後輩だ」

「まだそんなこと言ってる!もう僕のほうが強いんだぞ」

「面白い。じゃあ今度正々堂々殺し合いでもするか?」

「そ、それはやだ…」

「臆病者」

「君子危うきになんとやら!だよ」

「はあ?なんでそこまで言っただけで最後まで言わねーんだよ。クソムカつくぜ…」

「いえいう!ほら、スピード上げようよ。涙を乾かさなくちや」

「文句があるならテメーで運転しろッ」

「事故る覚悟があるのなら!」

「チッ…」



モメンタリー・ラプス・オブ・リーズン

00. D O P E : 過去

街全体にネオンが灯る日暮れ頃、プロシユートはそのグラフィックアートまみれの汚い道を、いつもと違う「相方」と歩いていた。

「ご存知ですか？先の大戦より前に、アンフェタミンは、発見当時鼻詰まりの薬として一般に流通していました」

二人はスパッカ・ナポリを歩き、クアルティエーリ・スパニョーニへ向かっている。観光客向けの店が数多く並んでいるおかげで日が暮れてもまだ人で賑わっていた。とはいえ、それはあくまでも表向きの明るさだ。ネアポリスの治安は言うまでもない。一本奥の路地へ入れば人っ子一人いなくなる。

「そればかりか、ドイツ兵はみんなペルビチンという市販覚醒剤を飲んで戦地に赴いたらしいです。さらにさらに、子供の安眠に大麻が処方され、推奨されていたらしいです。：よかったですよね、僕たちこの時代にギャングで。だって、そんなに流通してちゃ商売にならない」

プロシユートは横でくどくどと麻薬について話す「相方」に尋ねた。

「勉強してきたのか？」

「ええ、そりやもう。ペツシアニキの代理ですんで！恥をかかないように一夜漬けです！」

ヴォート・ブランクはそれに笑顔で応えた。

これから暗殺任務をしようっていうのに呑気なやつだ。

D O P E

「依頼だ」

招集に応じたメンバーは、いつも通り淡白なりゾットの言葉を聞いて視線を交わした。この段階で誰が仕事をやりたがってるのか大体は把握できる。今回は誰も金に困っていたり腕を鳴らす機会を欲していないようで、ギラギラした目のやつはいなかった。

「ターゲットは売人だ」

「売人？クスリか？」

「そうだ」

「麻薬チーム絡みならオレは絶対パスだ」

それを聞いてギアツチヨはすぐに興味を失ったようだ。たしかに麻薬関連にむやみに足を踏み入れても余計なトラブルを抱え込むだけだ。

しかしリゾットは首を振った。

「いや、新規の業者だ。どうやら質の悪いヘロインをパツシヨーネのものだと偽って売っぱらっているらしい。それで何人か死んだ」

「救えねーやつだな」

ペツシがぼそつとつぶやいた。

「ちよつと待て。パツシヨーネの麻薬と、質が悪いとはいえ卸のヘロインじゃどうやったって儲けが違うだろ。売人は損じゃあねーのか？」

「営業妨害が目的ってことですか？そうまでしてイタリアで売りたいもんですかねえ…」

イルルゾオとブランクの疑問にメローネが答えた。

「薬物市場ってのはどこも新規参入が難しい。なんせ商品が商品だ。売り手と買い手に信頼関係が必要だろう。今回はその信頼を崩そうとしている奴がいるのさ」

「ああ。どこかの幹部も言っていたが、『信頼』を『侮辱する』という行為に対してだけは命を賭ける”ってわけだ」

「ははん。つまり依頼主はあのタコか」

「で、標的の名前、写真、性別は？」

「写真はない。本名も不明だが、通り名はシザーマン」

「うわ、おつかねえー。両手がハサミなのか？」

「今回は搜索も込みでの任務だ。お察しのとおり、さる幹部直々の依頼だから報酬は弾む。経費も全額支払われる」

「デブの尻拭いか…オレはやめとく。人探なんてたるいからな」

メンバーはほとんど乗り気ではなかった。そこで黙っていたプロシユートが手を上げた。

「おいペツシ、やる気はあるか？」

「えっ?!オレたちでやるんですかい…?」

「やる気があるのか、ねーのか、どっちだ」

「や、やります!やるツス!」

「じゃありゾット、今回はオレとペツシでやるぜ」

プロシユートの言葉にペツシは怯えたような顔をしていた。そんな二人を見てイルーゾオが鼻で笑う。

「おいおい大丈夫かよ? 標的見つかんなくて泣きついてきても無視するぜ」

「間違つてもテメーには頼んねえよ。…いいな? リゾット」

「わかった。資料は今渡す。…じゃああとは好きにしろ」

リゾットの一声で会議は終了し、イルーゾオが気楽に言った。

「よし…ブランク、ホルマジオ。ダーツ行こうぜダーツ」

「あゝいいですねえ。メローネ先輩もどうですか」

「行く。ギアツチヨお前は?」

「ダーツなんてつまんねえ。的に矢をぶん投げてちまちま計算しろつていうのか? 何がおもしろーんだよ」

「奢つてやるから来いよ」

「チツ…しょうがねえな…」

「あとでリゾットさんもくるそーです」

いつの間にか聞いたのか、ブランクが楽しげにイルーゾオに話しかけている。各々席をたとうとする中、メローネがプロシユートにも声をかけた。

「お前らは?」

「ブリーフィングだ。気が向いたら行く」

「ちやんと来いよな」

プロシユートはペツシの方を見た。自信なさげに「ああ…？」と曖昧な返事をした。

「いやあ。まさかダーツからのビリヤードでペツシアニキが腰をやっちゃうとは思いませんでしたね」

賑わう人通り。クアルティエール・スパニョーニ(スペイン地区)は裏通りまで明かりが灯って活気づいている。もちろん観光客ではない。誰もが派手な色合いの派手な服、夜の装いだ。

ブランクも今日はいつもより踵の高い靴を選び、サングラスもレイバンのお高いやつをつけている。香水もいつもと違うようだった。行く場所が場所だから気合を入れてきたんだろうか。

「で、心当たりの店っていうのはどこだ？」

「もうすぐです。あ、ここだ」

看板も出てない一本裏のビルの地下へ降りていく。

「このママとは顔見知りなので、大丈夫です」

ドアを開けるとベルが鳴った。青臭い匂いがむつと漂う。大麻の匂いだ。

「あら。ブランクくんちゃんじゃない」

「アヴィー…」無沙汰してまーす」

そこはいわゆる”コーヒーシヨップ”で、もちろん非合法な場所だった。しかし餅は餅屋。葉は葉屋ということであつてブランクが働いていた風俗業界と深いコネのあつたこの店に来たわけだ。

広いフロアではチルな音楽が流れ、キマった連中がまったりと中央で踊っている。壁に沿うようにソファとベッドが並び、完全にリラックスした奴らはそこで寝たりヤツたりしていた。

なるほど確かにブランクの送迎業も必要とされるのかもしれない。「聞いたわよ」。『組織』に入ったそうじゃない？金回りが良くなつたなら客として来なさいよ！」

「いやあ。それがとんだ貧乏チームに配属されちゃいましたね」

ブランクは店主らしき男(いや、女と言ふべきなんだろうか?)と親しげに話し始める。濃い化粧に香水がプンプンで、いかにも薄暗い

この店内でしか通じない装いだ。

「で…そちらの彼は？…めちやくちやいい男じゃない!!」

「こちら僕の上司のプロシユート兄貴です！…実は仕事で、ママに聞きたいことがあって。ね、兄貴」

「あら。刺激的だわ。何かしら」

「最近、劣悪なヘロインで死者が出ているのは知っているか？」

「…ああ。うちは見ての通りウィード専門だけど…噂には聞かぬわ。でもその『商品』ってお宅のじゃあなかったかしら」

「そー！腹立つんだよー！詐欺なんだよそれッ！」

ブランドはすかさず畳み掛ける。

「僕らが卸すのは純正100%真つ白なチャイナホワイトのはずなんだよね。でも、問題のそれはだいぶくすんだ色なんだ。混ぜてる時点で、『偽物』なんだよ。でもみんなラリってるでしょう？だから誤解が解けなくてすっごく困ってるんだ」

ブランドはさり気なく大麻を吸い始めた。ラリったりしないのかよと思いつつ、傍観だ。多分それが一番店主の警戒を解く仕草なのだろう。ブランドはやけにそういうのがうまかった。

「…混ぜてるものを知ってる？」

「んん…多分だけど動物用麻酔とか、そこらへんでしょ？」

「そうよ。合成麻酔薬フェンタニル。はつきり言って使用者を殺すつもりで作ったとしか思えない、悪質なものよ」

「オレたちも早急に手を打ちたいが、今のところ通り名しか掴めてない。売人の名前はシザーマンだ。心当たりはないか？」

「シザーマン…シザーマンね…。生憎ねえうちはウィード以外仕入れてないの。そういう粉物の売人とは取引してない」

「ねえアヴィゲイル、現物持ったりしない？」

「あたしはそんなの手にも取らないわ。でも…」

そう言っただけで店主はダンスフロアを持つてる煙管で指した。

「あそこなら誰か持つてるかもね。ううん。もしかしたらシザーマンもいるかもしれない」

音楽がぐるぐると渦巻いて聞こえる。どうやら円形フロアの天井にぐるっと配置されているスピーカーで立体音響のようにしているらしい。大麻をやつてなくても酔つてしまいそうだった。

あきらかに素面の二人がホールの中央に出ても誰も気にしていない。煙で前がよく見えない上に、全員キマっている。

「この葉っぱは、シチリアの古いマフィアが持ってたルートで仕入れてるそうです。だからかなり上質で、キレがいい」

ブランクは鼻を鳴らす。匂いでシザーマンのヘロインを見つけようなんてしてるのだろうか？

「そのマフィアは、今やパツシヨナーネの傘下にあるとか。そいつの名前は…カキク？ケコ？なんかそんな名前だったような…」

「うる覚えじゃあねーか」

「いますかね、シザーマン」

「さあな」

プロシユートは客全員が吸ってるものを確かめた。全員葉っぱだ。粉ではない。プロシユートの警戒に何人が怪訝そうな顔をしていた。「なんだあんたら、何吸えばいいのかわからないのか？」

酩酊気味の老人が素面のプロシユートに絡んできた。若者の多い中では浮いている。

「そうなんですよ。僕ら無敵なんで大体の葉っぱじゃチルれなくて」

「そら難儀だ。粉は試したか？」

「一応ね。よく売ってるやつ。でもしばらくしまついたら全然効かなかった」

「あー、そりゃあんた。パツシヨナーネの麻薬だろう？ありやだめさ、なぜかすぐだめになっちゃう」

「困ったもんだよね。本場に行つて吸うしかないのかな」

ブランクは人から話しかけられやすい、というのを通り越していると思う。しかも相手がほしい答えを必ず返す。

「最近出回ってる…あたらしいパツシヨナーネの麻薬…試したことあるか？」

「噂には聞くけど…それ、ホントにあるの？」

「ああ。ここから南に2ブロック先のD O P E って店に行くといい。あとはお前さんの交渉次第さ」

「ありがとう、恩に着るよ」

ブランクは持ってた葉っぱを全部老人にやってプロシユートにウインクした。

「手がかりゲットですね」

「お前、探偵に転職したらどうだ」

「こういうのはむしろ警察っぽい気もしますが」

チームに入ってきたときからちぐはぐなやつだと思っていた。見た目の印象も男か女か、大人か子供かよくわからなかったし、性格も取ってつけたような明るさの下に冷たい諦観が積もっているような、そんな感じだった。

ペツシが新芽なら、ブランクはむりやり葉っぱをもぎ取って新芽のように見せたみたいだな、そういう違和感があった。

もちろん暗殺チーム内でそんな矛盾や違和感を抱えてるやつなんてゴロゴロいる。だからそれは問題ではないのだが、そのことを隠すのがうますぎるのだ。

過去にどんなことがあったのか、わざわざ聞くことはない。しかしこの若さで、と思うと過酷なものであったのは想像に難くない。

「それにしてもD O P E か…聞いたことないな…ここ一年で出てきたのかな」

「ブランク、お前麻薬チームにいたことでもあるのかよ」

「いえ。前職が近かったつてのとムーロロさんの受け売りですよ」

「あいつか…お前には悪いが、やつは胡散臭い」

「まあそうですね」

先程の老人に言われたとおり2ブロック先までくると、治安はさらに悪くなっていた。ゴミと大麻の香りがそこら中からしてくる。

D O P E という店はすぐに見つかった。というのも店頭でデカデカとネオンで看板が置いてあったからだ。道理である老人、雑な案内するわけだ。

「入ります？入り口からバーンと！」

「おいおいおいおい：ブランク。忘れたのか？オレたちは暗殺者だつて」

「え？……あ」

「黙って待つてな。すでにグレイトフル・デッドは発動中だ」

となるとやることはない。ブランクは入り口前の柱にもたれてただ待った。今頃店内はいつの間にか老化していく自分たちに気づいて驚きながらも何もできずそのままか、老いていることにすら気付かないかのどちらかだ。扉を塞ぐまでもない。

10分程してプロシユートはようやく扉に手をかけた。ブランクもそれに続く。中からは生ぬるい人の気配と重低音の音楽が聞こえてくる。この店はさっきの店とは違い徹底的にハイなコンセプトのようだ。

今は老人たちが羽化の前のセミのように静かに床に寝て、激しく明滅するネオンに照らされている。

プロシユートとブランクは彼らの衣服を探り薬を山ほど持つてる売人を探す。しかしフロアの人間にそれらしきやつはいない。

「多いな、やけに。儲かって何よりだ」

「はずれはずれはずれ…となると店員かな？」

ブランクはカウンターを乗り越えバーテンダーを洗う。プロシユートはバックヤードに入った。しかし誰も倒れていない。

「ブランク、こっちはスカだ」

「僕もスカです。スカ・スカに改名しようかな」

「だがクラックを作ってる形跡がある。これがシザーマンの麻薬か？一応回収しておくか」

「警備員は武装しています。：見たことない顔ばかりだ」

「つまりここが卸売り店つてなわけか」

プロシユートはため息をついた。

「んん…どれどれ使ってる薬物は…：っ」と

ブランクは倒れた老人の鼻の下についている粉をぬぐいちよつと舌で舐める。



「うーん…普通にわからん」

「わかったからもう舐めるな。最悪死ぬぞ」

と、そこで突然ブランクが玄関に通じる防音扉を撃った。

「なんだ?!」

「誰か来ます。聞こえた! おおお…キマってきたのかも!! 感覚が研ぎ澄まされてきた気がします」

「幻聴なんじゃあねーのかツ?!」

「いいえ、間違いない」

とブランクが言うやいなや、扉が突然真ん中から真つ二つに割れた。すかさずブランクが連射する。プロシユートも構え、敵を狙った。

「…あはッ」

扉の向こうにいる人間は笑った。チャラチャラチャラ、と言う音とともに一歩踏み出す。プロシユートはその人影のどてツ腹めがけて撃った。銃声が轟く。続いてチャリンチャリンという音がする。

「残念」

「こいつ…」

ブランクは弾を装填した。そしてすぐさま撃つが、またも金属音。来訪者は扉を跨いでフロアに侵入した。

「パッショーネの人オ?」

そいつはピンクの髪をしたピアスマミれの男だった。おそらくファッションでボロボロの服にピチピチのラバーのパンツ。趣味の悪いパンク野郎だ。

「兄貴、こいつ銃弾を真つ二つに切断しています」

「切断…だと?」

「目エいいね。羨ましいイなあ…ボクはぶつちやけ全然よく見えないの…」

男はブランクの方にピースしながら言った。ブランクはこいつどうします?と聞いたげにプロシユートの方を見る。

「ツ…ブランク」

「はい?」

「お前顔に切り取り線ができてるぞ」

「は…ええ？」

男は一步踏み出した。スタンド能力が見えているのに近づいてくるといふことはこいつのスタンドは近距離型なのだろう。

「きるきるきるきる」

「あーもうー！」

ブランクはどこから取り出したのか、サブマシンガンで男の周囲を薙いだ。しかし弾丸は全てきれいに切断され地面にばら撒かれる。

「…プロシユート兄貴。二メートルだ。こいつ圈内のもの全部を切断する」

「チツ…二メートルかよ。今は分が悪いな」

プロシユートは自身の銃を天井へ向けて撃った。乾いた音とともに、照明が落ちる。突然の暗闇に戸惑うブランクの首根っこをひつつかみ廊下へ走った。

「一時撤退ですかっ」

「いいや、やつは追ってくる。お前にマークを残してるんだから。仕切り直しだ」

「でも兄貴、どうするんですか？兄貴のスタンドはあの切断厨には有効だけど、追われて戦うには向いてないですよね？」

「そうだ。だが捕まえないと任務失敗だ。やるしかない」

「ってどうやって！弾が届かないし…それに僕のスタンドもだいたい待ち構え型ですよ。それになんですか、僕の顔どうなっちゃってるんですか？流石に頭真つ二つは生き残れる気はしないです！」

「落ち着け」

さっきの男のスタントは2メートル圏内のものをすべて切り刻む他に、敵に切り取り線を付与したのち切り刻む中距離攻撃があると推察される。

射程は定かではないが、ブランクに切り取り線が付与されたときは間合いがおよそ15メートル。こいつがまだ死んでないということ  
は切れる射程はもつと短い。

「よしブランク、お前は囿だ」

「き、最悪……！」

ブランクは走っていた。ちらりと後ろを見ると人混みの向こうからピンクの髪が見える。切り取り線をつけた相手を感じすることができるんだろう。

「ああもう……！」

男は人にぶち当たるのもお構い無しで人混みを掻き分けてくるのでブランクも同じように、他人に気遣う余裕もなく走る。

ブランクしか眼中にないということは切り取り線をつけられるのは一人限定なんだろうか。

「てめーッ前見てるくせに何ぶつかってんだコノヤローツ！」

チンピラにぶつかりキレられても無視だ。当然ブランクをまっすぐ追ってくる男も同じチンピラにぶつかる。

「オツ…オツオツ…！お前らグルかアアー?!」

チンピラは男の腕を掴んだ。しかしバチンと音がしてその腕が切断される。

人々から悲鳴が上がり、逃げ出そうとする人たちが一斉に駆け出した。ブランクにとっては好都合だ。

「きんきんきんきんきんー！」

男ももちろん猛然と走ってくる。ブランクは15メートル圏内になんて入らないようにとにかく必死に駆ける。プロシユートと打ち合わせた駅まで。

改札を飛び越えた。ホームには今日の最終列車が停まっている。バコンという音がして改札機が切断された。階段を慌てて登りその電車に滑り込む。

プシュー…と音がして電車が動き出した。ブランクは一息つき、先頭車両の方へ歩き出した。

連結部分の扉に手をかけるとバコンと音がして後ろ側の扉が切断され、男がぬるりとブランクのいる車両へ入ってくる。

「るきるき……これでおにごっこはおわり、君の人生もおわり」

「……最後に名前聞いていい……？」

「……………はア？」

「僕ら、シザーマンとしか聞いてなくて」

「ん……？シザーマン……シザーマン？なにそれ」

「君の通り名だよ」

「ボクウ？なんで？」

「いやいやいや……そのスタンド、いかにもシザーマンって感じじゃん」  
「そんなダサイ名前なわけじゃないじゃん。それになおさらおかしいな。  
ボクのスタンドを見て生き残れた人なんていないのに」

バチンバチンバチン、と男が一步進むたびに周りの座席が切断されていく。

「わ、わー！待って！待って！」

「待たない……」

ブランクは慌てて前の車両へ逃げた。男はだるそうに連結部の扉を切断する。扉を潜ろうとした直後、男の後ろから急に声がかかった。

「おい」

「え？」

先ほど男が切断したドアからプロシユートが入ってきた。そしてまるでボールでも投げ渡すように白い包みを投げ渡してきた。

「あハッ」

バチン、と袋が切断される。

「は……」

その袋からぶわりと広がったのはくすんだ白の粉だった。

「……死んだんじゃないですか、これ……」

「さてな」

プロシユートとブランクは床に転がり泡を吹いてる男を見てそう

つぶやく。

「悪質なヘロイン…か」

この麻薬に混入られているフェンタニルはヘロインの50倍も効果があるとされている、象でも気絶する鎮痛剤だ。

あのD O P Eのバックヤードにあったものだ。ざっと一キロ、直で浴びて吸えば昏倒する。

「さーってつと…麻薬はどこぞ？」

ブランクは男の体を一通りチェックする。しかし薬どころか小銭すら持っていなかった。さらに腕をまくってみても注射痕の一つない。

「彼、ほんとにくだんの売人なんですかね？」

「……この仕事、一晩ですまねーようだな」

昼下がり、公園。きらきらひかる、木漏れ日。頬をくすぐる風、それに乗ってくる様々な匂い。ただここにある全てのものを、穏やかな酩酊感で包み込んで享受する。

薬物で得た刹那的な幸福は人生に敷き詰められた真っ黒な不幸をグロウでぼやかす。

「シザーマン。とんだミスリードだ」

そんな幸福に浸っていると、突然ベンチの隣に誰かが座った。すべてがきらめいてぼやけた視界ではそれが男だということしかわからない。しかし声だけは聞き覚えがあった。アヴィゲイルの店で売人を探していたギャングの一人だ。

「まさかヤツを破るとはな」

ピンク髪の殺し屋、モイライの顔を思い浮かべ、笑う。金払いが良ければいくらかでも媚びへつらう犬のようなやつだった。

「アントニオ・ブシエッタ。大した名前だな」

「ふん…」

「あんたのこと、調べたらすぐにわかったぜ。詐欺、恐喝、暴行、麻薬

取引、殺人、死体遺棄……まあオレも偉そうなことは言えないが、大した犯罪歴だ」

「すべて過去のことだ。今はなんにも残つとらん。わかるか？大切なものはいつも手元に残らない」

「説教かますつもりなら悪いが、あんたはここで終わりだ」

「ふ……よりもよってどこのだれともわからん若造に」

「あんたが本当に会いたかったのはヴラデー・ミル・コカキだな」

「ああ、かつての相棒だ……」

「麻薬チームに属してるとはな。たまたまぶち当たったとはいえ、こつちにとつては収穫だった」

「そうかい。ああ、くそ……やつの名前を出すなんてな。せつかくキマってきたのに台無しじゃないか」

「そりや悪かったな。オレはもう邪魔するぜ」

「なんだ、銃でもぶつ放すのかと思つたら。毒矢でも吹くのか？」

「オレのはもう少し……そうだな。あんたにとつちや優しいのかもしれないな」

そう言つて男は去つていった。何がなんだかよくわからないが、今すぐ逃げようとかそういう気持ちにはなれなかった。ただ体がぼんやりとだるくなつて、大麻のおかげでそれが心地のいい眠気に変換されていった。

ただ片隅に浮かぶ、青春の日々がどんどん褪せていく。あせた思いは美しい部分だけ鮮明で、心地よかつた。

「おいおいおい、老人の安楽死なんてなーんかお前らしくない」

「あ？じゃあ町中で銃ぶつ放せと？これがただしい暗殺だろうが」

「はあー。そういえば最近ハデハデに戦つてたんで、暗殺つてなんだろうって感じでしたね」

メローネとブランクが公園の出入り口にあるジェラート屋で三段重ねアイスを食べていた。メローネはブシエッタの情報を集める際に声をかけたので一応ついてきたわけだ。しかし人の仕事をアイス

食って待つなんてペッシならありえない。

「かつての大マファイアがあんなおじいちゃんになってせこせこ麻薬売ってるなんて夢ないっすね」

「盛者必衰だな」

「…で、あのD O P Eの麻薬のルートの方はどうなったんだ」

「ポルポが全部持ってっちゃったよ。ま、麻薬チームがルートをべろんじゃあないか?」

「それでいて追加報酬もなし、か」

「世知辛いつすー」

あの老いたマファイアの今がボスにとつての未来になってしまえばいいのに。なんて考えが頭を過る。そんな不確定で曖昧な未来を願うのは馬鹿馬鹿しい。思ったら行動に移すべきなのに、今はそれすらも縛られている。

「とりあえず…ペッシの見舞いに行くか」

「じゃあ僕は遠慮します。このあと僕ホルマジオぱいせんとおデートですので」

「はあ?デートってお前…」

「喧嘩賭博で八百長ひと儲けデートっす!わくわく」

「…………オレも賭けに行くか。…じゃあなプロシユート」

「ああ」

裏切り者を出したというだけでリスクと見合わぬ待遇で、それでもこの世界で生きるしかないならば、今現在提示されている賭けに勝ち続けるしかない。

## 00. ギャンブラー②：過去

ホルマジオは夜11時のネアポリスの裏路地を歩いていった。切れかけた電灯の照らす道や壁は薄汚れていて、暗殺チームのアジト周辺を思わせる。

違うところといえば通り全体に魚醤や発酵食品を思わせる独特の臭いがするところだろうか。エキゾチックな食品の香り。事実ここはアジア系の移民の集まる一角で、中華街と呼べるほど大きくはないが、かなりの数のアジア系の移民や不法滞在者が住んでいる場所だ。しかし人通りは皆無だ。まるで「余所者」のホルマジオが来たのを察知したかのように通りは静まり返っている。

そんな中で唯一看板を出している建物があった。ホルマジオはその看板のすぐ横にある地下への階段を降りた。

扉を開けると鈴がなり、中に充満していた煙が外へぶわりと流れた。そのタバコの臭いも嗅ぎなれないもので、ホルマジオは眉を顰める。

煙の充満する店の中央には三人と卓を囲むブランクがいた。

三人の男はじろりと鋭い瞳でホルマジオを一瞥した。しかし視線はすぐ自分たちの手元、麻雀牌へと戻った。

「ブランク、仕事だ」

ホルマジオの声にブランクは視線を上げた。

「やっとツキが回ってきたところなんです」

自分の教育が悪かったのだろうか。と一瞬頭によぎる。ちよつと遊びのつもりでギャンブルを教えるからブランクはドーパミン中毒になってしまったらしく、様々な賭け事に出しては有り金すべてをベットしてスリルを味わっているらしい。

「へえそうかよ。それがオレになんの関係があるんだよ、ブランク」

「ドラを抱えて大三元リーチがかかっているんですよ？」



「いいから、来い」

ホルマジオがそう言うのと、ブランクは一瞬悔しそうな顔をしてから麻雀牌を倒し、席を立った。

卓を囲む男が何かを言う。おそらく中国語だろう。全く聞き取れない。ブランクは二言三言返事をしてから足元に置いた細長いカバンを背負い、ポケットから金を少しばかり置いてホルマジオのもとへ来た。店を出るとジャケットを帆のように張って夜風にあて煙の臭いを落とすかのようにバサバサと振った。

「おまえ中国語も喋れたのかよ」

「いや？最近ちよつとした会話くらいなら……って感じですね」

「へえ？なんか言ってるよ」

「最坏的人渣！把???我！」

「意味はなんだよ」

「そうですね……まあ負け惜しみです」

ブランクはそこらへんにいるアホな若者のような外見をしているし実際そう振る舞っているのだが、チームとして過ごして一年も経てばそれがよくできた仮面であることに気付く。

ブランクのスタンド能力自体は『相手の能力をコピーする』というもので非常にピーキーだ。チームの中では一番弱いと言っているかもしれない。しかしスタンドを抜きにすれば（この国でその条件が成立することはまずないが……）殺しの技術自体は一番高いかもしれない。腕のいい狙撃手のもとで何年も諸国を渡り歩いてきた経験も他のメンバーにはないものだ。

「で、誰を撃ち殺せばいいんです？」

「いや。スナイパーの出番はねえんだ。今回は」

「……ん？っていうかそもそも『悪い』なアブランク。今回は派手に臍物ブチ撒けるテメーの暗殺じゃあ注文にあわねえんだよ。おとなしく留守番してな……って僕をハブった仕事ですよ？なんで今更声かけるんですか？」

「どうやら仕事の割り振りのときの軽口を根に持っているらしい。だがそのセリフはイルーゾオのものだ。なぜ自分がブランクの機嫌取りなんてしなくちゃあなんねーんだ?」と思いながらも、ホルマジオの思い当たる適任者はブランクしかない。

「ちと事情が変わったんだよ」

「はあ…」

ホルマジオとブランクは留めていた車に乗り込む。ホルマジオは今回の仕事について表示された自分の端末をブランクに渡した。

「ターゲットは記者。まあ記者なんてありふれた暗殺対象なわけだが：殺す前にそいつが行方不明になっちまったのさ。イルーゾオが調べたところによるとどうやら奴はギャンブル依存症らしくてな。ある日いつものように賭場に出かけてそれっきりらしい」

「先に別の人に殺されちゃったんじゃないですか?」

「それだったら手間が省けて結構だがよオ。どんなに探しても死体が出ていない。オレたちへの指示は『必ず殺すこと』。つまり死んだのをキツチリ確認するまでが仕事ってなわけだ」

「なるほど…。…ってなおさらなんで僕が必要なんです? 僕って別に人探しは得意じゃないですよ」

「話は最後まで聞けよ、ブランク。…そいつが最後に目撃された賭場では行方不明者がすでに何人か出てるんだぜ」

「なるほど。帰りたくなってきたっすー」

「イルーゾオが突き止めたところによると新しいディーラーが来てから行方不明者が出始めたらしい」

「……………で?」

「で、テメーの出番だ。賭け事、好きだったよな?」

「ウオオオオオ!! ツシャオラアアアー!!」

ブランクは今クラップスをプレイしている。クラップスとは言ってしまうえばサイコロを2つふりその出目を当てるというシンプルな

ゲームだ。

まず全員が掛け金を自分の予想する出目に賭けおわるとシューターがサイコロを振る。この第一投を『カムアウトロール』と呼び、『7』の目が出るまでゲームが続く。

ブランクはパスラインという賭け方で順当に勝ちを拾い、チップを蓄えている。このゲームはルーレットなどと違い、有利なかけ方が存在する。そのため“自然に”勝ってるように見せることはできる。

「すげーな兄ちゃん。さつきから当てまくりだ！」

「サイコロ〜!!」

オッズ賭けが成功してチップが倍になった。ブランクが勝鬨を上げる。クラップスはサイコロをふるだけで観客がわく賑やかなゲームだ。その中心にいるブランクには自然と注目が集まる。ブランクはホルマジオと目が合うとピースサインをした。

「あんたのツレ、ツイてるなあ…」

それも当然だ。ブランクはイカサマをしている。しかもペツシからコピーしたビーチボーイでサイコロの出目をちよつといじるセコイイカサマで。

「こう勝ってしまうと店に悪い気がしますねエ〜。どうしましょ。ドリンクでも追加で飲みますか？もちろん奢りです」

「ああ、遠慮なくくださいませ」

そろそろだ。そろそろ本命が餌にかかる時間だろう。バーカウンターへ行くとバーテンダーがにこやかにブランクに微笑みかける。

「お客様、素晴らしい勝ちっぷりですね」

「そう。今日はすごいツイてる日みたいで」

「如何でしょう。よりスリリングな賭けをしてみるといいのは」

「っていうと？」

「あちらのカーテンをくぐればわかりますよ」

思わせぶりな言い方。勝って気が大きくなった客なら飛びつくだろう。もちろんブランクも飛びつく。興奮気味に自分の勝ち筋についてデタラメを述べてグラスを空けてからホルマジオと肩を組んで、耳元で囁いた。

「僕が適任って言うのは、如何にも調子づいたカモっぽいから?」

「ああ、その通り」

ブランクは微妙な笑顔を見せた。ホルマジオはフン、と鼻で笑う。  
「行くぞ」

「はい」

潇洒な飾りとたつぷりのドレープの入ったカーテンをくぐると、そこもまた賭場だった。しかし先程の場所はルーレットやスロットマシン、バカラなどすぐに決着のつくゲーム用のテーブルゲームが数個あっただけに対しこちらは本格的なカジノゲームの場がいくつもあり、それぞれにやり手そうなディーラーがついている。

なんならカーテンをくぐる前より客も多い。こちらが本場であちらは一見さん向けだったようだ。

ホルマジオは全体を見回し、目的の人物を見つけた。

「…いたぜ。一番奥でランプいじってるやつだ」

「あの人がターゲットの最後の対戦相手なんですか?」

「さあな。だがあいつが件のディーラーなのは確かだ」

そのディーラーは他の従業員と比べると一回りは年老いて見えた。髪は総白髪で、ややコケた頬は血色が悪く土色だ。ポーカー用の卓だが病人じみた風貌のせいかわテーブルには誰もついていない。

「……さて。じゃあここからはオレたちの本業らしく紳士的に情報を聞き出すとするか」

「紳士的ねえ」

ホルマジオは問題のディーラーの席につく。ディーラーは嬉しそうに顔をクシャツと歪め、ホルマジオを見た。

「ようこそ。楽しんでおられますかな?」

「いいや、お楽しみはこれからなんぞな」

「グッド。こちらではテキサスポーカーからインディアンポーカーまで、なんでもプレイできますよ。もちろん、お望みならヨットやバツクギヤモンなんかの他のゲームもございます」

ディーラーはそれはもう美しい手さばきでカードをシャツフルし、並べてはまた手元に戻す。しかしホルマジオはきれいに返されたト

ランプの上に構わず写真を広げた。

「この男を知ってるな?」

「……ほう。人探しとは。……どうでしたかね。見覚えのあるような」

「ボケたフリは賢明じゃあねーな。とつとと言ったほうが身のためだせ」

「この年になってくるとフリも本当になってくるものです。……どうでしょう、あなた方はこの男の情報が知りたい。ならば私とここでゲームをして、勝ったらそれを手に入れる。そういう賭けをするというのは」

「オレたちが何者か理解できてねーようだな」

ホルマジオがすごんでもディーラーはまるで動じなかった。ランプを繰る手は止まらずにまつすぐホルマジオを見つめ返している。「あなた達が何者かは私には関係ない。私はダニエル・D・ダービー。生粋のギャンブラーだ。私にとってそれがすべて」

「賭けに勝ったら情報を渡すとは限らねえ。デタラメを言う可能性もある。ここで肋の二三本折ったほうが確実に、それも早く吐くだろオーよ、と思うわけだが?」

「ここまで脅しをかけてもディーラーの男は変わらぬ意志の強い瞳でいる。老年に差し掛かったとは思えないぎらついた瞳に、簡単には情報を渡さないと意志の強さを感じさせる。」

「情報を持っているのは本当だ。魂を賭けたっていい」

「はっはっはっ…」

ホルマジオの後ろで黙って立っていたブランクが突如笑い始めた。

「失礼、魂とか言いだしたもんだからつい笑ってしまっただな」

「なに?」

ブランクはやや演技過剰めいたしぐさで髪をかき上げた。

「僕たちや魂なんてとつとに悪魔に売り渡してる。賭けるなら命かな」

「ほう?命懸けのギャンブル。それもまた心躍る提案ですな」

「あなたが生粋のギャンブラーというのなら、ぜひとも勝負していた

だきたい」

ホルマジオはブランクと席を替わる。

ダービーはこれみよがしに自分のトランプさばきを見せつけながらブランクを値踏みするように上から下まで眺めた。

ダービーの手さばきは熟練のディーラーでありギャンブラー。先程のようにスタンドによるイカサマなどは通用しないだろうという圧を感じる。

当のブランクはトランプには興味ないと言いたげにテーブルに肘を突き、ダービーを見つめていた。

ダービーはホルマジオと比べて幼く見えるブランクを安く見積もったのだろう。いやらしすら感じるへりくだった笑みを浮かべた。

「では…ゲームはあなたが決めて結構です、ボクちゃん」

「そうですか。じゃあコレで」

発砲音がした。

悲鳴、そして静寂。あまりに唐突な銃撃に場が静まる。ダービーの肩口越しの壁に弾痕があった。

ブランクはどこにしまっていたのか、煙を上げるリボルバーを持っていた。入店時の身体検査をどう誤魔化したのか。ハンドガンを持ち歩いているとはホルマジオも知らなかった。

「貴様ツ……」

店のガードマンがブランクへ銃を向けた。ブランクはリボルバーを持った手をあげた。銃を持つ指の間にパツシヨ―ネのバッヂを挟んでいる。

「文句があるならポルポに言いな。信頼を疑われてるあんたらが悪いんだ」

賭博を仕切る組織の幹部、ポルポの名前の効果は絶大だった。土壇場でよく大嘘がつけるもんだ。

ブランクはリボルバーから弾を出した。テーブルの上に葉莢が落ちて転がる。そしてそのまま銃をゴトリと置き、ダービーへ突き出した。

「僕はロシアアンルーレットをやりたい」

ダービーはひと呼吸おいてブランクを見つめた。どうやら値付けを改めているらしい。そして銃を手にとった。

「……S&W M29。よく整備されてるようす」

ダービーは卓に散らばった弾の一つをつまみそれをしげしげと観察する。

「いいでしょう。それで、勝敗はどうつけるおつもりで？ 仮にわたしがこれで頭を撃ち抜いたらあなた方の欲しがっている情報もおじやん。賭けが成立しないのでは？」

「銃口を押し当てる場所は頭じゃなくてもいい。心臓と頭に近けりや近いほど高得点。何回でも引き金を引いていい。プレイヤーには一度だけシリンダーを回す権利が与えられる。回さずに引き金を引いた場合得点は倍づけ。これでどうですか？」

「グッド」

ダービーはにやつと笑う。下手したら死ぬギャンブルを前にワクワクしているらしい。ダービーはさつきまでの枯れた雰囲気から一転し、瞳にキラキラと生気がみなぎっているように見える。

ダービーは弾と銃をブランクにつきかえす。ブランクはそれをホルマジオに手渡す。

「ダービーさんに何もされてないか確かめてくれますか？」

「ああ…」

ホルマジオは銃と弾を点検し、ブランクに返した。ダービーは何もしてないようだ。

ブランクはダービーにそれをそのまま渡す。

「弾込めはあなたに任せましょう。先手も譲ります」

「それはそれは。では遠慮なく」

ダービーは弾を込め、シリンダーを回転させて振り戻す。これどこに弾が入っているかわからなくなった。そしてまるで臆することなく頭に銃を突きつけ、引き金を引いた。

カチン、と音がした。

「では頭は……30点でどうです？」

「いいですよ」

ダービーはそのまま銃を腹に当て引き金を引いた。弾は入っていない。不発。

「そして腹は…15点といったところですか」

ダービーは不敵に笑う。そしてもう1度引き金を引いた。

「では追加でもう15点だ」

ダービーには弾の位置がわかっているのか？いや、わかっているとは思議ではない。この危険な賭けに全く動じていなかった点がよりそれに説得力を与えていた。

ブランクは渡された銃を受け取るとシリンダーを回転させた。

そしてそれを頭に突きつけて連続で2回引き金を引いた。

「60点。同点ですね」

「GOOD……賭け事はこうでなければ盛り上がらない」

ダービーは笑う。勝負師の顔と言えはいいのだろうか。銃を受け取り、シリンダーを回転させずに頭へ突きつけ、引き金を引く。

「60点…」

いつの間にかできていたギャラリから息を呑む音が聞こえた。ブランクは銃を受け取ると、それをそのまま頭に突きつけた。

「シリンダーを回転させなくていいのか？残り三発、そのうち一発が当たりだというのに。…おっと、さっき回転させてしまったんだっただか」

「回転させて一発目が当たりってこともあるんだからそんなことしても意味がないよ。重要なのはあんたがシリンダーを回さず一発だけ引き金を引いたこと。僕の得点が四倍になることさ」

「考えなしに脳みそぶちまけるのはいいこととは思えないね」

「そうかな？どっちにしろ人は死ぬ。場所と死因が多少変わるだけだ。僕にとつては大した問題ではない。こんな仕事をしてるんだ。ぶちまけられるのがあんたの脳みそだろうが、それは変わらない」

「そうか。なら引き金を引け。外れても私にはシリンダーを回す権利が残っているからな。たった120点のリーチ、覆すのは簡単だ。…わたしにとつてはね」



「いや、240点だ」

「は？」

ブランクは引き金を二度引いた。周囲から悲鳴が上がった。しかし、弾はでなかった。

「あと一発。16倍の弾だ。それを頭に撃てばあんたの勝ちでいい」

ブランクは銃を差し出す。ダービーはブランクを見つめ、しかし銃は取らなかった。

「君の名前は？」

「ブランク」

「ブランクくん。いい勝負だった」

二人は握手して周りからは困惑気味の拍手が上がった。

いかにも何かありそうなダービーがあっさり負けを認めたのはこれもまたギャンブラーとしての挟持なのだろうか。

「はあ…緊張しました」

そう言っただけでブランクはおもむろに銃を自分の頭に突きつけ、引き金を引いた。しかしこれもまた不発だった。

「な……」

ダービーは目を丸くする。

「アドリブでよくわかってくれましたね、ホルマジオ先輩」

「序盤はぶっちゃけ運だけだな」

「それくらいのリスクは全然犯せますよ。普段の賭け事より勝率が高いし」

種は簡単だ。銃と弾を点検した際、ホルマジオの『リトル・ファイト』で弾を縮めた。それだけだ。

イルーゾオではなくブランクを賭場に連れてきた理由がこれだった。イルーゾオのスタンド、マン・イン・ザ・ミラーは自分が確実に勝てる場を作りだす。故にイルーゾオ自身も土壇場での駆け引きやリスクな賭けは実のところ不得手。その点ブランクは賭け事に漬かりきって麻痺している。

「くくく……まさかスタンド使いとはな…わたしも耄碌したものだ」

「ダービーさんもスタンド使えばよかったのに」

「わたしは……スタンドを……使えないのだ……いや。使おうとする」と

ダービーの顔色がみるみる悪くなり手が震えだした。さつきまで漲っていた生気が一気に消えて怯えと恐怖で目が虚ろになっていく。「使おうとすると……思い出す。あの時の決定的な敗北を……こんな、こんな……このダービーに……許されぬあの敗北を……！」

ダービーは顔を覆い、必死に呼吸をする始末だ。どうやらトラウマ級の負けでスタンドを使うことができなくなってしまったらしい。それでもギャンブルを続けているあたり図太いのか繊細なのかよくわからないが。

「……で、情報は？」

「……ああ、ああ。その男とは確かに対戦した。彼はわたしとのポーカーに負けたあと、弟の勝負に乗ってしまった」

「弟？」

「そうとも。この建物の三階にいる。だが弟と勝負をするのは避けたほうがいい。あいつは……いや。とにかく期待しないほうがいい。何も賭けるな」

「スタンド使いなんですか？」

「……そうだ。やつはゲームを仕掛けてくる。それに負けると『魂』をとられるぞ。……忌々しい、あいつは心までは折れなかったらしい……」

ホルマジオとブランクは顔を見合わせた。

賭場をあとにし、二人は階段を上る。ダービーの弟とやらがいる三階、とつくに廃業したと思しき玩具屋の看板が立てかけられている。中には誰かいるらしく、灯りが漏れている。

「ここからはギャンブラーじゃなくて暗殺者だ」

「え？」

ぼけっとしているブランクをほっというて、ホルマジオはドアを蹴破った。

ドアの向こうには誰もいなかった。倒れた椅子とついさつきまで飲んでいたらしいまだあたたかい紅茶があるだけだ。

「下の騒ぎで逃げましたかね」

「そのようだな」

「肩透かしだな」

ブランクはリボルバーをしまい家探しをはじめ。陳列棚はほとんど空で、床には市販の人形の空箱ばかりが落ちていた。

店の荒廃具合は散々だが、バックヤードは整然としていて清掃もなされていた。棚に大量のゲームハードが並んでおり、ブランクが興奮気味に「あくセガサターンじゃん!!」と言って手に取っていた。大量のゲームカセットもきつちりと棚に納められている。

奥の部屋のドアを開けて、ホルマジオはホツとした。そこには魂の抜けたような顔をした(ダービーの言ったとおり、実際そうなのだろう) 標的の体が無造作に放って置かれていたからだ。

「ようやく仕事の終わりだな」

「ダービー兄弟は殺さなくていいんですか?」

ブランクはハードを一個、カセットをいくつか盗んで帰るつもりらしい。ポケットがパンパンになっている。

「ロハでやれって?ただでさえ無駄に駆けずり回ったんだ。オレはごめんだぜ」

「ま、そうですね」

ただでさえ単価の少ない依頼だ。死体を見つけた以上、何人金をするうが魂を抜かれようがもう関係ない。ダービーはきつとこの店を去り、ひよつとしたら国を去り、二度と会うことはないだろう。

「ずっと気になってたんですけどイルーゾ先輩はどこにいますか?」

「さあな。もうこの件に興味ねえーんじゃあねえの?」

「なんですかそれえ。代わりに僕がこんなに頑張ったというのに…」

「名演技だったな」

「へへへ…ホルマジオ先輩のお役に立てたならそれでいいんですけどね」

「飯でも行くか。それともどこかギャンブルのできる場所にいったらいいぜ。麻雀の邪魔しちまったからな」

「ん…いや。もう賭けはいいです」

「なんだア？実はロシアアンルーレットで懲りたのか？」

「いいえ。クラップスでイカサマして気づいちゃったんですよね…スランド使えば絶対勝てるって」

「いいことじゃあねーか」

「それじゃあ全財産賭けてもヒリヒリできないじゃないですか」

「どうやらホルマジオが思っていたより重症なハマり方をしていらしい。期せずしてだがここで悟ってくれてよかった。暗殺者のくせに借金の取り立てでぶっ殺されていたかもしれない。」

「なら普通に飯だな」

「わーい。奢りですね？最高！」

「しよオーがねエーなア…」